

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motooka                   Kuwabara

# 元岡・桑原遺跡群3

—第3、4、8、11次調査の報告—

2004

福岡市教育委員会

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motooka

Kuwabara

# 元岡・桑原遺跡群3

—第3、4、8、11次調査の報告—



遺跡略号 MOT

2004

福岡市教育委員会





調査地点遠景（西から）



第3次調査集石遺構



第3次調查出土刺突文土器



第3次調查出土石槍

# 序

福岡市は大陸に近いという地理的条件から、文化の流入拠点、大陸との貿易基地として古くからの歴史を有しています。現在は歴史的、地理的に関係の深いアジアとのつながりを重視し、「アジアの交流拠点都市」を目指し、アジアの様々な地域との交流や学術・文化などの交流を行っています。

現在、九州大学は「時代の変化に応じて自立的に変革し、活力を維持し続ける開かれた研究大学の構築」をコンセプトに箱崎地区、六本松地区、原町地区的キャンパスを統合移転し、世界的なレベルでの研究・教育拠点を創造するために福岡市西区元岡・桑原地区、前原市、志摩町にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めています。

本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多核連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。移転用地内の埋蔵文化財の発掘調査もこの一環として平成7年度から教育委員会が取り組んでおります。

本書は九州大学統合移転事業に伴い、実施した元岡・桑原遺跡群第3、4、8、11次調査の成果を報告するものです。特に第3次調査では約8,500～9,500年前の縄文時代早期の石組炉や炉穴、多量の土器、石器が出土し、この地域の古くからの生活の営みを知ることができました。本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に調査を委託された福岡市土地開発公社、調査にご協力いただいた九州大学及び都市整備局大学移転対策部、並びに元岡地区、桑原地区の地元の方々をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 生田征生

## 例　言

1. 本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が1997、1998年度に行った元岡・桑原遺跡群第3、4、8、11次調査の報告書である。この事業に関わる埋蔵文化財調査報告書は「九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書　元岡・桑原遺跡群1－第2次調査の報告－」(市報告書723集 2002)、「九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書　2－桑原石ヶ元古墳の報告－」(市報告書744集 2003)が刊行されており、本書は同シリーズの「3」になる。今後、この事業に関わる調査報告書はこの書名で継続して刊行される予定である。
2. 本書で報告する元岡・桑原遺跡群は縄文時代～中世にかけての複合遺跡で遺跡略号はMOTとしている。遺跡群には多数の群集墳や前方後円墳等も含まれ、それぞれに名称が付けられているが、今回の調査では古墳の調査についても遺跡略号は「MOT」で統一している。
3. 本書に使用した遺構実測図は松村道博、池崎謙二、菅波正人、中園聰、鐘ヶ江賢二、吉岡和哉、櫛山範一、大南あずさ、柴田知二が、遺物実測図は吉留秀敏、中園、大庭友子、濱石正子、撫養久美子、小杉山大輔、西村直人、池崎、菅波が行った。トレースは濱石、撫養、菅波が行った。Ⅱに掲載した第3次調査出土石鏡については大成エンジニアリング株式会社に実測、トレースを委託した。
4. 本書に使用した写真は松村、池崎、菅波が撮影した。空中写真については有限会社空中写真企画に撮影を委託した。
5. 本書に使用した座標は国土座標第Ⅱ系を使用した。
6. 本書の執筆はI、IIを菅波正人、Ⅲを池崎謙二、Ⅳ、Vを松村道博が行った。Ⅱに掲載した自然化学分析は古環境研究所に依頼したものである。編集は各担当者の協力を得て、菅波が行った。
7. 今回報告する出土遺物および遺構、遺物の記録類は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

## 目 次

Iはじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. これまでの調査経過	3
4. 遺跡の位置と環境	5
II 第3次調査の記録	
1. 調査の概要	7
2. 旧石器・縄文時代の遺構・遺物	10
3. 弥生時代の遺構・遺物	95
4. 古墳時代の遺構・遺物	117
5. その他の遺構・遺物	125
6. 付編	
福岡市元岡・桑原遺跡第3次調査における植物珪酸体(プランクトン・オパール)分析	131
福岡市元岡・桑原遺跡第3次調査遺跡における放射性炭素年代測定	135
7. 小結	137
III 第4次調査の記録	
1. はじめに	191
2. 調査地点の立地	192
3. 1区の遺構と遺物	194
4. 2区の遺構と遺物	210
5. 遺構外出土遺物	213
6. まとめ	214
IV 第8次調査の記録	
1. はじめに	223
2. 位置と現状	223
3. 古墳の調査	
1) 墳丘	225
2) 埋葬施設	229
3) 出土遺物	232
4. まとめ	234
V 第11次調査の記録	
1. 遺跡の位置と現状	241
2. 土層	242
3. 検出遺構と出土遺物	
1) 土器窓り	247
2) 槽状遺構	249
4. まとめ	249

## 挿 図 目 次

Iはじめに	
Fig. 1 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15,000)	2
Fig. 2 元岡・桑原遺跡群位置図 (1/50,000)	6
II 第3次調査	
Fig. 1 元岡・桑原遺跡群第3次調査地点位置図 (1/1,000)	8
Fig. 2 第3次調査地点遺構配置図 (1/600)	9
Fig. 3 縄文時代調査グリッド設定図 (1/400)	10
Fig. 4 縄文時代調査土層図 1 (1/100)	12
Fig. 5 縄文時代調査土層図 2 (1/100)	13
Fig. 6 縄文時代調査土層図 3 (1/100)	14
Fig. 7 縄文時代調査土層図 4 (1/100)	15
Fig. 8 縄文時代調査土層図 5 (1/100)	16
Fig. 9 土層対応概念図	17
Fig. 10 縄文時代遺構配置図 (1/300)	19
Fig. 11 集石遺構実測図 1 (1/40)	21
Fig. 12 集石遺構実測図 2 (1/40)	22
Fig. 13 集石遺構実測図 3 (1/40)	23
Fig. 14 集石遺構実測図 4 (1/40)	24
Fig. 15 集石遺構実測図 5 (1/40)	25
Fig. 16 集石遺構実測図 6 (1/40)	25
Fig. 17 集石遺構実測図 7 (1/40)	26
Fig. 18 集石遺構実測図 8 (1/40)	27
Fig. 19 炉穴実測図 (1/40)	28
Fig. 20 遺物分布図 1 (1/600)	31
Fig. 21 遺物分布図 2 (1/600)	32
Fig. 22 縄文土器分布図 (1/800)	33
Fig. 23 縄文土器実測図 1 (1/3)	34
Fig. 24 縄文土器実測図 2 (1/3)	35
Fig. 25 縄文土器実測図 3 (1/3)	36
Fig. 26 縄文土器実測図 4 (1/3)	38
Fig. 27 縄文土器実測図 5 (1/3)	39
Fig. 28 縄文土器実測図 6 (1/3)	40
Fig. 29 縄文土器実測図 7 (1/3)	41
Fig. 30 縄文土器実測図 8 (1/3)	43
Fig. 31 縄文土器実測図 9 (1/3)	44
Fig. 32 縄文土器実測図 10 (1/3)	45
Fig. 33 縄文土器実測図 11 (1/3)	46
Fig. 34 縄文土器実測図 12 (1/3)	47
Fig. 35 縄文土器実測図 13 (1/3)	48
Fig. 36 遺物分布図 3 (1/600)	56
Fig. 37 石鍛の研磨状況	57
Fig. 38 石鍛実測図 1 (2/3)	58
Fig. 39 石鍛実測図 2 (2/3)	59
Fig. 40 石鍛実測図 3 (2/3)	60
Fig. 41 石鍛実測図 4 (2/3)	61

Fig.42	石器実測図5 (2/3) .....	62
Fig.43	石器実測図6 (2/3) .....	63
Fig.44	石器実測図7 (2/3) .....	64
Fig.45	石器実測図8 (2/3) .....	65
Fig.46	石器実測図9 (2/3) .....	66
Fig.47	石器実測図10 (2/3) .....	67
Fig.48	石器実測図1 (2/3) .....	74
Fig.49	石器実測図2 (2/3) .....	75
Fig.50	石器実測図3 (2/3) .....	76
Fig.51	石器実測図4 (2/3) .....	77
Fig.52	石器実測図5 (2/3) .....	78
Fig.53	石器実測図6 (2/3) .....	79
Fig.54	石器実測図7 (2/3) .....	80
Fig.55	石器実測図8 (2/3) .....	81
Fig.56	石器実測図9 (2/3) .....	82
Fig.57	石器実測図10 (1/3) .....	83
Fig.58	石器実測図11 (1/3) .....	84
Fig.59	その他の遺物実測図1 (1/3) .....	87
Fig.60	その他の遺物実測図2 (2/3, 1/3) .....	88
Fig.61	その他の遺物実測図3 (1/3) .....	89
Fig.62	後期旧石器～縄文時代草創期の石器実測図1 (1/1) .....	92
Fig.63	後期旧石器～縄文時代草創期の石器実測図2 (1/1) .....	93
Fig.64	後期旧石器～縄文時代草創期の石器実測図3 (1/1) .....	94
Fig.65	弥生～古墳時代遺構配置図 (1/300) .....	96
Fig.66	竪穴住居跡遺構実測図1 (1/60) .....	97
Fig.67	竪穴住居跡遺構実測図2 (1/60) .....	98
Fig.68	竪穴住居跡遺構実測図3 (1/60) .....	99
Fig.69	竪穴住居跡出土遺物実測図1 (1/4) .....	100
Fig.70	竪穴住居跡出土遺物実測図2 (1/4) .....	101
Fig.71	竪穴住居跡出土遺物実測図3 (1/4) .....	102
Fig.72	竪穴住居跡出土遺物実測図4 (1/4) .....	103
Fig.73	竪穴住居跡出土遺物実測図5 (1/4) .....	104
Fig.74	竪穴住居跡出土遺物実測図6 (1/4) .....	105
Fig.75	竪穴住居跡遺構実測図4 (1/60) .....	107
Fig.76	掘立柱建物跡遺構実測図 (1/60) .....	108
Fig.77	SX009出土遺物実測図1 (1/4) .....	111
Fig.78	SX009出土遺物実測図2 (1/4) .....	112
Fig.79	SX009出土遺物実測図3 (1/4) .....	113
Fig.80	SX009出土遺物実測図4 (1/4) .....	114
Fig.81	SX014出土遺物実測図1 (1/4) .....	115
Fig.82	SX014出土遺物実測図2 (1/4) .....	116
Fig.83	元岡古墳群M群2号墳墳丘遺存状況測量図 (1/200) 及び土層実測図 (1/100) .....	
Fig.84	2号墳周溝遺物出土状況実測図1 (1/20) .....	118
		119
Fig.85	石室実測図 (1/40) .....	120
Fig.86	石室遺物出土状況実測図 (1/20) .....	121
Fig.87	石室及び墳丘出土遺物実測図1 (1/4) .....	123
Fig.88	石室及び墳丘出土遺物実測図2 (1/4, 1/2) .....	124
Fig.89	SX010遺構実測図 (1/40) .....	125
Fig.90	包含層位置図 (1/800) .....	125
Fig.91	包含層出土土器実測図1 (1/4) .....	126
Fig.92	包含層出土土器実測図2 (1/4) .....	127
Fig.93	包含層出土土器実測図3 (1/4) .....	128
Fig.94	その他の遺構出土遺物実測図1 (1/2, 1/1, 1/3) .....	129
Fig.95	その他の遺構出土遺物実測図2 (1/3) .....	130

### III 第4次調査

Fig. 1	第4次調査地点周辺地形図 (1/2000) .....	191
Fig. 2	第4次調査地点遠景 (北から) .....	192
Fig. 3	第4次調査地点全景 (空中写真) .....	192
Fig. 4	第4次調査遺構全体平面図 (1/300) .....	193
Fig. 5	1区 (テラスⅠ・Ⅰ'・Ⅱ) 全景 (空中写真) .....	194
Fig. 6	1区 (テラスⅠ・Ⅰ'・Ⅱ) 上面遺構全体平面図 (1/200) .....	195
Fig. 7	SB26, 27全景 (北から) .....	196
Fig. 8	SB26, 27実測図 (1/50) .....	197
Fig. 9	SB28実測図 (1/50) .....	198
Fig.10	SB28全景 (西から) .....	198
Fig.11	テラスⅡ 遺構出土遺物 .....	199
Fig.12	1区 (テラスⅠ・Ⅰ'・Ⅱ) 下面遺構全体平面図 (1/200) .....	200
Fig.13	テラスⅡ埋め立て整地土層実測図 (1/50) 折り込み .....	201 202
Fig.14	テラスⅡ埋め立て整地下面捨て石列実測図 (1/100) .....	203
Fig.15	テラスⅡ整地層出土遺物 (1) .....	204
Fig.16	テラスⅡ遺構整地層出土遺物 (2) .....	205
Fig.17	テラスⅡ捨て石列出土遺物 .....	206
Fig.18	テラスⅡ捨て石列間出土遺物 .....	207
Fig.19	2区 (テラスⅢ) 全景 (空中写真) .....	208
Fig.20	2区SX01実測図 (1/20) .....	209
Fig.21	2区遺構全体平面図 (1/200) .....	210
Fig.22	テラスⅢ 出土遺物 .....	210
Fig.23	テラスⅠ' 出土遺物 .....	211
Fig.24	遺構外出土遺物 (1) .....	212
Fig.25	遺構外出土遺物 (2) .....	213

#### IV 第8次調査

Fig.1	第8次調査地点周辺地形測量図 (1/1,000) .....	223
Fig.2	1号墳現況地形測量図(1/200) .....	224
Fig.3	1号墳墳丘遺存状況図(1/200) .....	225
Fig.4	1号墳地山整形測量図(1/100) .....	226
Fig.5	1号墳墳丘土層実測図(1/80) .....	227
Fig.6	1号墳石室実測図(1/80) .....	228
Fig.7	1号出土遺物実測図1(1/3) .....	229
Fig.8	1号出土遺物実測図2(1/3) .....	230
Fig.9	1号出土遺物実測図3(1/3・1/4) .....	231
Fig.10	1号出土遺物実測図4(1/2・1/3) .....	232

#### V 第11次調査

Fig.1	第11次調査地点周辺地形測量図(1/1,000) .....	241
Fig.2	第11次調査遺構全体実測図(1/200) .....	242
Fig.3	南壁土層実測図(1/80) .....	243
Fig.4	土器溜り出土状況実測図(1/40) .....	243
Fig.5	土器溜り出土土器実測図1(1/3) .....	244
Fig.6	土器溜り出土土器実測図2(1/3) .....	245
Fig.7	土器溜り出土土器実測図3(1/3) .....	246
Fig.8	土器溜り出土土器実測図4(1/3) .....	247
Fig.9	土器溜り出土鉄器実測図(1/2) .....	248

#### 図版目次

#### II 第3次調査

PL.1	1 調査区全景(北から) .....	145
	2 調査区全景(南から) .....	
	3 調査区東側全景(南から) .....	
PL.2	1 調査区全景(西から) .....	146
	2 25グリッドセクションベルト(東から) .....	
	3 27グリッドセクションベルト(東から) .....	
PL.3	1 27グリッドセクションベルト(東から) .....	147
	2 15~20グリッド出土集石全景(南から) .....	
	3 調査区西側全景(南から) .....	
PL.4	1 16-IグリッドSX034検出状況(西から) .....	148
	2 16-IグリッドSX034炉内蝶除去後 (北から) .....	
	3 16-IグリッドSX034完掘(北から) .....	
PL.5	1 16-IグリッドSX034断ち割り(西から) .....	149
	2 26-JグリッドSX045周辺(東から) .....	
	3 26-JグリッドSX045(東から) .....	
PL.6	1 26-JグリッドSX045炉内蝶除去後 .....	150

2	17-IグリッドSX033(北から) .....	
3	18-IグリッドSX035検出状況(西から) .....	
PL.7	1 14-LグリッドSX037検出状況(北から) .....	151
2	19-MグリッドSX041(西から) .....	
3	17-LグリッドSX042(北から) .....	
PL.8	1 17-LグリッドSX042第2面(北から) .....	152
2	11-EグリッドSX043(西から) .....	
3	12-HグリッドSX059(北から) .....	
PL.9	1 12-HグリッドSX046、047(西から) .....	153
2	12-HグリッドSX052(南から) .....	
3	23-JグリッドSX053(北から) .....	
PL.10	1 24-MグリッドSX054(西から) .....	154
2	24-NグリッドSX055(西から) .....	
3	17-FグリッドSX056(東から) .....	
PL.11	1 17-JグリッドSX060(北から) .....	155
2	11-GグリッドSX049(西から) .....	
3	39-HグリッドSX023(東から) .....	
PL.12	1 34-IグリッドSX024炉内集石(北から) .....	156
2	34-IグリッドSX024第2面(東から) .....	
3	34-IグリッドSX024支石(東から) .....	
PL.13	1 34-IグリッドSX024支石(東から) .....	157
2	34-Iグリッド024底石(北から) .....	
3	34-Iグリッド024底石(北から) .....	
PL.14	1 42-JグリッドSX029(東から) .....	158
2	43-LグリッドSX031(北から) .....	
3	36-JグリッドSX032検出状況(北から) .....	
PL.15	1 11-EグリッドSX050検出状況(西から) .....	159
2	11-FグリッドSX050(西から) .....	
3	11-FグリッドSX050完掘(南から) .....	
PL.16	1 15-Iグリッド出土石槍(南から) .....	160
2	41-Kグリッド出土石槍(東から) .....	
3	31-Kグリッド出土石槍(南から) .....	
PL.17	1 15-Jグリッド出土石槍(南から) .....	161
2	36-Jグリッド出土黒曜石(南から) .....	
3	12-Hグリッド出土石皿(北から) .....	
PL.18	1 34-IグリッドSX024型取り製作風景 (北から) .....	162
2	SX024型取り製作風景 .....	
3	SX024型取り製作風景 .....	
PL.19	1 SX024型取り製作風景 .....	163
2	SX024型取り製作風景 .....	
3	SX024型取りレプリカ .....	

PL.20	1 全景空撮（東から）	164	PL. 2	1 捨て石列SX01検出状況（北から）	
2	全景空撮（西から）		2	捨て石列SX01検出状況（北から）	216
3	全景空撮（南から）		3	捨て石列SX01検出状況（北から）	
PL.21	1 SC002、003、005、015～017完掘空撮（南から）	165	4	捨て石列SX01検出状況（西から）	
2	SC002、003完掘（南から）		5	捨て石列SX01検出状況（東から）	
3	SC005遺物出土状況（北から）		6	捨て石列SX01部分（西から）	
PL.22	1 SC005完掘（南から）	166	PL. 3	1 捨て石列SX01～3全景（北から）	
2	SC015～016完掘（南から）		2	捨て石列SX01～3全景（西から）	217
3	SB019、020完掘（南から）		PL. 4	1 捨て石列SX03全景（東から）	
PL.23	1 SC018完掘（南から）	167	2	捨て石列SX03全景（西から）	218
2	SB021完掘（南から）		3	捨て石列SX02上面（北西から）	
3	SX009遺物出土状況（北から）		4	捨て石列SX02下面（西から）	
PL.24	1 M-2号墳石室掘り下げ前（南から）	168	5	土層断面4 北半（北西から）	
2	M-2号墳空撮（南から）		6	土層断面5（東から）	
3	M-2号墳周濠縁遺物出土状況（南から）		PL. 5	1 土層断面1（北西から）	219
PL.25	1 M-2号墳周濠Ⅲ区遺物出土状況（北から）	169	2	土層断面1・2-1（北西から）	
2	M-2号墳周濠Ⅲ区遺物出土状況（西から）		3	土層断面4 北半（西から）	
3	M-2号墳周濠Ⅲ区遺物出土状況（西から）		4	土層断面5（東から）	
PL.26	1 M-2号墳石室完掘（北から）	170	5	捨て石列SX02検出状況（北西から）	
2	M-2号墳石室遺物出土状況（東から）		6	土層断面5・6（東から）	
3	M-2号墳石室遺物出土状況（東から）		PL. 6	1 SB26、27全景（西から）	220
PL.27	1 M-2号墳石室遺物出土状況（東から）	171	2	SB26、27全景（東から）	
2	M-2号墳石室第2面近景（北から）		3	SB26、27全景（北から）	
3	M-2号墳石室敷石第3面（北から）		4	SB26、27全景（西から）	
PL.28	縄文土器1	172	PL. 7	1 1区 SK06（南から）	221
PL.29	縄文土器2	173	2	1区 SX05（東から）	
PL.30	縄文土器3	174	3	2区 SX01（北から）	
PL.31	縄文土器4	175	4	2区 SK02（北から）	
PL.32	縄文土器5	176	PL. 8	出土遺物(1)	222
PL.33	縄文土器6	177			
PL.34	縄文土器7	178	<b>IV 第8次調査</b>		
PL.35	縄文土器8	179	PL. 1	1 調査地点遠景（南から）	236
PL.36	縄文土器9	180	2	調査区全景（南から）	
PL.37	縄文土器10	181	PL. 2	1 調査前墳丘全景（南から）	237
PL.38	縄文土器11	182	2	調査前石室の状況（西から）	
PL.39	縄文土器12	183	PL. 3	1 石室完掘状況（西から）	238
PL.40	縄文土器13	184	2	石室全景（南から）	
PL.41	石礫	185	PL. 4	出土遺物(1)	239
PL.42	石槍・尖頭器状石器	186	PL. 5	出土遺物(2)	240
PL.43	石皿・磨石	187			
PL.44	後期旧石器～縄文時代草創期の遺物1		<b>V 第11次調査</b>		
		PL. 1	1 調査区遠景（北から）	250	
		2	調査区全景		
PL.45	後期旧石器～縄文時代草創期の遺物2		PL. 2	1 土器溜り全景	251
		2	土器溜りの遺物出土状況		
PL.46	2号墳及びSX010出土遺物	189	PL. 3	出土遺物(1)	252
		PL. 4	出土遺物(2)	253	

### III 第4次調査

PL.1 第4次調査地点全景（空中写真、北から）

215

# I 序 説



# I はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成6年2月、九州大学から福岡市に新キャンパス大学移転用地の取得の依頼があり、同3月、福岡市、九州大学、福岡市土地開発公社（以下公社とする）は用地取得について覚書の締結がなされた。事業用地は公社が福岡市に代わり先行取得し、新キャンパス建設のための造成工事を行うこととなった。造成工事に先立ち、平成7年2月九州大学から福岡市に対して事業用地内埋蔵文化財の事前調査の依頼があったことから、公社と福岡市で委託契約を締結して事業用地内の埋蔵文化財の踏査を実施した。平成7年12月、用地の275haの踏査が終了した。平成8年3月、九州大学、福岡市、公社間で「造成に関する覚書」が締結され、その中で公社は「事業用地の造成に関して埋蔵文化財調査等を行うものとする」との一項が盛り込まれたことから以後、埋蔵文化財の調査に関しては公社と福岡市との間で委託契約を締結して事業を進めることがとなった。

## 2. 調査の組織

調査委託 福岡市土地開発公社

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 生田征生 町田英俊 西憲一郎（前任）

文化財部長 堀徹 後藤直 平塚克則 柳田純孝（前任）

調査庶務 文化財整備課

文化財整備課長 平原義行 上村忠明（前任）

管理係長 市坪敏郎 井上和光（前任）

管理係 鈴木由喜 中岳圭 岩屋淳美（前任）

調査担当 大規模事業等担当

課長 二宮忠司 山崎純男（前任）

主査 濱石哲也 池崎譲二 松村道博（前任）

菅波正人 屋山洋 上角智希

小林義彦 吉留秀敏 久住猛雄 星野恵美 松浦一之介（前任）

調査員 大庭友子 小杉山大輔 西村直人 濱石正子 水崎るり 撫養久美子

調査調整 都市整備局大学移転対策部

調査番号	調査次数	担当者	所在地	分布地図番号	調査期間	調査面積	遺跡の時代
9763	第3次	菅波	大字元岡字瓜尾	桑原129	H9.11.19～H11.2.22	3,500m <sup>2</sup> 、古墳1基	縄文～古墳時代
9764	第4次	池崎	大字桑原字石ヶ元	桑原129	H9.12.1～H10.3.31	1,219m <sup>2</sup>	古代～中世
9829	第8次	松村	大字元岡字大坂	桑原129	H10.9.16～H10.12.25	古墳1基	古墳時代
9855	第11次	松村	大字桑原字柳ヶ浦	桑原西部139	H11.1.6～H11.3.20	1,650m <sup>2</sup>	古墳時代～古代



Fig.1 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15,000)

### 3. これまでの調査経過

平成6年の用地の取得後、埋蔵文化財の踏査、試掘調査を行い、平成8年後半から始まった発掘調査は平成15年度で37ヶ所目（Tab.1参照）となった。発掘調査は保存緑地の部分は現状の状態で残るため、造成工事で破壊される部分のみ実施している。緑地内には主な前方後円墳、山城が保存されている。また、発掘調査の過程で見つかった遺跡のうち、多数の副葬品が出土した桑原石ヶ元古墳群や奈良時代の製鉄遺構が多数見つかった12次調査地点、奈良時代の木簡が多数出土した20次調査地点は遺跡の重要性からキャンバス内の公開等の活用を視野に入れて、保存処置がなされている。これまでの調査経過及び平成14年度までの調査（第30次調査）の概要については概報1（市報第693集2001）、2（市報第743集 2003）に述べられている。また、第2次調査、桑原石ヶ元古墳群に関しては本報告書が刊行されている。ここでは今年度の調査概要を簡単に記述していく。

平成15年度は8箇所の調査を行った。第20次調査は平成12年度からの継続調査であるが、奈良時代の木簡や倉庫跡などを見つかり、何らかの官衙と考えられる。遺跡の重要性から遺跡の保存が決まり、今年度後半には埋め戻し作業が行われた。29次調査地点（元岡古墳群N群）も昨年度からの継続調査である。位置は遺跡群の東側丘陵上で、北側には前方後円墳の石ヶ原古墳が隣接する。古墳群は9基を確認したが、いずれも後世の開発のため、残りは良くない。埋葬施設はいずれも横穴式石室であるが、半壊もしくは全壊状態である。古墳の築造は6世紀前半に始まり、8世紀前半までの追葬が認められた。

34次調査地点（元岡古墳群J群）は石ヶ原古墳や桑原古墳群A群等がある丘陵から南に向かって延びる尾根上に位置する。1986年に土砂採掘に伴い、古墳1基の調査が行なわれており、今回は1986年調査の1基を含む3基の古墳の発掘調査を行った。後世の開発のため、古墳の遺存状況は悪い。

35次調査地点（石ヶ原古墳）は平成8年度に一部確認調査が行われている。古墳は水崎山から北西に向かって延びていく標高70m程度の細い尾根上に立地する。ここから北に連なる舌状丘陵の先端には金屎古墳が、南及び西側の連なる丘陵上には元岡古墳群J群、同N群、桑原古墳群A群などの群集墳が所在する。墳丘規模は全長49m、後円部径23m、前方部長26mを測る。埋葬施設は両袖式单室の横穴式石室で、南側に開口する。石室はほとんどの石材が抜き取られ、現状では腰石及び右隅角の一部が残るのみである。右側壁長3.6m、奥壁幅2.1mを測る。古墳の年代は出土した土器等から6世紀中葉に築造され、6世紀後半まで追葬されたものと考えられる。また、北側に延びる尾根線上で小型の横穴式石室を内部主体に持つ円墳を4基検出した（第37次調査地点）。

36次調査地点の経塚古墳は事業地の東端に位置する標高10mほどの丘陵の先端に位置する。古墳は直径30m、高さ3mを超える大型の円墳である。墳丘には葺石が葺かれている。墳丘から円筒埴輪や形象埴輪（家形）等が出土しており、墳丘の頂部に埴輪が設置されていたと考えられる。主体部は現在調査中であるが、埋葬施設は横穴式石室と考えられ、5世紀中ごろに造られたと推測される。

31次調査は九州大学に委託を受けたG地点にある。検出した主な遺構は鍛冶炉、瓦窯1基、2×3間の掘立柱建物1棟、焼土を含む土坑および柱穴、石組遺構である。このうち、瓦窯は調査区南側の傾斜面で検出した登り窯で、燃焼部と焼成部のごく一部が遺存する。焼成部床面は緩やかに傾斜しており、瓦片、石を使って平坦面を階段状に築いている。窯内から出土した瓦は丸瓦・平瓦のみで軒先瓦は見られない。瓦窯の瓦は叩き文様が谷の東側にある瓦窯出土の瓦と同じ特徴をもち、平安時代に位置づけられる資料と考えられる。瓦窯は遺跡群の中で初めての発見で、周辺にもいくつか窯があるのか、また、瓦の供給先の解明も期待される。

tab.1 九州大学統合移転地内（元岡・桑原遺跡群）発掘調査一覧

遺跡名	担当者	所在地	調査年月日	調査面積又 は古墳基數	検出遺構	調査後の状況
(確認面積)						
桑原石之元古墳群	佐渡	大字桑原字平4丁目	00.11.11～010.10.21	19ha	円墳	保存
桑原金屋古墳	久住	大字桑原字金屋	00.8.20～00.11.29	1基	前方後円墳	保存
元岡石之原古墳	佐渡	大字元岡字石之原	00.8.27～00.11.29	1基	前方後円墳	
(実施面積)						
元岡・桑原遺跡群	島崎・小林	大字元岡・桑原	00.12.1～010.10.21		風景	
桑原石之元古墳群	佐渡	大字桑原字平4丁目	00.12.1～010.10.31	11ha	円墳	調査後造成
第2古	久住	大字桑原字平4丁目	00.11.11～00.3.25	3,000m <sup>2</sup>	古墳時代～古代漢、土器、水井	調査後造成
第3古	菅原	大字元岡字丘尾	00.11.19～011.2.22	1,200m <sup>2</sup> 、古墳 1基	調査時代石碑記、出生代姓址記、円墳	調査後造成
第4古	佐渡	大字桑原字平4丁目	00.12.1～010.3.31	1,210m <sup>2</sup>	古代～中世獨立社碑記、漢	調査後造成
第5古	佐村	大字桑原字石之原	00.4.27～010.6.23	2,500m <sup>2</sup>	古代～中世・古墳	調査後造成
第6古	佐村	大字桑原字石之原	00.6.30～010.8.28	2,800m <sup>2</sup>	古墳時代古代漢	調査後造成
第7古	吉留	大字元岡字船ノ瀬	00.3.6～011.6.11	7,500m <sup>2</sup>	古墳時代～古代汉、立柱建物、出状遺構、製鉄炉	調査後造成
第8古 (元岡古墳 跡群)	佐村	大字元岡字大坂	00.9.16～010.12.25	古墳1基	円墳	調査後造成
第9古	佐渡	大字元岡字道ノ瀬	00.11.2～010.12.19	190m <sup>2</sup>	出生代姓址記	調査後造成
第10古	佐渡	大字桑原字櫛ノ瀬	00.1.6～011.3.31	1,330m <sup>2</sup>	古代～中世古坟層	調査後造成
第11古	佐村	大字桑原字櫛ノ瀬	00.1.6～011.3.20	1,650m <sup>2</sup>	古墳時代～古代土壤、古含層	調査後造成
第12古	菅原	大字桑原字櫛形	00.4.1～012.3.28	5,300m <sup>2</sup>	古代對鉄炉	保存
第13古 (元岡古墳 跡群)	佐渡	大字元岡字小坂	00.4.12～011.9.28	古墳3基	前方後円墳1基、円墳2基	調査後造成
第14古	佐村	大字桑原字櫛ノ瀬	00.4.22～011.7.22	1,300m <sup>2</sup>	古代古含層	調査後造成
第15古	吉留	大字桑原字櫛形	00.6.11.～011.9.28	3,500m <sup>2</sup>	古代古含層、中世水田	調査後造成
第16古	佐村	大字桑原字牛切	00.8.2～011.11.10	2,500m <sup>2</sup>	古代古含層	調査後造成
第17古 (元岡古墳 跡群)	佐渡	大字元岡字牛切	00.8.9.～011.12.8	古墳2基	円墳	調査後造成
第18古	吉留	大字桑原字牛切	00.10.15.～014.2.20	16,900m <sup>2</sup> 、古 墳2基	古墳時代～古代住居址、獨立社碑記、出土遺構、製鉄炉、円墳	調査後造成
第19古	佐村	大字桑原字牛切	00.11.18～011.12.24	3,000m <sup>2</sup>	古代古含層	調査後造成
第20古	菅原	大字桑原字牛山	012.4.5～015.5.23	20,130m <sup>2</sup>	古墳時代住居址、古代立柱建物、製鉄炉	内、15,000m <sup>2</sup> 分保存 予定
第21古	佐渡	大字桑原字石之原	012.4.4～012.10.20	2,300m <sup>2</sup> 、古墳 1基	元・元・古・礎跡・円墳1基	調査後造成
第22古	佐村	大字桑原字牛坂	012.4.13～012.10.20	3,800m <sup>2</sup>	古代獨立社碑記、製鉄炉遺構	調査後造成予定
第23古	二葉	大字元岡・桑原	012.6.5～012.12.25	9,100m <sup>2</sup>	礎跡遺構	7,200m <sup>2</sup> (13ha)地保全地区 (保存)
第24古	佐村	大字桑原字牛切	012.8.21～015.3.20	3,500m <sup>2</sup>	古墳時代住居址、古代對鉄炉	調査中
第25古 (桑原古墳 跡群)	佐渡・星野	大字桑原字牛山	012.11.18～013.11.30	古墳2基	円墳	調査後造成予定
第26古	二葉	大字桑原字牛山	013.4.6～013.11.30	5,257m <sup>2</sup> 、古墳 1基	古墳時代住居址、円墳、古代獨立社碑記	保存(3,445m <sup>2</sup> )
第27古	二葉	大字桑原字牛山	013.12.1～014.8.29	4,495m <sup>2</sup>	古墳時代住居址	建物復原へ変更による保 存、1,000m <sup>2</sup>
第28古	星野	大字元岡字船込	014.2.1～014.7.4	2,300m <sup>2</sup>	古代～中世古含層	調査後造成
第29古 (元岡古墳 跡群)	星野・菅原	大字元岡字石之原	014.4.5～015.9.30	古墳9基	円墳	調査中
第30古	二葉	大字桑原字牛坂	014.8.1～014.9.30	2,450m <sup>2</sup>	古代古含層	調査後造成予定
第31古	二葉・上角	大字元岡字磯峰	015.1.10～	5,000m <sup>2</sup>	古墳古墓なり、獨立社碑記、圓窓炉(10)	
第32古	二葉	大字元岡字宮原	015.1.20～015.3.21	1,700m <sup>2</sup>		
第33古	須石	大字桑原字平川	015.4.7～015.5.19	古墳1基	円墳	
第34古 (元岡古墳 跡群)	須石	大字元岡字石之原	015.5.20～	古墳1基	前方後円墳	
第35古 (星原古 墳)	須石	大字元岡字平川	015.5.20～	古墳1基	円墳	
第36古 (星原古 墳)	須石・菅原	大字桑原字深澤山(1)	015.9.1～	古墳1基、 2,200m <sup>2</sup>	大型円墳	
第37古	須石	大字元岡字石之原	015.10.20～	古墳4基	円墳	

#### 4. 遺跡の位置と環境

元岡・桑原遺跡群は九州大学統合移転事業に伴って発見された遺跡である。遺跡群は旧石器～近世にわたる複合遺跡である。縄文～古代にかけての集落関連遺構、古代の官衙関連遺構、製鉄等の生産関連遺構、70基余りの後期群集墳や7基の前方後円墳等が認められる。遺跡群の位置は福岡市の西端にあたり、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯にある。丘陵は小河川により樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入りこむ。遺跡は丘陵上や枝分かれした谷部に立地する。行政的には福岡市西区元岡・桑原に所在する。遺跡の立地する糸島半島の基部付近は近世以前、東側の今津湾と西側の加布里湾から潟状に湾が入り組み、志摩町泊地区から前原市志登地区にかけて陸橋状に繋がっていたと想定されている。この地域はこれまで都市化の影響が少なく、調査の実施例は多くなかった。それでは時代ごとの遺跡の概要を見ていく。

旧石器時代の遺跡の単独での検出例はないが、後世の遺構に混入する形では遺物の出土は見られる。遺跡群の北側に位置する大原D遺跡ではナイフ形石器、剥片尖頭器、台形様石器、細石核等が比較的まとまって出土した。

縄文時代の遺跡では先述の大原D遺跡では縄文時代草創期から晩期に至る遺物が多量に出土した。中でも第4次調査では縄文時代草創期の焼失住居が検出された。住居址は斜面に造られた土葺きの屋根構造と考えられ、当時の住居構造を考える上で重要な成果が得られた。このほか、糸島半島には市域では数少ない貝塚が見られる。半島の東側にあたる地域では桑原飛揚貝塚、元岡瓜尾貝塚、西側のでは志摩町岐志貝塚、天神森貝塚などが見られる。このうち、桑原飛揚貝塚は道路拡張工事に伴って調査が行われ、主に縄文時代後期の土器や石器、貝輪、骨製品等が多量に出土した。また、貝層中に計6体の埋葬人骨が検出された。

弥生時代の遺跡では海岸部に長浜貝塚、今津貝塚が展開する。また、丘陵上では小暮遺跡（大原B遺跡）がある。病院建設に伴って調査が行われ、弥生時代中期後半から後期後半に至る多量の土器が出土した。土器のなかには鹿の絵を描いた絵画土器もある。今津の春山遺跡では今山遺跡と同様に玄武岩の露頭があり、弥生時代の前期末には石斧製作が行われていたと考えられる。集落遺跡では近年、志摩町稻留の一の町遺跡で弥生時代中期前半から後半の面積100m<sup>2</sup>近い大型の建物が検出され、重要な拠点集落と考えられている。埋葬遺構は新町遺跡、志登支石墓群、小田支石墓等の支石墓の分布が見られる。祭祀遺物では唐泊の沖合で広形銅矛が引き上げられている。

古墳時代では山麓部に群集墳が形成されるが、調査例も少なく、状況は不明瞭である。また、集落遺跡は大原A遺跡や大原B遺跡で小規模なものが発見されている程度である。前方後円墳では遺跡群の南側には前原市御道具山古墳、泊大塚古墳があり、元岡・桑原遺跡群内の前方後円墳を含めた首長墓をたどることができる。このほか、前方後円墳は志摩町開1号墳、権現塚、稲葉1号墳、稲葉2号墳等があるが、いずれも陸橋状の半島基部に立地している。

古代では当該地域は志麻（鷲）郡に属し、郡内には登志、川辺、韓良、明敷、久米、加夜、志麻、鶏永等の郷が存在した。文献では正倉院に現存する最古（大宝二年）の戸籍の筑前国鷲郡川辺里戸籍がある。遺跡では海岸で良好な砂鉄が得られることから製鉄遺跡が多く分布する。大原A遺跡や大原D遺跡では8～9世紀の製鉄炉や鍛冶炉、多量の鉄滓が検出された。また、半島の西側の八熊製鉄遺跡でも8世紀後半の製鉄炉や鍛冶炉の他、木炭窯も検出された。当地域が鉄生産に関して重要な役割を果たしていたことを伺うことができる。



Fig.2 元岡・桑原遺跡群位置図 (1/50,000) (■は製鉄関連、●は前方後円墳)

## II 第3次調査の記録



## II 第3次調査の記録

### 1. 調査の概要

調査地点は石ケ元古墳群が立地する丘陵の南側斜面に位置する。前面には東側に開口する狹長な谷がある。標高は13~19mを測る。調査は厚さ約30~60cmの表土を除去した後の黄灰色粘質土を遺構面として行った。この遺構面では弥生時代中期の堅穴住居跡9軒以上、掘立柱建物跡、土坑、柱穴、6世紀代の円墳1基を検出した。また、この遺構面より約1~1.5m下層で縄文時代早期の文化層を確認した。調査期間は1997.11.19~1999.2.22で、面積は3500m<sup>2</sup>である。

縄文時代早期の文化層は花崗岩の基盤に堆積した礫層の上面に形成されている。厚さ50cm~150cmを測る。土層観察から文化層は数層に分けることができる。検出した遺構は集石遺構24基（内、2基は焼石の礫群）、炉穴1基、焼土面数基等である。集石遺構は調査区の西側に多く分布する。集石遺構は炉と考えられるが、形態からいくつかのタイプに分けることができる。石囲いをもつもの（034、045）、浅い掘り込みに人頭大の礫を充填したもの（042）、掘り込みの中に炭化物が多量に詰まり、そこに礫が数個立てられたもの（024）等がある。炉穴050（連結土坑）は調査区西端にあり、平面形はひょうたん形を呈し、先端に向かって土坑の底が上がってしていく。窄まつた側の壁の上面が被熱で赤変している。長さ140cm、幅80cm、深さ35cmを測る。埋土には炭粒子が含まれる。この遺構から出土した炭化物のC14年代測定でBP9120±45の数値が得られた。炉穴は南九州で多く発見されているが、北部九州では検出例は少なく、貴重な発見と言える。遺物は層位的に大きく2期に分けることができる。I期は押型文土器の時期である。II期は撚糸文土器、刺突文土器、条痕文土器の時期で、今回の調査では量的にもっとも多い。石器は石鎌、石槍、磨石、石皿等がある。また、これらの縄文時代の文化層からは旧石器時代の遺物（ナイフ形石器、剥片尖頭器、細石刃核等）も出土しているが、該期の文化層は検出できなかった。このほか、弥生時代の遺構の検出面で曾畠式土器、阿高式土器等、早期以後の遺物も出土している。

弥生時代の堅穴住居跡は斜面を造成して掘り込まれている。斜面の下側は削平されている。堅穴住居跡の平面形は方形もしくは隅丸方形を呈する。全体に遺構の遺存状態は悪く、壁溝と主柱穴のみのものが多い。そのため、構造に不明確な部分が多いが、主柱穴の配置から二つのタイプが見られる。SC005は調査区東側に位置し、SC003を切る。削平のため、全体の半分程度しか遺存していないが、1辺10m前後の大型の住居跡である。主柱穴は壁際に沿って、桁行3間を検出した。梁行は削平されているが、2間と推測される。SC008、015、016も同様の構造になると考えられる。一方、SC002、003、019は1辺6m程度で、主柱穴は4本と推測される。中央には地床炉が配置される。遺物は住居内に廃棄された状態で、弥生土器（甕、壺、高杯、器台）、石製品（石斧、石錐）等が多量に出土した。堅穴住居跡の時期は弥生時代中期後半に限られ、谷部の開発等を目的とした集落と推測される。

調査区の西側で検出したSC002は主体部に横穴式石室を持つ円墳である。墳丘は削平のため、ほとんど遺存しておらず、周濠が残るのみである。周濠の内側の直径で約9mを測る。石室は天井石と壁石の大半が抜き取られ、奥壁と側壁の腰石が残るのみである。渓道部も削平されているが、南側に開口する。奥壁幅1.8m、現存長2.5mを測る。床面にはこぶし大から人頭大の礫が敷かれる。敷石は初葬時の床面に更に礫が積み上げられており、2回以上の追葬があったと考えられる。遺物は石室から須恵器（杯、壺）、土師器（甕、高杯、蓋）、耳環が出土した。また、周濠から破碎された須恵器甕、壺等が出土した。古墳の時期は6世紀中頃~後半と考えられる。

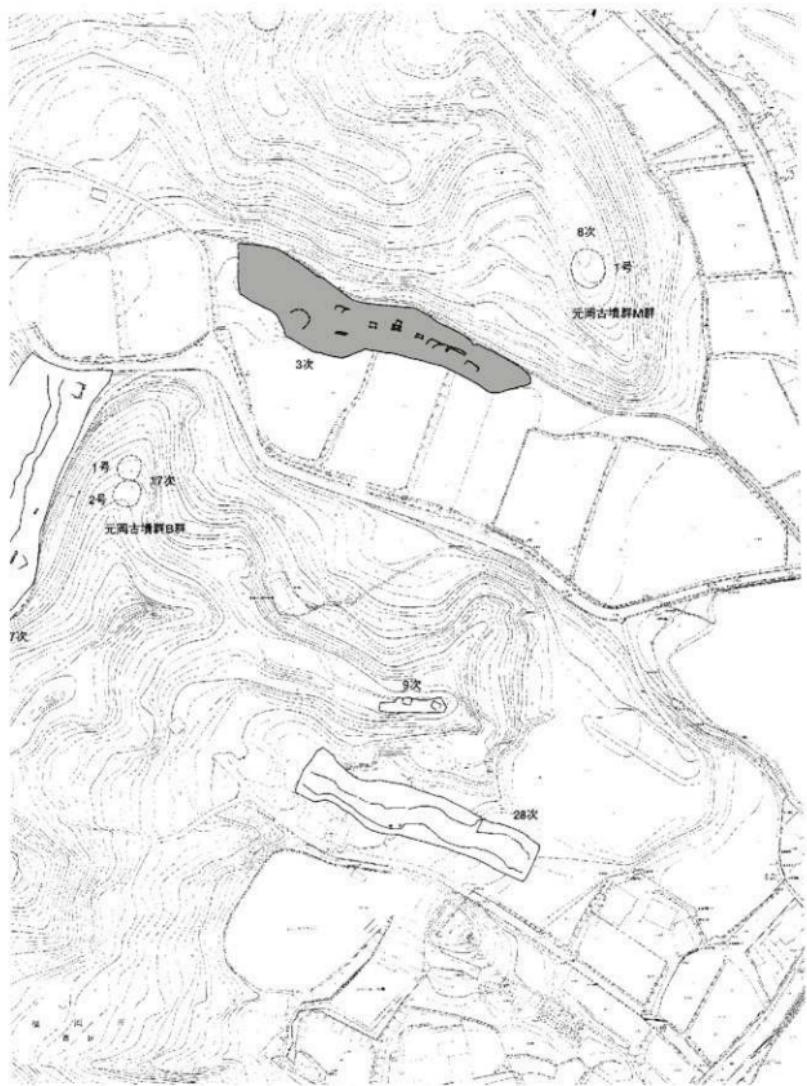


Fig.1 元岡・桑原遺跡群第3次調査地点位置図 (1/1,000)

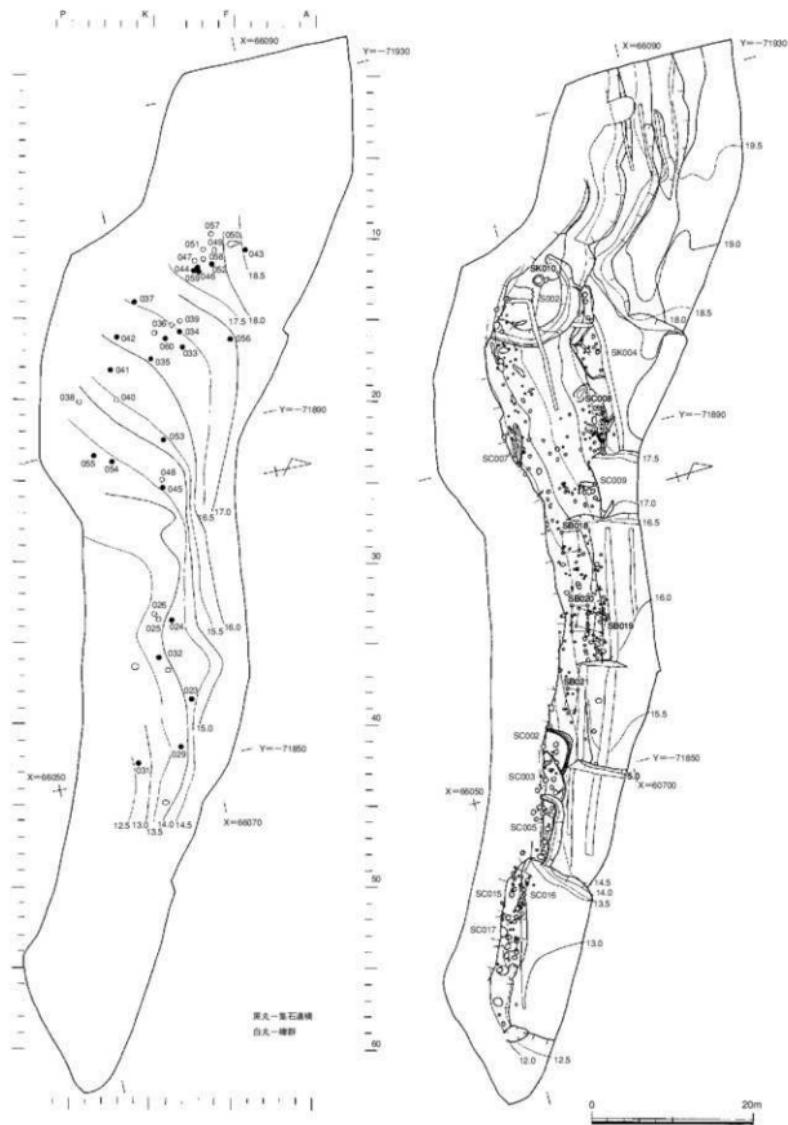


Fig.2 第3次調査地点構造配置図 (1/600)

## 2. 旧石器・縄文時代の遺構・遺物

### 1) 調査の方法

今回の調査では試掘の成果を基に厚さ約30~60cmの表土を除去した後の黄灰色粘質土を遺構面として、遺構の検出を行い、弥生時代中期の竪穴住居跡等を検出した。調査を進めるうちにこれらの遺構に縄文時代の遺物が多数含まれていることが分かり、弥生時代の遺構面の下層にそれ以前の文化層の存在が想定された。調査区の数箇所にトレーナーを設定し、基盤の花崗岩バイラント土まで掘り下げ、土層の堆積や遺物の出土状況を観察した。その結果、弥生時代の遺構面の下層約1~1.5mには縄文時代早期の文化層が存在することが判明した。そのため、弥生時代の遺構の調査を終えた後、下層の文化層の調査に着手した。下層の文化層は遺構の有無や遺物の包含状況に未知数のものがあったため、調査は地形に合わせた2m四方のグリッド(Fig.3)を設定し、グリッド毎を人力によって掘り下げた。掘り下げは地形の傾斜に沿う形で、原則的に4m毎に南北方向の土層を残しながら行った。出土遺物はグリッド内の平面分布及び垂直分布をドットで記録しながら取り上げた。グリッドの名称は東西方向に西から1、2、3の順で60まで、南北方向に北からA、B、Cの順でZまで付けた。グリッドの座標は東西方向をX座標、南北方向をY座標とし、1-Aグリッドの北西隅をX=0、Y=0とした。遺物の一覧表等にはこの座標に基づいて出土位置を示した。遺物の取り上げ番号はグリッド毎で1、2、3の順で付けて行った。取り上げ点数は一万点を超えるものとなった。

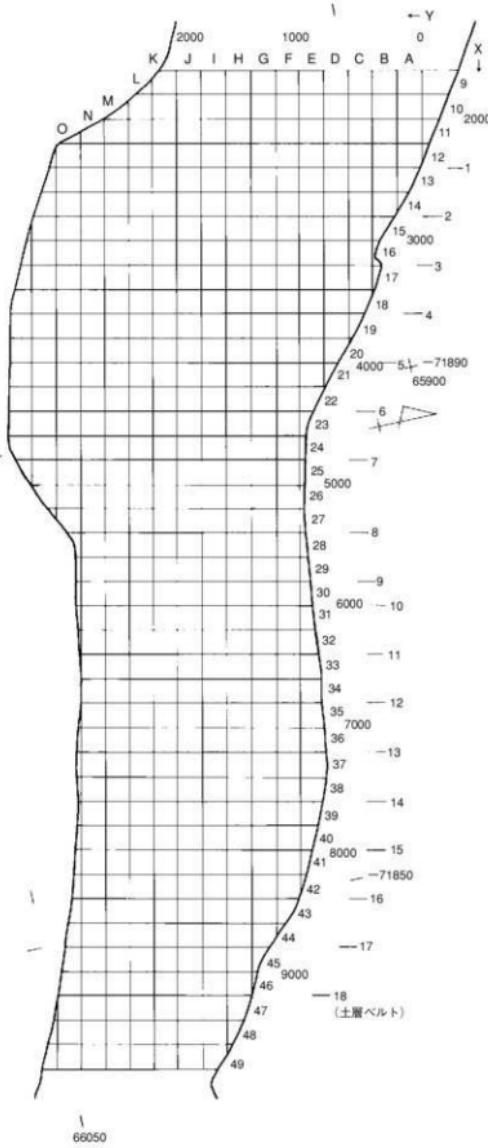


Fig.3 縄文時代調査グリッド設定図 (1/400)

## 2) 基本層序

縄文時代早期の文化層は花崗岩の基盤に堆積した段丘礫層の上面に形成されている。段丘礫層は段丘礫層の形成の時期は上面の文化層の出土遺物に剥片尖頭器、ナイフ形石器等があることからそれ以前と考えられる。この段丘の南側は谷部に面する。また、段丘面は東側に緩やかに傾斜している。この上面に形成された文化層は主に基盤の花崗岩バイラン土からなり、その中に礫やシルトを含む土壤である。各グリッドの土層を観察すると、文化層は段丘面の傾斜に沿うように形成されている。次に土層についてみていく。土層はFig. 3に位置を示した18本である。

1 (12~13間ベルト土層) (Fig. 4) 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。1層の上面は弥生時代の遺構面となる。1層には押型文土器等が含まれる。2層はこぶし大~人頭大の礫を多数含む砂礫層で遺物はほとんど見られず、短期間に形成されたと考えられる。この層は一定の広がりをもつ。4層から撚糸文土器、条痕文土器等を含む暗褐色粘質土である。8層以下は無遺物層である。

2 (14~15間ベルト土層) (Fig. 4) 土層は1と同様の堆積状況である。1層は押型文土器等が含まれる。2層はこぶし大の礫を多く含む砂質土層である。3層は撚糸文土器、条痕文土器等を含む暗褐色粘質土である。5層以下は無遺物層である。

3 (16~17間ベルト土層) (Fig. 4) 土層の上層は1と同様の堆積状況であるが、下層は異なる。1層は押型文土器等が含まれる。2層はこぶし大~人頭大の礫を多数含む砂礫層で遺物はほとんど見られない。1で見られた層に対応するものか。3層~8層は撚糸文土器、条痕文土器等を含むが、堆積状況が水平堆積ではなく、土坑等の埋土の可能性がある。平面的には遺構は検出できなかった。9層以下は無遺物層である。

4 (18~19間ベルト土層) (Fig. 4) 土層は1と同様の堆積状況である。1層は押型文土器等が含まれる。2層はこぶし大の礫を多く含む砂質土層である。3層~7層は撚糸文土器、条痕文土器等を含む包含層である。特に4層は暗褐色粘質土で遺物が多く含む。8層以下は無遺物層である。

5 (20~21間ベルト土層) (Fig. 5) 土層は1と同様の堆積状況である。1層は押型文土器等が含まれる。2層はこぶし大の礫を多く含む黄褐色粘質土である。3層は撚糸文土器、条痕文土器等を含む暗褐色粘質土である。5層は無遺物層である。

6 (22~23間ベルト土層) (Fig. 5) 土層は1と同様の堆積状況である。2層はこぶし大の礫を多く含む黄褐色粘質土である。2層の下層では人頭大~こぶし大の礫を多数含む。3層は撚糸文土器、条痕文土器等を含む暗褐色粘質土である。4層は無遺物層である。

7 (24~25間ベルト土層) (Fig. 5) 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。1層はこぶし大の礫を多く含む黄褐色粘質土である。6で見られた2層に対応するものか。3層は撚糸文土器、条痕文土器等を含む暗褐色粘質土である。5層は無遺物層である。

8 (27~28間ベルト土層) (Fig. 6) 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。1層はこぶし大の礫を多く含む黄褐色粘質土である。2層はやや暗い黄褐色粘質土でこぶし大の角礫を多く含む。押型文土器等を含む。3層も人頭大~こぶし大の礫を多く含む黄灰色粘質土で押型文土器等を含む。4層は暗褐色粘質土で撚糸文土器、条痕文土器等を含む。5層、6層は遺物包含層である。7層以下は無遺物層である。

9 (29~30間ベルト土層) (Fig. 6) 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。1、2層は礫を多く含む。3層は暗褐色粘質土で押型文土器を含む。5層は灰白色砂礫で10~20cmの角礫を多く含む。6層は黒色砂質土で撚糸文土器、条痕文土器を含む。8層以下は無遺物層である。

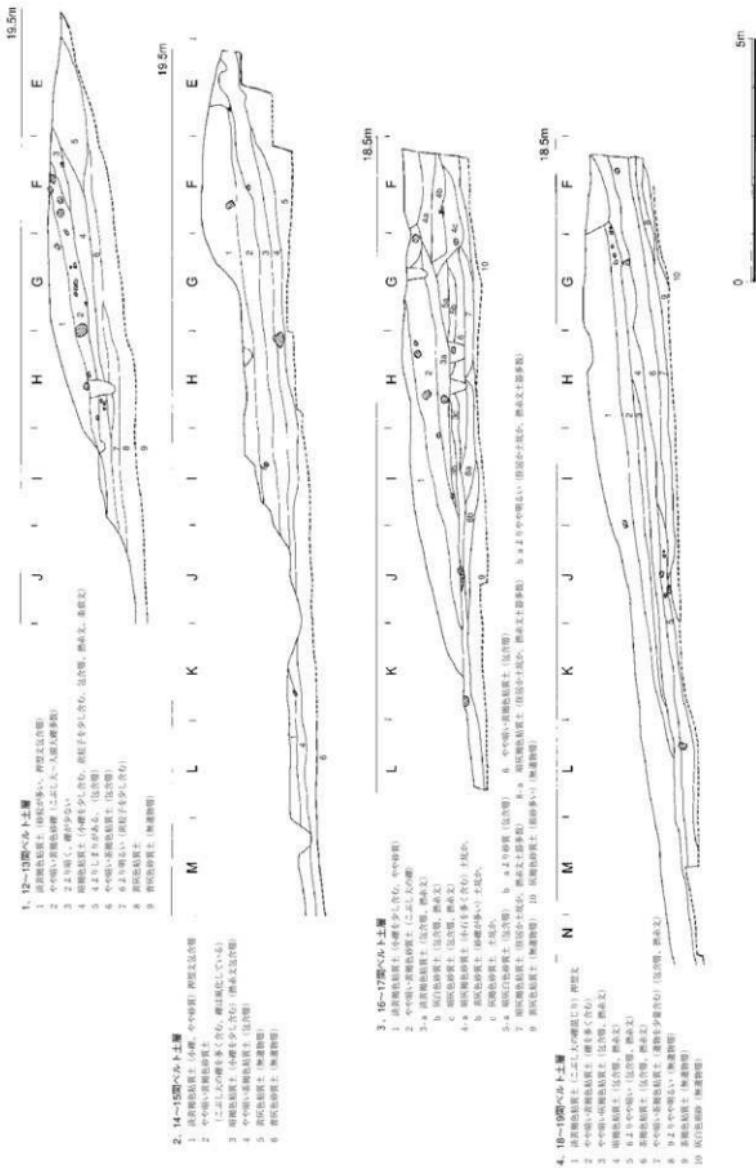


Fig.4 繩文時代調査土層図 1 (1/100)

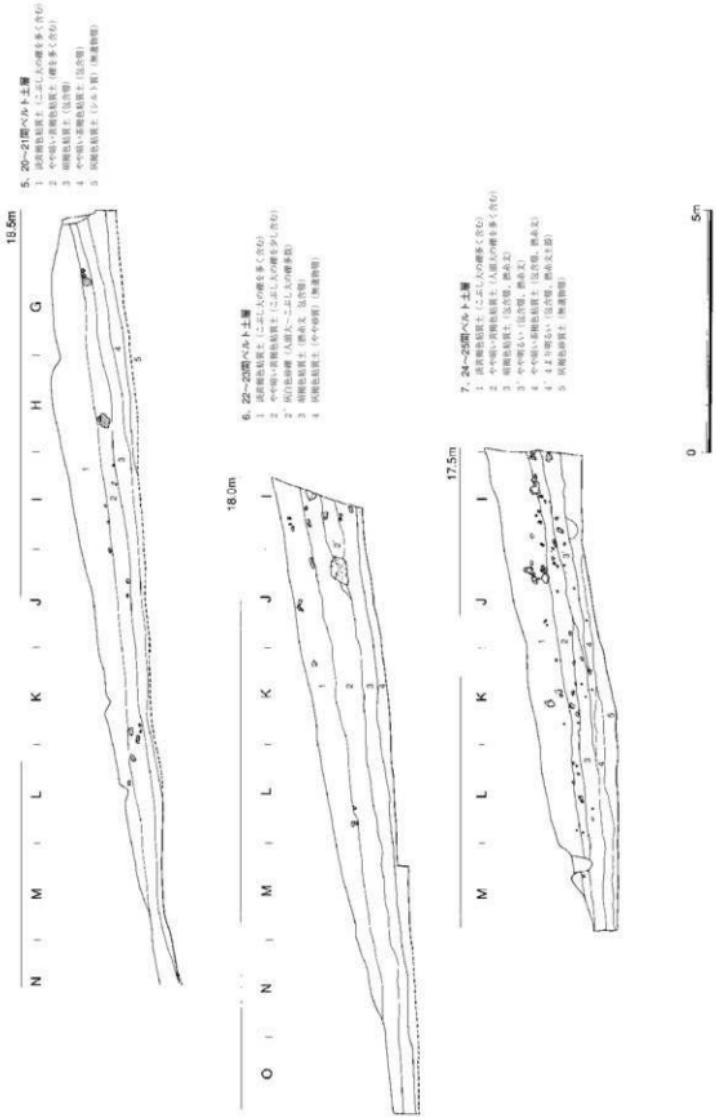
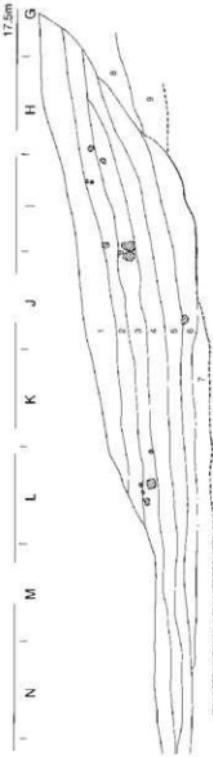
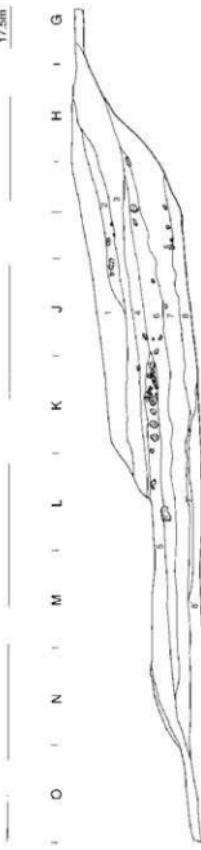


Fig.5 繩文時代調査土層図 2 (1/100)

8. 27~28ベルト土層
1. 深褐色色鉄土: こじらかした外観をもつ(含む) 鉄酸化、生分解
  2. やや暗い褐色色鉄土: こじらかした外観をもつ(含む) 鉄酸化、生分解
  3. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化、生分解
  4. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化、生分解
  5. やや暗い褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化、生分解
  6. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化、生分解
  7. 黄褐色色鉄土: (黄褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化
  8. 黄褐色色鉄土: (黄褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化
  9. 深褐色色鉄土: (暗く黒っぽい色) 鉄酸化



9. 29~30ベルト土層
1. やや暗い褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化、生分解
  2. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化
  3. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化
  4. 黄褐色色鉄土: (やや暗い褐色色鉄土) 鉄酸化、生分解
  5. 深褐色色鉄土: (やや暗い褐色色鉄土) 鉄酸化、生分解
  6. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化、生分解
  7. やや暗い褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化、生分解
  8. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化、生分解



10. 30~31ベルト土層
1. やや暗い褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化、生分解
  2. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化
  3. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化
  4. やや暗い褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化
  5. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化、生分解
  6. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化
  7. 黄褐色色鉄土: (深褐色~こじらかした外観をもつ) 鉄酸化
  8. 黄褐色色鉄土: (深褐色)

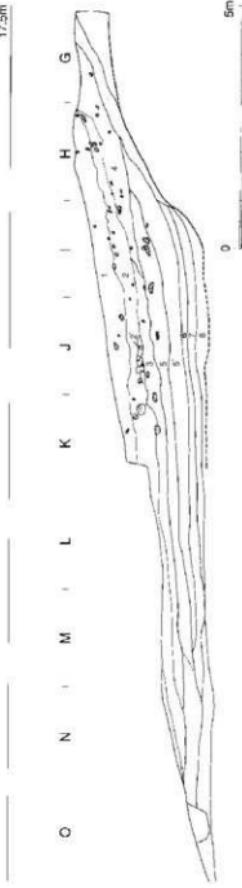
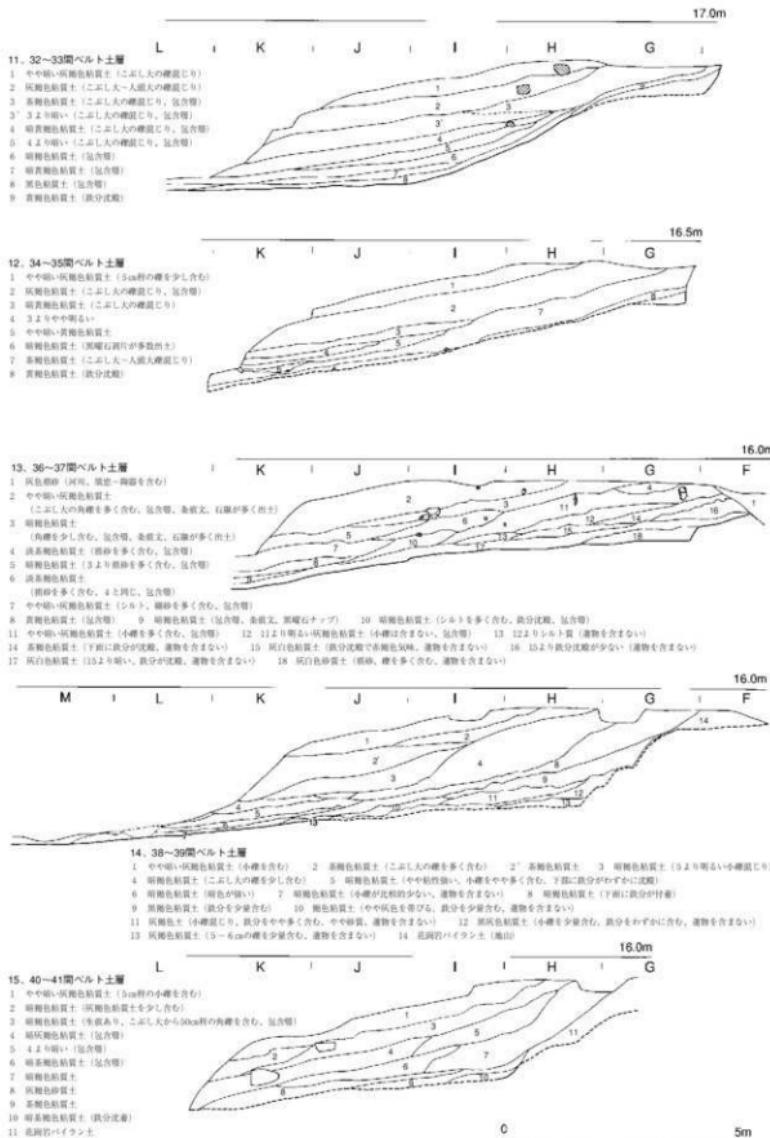


Fig.6 繩文時代調査土層図3 (1/100)



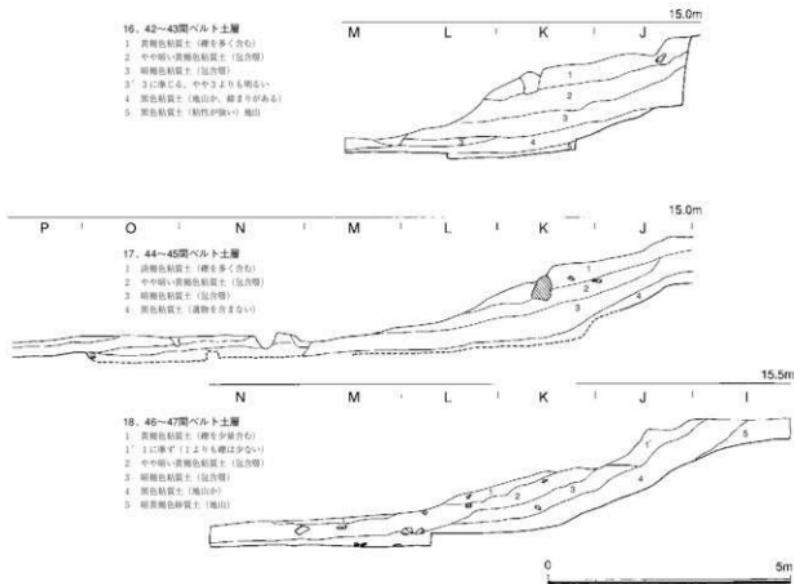


Fig.8 繩文時代調査土層図 5 (1/100)

**10 (30~31間ベルト土層) (Fig. 6)** 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。1層から3層は礫を多く含む。3層から7層にかけては遺物を含むが、特に5層の黒色砂質土からは撫糸文土器、条痕文土器が多く出土した。8層は無遺物層である。

**11 (32~33間ベルト土層) (Fig. 7)** 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。1層から3層は礫を多く含む。この土層より西側では礫を多く含む上層から押型文土器が出土していたが、これより東側では押型文土器はほとんど見られない。3層から8層にかけては撫糸文土器、条痕文土器等の遺物を含む。9層は無遺物層である。

**12 (34~35間ベルト土層) (Fig. 7)** 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。1層はやや暗い灰褐色粘質土で5cm程の礫を少し含む。2層は灰褐色粘質土でこぶし大の礫を含む。条痕文土器等を含む。6層では黒曜石剥片が多数出土している。土坑の可能性がある。8層は無遺物層である。

**13 (36~37間ベルト土層) (Fig. 7)** 土層に非連続面が観察される。2層以下は細かく分かれる。10層までは条痕文土器等の遺物を含む。特に2、3層で多く見られる。8、9層からは条痕文土器、黒曜石剥片等が出土している。13層以下は無遺物層である。

**14 (38~39間ベルト土層) (Fig. 7)** 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。2層から8層には条痕文土器等の遺物を含む。9層以下は無遺物層である。

**15 (40~41間ベルト土層) (Fig. 7)** 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。2層から6層には条痕文土器等の遺物を含む。7層以下は無遺物層である。11層は基盤の花崗岩バイラン土である。

**16 (42~43間ベルト土層)** (Fig. 8) 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。3層には条痕文土器等の遺物を含む。4層以下は無遺物層である。

**17 (44~45間ベルト土層)** (Fig. 8) 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。3層には条痕文土器等の遺物を含む。南側には落ち込みが確認でき、遺物もまとまって出土した。住居などの遺構も想定したが、プラン、床面など不明確であった。4層以下は無遺物層である。

**18 (46~47間ベルト土層)** (Fig. 8) 土層は北側から南側に流れ込むように堆積している。3層には条痕文土器等の遺物を含む。4層以下は無遺物層である。

土層の対応関係を整理すると、土層ベルト1から10にかけては上層に押型文土器を含み、その下にこぶし大~人頭大の大きさの礫を多く含む層が認められる共通点が見られる。この層には遺物はほとんど含まれず、短期間で堆積したものと考えられる。更にこの層の下層からは撲糸文土器、条痕文土器等から押型文土器を含まない文化層が認められる。この礫層は押型文土器とそれ以前の時期を区分する鍵層と言える。土層ベルト11より東側ではこの層は見られない。無遺物層のレベルで等高線を引くと、10から11にかけて浅い谷が入る地形が復元される。土層ベルト11~18にかけても撲糸文土器、条痕文土器が出土しているが、遺物の量や集石遺構の分布状況は西側と異なる。同時期のものか、時期差が持つものは明確ではないが、大きく2つの分布域が想定される。この分布域は更に細かく分かれる可能性があるが、次項からはこの二つの分布域中の遺構・遺物の広がり、様相を示しながら報告していく。なお、観察表に示した層の対応関係はグリッド毎での対応関係であるため、グリッドが異なれば、層順は一致しない。各グリッド同士の層の対応関係はFig.9に示した。

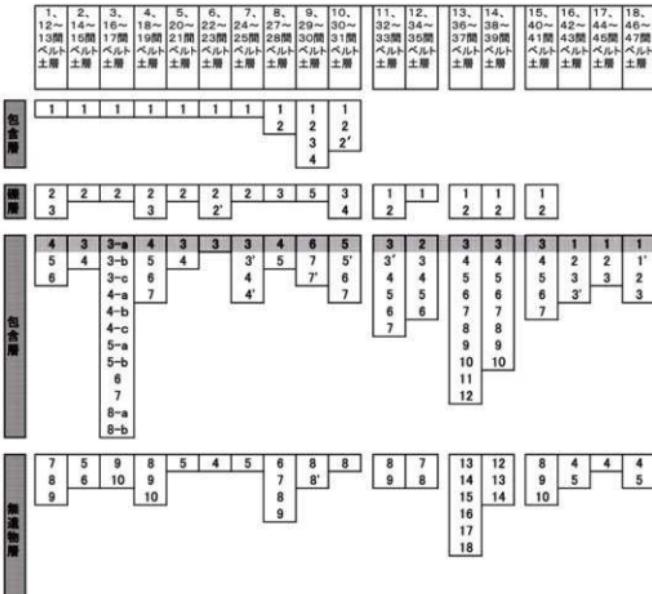


Fig.9 土層対応概念図

### 3) 遺構

検出した遺構は集石遺構24基（内、2基は焼石の礫群）、炉穴1基、焼土面数基等である。遺構の分布は30~33区を境に大きく二つ（西エリア、東エリア）に分かれる。集石遺構は全域で検出した。炉穴は調査区西端で検出した。焼土面は調査区西側で数基検出した（Fig.10）。

#### 集石遺構

集石遺構は掘り込みをもつものともたないものがある。掘り込みを持つものは壁に沿って石が配置されるものと配置されないものがある。掘り込みを持たないものは自然堆積のものと区別が難しかったが、礫が被熱していることや周辺での炭化物の分布状況から遺構として認定した（tab. 2）。

#### 西エリアの遺構

##### SX034 (Fig.11, PL4-1~3, 5-1)

16-I区で検出した。検出面17.4mを測る。不整円形の掘り込みをもつ。掘り込みの底には炭化物が多く見られる。掘り込みの壁に立てられるように長さ20cm程度の扁平な石が巡る。石は赤変している。石囲いの内部には手のひら大の礫が見られる。AMS法による測定のC14年代ではBP8565±40の値が得られた。

##### SX045 (Fig.12, PL5-2, 3, 6-1)

26-J区で検出した。検出面16.5mを測る。円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が見られる。掘り込みの壁に立てられるように長さ20~30cm程度の扁平な石が巡る。底には拳大の礫が敷かれる。石は赤変している。石囲いの内部には拳大の礫が見られる。AMS法による測定のC14年代測定ではBP8495±40の値が得られた。

##### SX033 (Fig.13, PL6-2)

17-I区で検出した。検出面17.1mを測る。不整円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。20個程度の拳大から人頭大の礫が掘り込みの縁に沿って出土した。赤変した礫がある。AMS法による測定のC14年代測定ではBP8675±35が得られた。

##### SX035 (Fig.13, PL6-3)

18-K区で検出した。検出面16.5mを測る。不整円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。10個程度の手のひら大の礫が掘り込みの縁に沿って出土した。ほとんどが赤変している。

##### SX037 (Fig.13, PL7-1)

14-L区で検出した。検出面17.0mを測る。梢円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。50個程度の拳大の礫が密集する。大半が赤変している。

##### SX041 (Fig.13, PL7-2)

19-M区で検出した。検出面16.2mを測る。不整円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。70個程度の拳大の礫が密集する。大半が赤変する。

##### SX042 (Fig.13, PL7-3, 8-1)

17-L区で検出した。検出面16.2mを測る。円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。200個程度の拳大の礫が密集して出土した。赤変した礫がある。AMS法による測定のC14年代測定ではBP9405±40が得られた。

##### SX043 (Fig.14, PL8-2)

11-E区で検出した。検出面18.6mを測る。円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。50個程度の拳大の礫が密集して出土した。赤変した礫がある。

##### SX044 (Fig.14, PL8-3)

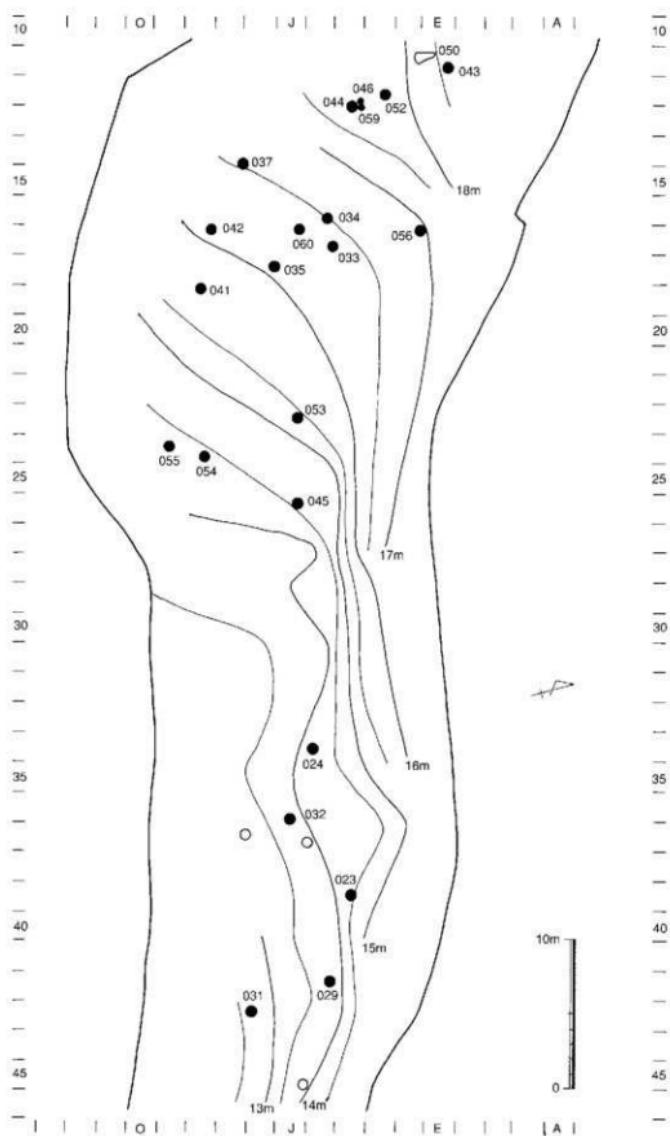


Fig.10 縄文時代遺構配置図 (1/300)

13-H区で検出した。検出面17.9mを測る。不整円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が見られる。10個程度の拳大の礫が点在する。赤変した礫がある。

**SX046** (Fig.14, PL.9-1)

12-H区で検出した。検出面18.4mを測る。円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。8個程度の手のひら大の礫が密集して出土した。赤変した礫がある。

**SX052** (Fig.14, PL.9-2)

12-G区で検出した。検出面17.8mを測る。円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。10個程度の拳大の礫が密集して出土した。赤変した礫がある。

**SX053** (Fig.14, PL.9-3)

23-J区で検出した。検出面15.6mを測る。楕円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。10個程度の拳大の礫が密集して出土した。赤変した礫がある。

**SX054** (Fig.14, PL.10-1)

24-M区で検出した。検出面15.0mを測る。楕円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。10個程度の拳大の礫が密集して出土した。赤変した礫がある。

**SX055** (Fig.15, PL.10-2)

24-N区で検出した。検出面14.9mを測る。楕円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。20個程度の拳大~手のひら大の礫が密集して出土した。赤変した礫がある。

**SX056** (Fig.15, PL.10-3)

17-F区で検出した。検出面16.7mを測る。楕円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。10個程度の手のひら大の礫が密集して出土した。赤変した礫がある。AMS法による測定のC14年代ではBP9385±40。

**SX059** (Fig.14, PL.8-3)

13-H区で検出した。検出面17.9mを測る。不整円形の掘り込みをもつ。SX044に切られる。埋土には炭粒子が見られる。10個程度の拳大の礫が点在する。赤変した礫がある。

**SX060** (Fig.15, PL.11-1)

17-J区で検出した。検出面17.1mを測る。円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。人頭大の礫が5個出土した。赤変した礫がある。

**SX049** (Fig.16, PL.11-2)

11-G区で検出した。検出面18.3mを測る。掘り込みは見られない。40個あまりの拳大の礫が点在する。赤変した礫がある。

**SX051** (Fig.16)

11-H区で検出した。検出面18.1mを測る。掘り込みは見られない。10個あまりの拳大の礫が点在する。赤変した礫がある

東エリアの遺構

**SX023** (Fig.18, PL.11-3)

39-H区で検出した。検出面14.9mを測る。不整円形の掘り込みをもち、拳大の礫が10個程度点在する。赤変した礫がある。掘り込みの中の炭化物のAMS法による測定のC14年代ではBP8630±35の値が得られた。

**SX024** (Fig.17, PL.12-1~3, 13-1~3)

34-I区で検出した。検出面15.1mを測る。不整円形の掘り込みをもつ。この遺構は検出面で

は拳大の礫が密集していた。それを除去すると、壁に沿って礫が巡り、中央のくほんだ部分で長方形の礫を検出した。更に周囲の礫を除去すると、炭化物層の上面に中央を空けて敷かれた礫を検出した。礫より下は炭化物層となり、礫は見られない。検出状況から炭化物層の上面で見られた礫は土器を支えるための支脚のような役割があったのではないかと考える。掘り込みの底の炭化物のAMS法による測定のC14年代ではBP9245±40の値が得られた。

**SX029** (Fig.18, PL.14-1)

42-I区で検出した。検出面15.2mを測る。楕円形の掘り込みをもつ。埋土には炭粒子が含まれる。40個程度の拳大の礫が密集する。赤変した礫がある。

**SX031** (Fig.18, PL.14-2)

43-L区で検出した。検出面13.1mを測る。楕円形の掘り込みをもつ。炭はほとんど出土しない。20個程度の拳大の礫が密集する。礫は被熱のためかもろくなっている。

**SX032** (Fig.18, PL.14-3)

36-J区で検出した。検出面14.6mを測る。隅丸方形の掘り込みをもつ。埋土には2~5cm程の炭化物が点在する。上部に礫が見られるが、熱を被ったようではない。

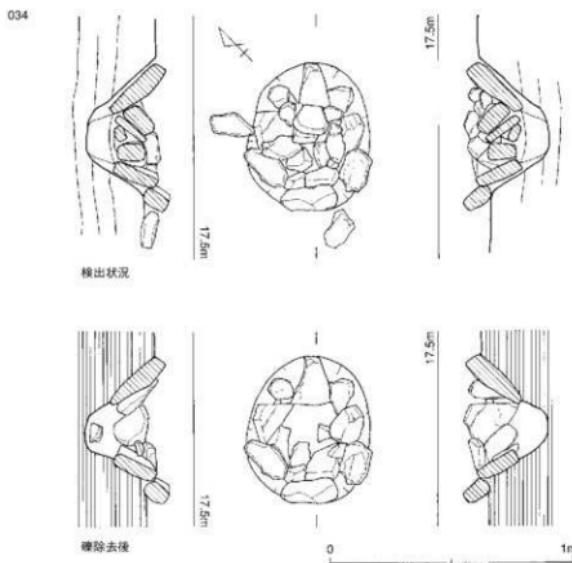


Fig.11 集石遺構実測図1 (1/40)

045

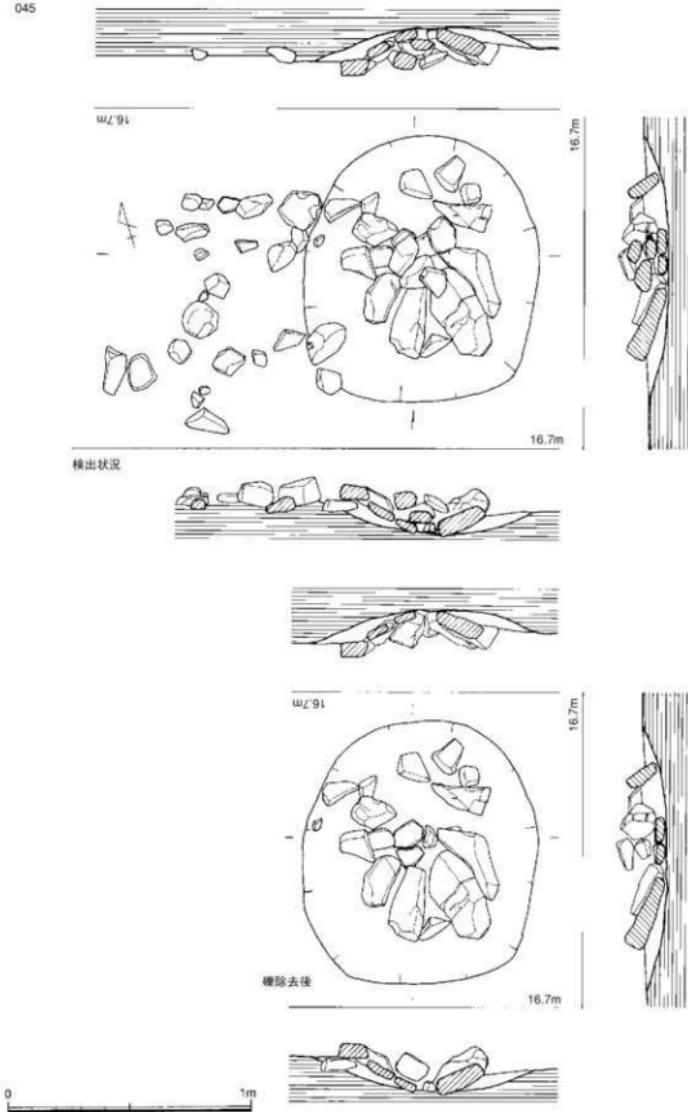


Fig.12 集石遺構実測図 2 (1/40)

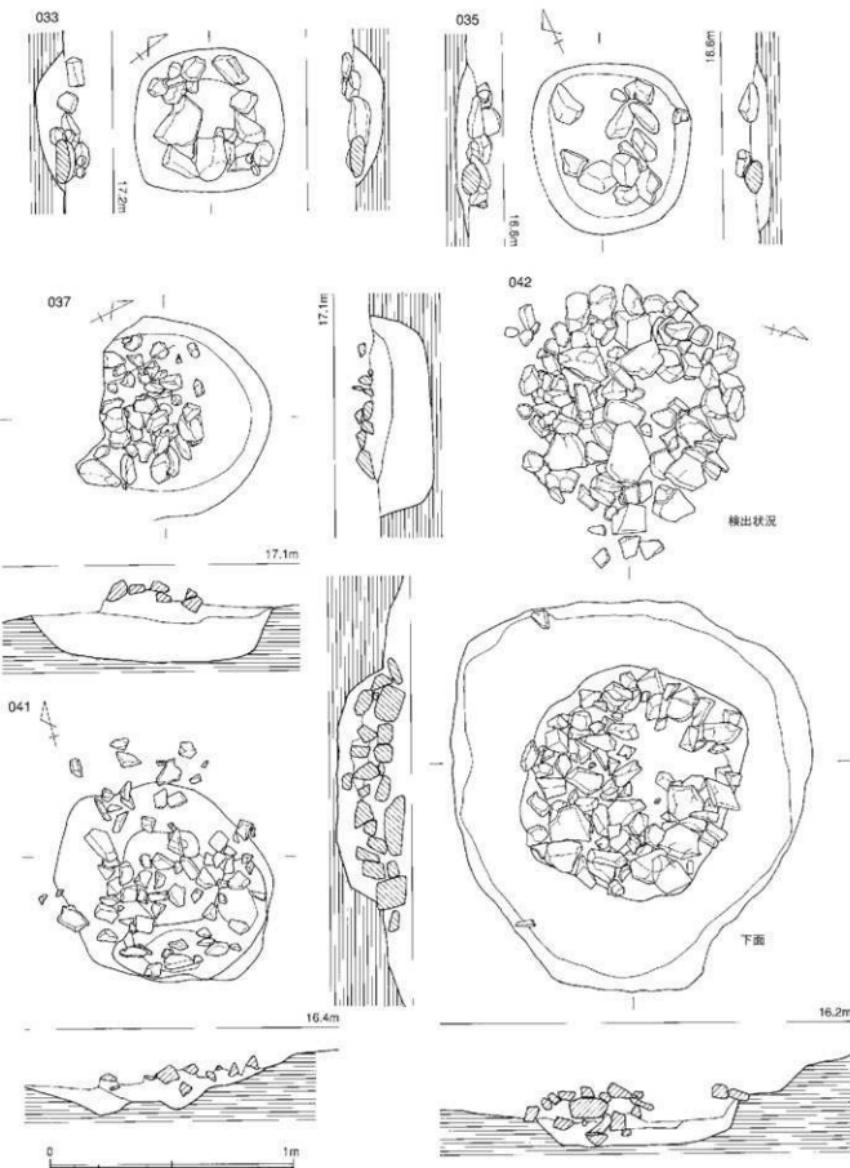


Fig.13 集石遺構実測図 3 (1/40)

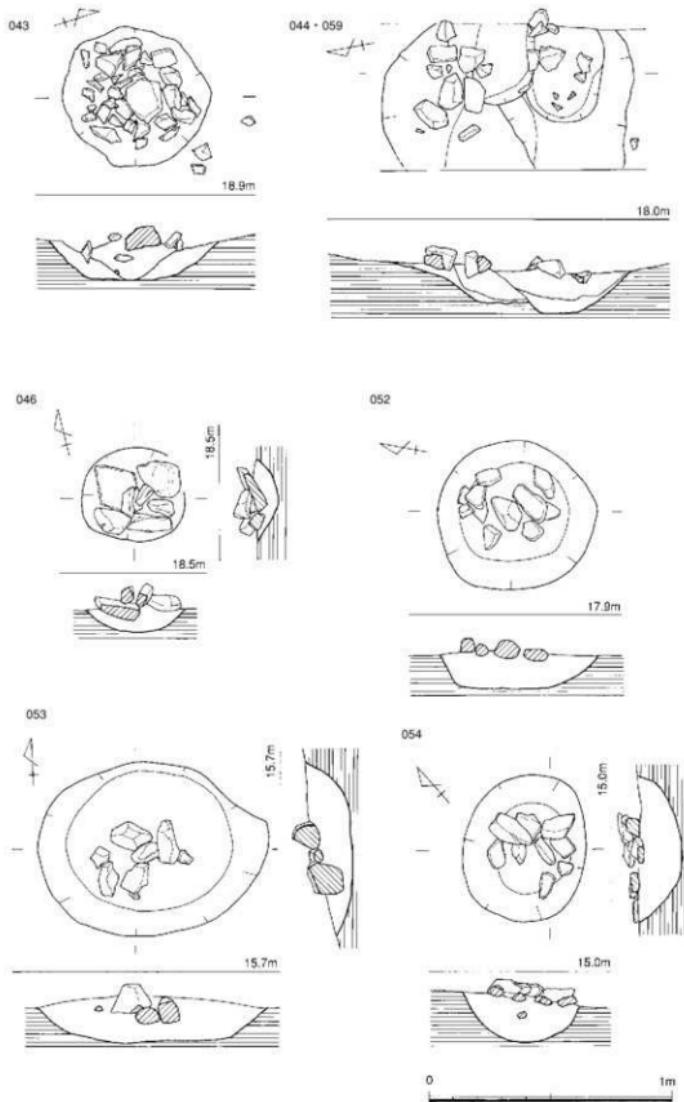


Fig.14 集石遺構実測図 4 (1/40)

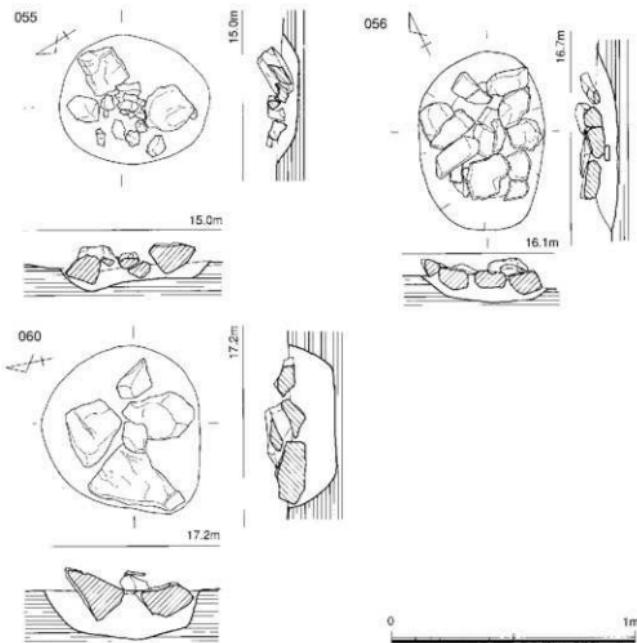


Fig.15 集石遺構実測図 5 (1/40)

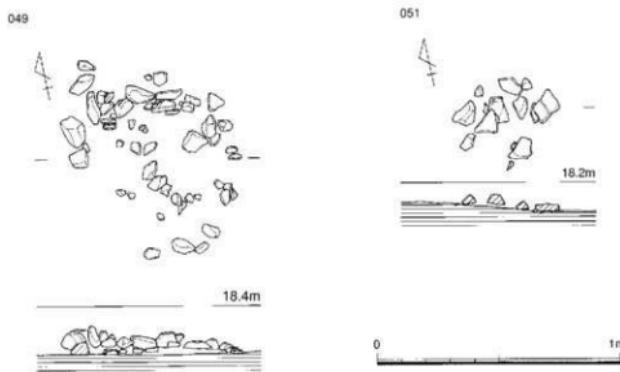


Fig.16 集石遺構実測図 6 (1/40)

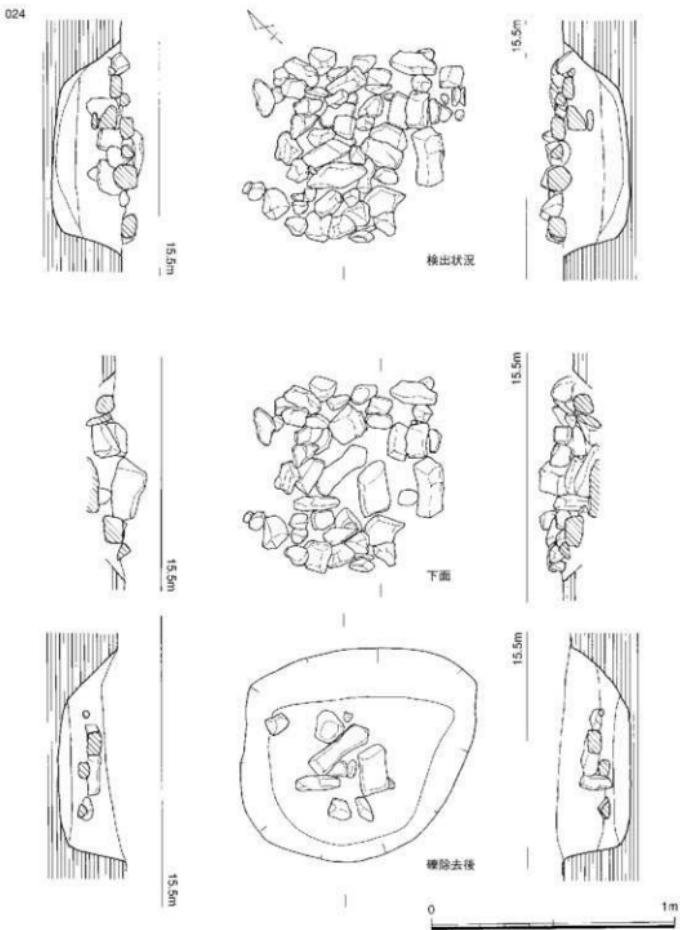


Fig.17 集石遺構実測図 7 (1/40)

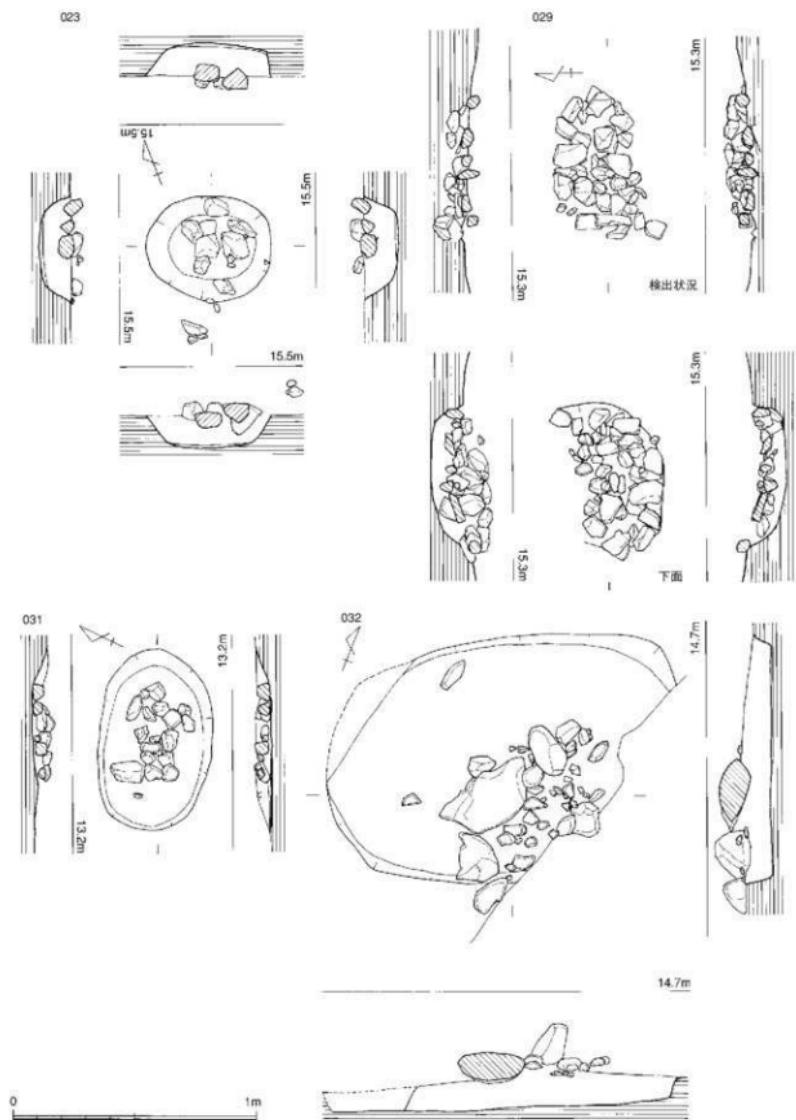


Fig.18 集石遺構実測図 8 (1/40)

## 炉穴

SK050 (Fig.19、PL.15-1~3)

11-F区で検出した。検出面18.4mを測る。規模は長さ140cm、幅80cm、深さ35cmを測る。平面形はひょうたん形を呈し、先端に向かって土坑の底が上がっていく。先端の両壁の上面は被熱で赤変している。埋土には炭粒子が含まれる。AMS法による測定のC14年代ではBP9120±45が得られた。

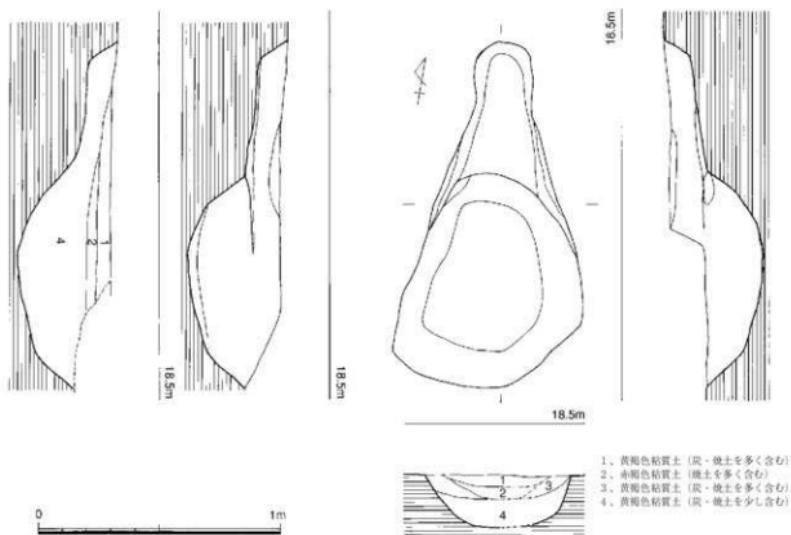


Fig.19 炉穴実測図 (1/40)

tab. 2 集石遺構一覧

辨図番号	因版番号	遺構番号	地区・検出面	時期	盛り込みの有無	盛り込みの法量 (長さ×幅×深さ cm)	縁の密度	配石の有無	炭化物の有無	備考
16	11-3	0 2 3	39-H区。14.9m。5層。 3, 13-1 ~3	I か	有	52×44×13	疎	無	有	AMS法のC14年代測定では BP8630±35。
17	12-1~ 3, 13-1 ~3	0 2 4	34-I 区。15.1m。2~ 3層。	II	有	108×90×25	密	有	有	盛り込みの底には炭化物が10cm堆積。支脚状の立石あり。AMS法のC14年代測定ではBP9245±40。
18	14-1	0 2 9	42-L区。15.2m。1層 中。	II	有	65×45×15	密	無	無	
18	14-2	0 3 1	42-L区。13.1m。2層 中。	II	有	74×46×7	密	無	無	
18	14-3	0 3 2	36-J区。14.6m。5層 中。	II	有	140×105×15	疎	無	無	
13	6-2	0 3 3	17-I区。17.1m。1層 中。	I	有	60×60×10	疎	無	有	AMS法のC14年代測定では BP8675±35。
11	4-1~3、 5-1	0 3 4	16-I区。17.4m。1~2 層中。	I	有	60×50×25	密	有	有	AMS法のC14年代測定では BP8565±40。
13	6-3	0 3 5	18-K区。16.5m。2層。	I	有	80×65×7	疎	無	有	
13	7-1	0 3 7	14-I区。17.0m。1~ 4層間。	I か	有	100×80×30	密	無	有	
13	7-2	0 4 1	19-M区。16.2m。1層 中。	I	有	92×83×15	密	無	有	
13	7-3, 8- 1	0 4 2	17-L区。16.2m。3c 層。	II	有	160×145×30	密	無	有	AMS法のC14年代測定では BP9405±40。
14	8-2	0 4 3	11-E区。18.6m。5層 中。	I か	有	62×57×20	密	無	有	
14	8-3	0 4 4	13-H区。17.9m。4層 上面。	II か	有	60×55×25	疎	無	有	
12	5-2, 3、 6-1	0 4 5	12-J区。16.5m。1層 中。	I	有	110×95×20	密	有	有	AMS法のC14年代測定では BP8495±40。
14	9-1	0 4 6	12-H区。18.4m。1層 中。	I	有	40×40×20	密	無	有	
16	11-2	0 4 9	11-G区。18.3m。2~ 4層間。(2房中)。	I	無		疎	無	無	
16	—	0 5 1	11-H区。18.1m。2層 中か。	I	無		疎	無	無	
14	9-2	0 5 2	12-G区。17.8m。6層 中。	II	有	65×60×20	疎	無	有	
14	9-3	0 5 3	23-J区。15.6m。3層 中。	II	有	95×70×25	密	無	有	
14	10-1	0 5 4	24-M区。15.0m。3層 上面。	II	有	60×50×25	疎	無	有	
15	10-2	0 5 5	24-N区。14.9m。1層 中か。	I	有	60×52×15	疎	無	有	
15	10-3	0 5 6	17-F区。16.7m。9層 下面(10層に盛り込まれる)。 中か。	II	有	72×52×20	密	無	有	AMS法のC14年代測定では BP9385±40。
14	8-3	0 5 9	13-H区。17.9m。4層 中か。	II	有	60×45×20	疎	無	有	
15	11-1	0 6 0	17-I区。17.1m。1層 中。	I	有	65×65×25	疎	無	有	

※時期はI期は押型文土器の時期、

II期はそれ以前の時期(撲糸文、

刻突文、条痕文土器の時期)

#### 4) 出土土器の分布状況と内容

##### 分布状況 (Fig.20)

今回の調査では10,000点を超える土器（押型文土器、無文土器、撲糸文土器、刺突文土器、条痕文土器等）、石器（石錐、石槍、削器、搔器、敲石、磨石、石皿、石核等）を取り上げた。遺物の分布を見していくと、造構の分布でも触れたように、おおむね、30～33区を境に西側（西エリア）と東側（東エリア）に分けられる。各エリアの中で見ていくと、集石造構等に対応するように遺物の集中が認められる。西エリアでは集石造構052や炉穴050等がある12-F区～14-I区、集石造構056等がある15-F区～18-I区、集石造構045、053等がある25-I区～26-K区、両エリアの境となる28-G区～32-L区で遺物が集中して出土した。東エリアでは集石造構024、032等がある34-I区～35-L区、集石造構023、029等がある38-G区～41-K区、集石造構031等がある43-L～45-O区等で遺物の集中が見られた。

##### 出土土器 (Fig.21)

出土した土器には押型文土器、無文土器、撲糸文土器、刺突文土器、条痕文土器がある。土器片は6369点取り上げたが、細片が多く、個体識別が難しい。特徴が分かる破片で数量を示すと、押型文土器91点、無文土器1190点、撲糸文土器269点、刺突文土器63点、条痕文土器1285点となる。分布状況を見していくと、押型文土器は主に西エリアで出土した。東エリアではほとんど見られない。また、層位的にも層序の項で触れたように西エリアに広がる疊層の上層で出土し、下層は押型文土器を含まない。無文土器は全域で見られた。層位的には押型文土器に伴うものとそれ以前のものがある。撲糸文土器は全域で出土する。西エリアでは主に疊層より下層で出土する。押型文土器を含む層から出土するものはそれに伴うものかは特定できない。刺突文土器は点在して全域で出土する。数量は少ない。層位的には撲糸文土器を含む層から出土する。条痕文土器は全域で出土する。層位的には押型文土器を含む層、撲糸文土器を含む層等、各層で出土する。次にそれぞれの土器について特徴を見ていく。なお、土器の調整、出土位置、層位等はTab. 4に示した。

##### 押型文土器 (Fig.23, PL.28)

押型文土器の文様には山形文、楕円文がある。

1～7はいずれも胴部片で横方向の山形文が施される。1は内面に横方向の条痕が見られる。2の外面は剥離しているが、内面に山形文が施される。8～20は楕円文が施される。8は口縁は緩やかに外反し、外面には横方向の大きめの楕円文が施される。口縁内面は端部付近に縱方向の長めの原体条痕が施される。所謂「下背生B式」に相当するか。9～11は胎土、文様など類似しており、同一個体と考えられる。口縁はやや外反し、外面には横方向の細かい楕円文が施される。口縁内面は端部付近に縱方向の短い原体条痕が施される。その下方に横方向の細かい楕円文が施される。所謂「早水台式」に相当する。12は外面に横方向の細かい楕円文が施される。内面はケズリ気味のヨコナデが施される。13～15は胎土、文様などから同一個体と考えられる。器壁は薄く、口縁は直線的に開く。外面には横方向の細かい楕円文が施される。内面には原体条痕はなく、端部付近に横方向の楕円文が施される。17、18も同様の器形、文様構成を持つ。所謂「船荷山式」に相当するものか。

##### 無文土器 (Fig.24～25, PL.29, 30)

ナデ調整の文様を持たないものを無文土器とした。遺物は西エリアと東エリアで出土したもので分けて、西エリアでは押型文土器が含まれる層とその下層で出土したものでまとめて掲載した。

21～27は西エリアの押型文土器を含む層から出土したものである。21は器壁は薄く、口縁は緩やかに外反する。内面斜め方向の短い沈線が施される。色調は淡い黄橙色を呈する。22、23は緩やかに外反する口縁を持つ。24～27は底部である。24は乳房状を呈する。下層に属するものか。25～27は尖底

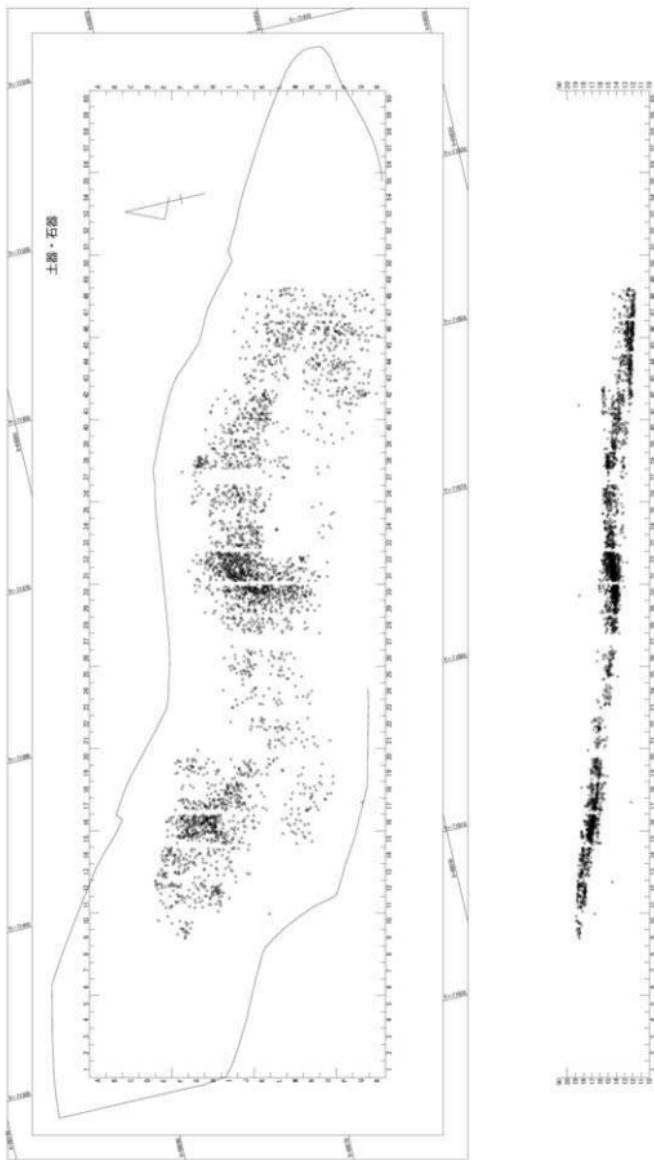


Fig.20 遺物分布図1 (1/600)

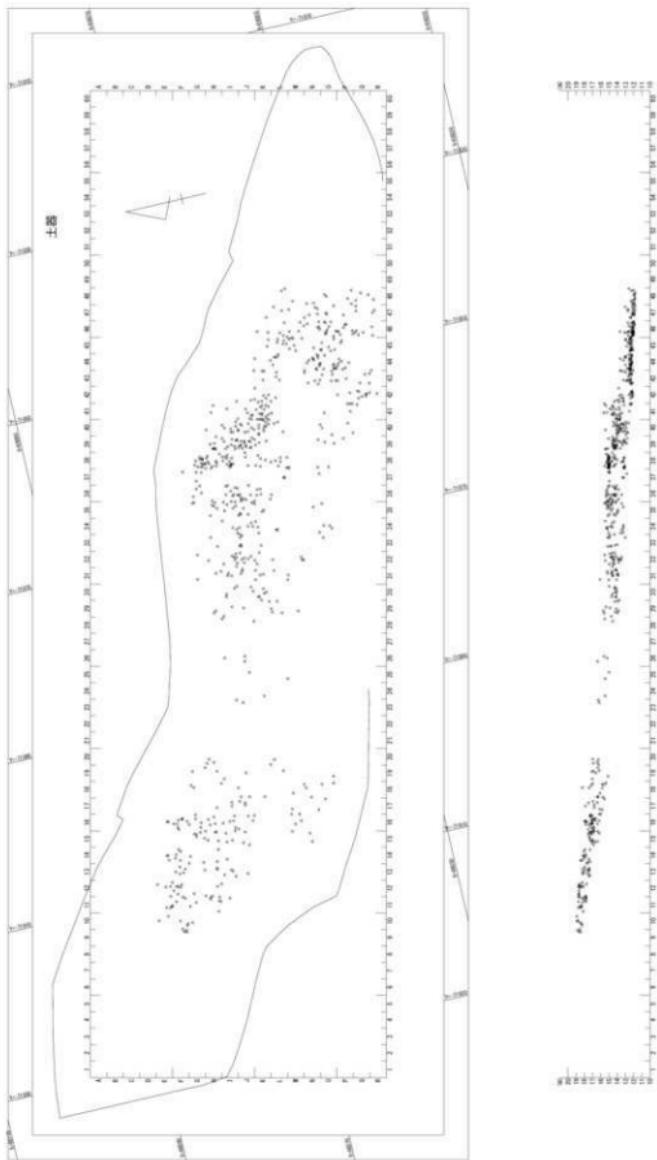


Fig.21 遺物分布図2 (1/600)

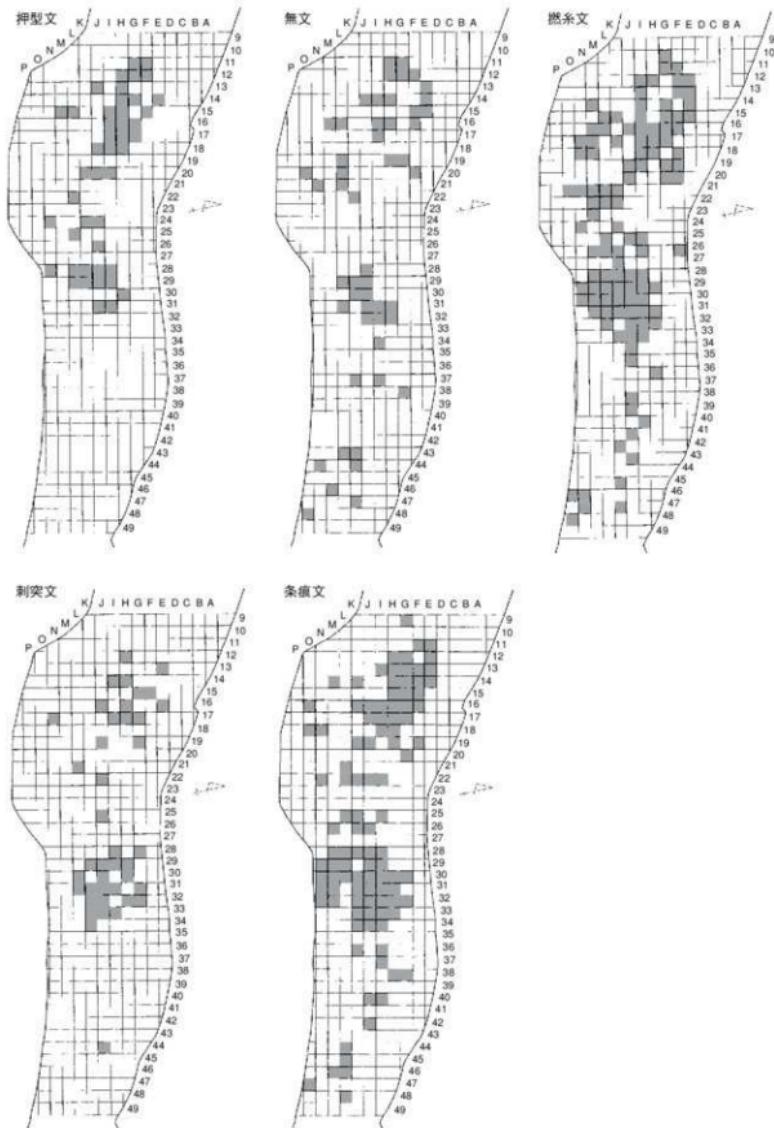


Fig.22 繩文土器分布図 (1/800)

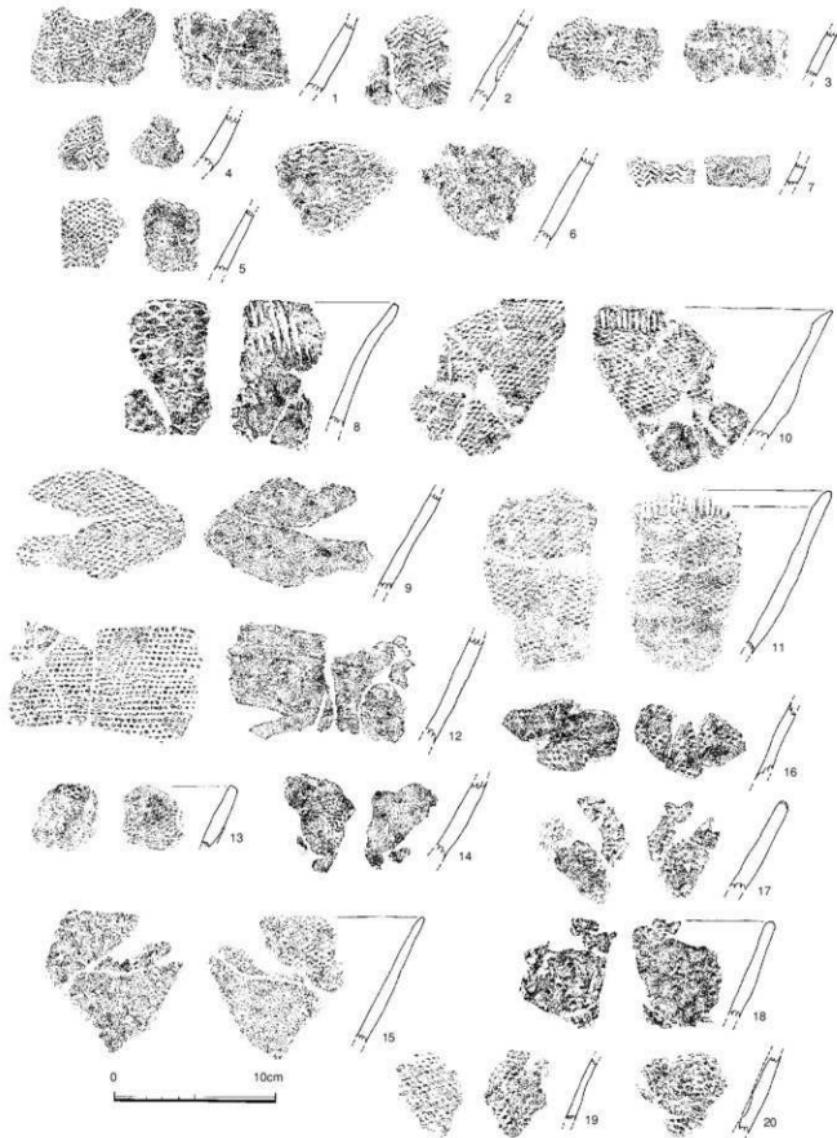


Fig.23 繩文土器実測図 1 (1/3)

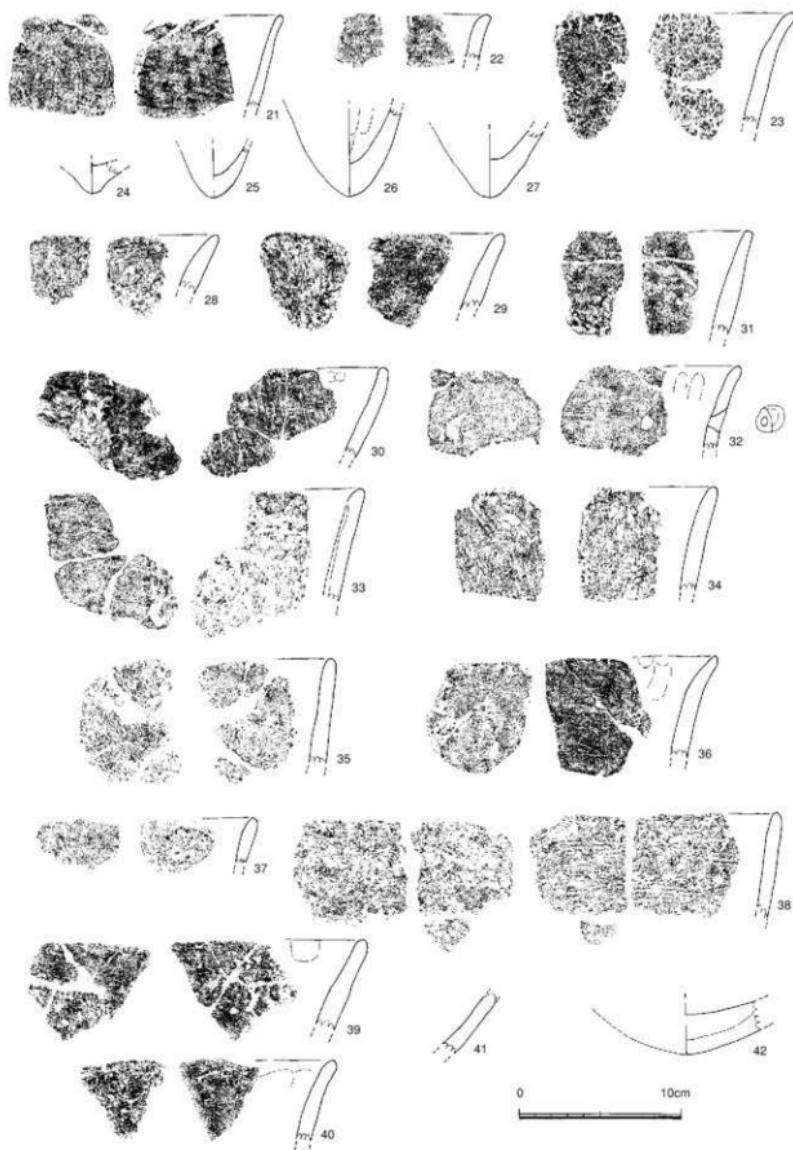


Fig.24 縄文土器実測図 2 (1/3)

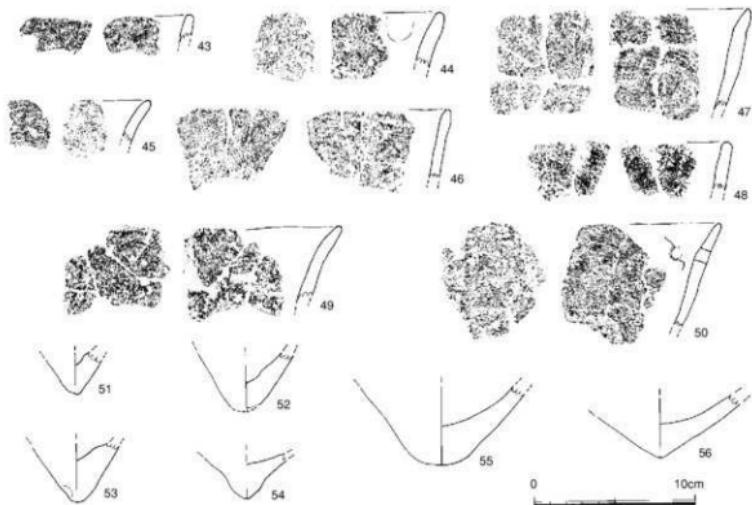


Fig.25 縄文土器実測図 3 (1/3)

tab.3 土器の出土層位一覧表

地区	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	25	26	27	28
層位	4	5	4	5	4	5	3	2	3	4	5	3	2	3	4	5
押						○										
無	○		○	○	○	○	○	○								○
擦	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
刺	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
条	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

地区	29	30	31	32	33	34	35	36	40	41	42	43	44	45	46
層位	3	4	5	6	7	8	3	4	5	6	7	8	3	4	5
押	○	○	○	○											
無	○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○
擦	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
刺	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
条	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

符号-押型土器、無-無文土器、擦-擦糸文土器、刺-刺突文土器、条-条痕文土器

を呈する。色調は淡黄橙色を呈する。28~42は西エリアの下層から出土したものである。28~40は口縁である。胎土には砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈するものが多い。口縁は直立気味に立ち上がるもの(34、35、38等)、やや外反するもの(32、36、40等)がある。32は口縁からやや下ったところに焼成後の穿孔が見られる。41、42は底部片である。42は器壁は厚く、丸底である。色調は暗褐色を呈する。43~56は東エリアで出土した。43~50は口縁である。口縁は直立気味に立ち上がるもの(43)、やや外反するもの(47、49、50等)がある。50は口縁からやや下ったところに焼成前穿孔が見られる。51~56は底部である。51~54は乳房状を呈する。55は器壁は厚く、丸底を呈する。56は広角の尖底である。

#### 撚糸文土器 (Fig.26~29, PL.30~34)

撚糸文土器は判別できるものは胴部片も掲載したが、傾きや施文原体が不確かな部分が多い。撚糸文土器は他の土器と比べると、色調、胎土に違いが見られ、色調は赤褐色~淡橙色を呈し、胎土の砂粒も細かいものが多い。

57~61は西エリアの上層から出土した。施文は外面のみのもの(57、58等)と内外面に施すもの(59、60)とがある。器形は直立気味に立ち上がるもの、外反するもの、外側に開くなどがある。57は口縁は直立気味に立ち上がり、外面には右下がりの斜め方向の撚糸文が施される。内面はナデである。58は口縁は外反し、外面に横方向の撚糸文が施される。内面はナデである。59は口縁は外側に開き、端部には突起がつく。外面には横方向の撚糸文、内面は右下がりの斜め方向の撚糸文が施される。63~129は西エリアの下層から出土した。撚糸文は太さは2mm前後、間隔は3mm前後で、撚りが分かるものでは1段右撚りのものが大半である。文様の方向は横方向~右下がりの斜め方向のものが多く、縦方向のものは少ない。器形は直立気味に立ち上がるもの、外反するものなどがある。施文は内面にも施されるものである。71は器壁は厚く、直立気味に立ち上がる。端部は丸く仕上げる。外面には横方向の撚糸文が施される。内面は横方向のミガキが施される。63は口縁は外側に開き、外面には右下がりの斜め方向の撚糸文が施される。内面はナデである。107は器壁は薄く、外面に縦方向の撚糸文が施される。内面には横方向の撚糸文が施される。110、116は口縁端部に山形の突起がつく。外面は右下がりの斜め方向の撚糸文が施されるが、口縁付近はヨコナデされる。内面はナデである。114は口径が復元できたもので、18.5cmを測る。外面には右下がりの斜め方向の撚糸文が施されるが、口縁付近は強いヨコナデが施される。121は外面に口縁端部からやや下った位置に横方向の撚糸文が施される。端部には刻み目が施される。74、75は緩やかに外反する。外面には横方向の撚糸文が施される。128は器壁は厚く、緩やかに外反する。端部には山形の突起がつく。外面は横方向の撚糸文施文の後、ヨコナアが施される。68は疑口縁の部分である。外面に横方向の撚糸文が施される。126~129は底部片である。126は乳房気味の広角の尖底である。外面に若干撚糸文が見られる。底面はナデ。128、129も近い器形になると考えられる。127は器壁は厚く、丸底を呈する。外面に若干撚糸文が見られる。底面はナデ。130~136は東エリアで出土した。点数は少ない。132は外面に口縁端部からやや下ったところに横方向の撚糸文が施される。内面はナデである。

#### 刺突文土器 (Fig.30、31, PL.34~36)

刺突文土器は口縁付近に刺突による文様を巡らせるものである。137~140は西エリアの上層から出土した。141~163は西エリアの下層から出土した。164~175は東エリアで出土した。

器形は外側に開くもので、口縁端部付近で更に外反するものもある。直立気味に立ち上がるものは少ない。器面調整にはナデ調整、条痕調整、撚糸文施文のものなどがある。胎土は無文土器や条痕文土器に近い。刺突文様は形状、刺突の方向でいくつかで分けられる。文様で分類すると、I類は棒状

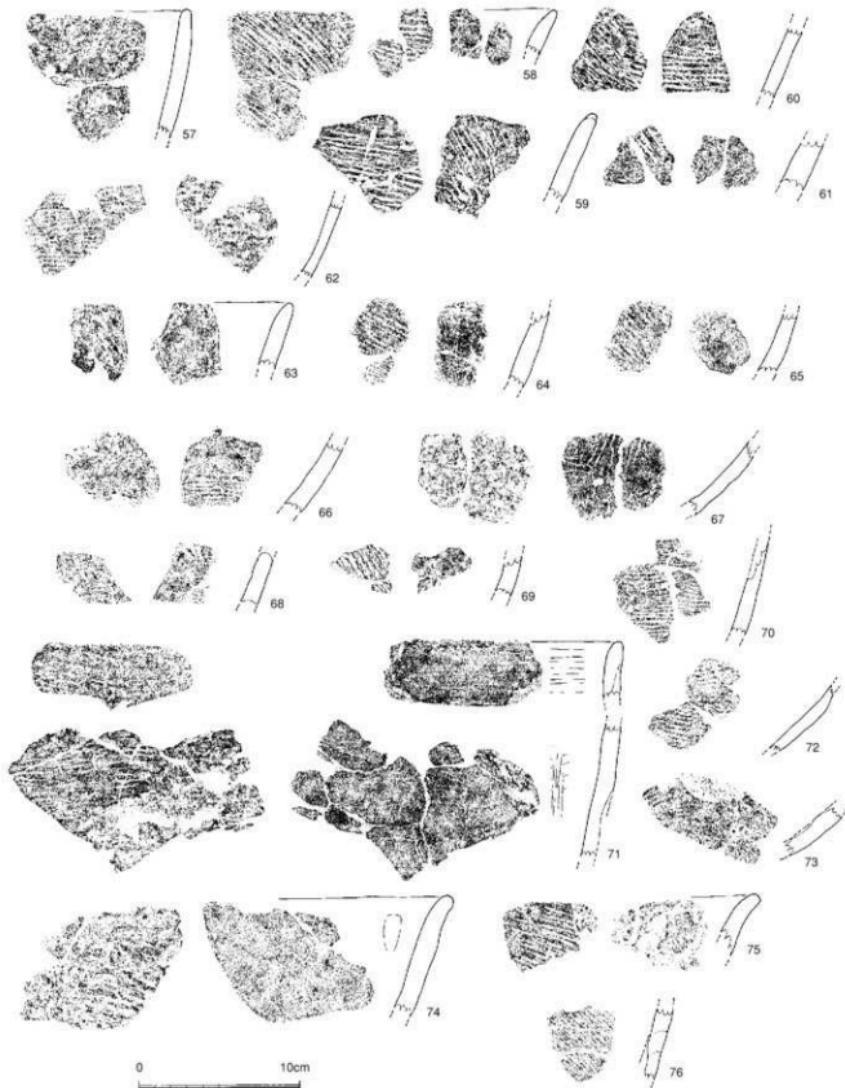


Fig.26 繩文土器実測図 4 (1/3)

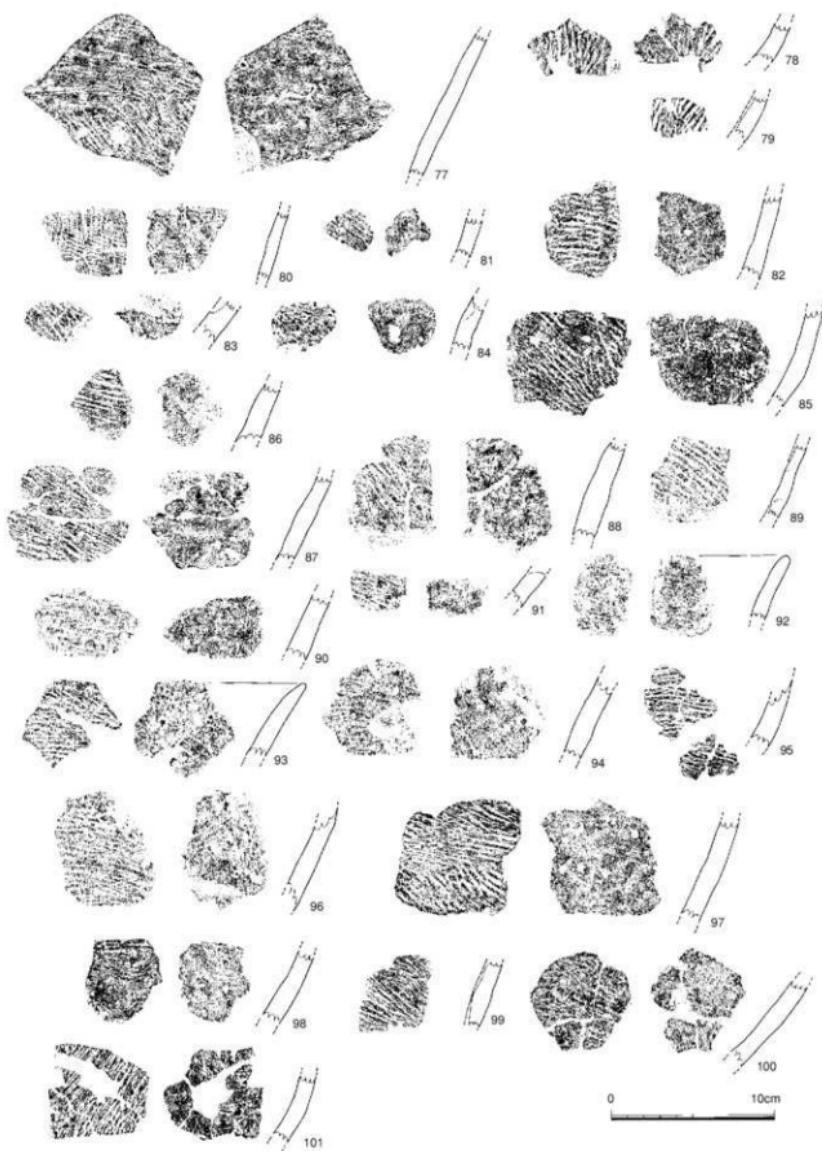


Fig.27 繩文土器実測図 5 (1/3)

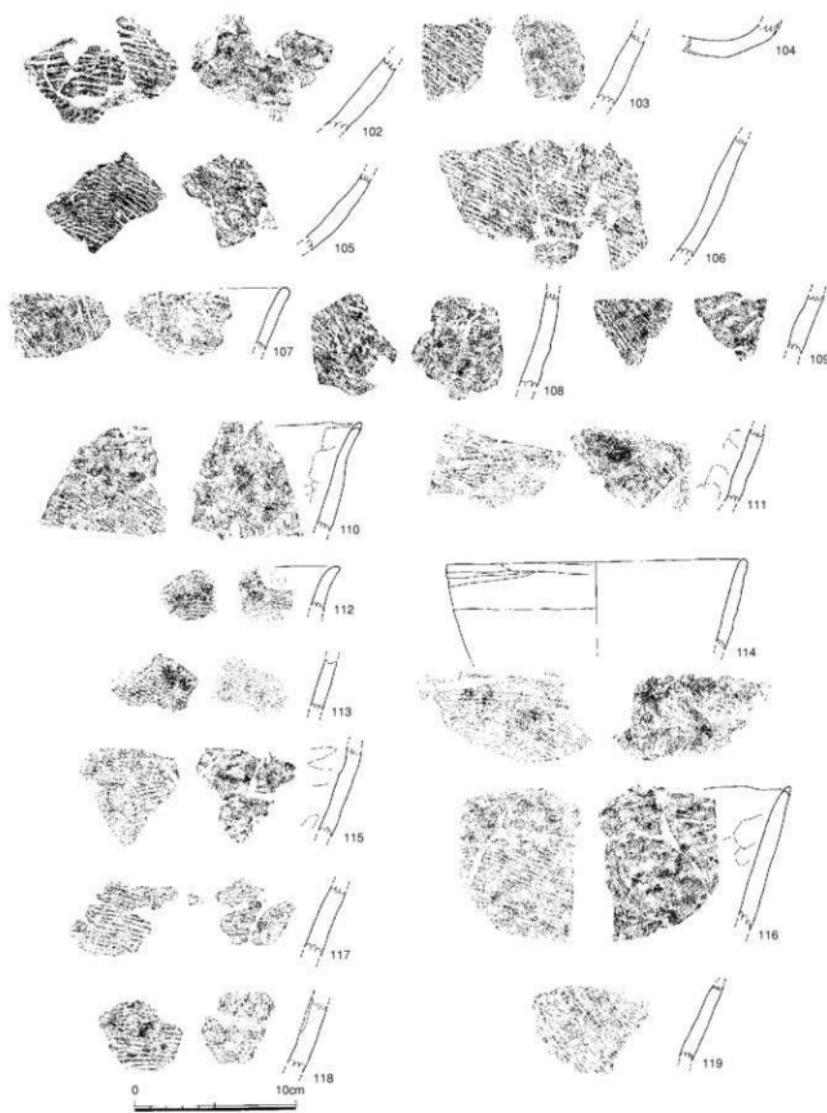


Fig.28 繩文土器実測図 6 (1/3)

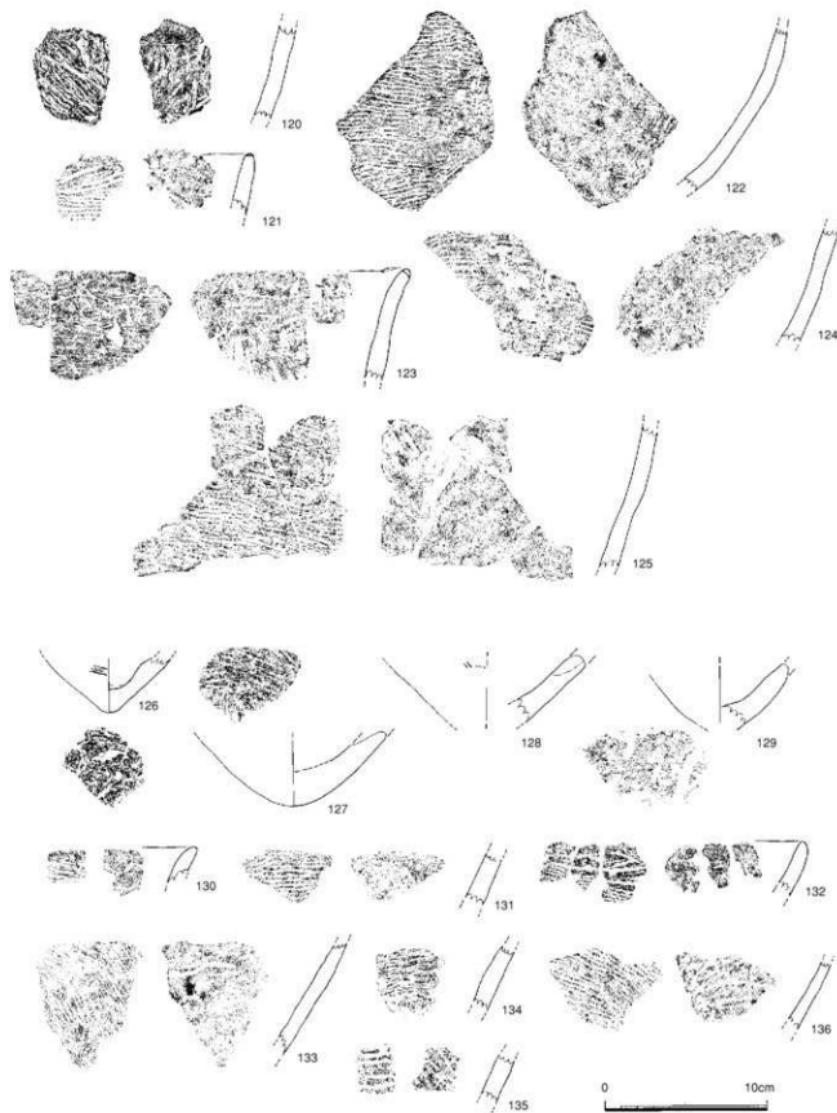


Fig.29 繩文土器実測図 7 (1/3)

工具や竹管状工具で正面もしくは斜め下から刺突したもの（138、140、146、149、151、152、156～164、167、173～175）である。刺突の形状には丸、三角形、四角形を呈するものがある。刺突の深さによっては土器の内側が瘤状に盛り上がるものもある。器面調整には条痕、ナデ、撚糸文が見られる。157は直立気味に立ち上がり、浅い小さな三角形の刺突が施される。158は器壁は薄く、円形の刺突が施される。内側は刺突により瘤状に盛り上がる。調整は条痕後ナデ。160は口縁は緩やかに外反し、浅い小さな円形の刺突が二段に施される。162は外側に開き、口縁端部で外反する。5mm程の円形の刺突が施される。器面調整は外面は斜め方向の撚糸文、内面は横方向の条痕である。胎土に砂粒を多く含み、色調は暗褐色を呈する。先で触れた撚糸文土器とは胎土、色調に相違が見られる。151は緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。浅い小さな円形の刺突が施される。刺突の下方には径1cm程の円形の粘土を貼り付ける。柏原E遺跡出土のものに類似する。167は外反しながら開く器形で、斜め下方向から円形の刺突を施す。内側に突き抜けているものもある。I類は大原D遺跡第15地点で刺突文1類とされたものに類似する。

II類は棒状工具で縱方向に押引状の刺突したもの（137、139、141～148、150、153～155、164、166、168～172）である。刺突の幅や長さには差が見られるが、形状はくさび形、楕円形を呈する。器面調整は横方向の貝殻条痕を施すものが多い。刺突文の幅は5mm程のもの（141、144、146、153、155等）と5mm以下のもの（147、148、166、168、170、172等）がある。前者のものでは141は半截竹管状の工具でやや斜めに施文したものである。145は刺突はくさび形を呈し、1cm以下の間隔で施文される。胎土に3mm程の砂粒を多く含む。146は幅5mm程で、やや斜め方向に長めに施文される。後者のものでは139は直立気味に立ち上がり、細長い刺突が施される。外面には長さ2cm、幅1cm程の縱長の粘土貼付をもつ。調整はナデを施す。148は器壁は1cm以下と薄く、器面調整に条痕が施される。幅5mm以下の細長い刺突が施される。II類は大原D遺跡第15地点で刺突文2類とされたものに類似する。

#### 条痕文土器 (Fig.32～35, PL.36～40)

条痕文土器は器面調整に条痕を施した土器である。条痕文土器は各グリッド、各層で出土したが、ここで掲載したものは下層の押型文土器以前の層から出土したものである。176～221は西エリア、222～253は東エリアで出土した。

器壁は1cm程度で、器形は開き気味に直線的に立ち上がる。端部は丸く仕上げるものが多い。器面調整は大半が二枚貝による横方向の条痕で、ナデを加えるものの若干見られる。色調は赤褐色や淡橙色を呈し、胎土には1～2mm程の砂粒を多く含む。西エリアのものでは181、184、202は焼成後穿孔が見られる。187は接合しないが、出土状態から同一個体と考えられる。口縁は直立気味に立ち上がる。内外面に貝殻条痕を施す。底部は平底である。ナデ調整のみ部分もあるが、形態、胎土からここに掲載した。212～221は底部片である。ナデ調整のみ部分もあるが、形態からここに掲載した。212、213はやや乳房状を呈するが、他は広角の尖底である。219は内面に縱方向の条痕が施される。221は底面は若干突出傾向があるが、外面には縱方向の条痕を施す。内面はナデである。東エリアのものでは226は焼成後穿孔が見られる。器形は開き気味に立ち上がるものが多いが、233は内湾気味に立ち上がる。内外面に横方向の条痕を施す。242～253は底部片である。ナデ部分の破片が多いが、形態、胎土からここで掲載した。242は乳房状を呈する。243～250は底面に突出傾向を持つものもあるが、広角の尖底である。246は丸みを帯びている。251、252は厚い底部で、内面には条痕が見られる。253は外開きの上げ底の底部である。調整はナデである。胎土は他の条痕文土器と類似している。これらの底部は36～38区の包含層の下層から出土しており、古く位置づけられる可能性はある。この種の底部は大原D遺跡第14地点で類例が見られるが、特異な形態である。

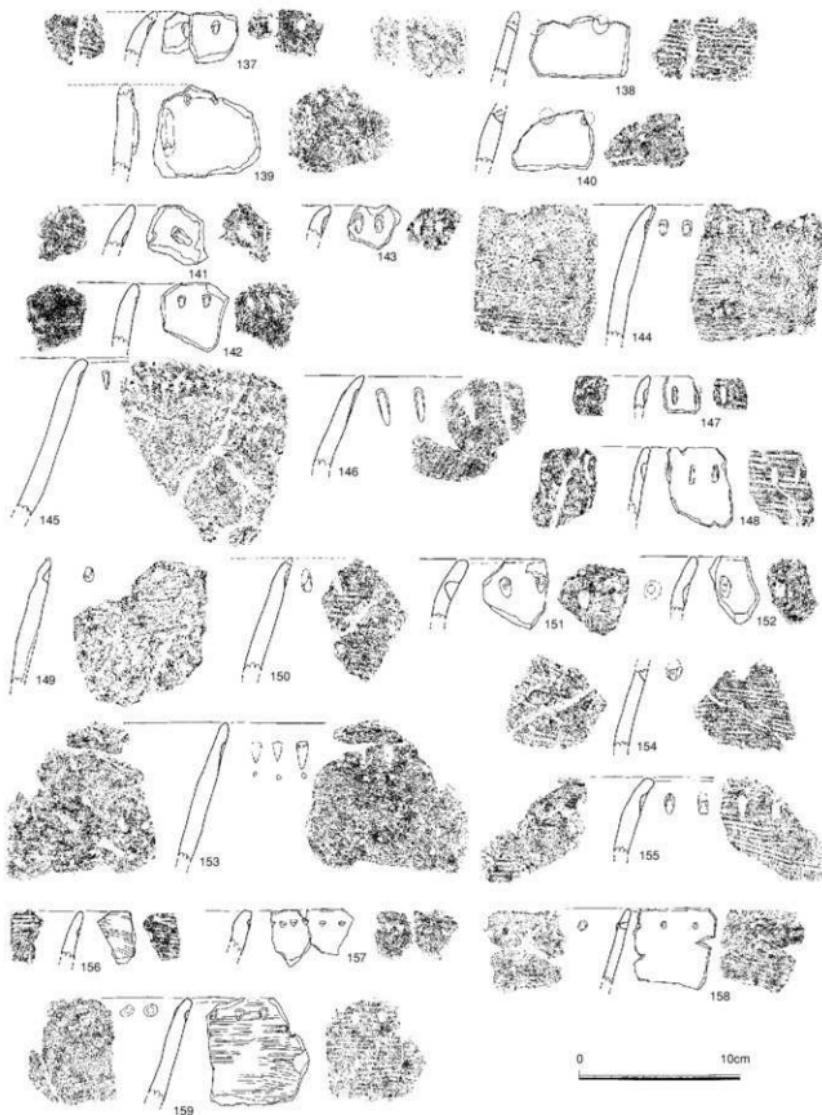


Fig.30 繩文土器実測図 8 (1/3)

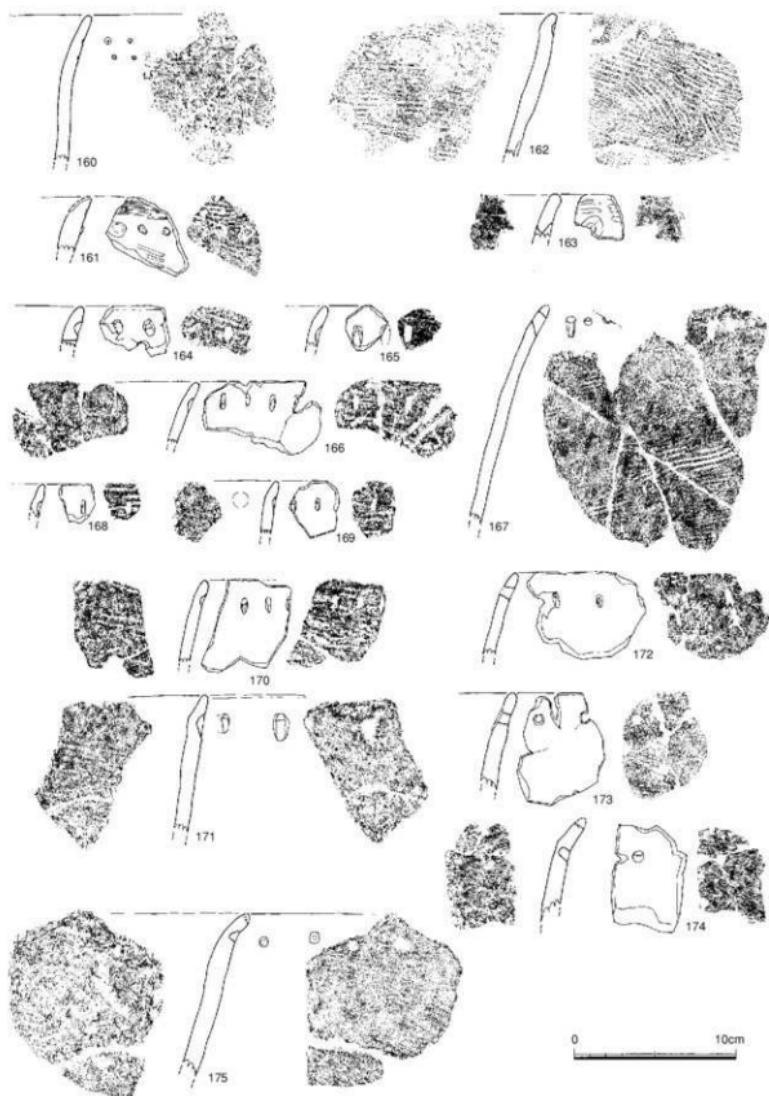


Fig.31 繩文土器実測図 9 (1/3)

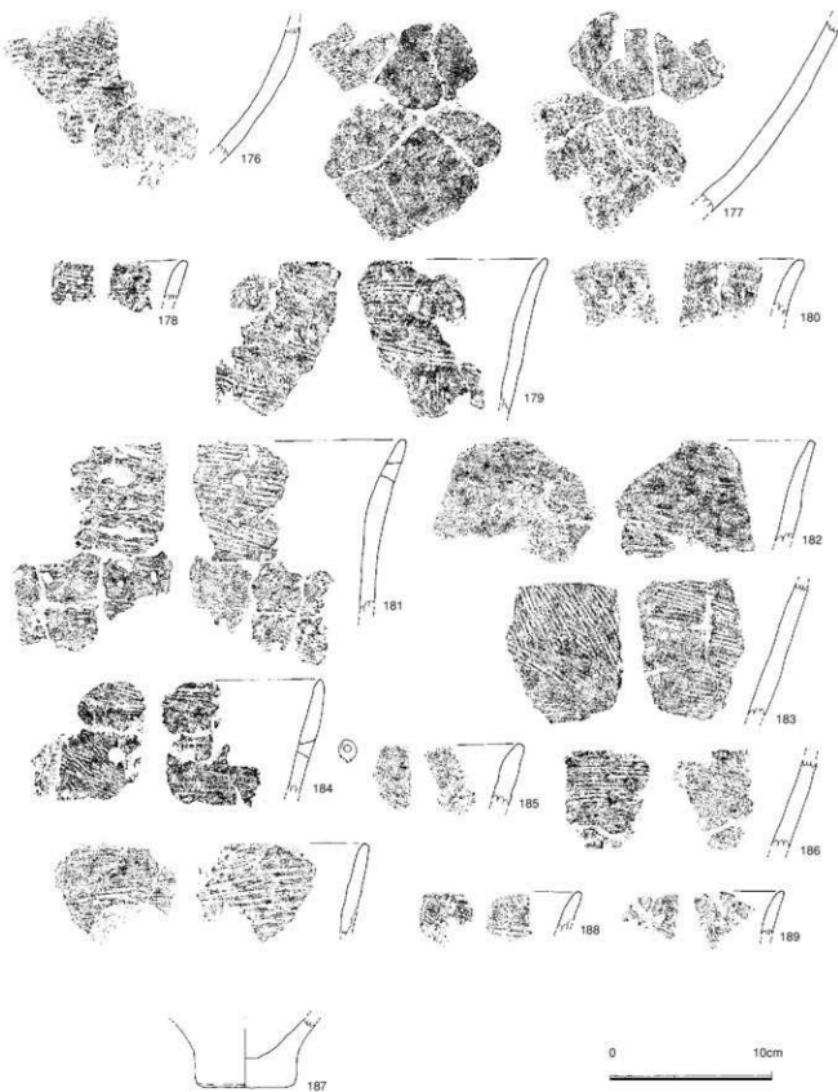


Fig.32 縄文土器実測図10 (1/3)

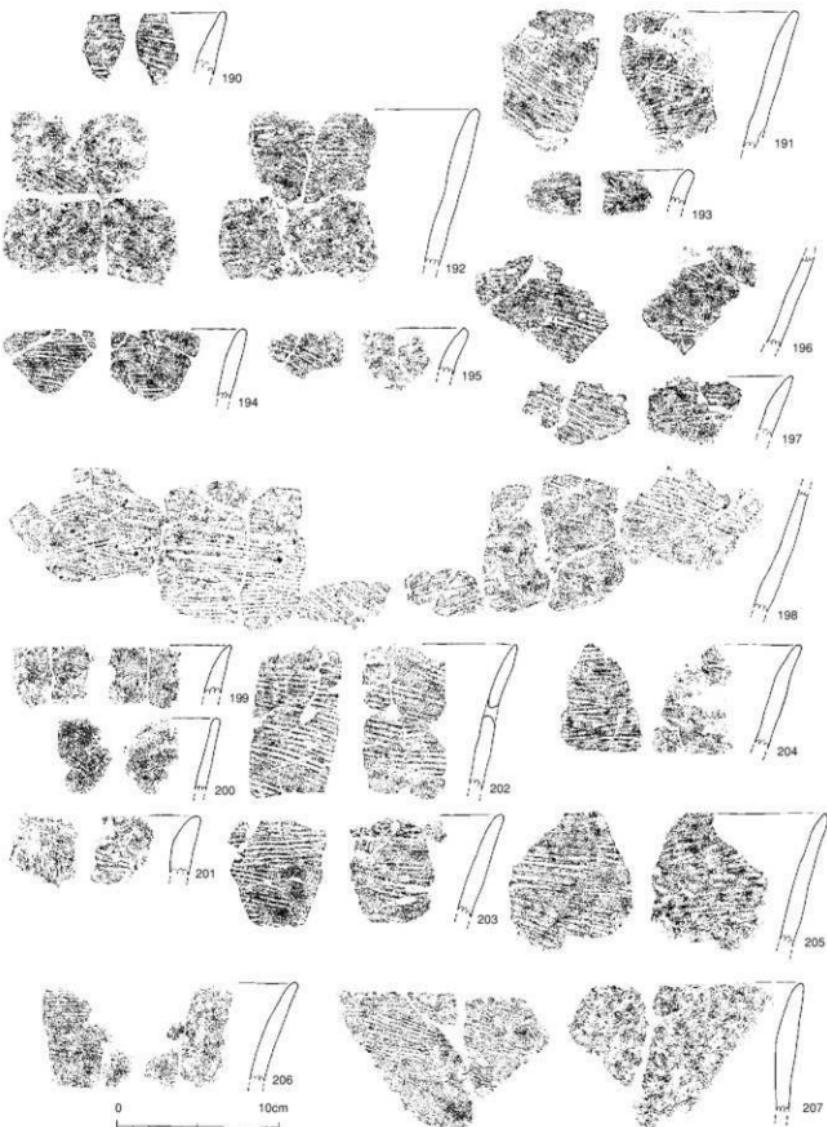


Fig.33 繩文土器実測図11 (1/3)

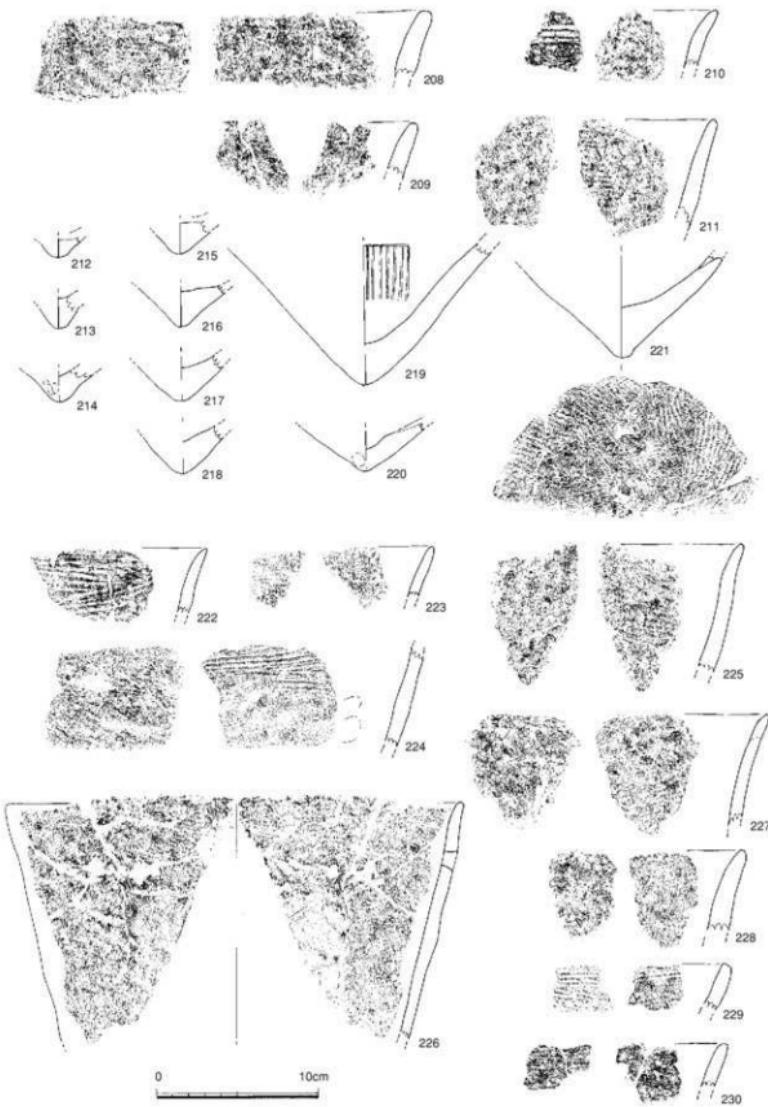


Fig.34 縄文土器実測図12 (1/3)

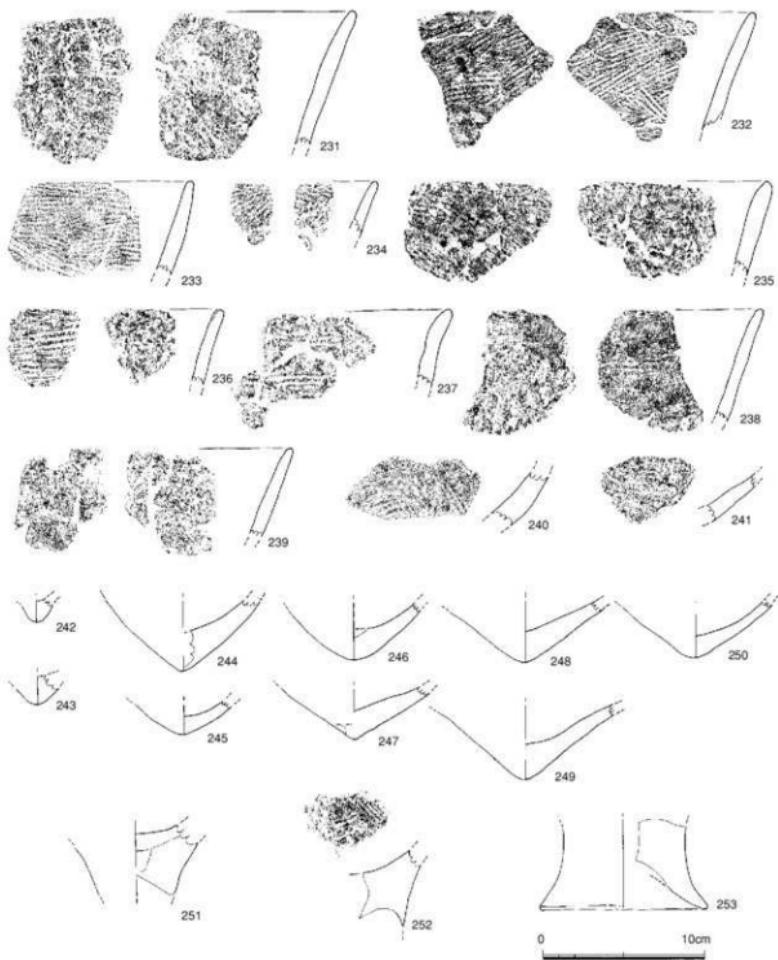


Fig.35 縄文土器実測図13 (1/3)

tab.4 土器観察表

捲団番号	図版番号	遺物番号	区(1~60)	区(a~z)	層位、遺構	取上番号	部位	文様	色調	調整などの特徴	X座標	Y座標	標高(m)
23	28	1	16	I	2層	0	胴部	押型文	淡褐色	外面は横方向の山形文。内面はナデ・横方向の条痕。			
23	28	2	24	K	1層	1	胴部	押型文	暗褐色	外面は器面剥離。内面は横方向の山形文・ナデ。	4651	2020	15.81
23	28	3	25	L	2層	6	胴部	押型文	暗褐色	外面は横方向の山形文。内面はナデ。	4952	2335	15.15
23	28	4	29	J	3層	11	胴部	押型文	灰灰色	外面は横方向の山形文。内面はナデ。	5692	1756	15.17
23	28	5	29	J	1層	4	胴部	押型文	暗褐色	外面は横方向の山形文。内面はナデ。	5720	1825	15.24
23	28	6	29	J	3層	0	胴部	押型文	暗褐色	外面は横方向の山形文。内面はナデ。			
23	28	7	29	K	3層か	17	胴部	押型文	暗褐色	外面は横方向の山形文。内面はナデ。	5776	2073	14.70
23	28	8	20	J	2層	0	胴部	押型文	暗褐色	外面は横方向の横円文(大粒)。内面は原体条痕・ナデ。			
23	28	9	24	J	—	0	胴部	押型文	黄灰色	外面は横方向の横円文。内面はナデ。			
23	28	10	28	I	3層	1	口縁	押型文	淡黃褐色	外面は横方向の横円文。内面は原体条痕・横方向の横円文。	5498	1795	15.35
23	28	11	29	K	3層	9	口縁	押型文	淡黃褐色	外面は横方向の横円押型文(長径 5mm程の横円)。内面は原体条痕・横方向の横円押型文。	5707	2133	14.82
23	28	12	12	F	1層	2	胴部	押型文	淡褐色	外面は横方向の横円押型文。内面は削り気味のヨコナカ。	2207	1190	18.74
23	28	13	16	G	2層	3.2	口縁	押型文	淡黃褐色	外外面とも横方向の横円文・ナデ。	3104	1391	17.60
23	28	14	16	H	2層	15	胴部	押型文	淡黃褐色	外外面はナデ・横方向の横円文。内面はナデ。	3097	1484	17.50
23	28	15	16	H	1層(GL=20cm)	0	口縁	押型文	淡黃褐色	外外面は器底剥離。内面は横方向の横円文・ナデ。			
23	28	16	17	I	2層	9	胴部	押型文	赤褐色	外外面とも横方向の横円文。	3320	1680	17.40
23	28	17	18	H	2層	7	胴部	押型文	赤褐色	外外面とも横方向の横円文・ナデ。	3552	1527	17.12
23	28	18	20	K	5層	5	胴部	押型文	赤褐色	外外面とも横方向の横円文。			
23	28	19	29	K	3層か	36	胴部	押型文	赤褐色	外外面とも横方向の横円文。	5783	2059	14.29
23	28	20	31	I	5層	0	胴部	押型文	黄褐色	外外面は横方向の横円文。内面は器面剥離。			
24	29	21	19	G	2層か	1	口縁	無文	淡褐色	外外面はナデ・指頭痕あり・縦方向のナデ。外外面ともヨコナカ。	3748	1350	17.15
24	29	22	30	K	3層	40	口縁	無文	淡褐色	外外面ともヨコナカ。	5825	2183	14.33
24	29	23	31	I	5層	136	口縁	無文	赤褐色	外外面はヨコナカ。内面はナデ。	6143	1665	14.54
24	29	24	15	F	1層	33	底部	無文	赤褐色	外外面ともナデ。	2972	1195	18.24
24	29	25	13	E	5層	15	底部	無文	淡黃褐色	外外面ともナデ。	2512	1885	18.34
24	29	26	19	H	2層	4	底部	無文	淡褐色	外外面ともナデ。	3702	1432	17.01
24	29	27	20	L	2層	3	底部	無文	黄褐色	外外面ともナデ。	3864	2286	16.30
24	29	28	14	H	3層	13	口縁	無文か	赤褐色	外外面ともナデ。	2733	1538	17.32
24	29	29	14	I	3層	27	口縁	無文	淡褐色	外外面はナデか。内面は横方向のナデ。	2615	1707	17.09
24	29	30	14	J	3層	1	口縁	無文	赤褐色	外外面はナデ。内面はナデ(指頭痕あり)、經方にナデ(ミガ風)。	2782	1812	17.22
24	29	31	16	H	6層か	184	口縁	無文	赤褐色	外外面ともナデ。	3134	1597	16.80
24	29	32	20	F	5層か	2	口縁	無文	赤褐色	外外面はナデ。内面は横方向のナデ(指頭痕あり)、摩孔あり(傳成後)。	3848	1191	16.61
24	29	33	20	O	—	3	口縁	無文	赤褐色	外外面もヨコナカ。	3814	2826	16.59
24	29	34	28	J	4層	41	口縁	無文か	赤褐色	外外面は絞後ナデ。内面はナデ。	5533	1957	14.52
24	29	35	29	J	7層	57	口縁	無文	暗褐色	外外面ともナデ。	5658	1995	14.30
24	29	36	30	J	5層	112	口縁	無文か	赤褐色	外外面はナデ。内面はナデ(指頭痕あり)。	5965	1892	14.27
24	29	37	29	K	6層	27	口縁	無文か	淡褐色	外外面はナデ。内面はナデ・墨風化。	5779	2014	14.40
24	29	38	31	I	5層	81	口縁	無文	赤褐色	外外面はナデ。内面は横方向の条痕。	6118	1705	14.63
24	29	39	31	I	5層	83	口縁	無文	黄灰色	外外面ともナデ(指頭痕あり)。	6117	1718	14.60
24	29	40	31	J	5層	112	口縁	無文	赤褐色	外外面はナデ。内面はナデ(指頭痕あり)。	6108	1824	14.54
24	29	41	31	H	4層	24	底部	無文	淡褐色	外外面ともナデ。	6160	1508	15.27
24	29	42	30	I	5層	28	底部	無文	暗褐色	外外面はナデか。内面はナデ。	5862	2180	14.29
25	30	43	32	H	3層	51	口縁	無文	赤褐色	外外面ともナデ。	6364	1489	15.24
25	30	44	32	H	3層	81	口縁	無文	赤褐色	外外面はナデ。	6322	1573	15.06
25	30	45	32	J	1層	7	口縁	無文	赤褐色	外外面ともナデ(指頭痕あり)。	6203	1923	15.24
25	30	46	37	I	6層か(トレンチGL=130cm)	0	口縁	無文	暗褐色	外外面はナデ。内面は条痕(スス付着)。			
25	30	47	32	J	3'層	121	口縁	無文か	暗褐色	外外面はナデか。内面は貝殻条痕後ナデ。	6280	1841	14.50
25	30	48	37	K	9層	2	口縁	無文か	黄褐色	外外面ともナデ。	7310	2198	13.46
25	30	49	44	P	—	47	口縁	無文	赤褐色	外外面はナデか。内面は条痕後ナデ。	6603	3142	12.24
25	30	50	44	P	—	80	口縁	無文	赤褐色	外外面は器面風化(焼成剥離孔)。内面はナデ。	6764	3174	12.22
25	30	51	43	K	2層	81	底部	無文か	赤褐色	外外面はナデ。内面はナデ。	6870	2081	13.34
25	30	52	44	N	—	11	底部	無文か	褐色	外外面ともナデ。	6875	2760	12.46
25	30	53	48	O	—	13	底部	無文	赤褐色	外外面ともナデ。	9447	2914	11.93
25	30	54	43	L	3層	21	底部	無文	赤褐色	外外面はナデ。内面は器面剥落。	8524	2397	12.40
25	30	55	44	K	3層	34	底部	無文か	赤褐色	外外面ともナデ。	8676	2193	13.10
25	30	56	47	K	—	372	底部	無文	黄褐色	外外面はナデ。内面は器面風化(ナデ)。	9263	2175	13.04
26	30	57	14	E	6層(GL=10cm)	0	胴部	擦糸文	淡褐色(内面は焼がりの擦糸文(巾2mm程、一段右側は焼))	内面はナデ。			

tab.4 土器観察表

排図番号	図版番号	遺物番号	区(1~60)	区(a~z)	層位構造	取上番号	部位	文様	色調	調整などの特徴	X座標	Y座標	標高(m)
26	30	58	22	L	2層	36	口縁	撚糸文	淡褐色	外面は横方向(右下がり)の撚糸文(径2mm、巾2mm)。内面はナデ。	4342	2284	15.69
26	30	59	22	K	1層	23	口縁	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径1~2mm、巾2mm)。一段右旋りか。内面は斜め方向(右下がり)の撚糸文。口縁に起変がつく。	4307	2110	16.19
26	30	60	21	K	2層か	8	頭部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文後斜め方向(右下がり)の撚糸文(径2mm、巾1~2mm)。内面は横方向の撚糸文(径2mm、巾2~3mm)。一段右旋りか。	4045	2178	16.43
26	30	61	22	K	1層	20	頭部	撚糸文	赤褐色	外面は縱方向の撚糸文(径5mm、巾3mm、二段右旋りか)。ナデ。内面はナデ。	4375	2092	16.19
26	30	62	30	M	3層	7	頭部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径2mm、巾2mm、一段右旋りか)。内面は淡褐色ナデ(原色は不明)。	5818	2492	14.10
26	30	63	11	F	4層	16	口縁	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文後ナデ(径2mm、巾2mm)。内面はナデ(指頭痕あり)。	2135	1080	19.35
26	30	64	12	E	5層	6	頭部	撚糸文	赤褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径2mm、巾2mm)。内面はナデ(指頭痕あり)。内面はナデ。	2390	803	18.65
26	30	65	13	E	5層	10	頭部	撚糸文	淡褐色(内面は褐色)	外面は右下がりの撚糸文(径2mm、一段右旋り)。内面はナデ。	2434	920	18.47
26	30	66	13	E	5層	13	頭部	撚糸文	淡褐色(内面は褐色)	外面は右下がりの撚糸文後ナデ(巾1~2mm)。内面は右下がりの撚糸文(巾2mm、右旋りか)。	2465	880	18.46
26	30	67	13	I	8層	13	頭部	撚糸文	赤褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径1mm、巾3mm、一段、一段か、左旋りか)。ナデ。	2565	1693	17.16
26	30	68	14	E	3層か	2	頭部	撚糸文	黄褐色	外面は横方向の撚糸文(径1mm、巾3mm、0段右旋りか)。内面は右方向の撚糸文(?)後ナデ。	2661	890	18.40
26	30	69	14	G	3層上	26	頭部	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径3mm、巾1mm、二段左旋りか)。内面はナデ(指頭痕あり)。	2603	1274	17.73
26	30	70	14	I	3層	22	頭部	撚糸文	赤褐色	外面は横方向の撚糸文(径1~2mm、巾2mm、一段右旋りか)。内面は器皿剥落。	2740	1692	17.15
26	31	71	15	F	3層	4	口縁	撚糸文	黃灰色	外面は横方向の撚糸文(径1mm、右旋りか)。内面は右下がりの撚糸文(?)。	2830	1062	17.73
26	31	71	16	F	4層	0	頭部	撚糸文	黃灰色	外面は横方向の頭部(径1mm程、巾5mm程、一段右旋りか)。内面は横方向のウミガキ後旋方向のラミガキ。			
26	31	72	15	G	4層	60	頭部	撚糸文	赤褐色	外面は横方向の撚糸文(横方向の頭部後ナデ)。横方向の撚糸文(支差する)。横方向の撚糸文後ナデ。横方向の撚糸文(径1~5mm、巾1mm、左旋り)。	2857	1308	17.13
26	31	73	15	H	4層	65	底部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文後ナデ(径1mm、巾3mm、一段右旋り)。内面は器皿剥落。	2874	1520	17.08
26	31	74	15	H	4層か	85	口縁	撚糸文	赤褐色	外面は右下がりの撚糸文(巾3mm、右旋り)。内面はナデ(指頭痕あり)。	2973	1526	16.94
26	31	75	15	L	4~層	5	口縁	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径1~1.5mm、巾2~3mm、一段右旋りか)。内面は横方向の撚糸文。	2664	2351	16.53
26	31	76	15	I	4層	41	頭部	撚糸文	赤褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径1~1.5mm、巾2~3mm、一段右旋りか)。内面は器皿剥落。	2915	1624	16.93
27	31	77	16	F	4c層		頭部	撚糸文	褐色	外面は斜め方向の頭部(径1mm程、巾3mm程、一段右旋りか)。内面は横方向の撚糸文(支差する)。その他の部分は横方向の撚糸文(横方向のものは斜め状、斜め方向のものは直線状)。	3043	1196	17.13
27	31	78	16	F	4c層	65		撚糸文	褐色	外面は横方向の撚糸文(径2mm、巾3mm、右旋りか)。内面は器皿剥落。	3180	1144	16.95
27	31	79	16	F	4c層	86	頭部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径2mm、巾3mm、右旋りか)。内面は器皿剥落。	3145	1190	16.94
27	31	80	16	G	3a層	20	頭部	撚糸文	黄褐色	外面は横方向の撚糸文(径1mm、巾2mm、左旋り)。内面は斜め方向の撚糸文(径1mm、巾2mm、左旋り)。撚糸文後ナデ。	3128	1375	17.24
27	31	81	16	G	4c層か5a層	44	頭部	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径1mm、巾3mm、右旋りか)。内面はナデ(指頭痕あり)。	3020	1285	17.24
27	31	82	16	G	5a層	51	頭部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径1mm程、二段か、一段か、一段か、右旋り)。内面はナデ(指頭痕あり)。	3107	1387	17.05
27	31	83	16	G	5a層か	67	頭部	撚糸文	淡黄褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径1~2mm、巾3~4mm、一段右旋りか)。内面はナデ。	3154	1330	16.99
27	31	84	16	G	6層	105	頭部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径1mm、巾3mm、右旋り)。内面はナデ。	3104	1280	16.79
27	31	85	16	H	4層	0	頭部	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径1mm、巾3mm、6巻ま、一段右旋り)。内面は撚糸文後ナデ。			
27	31	86	16	H	6層	154	頭部	撚糸文	褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径1~2mm、巾3mm、一段右旋り)。内面はナデ。	3130	1423	16.78
27	31	87	16	H	8a層	0	頭部	撚糸文	黄褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径2~3mm、巾2mm、一段か、左旋り)。内面はナデ。			
27	31	88	16	H	6層	158	頭部	撚糸文	褐色	外面は横糸文後ナデ、斜め方向の撚糸文(径1mm、巾2mm、一段右旋り)。内面は器皿剥落。	3044	1496	16.79
27	31	89	16	M	3c層	16	頭部	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径2~3mm、巾3mm、一段右旋り)。内面は器皿剥落。	3082	2415	16.36
27	31	90	16	L	3c層	5	頭部	撚糸文	赤褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径2~3mm、巾5mm、一段右旋り)。内面はナデ。	3140	2345	16.30
27	31	91	17	G	6層	11	口縁	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径1~2mm、右旋りか、一部ナデ)。内面はナデ。	3280	1260	16.75

tab.4 土器観察表

掲図番号	図版番号	遺物番号	区(1 ~ 60) 区(2 ~ z)	層位 (a ~ g)	取上番号	部位	文様	色調	調整などの特徴	X座標	Y座標	標高 (m)	
27	32	92	17	N	3=層か	9	口縁	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文。内面は横方向の撚糸文。(径 2mm,巾 3mm)。	3255	2650	15.96
27	32	93	18	F	7層	3	口縁	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文、横方向の撚糸文。(径 1~2mm、一段右捻りか)。内面は斜め方向の層か。	3510	1121	16.83
27	32	94	18	I	7層	95	口縁	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文後ナデ(巾 2~3mm,右捻りか)。内面はナデ。	3540	1685	16.24
27	32	95	18	I	7層	111	脣部	撚糸文	黄褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径 2~3mm、巾 2mm)。内面は剥落。	3491	1642	16.26
27	32	96	18	M	5層	20	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径 2~3mm、巾 2mm、一段右捻りか)。内面は剥落。	3450	2565	15.80
27	32	97	19	F	8層か	13	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径 1~3mm、右捻り段か)。内面はナデ。	3694	1047	16.70
27	32	98	19	G	7層か	17	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径 1mm、一段右捻り)。内面はナデ。	3716	1278	16.38
27	32	99	19	F	8層	0	脣部	撚糸文	黄褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径 2mm、巾 2mm)。内面は剥落。			
27	32	100	19	J	7層	47	脣部	撚糸文	淡黄褐色	外面は横方向の撚糸文(径 1mm、巾 3~4mm、一段右捻り(左巻き))。内面はナデ。	3697	1802	16.14
27	32	101	19	I	2層	6	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径 1~2mm、巾 1~2mm、一段左捻り)。内面はナデ。	3775	1785	16.76
28	32	102	20	F	5層か	1	脣部	撚糸文	黄灰色	外面は横方向の撚糸文(径 1~2mm、巾 3mm、一段左捻り(左巻き))。内面はナデ。	3837	1107	16.55
28	32	103	20	G	5層か	3	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径 2mm、巾 2~3mm、一段右捻り)。内面はナデ。	3840	1250	16.41
28	32	104	20	J	4層か	18	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は器表面滑。	3833	1942	15.89
28	32	105	20	J	4層か	19	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(巾 1mm、間隔 2mm、一段右捻り)。2段を呈する。内面はナデ。	3856	1957	15.90
28	32	106	25	J	4層	19	脣部	撚糸文	赤褐色	外面は斜め方向(右下がり)の撚糸文(径 3mm、巾 2mm、右捻りか)。内面はナデ。	4940	1898	14.90
28	32	107	25	L	3層	8	口縁	撚糸文	暗褐色	外面は横方向(左鎖傾)の撚糸文後ナデ(径 2mm、巾 1.5mm、一段右捻り)。内面は横方向の撚糸文後ナデ(径 1mm、巾 4mm)。	4992	2329	14.90
28	32	108	26	L	4' 層か	18	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径 1mm、巾 3mm、一段右捻り)。内面はナデ。	5094	2301	14.47
28	32	109	26	M	4' 層か	6	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径 1mm、間隔 3mm、一段右捻り)。内面はナデ。	5097	2490	14.40
28	32	110	27	K	3層	0	口縁	撚糸文	赤褐色	外面は浅いコヨナデ(索縫が残る)、斜め方向(右下がり)の撚糸文(径 1~2mm、巾 2mm、一段右捻り)。内面はナデ(指頭痕あり)。			
28	32	111	28	J	5層	65	脣部	撚糸文	赤褐色	外面は横方向の撚糸文(径 1mm、巾 2mm、一段右捻り)。内面はナデ(指頭痕あり)。	5580	1970	14.37
28	32	112	28	J	4層	38	脣部	撚糸文	暗褐色	外面は横方向の撚糸文(径 1~2mm、巾 2mm、一段か、直裏)、一部ナデ。内面はナデ。	5443	1879	14.60
28	33	113	28	M	—	1	脣部	撚糸文	暗褐色	外面はナデ、横方向の撚糸文(径 1mm、巾 1mm、一段右捻り)。内面はナデ。	5486	2415	14.75
28	33	114	28	K	3層	22	口縁	撚糸文	赤褐色	外面は浅いコヨナデ(索縫が残る)、斜め方向(右下がり)の撚糸文(径 1~2mm、巾 2mm、一段右捻り)。内面はナデ(指頭痕あり)。	5415	2090	14.45
28	33	115	29	L	6層	13	脣部	撚糸文	赤褐色	外面は横方向の撚糸文(径 1mm、巾 2~3mm、一段右捻り)。内面はナデ(指頭痕あり)。	5660	2215	14.23
28	33	116	29	N	8' 層か	21.1	口縁	撚糸文	淡褐色	外面は浅いコヨナデ、横方向(やや右下がり)の撚糸文(径 1mm、巾 2~3mm、一段右捻り)。内面はナデ(指頭痕あり)。	5738	2795	13.57
28	33	117	30	K	5層	263	脣部	撚糸文	黄褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径 2mm、巾 1mm、一段右捻り)。内面は横方向の条痕か。	5975	2150	14.15
28	33	118	30	M	5層か	33	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径 2mm、巾 2~3mm、一段右捻り)。内面はナデ。	5953	2422	14.00
28	33	119	30	M	5層	66	脣部	撚糸文	暗褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径 1~2mm、巾 2~3mm、一段右捻り)。内面はナデ。	5896	2490	13.80
29	33	120	31	I	5層	96	脣部	撚糸文	赤褐色	外面は横方向の撚糸文(径 2mm、間隔 3mm、一段右捻り)。内面はナデ(横方向のミガキ)。	6170	1757	14.58
29	33	121	31	I	5' 層	153	口縁	撚糸文	暗褐色	外面は横方向の撚糸文(径 2mm、巾 2~3mm、一段右捻り)。内面はナデ。	6125	1770	14.26
29	33	122	31	I	5層	104	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径 2mm、間隔 2mm、一段右捻り)。一部ナデ。内面はナデ。	6092	1750	14.51
29	33	123	31	K	5' 層	137	口縁	撚糸文か	淡褐色	外面は浅いコヨナデ(撚糸文後)。内面はナデ(指頭痕あり)。	6124	2095	13.96
29	33	124	31	L	5層か (14.0m)	0	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は横方向の撚糸文(径 1~2mm、巾 1~2mm、一段右捻り)。内面はナデ。			
29	33	125	31	L	3層か	17	脣部	撚糸文	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径 1~2mm、巾 1~2mm、一段右捻り)。内面はナデ。	6126	2311	14.20
29	33	126	12	H	4層	41	脣部	撚糸文か	淡褐色	外面は斜め方向の撚糸文(径 1mm、一段右捻りか)。内面はナデ。	2252	1504	17.87
29	34	127	16	G	5a層か	65	底部	撚糸文	淡黃褐色	外面は横方向の撚糸文(径 1~2mm、巾 2~3mm、一段右捻りか)。ナデ。内面はナデ。	3060	1290	16.97
29	34	128	16	J	6層	0	底部	撚糸文	淡灰褐色	外面は撚糸文後ナデ(右捻りか)。内面はナデ。			

tab.4 土器観察表

掲号	図版番号	遺物番号	区(1~60)	区(a~z)	層位(後構)	取上番号	部位	文様	色調	調整などの特徴	X座標	Y座標	標高(m)
29	34	129	16	H	6層	164	底部	撚糸文	淡褐色	外表面は横方向の撚糸文(径1~2mm、巾3mm、一段左捻り)。内面はナデ。	3067	1530	16.79
29	34	130	32	I	3'層か	74	口縁	撚糸文	淡褐色	外表面は横方向の撚糸文か(径1~2mm、巾3mm、無捻りは不明)。内面はナデ。	8212	1644	14.82
29	34	131	32	J	2層か	5	肩部	撚糸文	淡褐色	外表面は横方向の撚糸文(径1~2mm、巾2~3mm、一段右捻り)。内面はナデ。	6243	1850	15.28
29	34	132	33	J	3'層	86	口縁	撚糸文	黄褐色	外表面は横方向の撚糸文(径2~3mm、巾1~2mm、左捻り)。内面はナデ。	6478	1975	14.43
29	34	133	32	J	3'層	21	肩部	撚糸文	淡褐色	外表面は横方向の撚糸文(径1mm、巾3~4mm、一段右捻り)。内面はナデ(指痕あり)。	6374	1815	14.80
29	34	134	45	K	3層	17	肩部	撚糸文	淡褐色	外表面は横方向の撚糸文(全体不明、3本を右捻りしたものか)。内面は削れ。	8979	2182	12.98
29	34	135	46	P	—	123	肩部	撚糸文	淡褐色	外表面は横方向の撚糸文が(径3mm、巾5mm、段左捻り)。内面は撚糸文。	9111	3190	11.92
29	34	136	46	N	2層	0	肩部	撚糸文	黄褐色	外表面は横方向(右捻り)の撚糸文(径2mm、巾3mm、左捻り)。内面は各色が。	2945	1199	18.26
30	34	137	15	F	1層	34	口縁	刺突文	赤褐色	外表面はナデ、刺突(斜め上から棒状工具)。内面はナデ、多孔。	4105	2260	15.63
30	34	138	21	L	2層	3	口縁	刺突文	黒褐色	外表面は横方向の条痕。内面はナデ。	4360	1980	18.59
30	34	139	22	J	1層	5	口縁	刺突文	黄褐色(外側は暗褐色の部分あり)	外表面はナデ、刺突(斜め上から)、留付(巾約1cm、長さ約3cm)。内面はナデ。	5948	1423	15.97
30	34	140	30	H	1層	1	口縁	刺突文	淡褐色	外表面はナデ、刺突(正面から)。内面はナデ。内面は削れ。	3147	972	17.17
30	34	141	16	E	4層か	5	口縁	刺突文か	赤褐色	外表面はヨコナデ、刺突(右下から棒状工具)。内面はナデ。	3073	1487	16.84
30	34	142	16	H	6層	113	口縁	刺突文	赤褐色	外表面はヨコナデか。刺突(斜め上から棒状工具)。内面は貝殻多孔後ナデ。	3269	1431	16.57
30	34	143	17	H	7層	40	口縁	刺突文	赤褐色	外表面はナデか、刺突(斜め上から棒状工具)。内面はナデ。	3342	1359	16.65
30	34	144	17	G	7層か	22	口縁	刺突文	黄褐色	外表面は横方向の条痕(貝殻?)。内面は横方向の条痕。	3247	2635	16.04
30	34	145	17	N	3'層か	6	口縁	刺突文	暗褐色	外表面はナデ、刺突(斜め上から棒状工具)。内面は削れ。	5655	1405	15.92
30	34	146	28	G	? (上層)	0	口縁	刺突文	黄褐色	外表面はナデ、刺突(斜め上から)。斜め方向の条痕がある。内面はナデ。	5697	1932	14.20
30	34	147	29	H	3層	1	口縁	刺突文	淡褐色	外表面は横方向の条痕。内面はナデ(若干盛り上がる)。	5678	2018	14.30
30	34	148	29	J	7層	71	口縁	刺突文	赤褐色	外表面は横方向の条痕、刺突(斜め上から)。内面はナデ(若干盛り上がる)。	5924	2364	13.97
30	35	149	29	K	6層	46	口縁	刺突文	赤褐色	外表面は横方向の条痕、刺突(竹管状工具)。内面は横方向の条痕。	5813	1862	14.50
30	35	150	30	L	5層	126	口縁	刺突文	暗褐色	外表面はナデ、刺突(斜め上から)。内面はナデ。内面は貝殻多孔。	6150	1830	14.49
30	35	151	30	J	5層	5	口縁	刺突文	赤褐色	外表面はナデ、刺突(斜め上から)。内面はナデ。内面は貝殻多孔。	6079	2173	14.07
30	35	152	30	L	5層	129	口縁	刺突文	暗褐色	外表面はナデ、刺突(斜め上から)。内面はナデ。内面は貝殻多孔。	6125	2303	14.12
30	35	153	31	J	5層	113	口縁	刺突文	赤褐色	外表面はナデ、刺突(斜め上から)。内面はナデ。内面は貝殻多孔。	6292	1406	16.57
30	35	154	31	K	5層	116	口縁	刺突文	赤褐色	外表面は横方向の条痕。内面はナデ(若干盛り上がる)。	3764	1820	16.40
30	35	155	31	L	5層	37	口縁	刺突文	褐色	外表面は横方向のナデ(貝殻多孔)。内面はナデ(貝殻多孔)。	6046	1844	14.33
30	35	156	17	H	7層	37	口縁	刺突文	淡褐色	外表面は横方向のナデ(貝殻多孔)。内面はナデ(貝殻多孔)。	3770	1250	16.53
30	35	157	19	J	4層	16	口縁	刺突文	暗褐色(内面は赤褐色)	外表面とナデ。内面はナデ(貝殻多孔)。	3315	1610	17.05
30	35	158	31	J	5層	179	口縁	刺突文	褐色	外表面は貝殻多孔、刺突(正面からの棒状工具)。内面は貝殻多孔。	5588	1686	14.75
30	35	159	19	G	7層	6	口縁	刺突文	赤褐色	外表面は貝殻多孔、刺突(斜め上から棒状工具)。内面はナデ、空腹状。	4950	1872	14.99
31	35	160	14	I	3層	0	口縁	刺突文	暗褐色(内面は赤褐色)	外表面は貝殻多孔か、刺突(斜め下から)。内面は二段(正面から棒状工具)。内面は器面剥落。	6340	1930	14.48
31	35	161	17	I	3a層	34	口縁	刺突文	暗褐色	外表面は貝殻多孔か、刺突(縦から管状工具)の跡。粘土粒剥離付。内面は剥離。	6340	2021	14.10
31	35	162	28	I	4層	49	口縁	刺突文	暗褐色	外表面は横方向の撚糸文、刺突(斜め下から)。粘土の粗粒で剥離。内面は横方向の条痕。	6515	1696	15.20
31	35	163	25	J	4層	8	口縁	刺突文	赤褐色	外表面は条痕、傳成前穿孔。内面は条痕、穿孔(両側から)。	6340	1930	14.48
31	35	164	32	J	3'層	115	口縁	刺突文	赤褐色	外表面は貝殻多孔か、刺突(斜め下から)。内面はナデ。	6515	1696	15.20

tab.4 土器觀察表

鉢口番号	圓番号	遺物番号	区(1~60)	区(a~z)	層位、遺構	取上番号	部位	文様	色調	調整などの特徴	X座標	Y座標	標高(m)
31	35	167	33	I	3'層	21	口縁	刺突文	黄褐色	外面は刺突(下から)、横方向の条痕後ヨコナデ。内面は横方向のナデ(指痕底あり)、削落した可能性あり、刺突は貫通していたのではないか。	8590	1740	14.97
31	35	168	33	K	3'層	21	口縁	刺突文	青褐色	外面は横方向の条痕、刺突(斜め下から)。	6515	2035	14.38
31	35	169	34	K	2層	2	口縁	刺突文	淡褐色	外面は横方向の条痕、刺突(斜め下から)。	8660	2016	14.75
31	35	170	34	K	2層	22	口縁	刺突文	赤褐色	外面は条痕後ヨコナデ、刺突(斜め上から)、横方向の貝殻条痕。	6629	2045	14.43
31	36	171	44	J	1層	1	口縁	刺突文	淡褐色	外面は条痕底、刺突(斜め上から)。内面はヨコナデ(若干盛り上がる)、横方向の条痕。	8747	1831	14.37
31	36	172	34	K	3層	24	口縁	刺突文	赤褐色	外面はヨコヨコナデ、刺突(下から)。内面はヨコヨコナデ(若干盛り上がる)。	8615	2046	14.33
31	36	173	42	Q	—	26	口縁	刺突文	黄褐色	外面はナデ、横方向の条痕、刺突(貫通しているが、安価化になっていたと考えられる)。内面は横方向の条痕。	8310	3278	12.28
31	36	174	32	G	3層	6,2	口縁	刺突文か	淡褐色	外面は条痕後ヨコナデ、刺突。内面はナデ、条痕。	8290	1360	15.78
31	36	175	32	H	3層	21	胴部	刺突文	淡褐色	外面はナデ後ヨコナデ、刺突(正在しているが、表面が剥離したため)。内面は表面風化。	6275	1419	15.52
32	36	176	12	H	3層	0	底部	条痕文	黄灰色	外面は横方向の貝殻条痕、条痕後ナデ(赤窯している)。内面はナデ。			
32	36	177	15	F	2層	6	底部	条痕文	黄褐色、内面は暗褐色、暗褐色。	外面は貝殻方向の丁寧なナデ(ミカキ?)。内面は縦方向のナデ(丁寧なナデ)。	2850	1065	17.90
32	36	178	18	H	2層	10	口縁	条痕文	淡褐色	外面とも横方向の条痕。	3475	1530	17.08
32	36	179	18	N	1層	21	口縁	条痕文	黄褐色	外面は横方向の条痕後ナデ、内面は横方向の条痕、条痕後ナデ、条痕、ナデ。	3450	2612	15.80
32	36	180	22	K	2層 (15.62cm)	0	口縁	条痕文か	淡黄褐色	外面は横方向の条痕後ナデ。			
32	36	181	12	H	4層	36	口縁	条痕文	黄灰色	外面は横方向の貝殻条痕、條成前穿孔、条痕後ナデ。内面は横方向の貝殻条痕、ナデ。	2265	1545	17.87
32	37	182	13	F	4層	2	口縁	条痕文	淡黄褐色	外面は横方向の条痕後ナデ、内面は横方向の条痕、条痕後ナデ。	2482	1090	18.37
32	37	183	14	E	3層か	19	胴部	条痕文	赤褐色	外面は斜め方向の貝殻条痕、横方向の貝殻条痕。	2707	980	18.05
32	37	184	15	H	4層	63	口縁	条痕文	淡黄褐色	外面は横方向の条痕(一部ナデ、貝殻条痕か)、條成穿孔。内面は横方向の条痕(一部ナデ)。	2862	1460	17.07
32	37	185	16	G	56層	87	口縁	条痕文	褐色	外面はナデ、横方向の条痕。内面はナデ、貝殻条痕。	3170	1342	16.88
32	37	186	16	G	6層か	116	胴部	条痕文か	赤褐色	外面は横方向の条痕(貝殻か)。内面はナデ。	3101	1384	16.82
32	37	187	16	F	4c層	0	口縁、底	条痕文	赤褐色	外面ともナデ。			
32	37	188	17	G	7層か	18	口縁	条痕文	赤褐色	外面は条痕後ナデ。内面は横方向の条痕。	3312	1315	16.65
32	37	189	17	J	6層	33	口縁	条痕文	暗褐色	外面とも横方向の条痕後ナデ。	3339	1875	16.61
33	37	190	18	I	6層	64	口縁	条痕文	淡褐色	外面とも横方向の条痕。	3545	1886	16.32
33	37	191	19	K	9層か	15	口縁	条痕文	赤褐色	外面は貝殻方向の条痕(斜め)、赤褐色、(横)条痕。内面は(斜め)、赤褐色、(横)条痕。	3720	2035	16.05
33	37	192	21	L	3層	11	口縁	条痕文	赤褐色	外面は斜め方向の貝殻条痕、内面は横方向の条痕、斜め方向の条痕、条痕後ナデ。	4100	2308	15.28
33	37	193	25	I	3'層か	20	口縁	条痕文	淡褐色	外面は条痕後ナデ。	4970	1762	15.14
33	37	194	26	K	4層か	9	口縁	条痕文	赤褐色	外面は横方向の貝殻条痕、内面は横方向の貝殻条痕(一部ナデ)。	5130	2096	14.79
33	37	195	26	K	4層か	18	口縁	条痕文	赤褐色	外面は条痕後ナデ、斜め方向の条痕。内面は各層後ナデ。	5165	2010	14.82
33	37	196	25	K	4'層	11	胴部	条痕文	黄褐色	外面は斜め方向の貝殻条痕、内面は貝殻条痕後ナデ。	4732	2014	14.60
33	37	197	28	J	5層	70	口縁	条痕文	茶褐色	外面は横方向の貝殻条痕。内面は横方向の条痕。	5504	1901	14.30
33	37	198	28	M	6層	18	胴部	条痕文	赤褐色	外面とも横方向の貝殻条痕。	5472	2459	13.84
33	37	199	29	I	6層	39	口縁	条痕文	赤褐色	外面とも横方向の条痕。	5607	1752	14.85
33	37	200	30	L	5層	123	口縁	条痕文	褐色	外面は斜め方向の条痕(原体不明)。内面はナデ。	5836	2374	13.97
33	37	201	30	N	5層か	50	口縁	条痕文	赤褐色	外面はナデ、横方向の貝殻条痕か。内面はナデ、横方向の条痕。	5900	2635	13.60
33	37	202	29	J	7層	60	口縁	条痕文	赤褐色	外面はナデ、横方向の貝殻条痕。	5639	1841	14.37
33	38	203	31	I	5層か	33	口縁	条痕文	黄灰色	外面とも横方向の貝殻条痕。	6091	1624	14.65
33	38	204	30	K	5層	180	口縁	条痕文	赤褐色	外面は横方向の貝殻条痕。内面は横方向の条痕。	5870	2026	14.14
33	38	205	31	I	5層	0	口縁	条痕文	赤褐色	外面とともナデ、横方向の貝殻条痕。			
33	38	206	31	I	5層	85	口縁	条痕文	赤褐色	外面は横方向の貝殻条痕。内面はナデ。	6080	1730	14.60
33	38	207	31	I	5'層	115	口縁	条痕文	赤褐色	外面は横方向の貝殻条痕。内面はナデ。	6086	1688	14.60
34	38	208	31	J	5層	115	口縁	条痕文か	暗黄灰色	外面は器面風化。内面は横方向の条痕、ナデ。	6163	1835	14.49

tab.4 土器観察表

排号	図版番号	遺物番号	区(1~60)	区(a~z)	層位構造	取上番号	部位	文様	色調	調整などの特徴	X座標	Y座標	標高(m)
34	38	209	31	K	5層	79	口縁	条痕文か	赤褐色	外表面はナデ、条痕後ナデか。内面はナデ。	6043	2130	14.15
34	38	210	31	M	3層	10	口縁	条痕文	黄褐色	外表面はナデ、横方向の貝殻条痕か。内面はナデ。	6110	2415	14.19
34	38	211	31	N	5層か	3	口縁	条痕文	赤褐色	外表面はナデか。内面は横方向の貝殻条痕。	6040	2750	13.71
34	38	212	16	G	7層	0	底部	条痕文	赤褐色	外表面はナデ。内面は剥離か。	5791	2649	13.74
34	38	213	29	N	7層か	17	底部	条痕文	赤褐色	外表面はナデ。内面はナデか。	3738	2823	16.40
34	38	214	19	J	4層	18	底部	条痕文	赤褐色	外表面はナデ(指頭痕あり)。内面はナデか。	3172	1255	16.80
34	38	215	16	G	6層	99	底部	条痕文	赤褐色	外表面はナデ。内面は剥離。	3423	1680	16.50
34	38	216	16	O	3c層	0	底部	条痕文か	赤褐色	外表面はナデ。内面はナデか。	6136	1753	14.42
34	38	217	18	I	4層	42	底部	条痕文	赤褐色	外表面ともナデ。	3332	1384	17.28
34	38	218	31	I	5層	144	底部	条痕文か	赤褐色	外表面はナデ。内面は横方向の条痕、ナデ。	5987	1458	15.56
34	38	219	17	G	3a層	5	底部	条痕文か	赤褐色	外表面は条痕後ナデ(指頭痕あり)。内面はナデ。	6043	2130	14.15
34	38	220	30	H	4層	18	底部	条痕文か	赤褐色	外表面はナデ。	6308	1922	14.40
34	38	221	30	H	4層	432	底部	条痕文	褐色	外表面は斜め方向の条痕、条痕後ナデ、ナデ。	5925	1459	15.47
34	39	222	32	G	3層	11	口縁	条痕文	赤褐色	外表面はナデ。内面はナデ、横方向の貝殻条痕。	6249	1355	15.61
34	39	223	32	I	2層か	1	口縁	条痕文	赤褐色	外表面ともナデ。横方向の貝殻条痕。	6266	1650	15.28
34	39	224	32	I	4層	178	脣部	条痕文	黄褐色	外表面は斜め方向の条痕(巾4mm~5mm)。内面は横方向の条痕、ナデ(指頭痕あり)。	6245	1628	14.70
34	39	225	32	I	4層	146	口縁	条痕文	暗褐色	外表面はナデ。内面はナデ(器面化)。横方向の貝殻条痕。	6229	1678	14.70
34	39	226	32	J	3層	145	口縁	条痕文	赤褐色	外表面は条痕後ナデ(器面化)。横方向の貝殻条痕。	6308	1922	14.40
34	39	227	32	I	5層	213	口縁	条痕文	暗褐色	外表面は条痕後ナデ(差違が少し残る)。内面はナデ、土玷跡日、横方向の条痕後ナデ、斜め方向の条痕後ナデ。	6212	1695	14.44
34	39	228	32	J	3層	120	口縁	条痕文か	赤褐色	外表面は条痕後ナデか。内面はナデ。	6292	1810	14.50
34	39	229	34	I	2層	31	口縁	条痕文	赤褐色	外表面は横方向の貝殻条痕。内面は横方向の貝殻条痕。ナデ。	6265	1778	14.86
34	39	230	36	I	—	20	口縁	条痕文	赤褐色	外表面とも(横方向の貝殻条痕)。	7035	1684	—
35	40	231	36	K	5層	7	口縁	条痕文	赤褐色	外表面は条痕後ナデか(条痕はほとんどナデ消され)。内面はナデ、条痕後ナデか(条痕が残る)。	7020	2020	14.30
35	40	232	36	G	8層	6	口縁	条痕文	暗褐色	外表面は斜め方向の貝殻条痕。内面は斜め方向の貝殻条痕。	7435	1291	15.24
35	40	233	38	G	8層	35	口縁	条痕文	褐色	外表面は横方向の条痕。内面は器面剥落。	7470	1340	15.14
35	40	234	38	H	4層	73	口縁	条痕文	暗褐色	外表面は斜め方向の貝殻条痕。内面は条痕後ナデ。	7435	1515	15.00
35	40	235	40	J	3層	0	口縁	条痕文	赤褐色	外表面は斜め方向の貝殻条痕。内面はナデ。	7035	1684	—
35	40	236	42	J	3層	0	口縁	条痕文	赤褐色	外表面は横方向の貝殻条痕。内面はナデ。	7270	2320	12.74
35	40	237	44	L	3層	34	口縁	条痕文	赤褐色	外表面は横方向の貝殻条痕。内面は器面剥落。	9187	2534	12.60
35	40	238	46	M	2層	36	口縁	条痕文	黄褐色	外表面はナデ。横方向の貝殻条痕。内面はナデ。	9350	3351	11.85
35	40	239	47	Q	—	16	口縁	条痕文	赤褐色	外表面はナデ。横方向の貝殻条痕。内面はナデ。	6548	2039	14.58
35	40	240	33	K	3層	4	脣部	条痕文	赤褐色	外表面はナデ。内面は貝殻条痕。	8986	2350	12.56
35	40	241	45	I	3層	53	底部	条痕文か	赤褐色	外表面はナデか。内面はナデ。尖底。	6355	1532	15.20
35	40	242	32	H	3層	72	底部	条痕文か	赤褐色	外表面はナデ。内面は欠損。尖底。	6290	1825	14.52
35	40	243	32	J	3層	85	底部	条痕文か	赤褐色	外表面はナデ(器面に竹箸状の圧痕が数ヶ所見られる)。尖底。	6225	1728	14.40
35	40	244	32	I	5層	215	底部	条痕文か	赤褐色	外表面ともナデか。内面はナデ。	6264	2890	13.26
35	40	245	32	O	—	1	底部	条痕文か	赤褐色	外表面ともナデか。尖底。	6618	1992	14.59
35	40	246	34	J	2層	52	底部	条痕文か	赤褐色	外表面はナデか。内面はナデ。尖底。	9067	2465	12.67
35	40	247	46	M	2層	20	底部	条痕文か	赤褐色	外表面ともナデか。尖底。	9037	3037	12.14
35	40	248	46	P	—	48	底部	条痕文か	赤褐色	外表面はナデか(赤変している)。内面はナデ。尖底。	9332	2820	12.12
35	40	249	47	O	—	6	底部	条痕文か	赤褐色	外表面はナデか。内面はナデ。尖底。	9564	2374	12.67
35	40	250	48	L	—	22	底部	条痕文か	黄褐色	外表面ともナデか。尖底。	7197	1771	14.44
35	40	251	36	I	9層	50	底部	条痕文か	赤褐色	外表面はナデ。内面は条痕。上げ底か。	6225	1728	14.40
35	40	252	37	I	10~11層	0	底部	条痕文	黄褐色	外表面はナデか。内面は貝殻条痕。平底か。	7536	1323	15.31
35	40	253	38	G	10層	1	底部	条痕文	赤褐色	外表面はナデか。上げ底。	—	—	—

## 5) 出土石器の分布状況と内容

### 分布状況 (Fig.36)

今回の調査では約4,900点を石器を取り上げた。このうち、剥片等を除くと、800点程となる。石には石錐、石槍、尖頭器状石器、削器、搔器、磨石・敲石、石皿、石斧等の他、楔形石器、石核、2次加工がある剥片、使用痕がある剥片、原石等がある。石器は土器の分布と同様、集石遺構等に対応するように遺物の集中が認められる。次に各石器についてみていく。なお、楔形石器、2次加工がある剥片、使用痕がある剥片等については触れることができなかった。また、剥片の接合作業は行えなかったため、石器製作に関わる検討はできなかった。

### 出土石器 (Fig.38~58, Tab. 5, 6)

#### 石錐 (Fig.38~47, PL.41)

石錐はもっとも数が多く、324点がある。石錐は全域で出土し、各層で出土している。押型文土器を含む層からは主に鋸形錐が出土しているが、下層から出土したものには長さ2cm前後のものが多く、形態は多様性に富んでいる。石錐を平面形や基部の形態を基に分類すると以下のようになる。

1類 (1~13) は平面形は二等辺三角形で、抉りが深い。所謂、鋸形錐である。主に上層の押型文土器を含む層から出土した。3cm程の大型のもの (1、5、6、7等) と2cm前後のもの (3、11、12、13等) とがある。

2類 (14~96) は平面形は二等辺三角形を呈する。基部の形態は平基のもの (a類)、浅い凹基のもの (b類)、深い凹基で脚端が尖るもの (c類) とがある。大きさ2cm前後のものが多い。14~43は2a類である。大きさは2cm前後のものの小型のものが多い。44~71は2b類である。53は3cmを超える大型のものである。72~96は2c類である。

3類 (97~152) は平面形は正三角形を呈する。基部の形態は平基のもの (a類)、浅い凹基のもの (b類)、深い凹基のもの (c類) とがある。大きさ2cm以下の小型のものが多い。97~114は3a類である。ほとんどが1cm程の小型である。115~140は3b類である。1cm程のものと2cm前後のものとがある。141~152は3c類である。

4類 (153~159) は平面形は周縁が張る二等辺三角形を呈する。基部は平基である。

5類 (160~176) は平面形は周縁が張る正三角形を呈する。基部の形態で平基のもの (a類、160~165)、浅い凹基のもの (b類、166~169)、深い凹基のもの (c類、170~176) とがある。大きさ2cm以下の小型のものが多い。

6類 (177) は丸みを帯びた先端を持つ。177は黒曜石製で、基部は浅い凹基である。

7類 (178~180) は先端が圭頭形を呈する。177は基部は抉りが深く、脚端は尖る。179は平基である。180は両脚端は欠損しているが、凹基と考えられる。

8類 (181~191) は平面形は周縁が括れた二等辺三角形を呈する。先端は細く尖る。抉りは深く、脚端は尖るものが多い。

9類 (192) は脚部の外側が張る二等辺三角形を呈する。抉りは深く、脚端が尖る。石材はチャートである。

10類 (193~194) は脚部が開く、ブーメラン形を呈する。194は大型で、調整は粗い。

11類 (195) は有茎で、主剥離面を残す。

12類~18類は表面に研磨がある石錐である。平面形や基部の形状は研磨のないものと共通している。このタイプのものには全面を研磨し、周縁のみ剥離調整を行うものと剥離調整の後に抉り部分を中心に研磨するものとがある (Fig.37)。

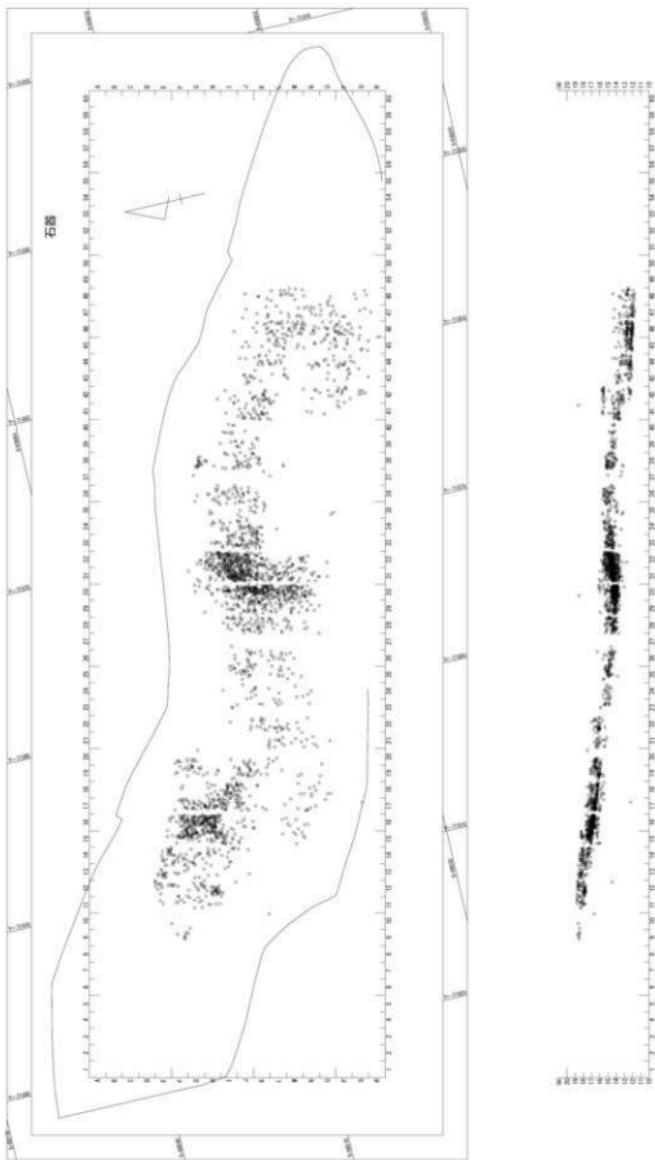


Fig.36 遺物分布図 3 (1/600)

**12類** (196~223) は平面形は二等辺三角形を呈する。基部は浅い凹基のもの（b類、196~203）、深い凹基で脚端が尖るもの（c類、204~214）がある。202は局部的に研磨を施す。208は全面を研磨し、基部を中心に剥離調整を行っている。研磨した面は研ぎによる棱が残る。

**13類** (224~231) は平面形は正三角形を呈する。研磨には全面と局部の両者が見られる。

**14類** (232~234) は平面形は周縁が張る二等辺三角形を呈する。232~234は基部は平基である。

**15類** (235~236) 周縁は丸みを持つ。基部の抉りの深く、脚端は尖る。

**16類** (235~241) は平面形は周縁が括れる二等辺三角形を呈する。脚端は尖る。

**17類** (242) は細長い二等辺三角形を呈し、脚部の外側は窄んで、短い脚部がつく。研磨は局部的に行われる。所謂「帖地型石鎌」に類似する。

**18類** (242) は平面形は二等辺三角形を呈し、浅い凹基である。長さ 3 cm を超える大型品である。

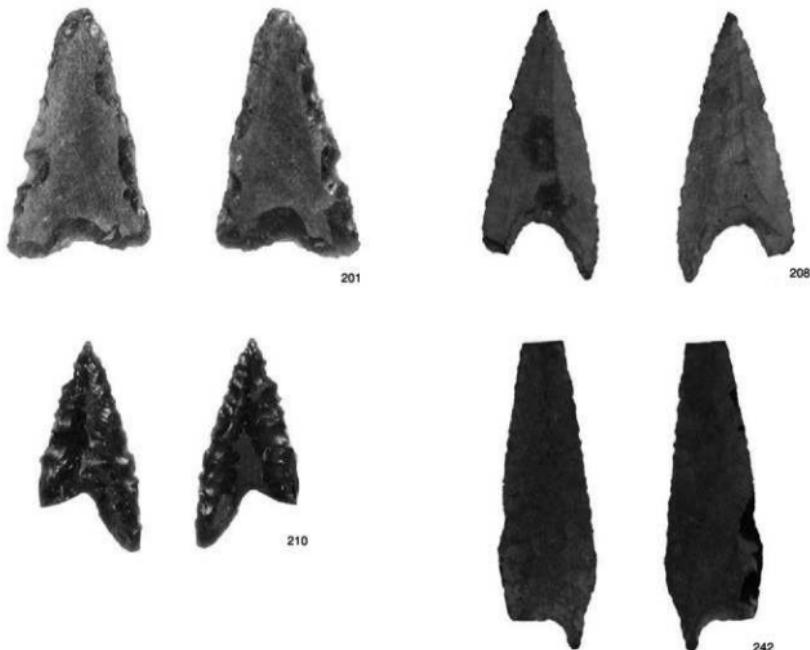


Fig.37 石鎌の研磨状況

tab. 5 石器出土位置一覧表

地区	11			12			13			14			15			16			17			18			19			20		
層位	1層	3層	4層	5層	7層	5層	1層	4層	6層	7層	1層	3層	4層	1層	3層	4層	5層	1層	2層	3層	4層	6層	3層	4層	1層	4層	1層	4層	1層	
種類	3b 3c 3b	2b. 2c. 6.	3b. 5b. 13	12c 1. 2a. 10. 12c	3b 12	2a 1. 3b	16 2c 7	16 4a. 7	2c. 13. 15	1. 12	12b. 2b. 3c. 11. 12c	5a	2c 5c	2c. 5c	11. 5b															
25 26	29			30			31			32			33			34			35			36			37					
4層	1層	1層	4層	3層	7層	8層	4層	5層	5層	5層	6層	7層	3' 層	1層	2層	2層	3層	4層	7層	2層	5層	6層	7層	8層	9層	3層	6層	12層		
	12 2b	1 2c	2c	3c. 5c. 13	4a	5b	2b. 8. 12	12 4a. 8. 12b	2b	2b	2b	2b	3c	2a	12b	2a	3a	2a	3b	2b	2a	2a	2a	3a	2a	2b	2b. 3a	3b		
38	39			40			41			42			43			44			45			46								
1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	2層	3層	5層	6層	1層	2層	3層	4層	7層	2層	3層	4層	6層	1層	3層	3層	2層	4層						
3b 2b. 2c. 3b 3a. 5a. 8	2a. 3b. 3a. 5a. 8	2b. 2c. 3a. 4a	1. 2b. 8	14 2a. 3b. 8	2a. 8. 12b	5b	4 3a. 16	2a 3b. 12	3b 3c. 5a. 5b. 8. 13	4a	3a	2b. 7. 15	3b	12 2b. 3c. 5c 8. 10	2c. 5c	2a. 2b. 5a. 9. 12c	2b. 3b. 5b. 12	2b. 3b	2b. 5b. 12											

■は磨製石器を含む

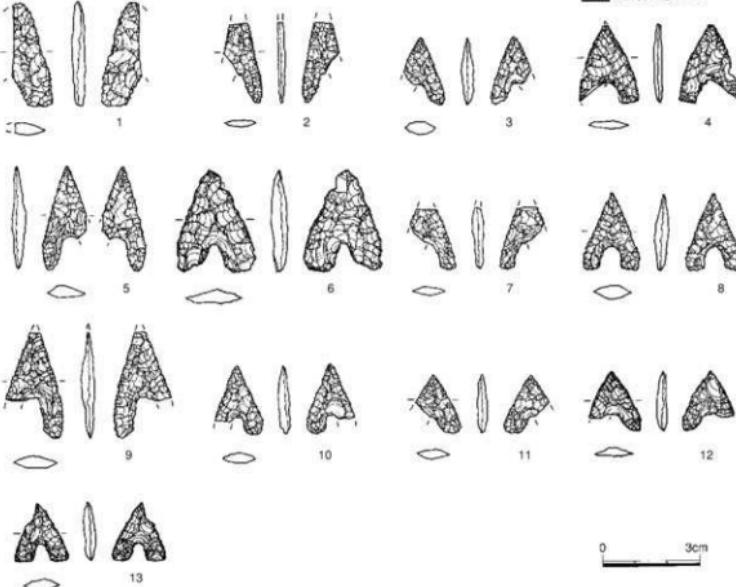


Fig.38 石器実測図 1 (2/3)

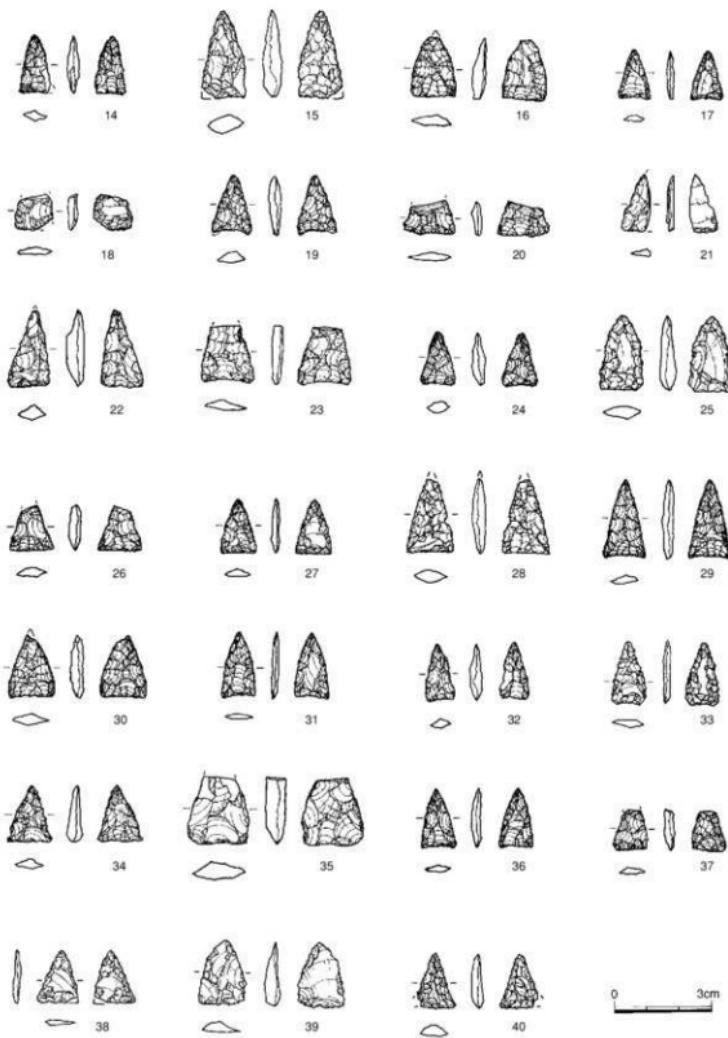


Fig.39 石器実測図 2 (2/3)

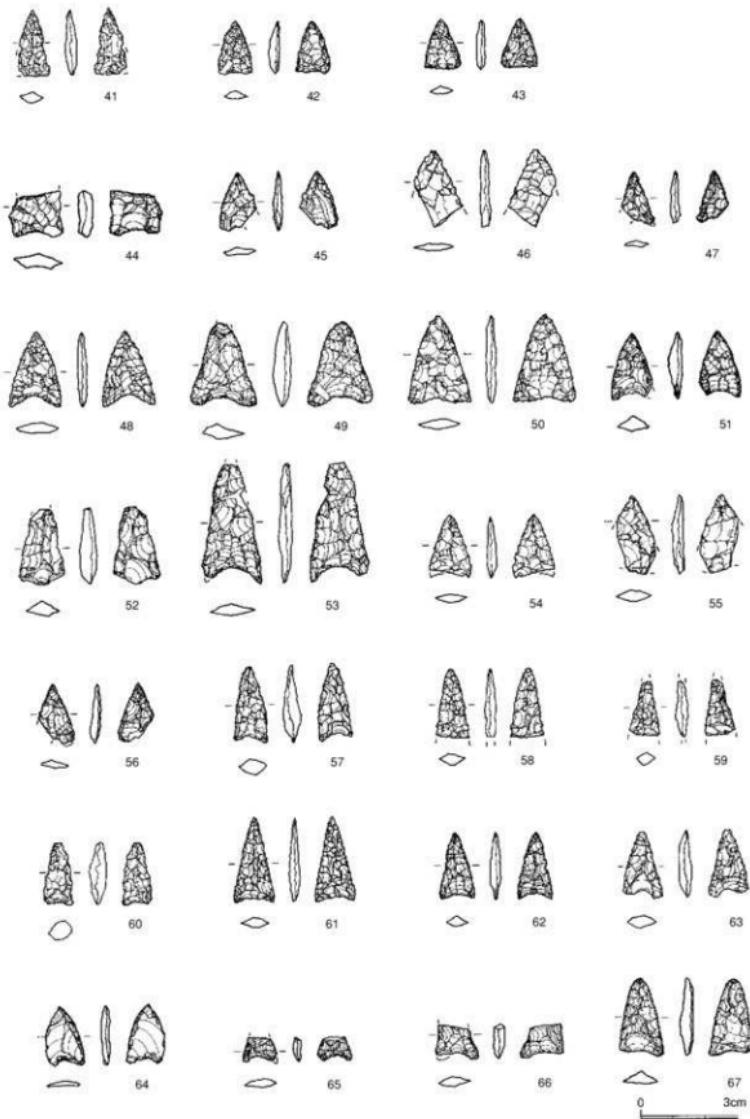


Fig.40 石器実測図 3 (2/3)

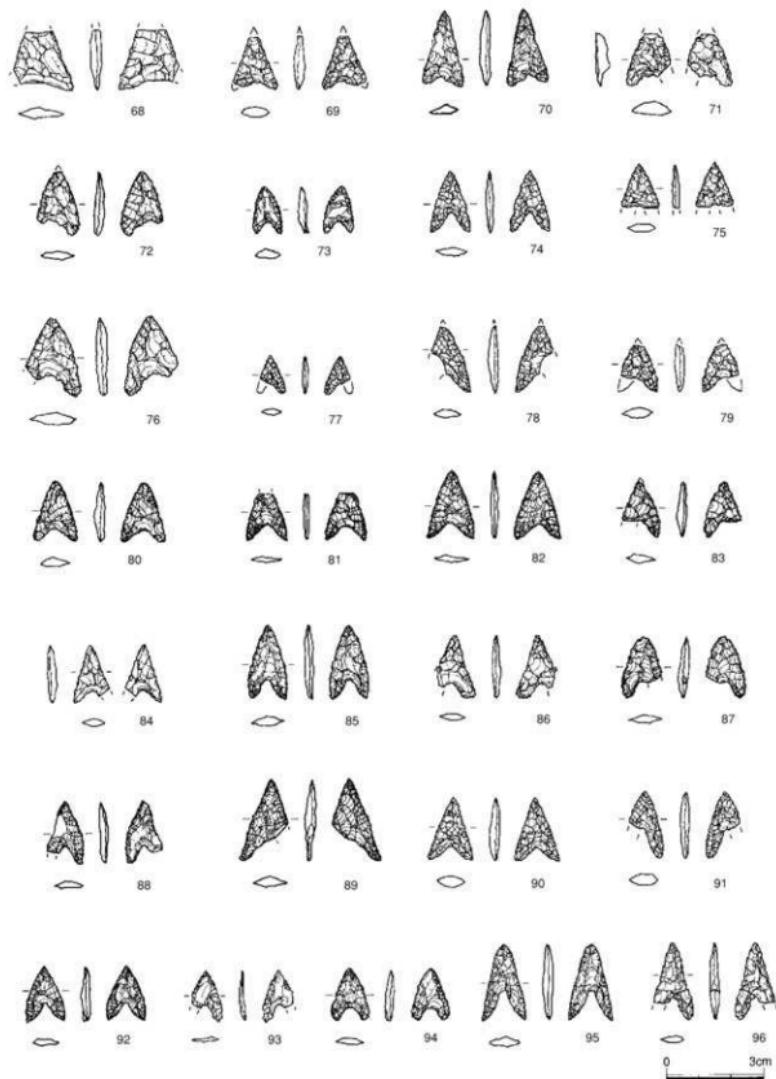


Fig.41 石器実測図 4 (2/3)

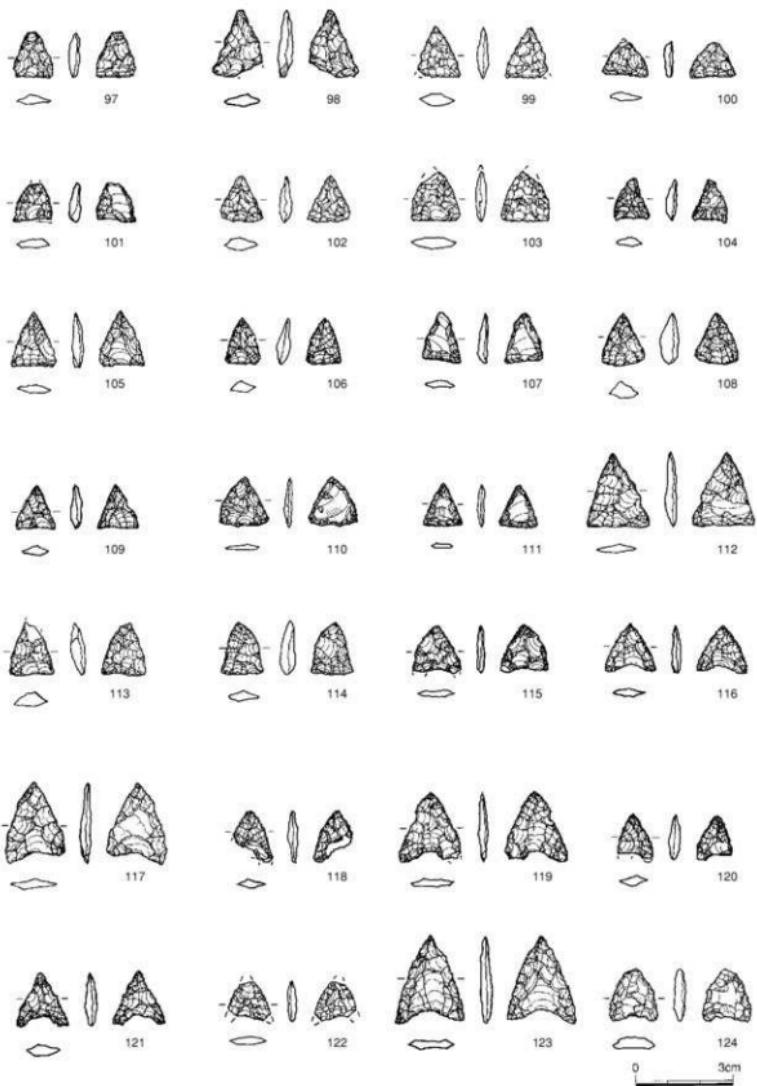


Fig.42 石鐵実測図 5 (2/3)

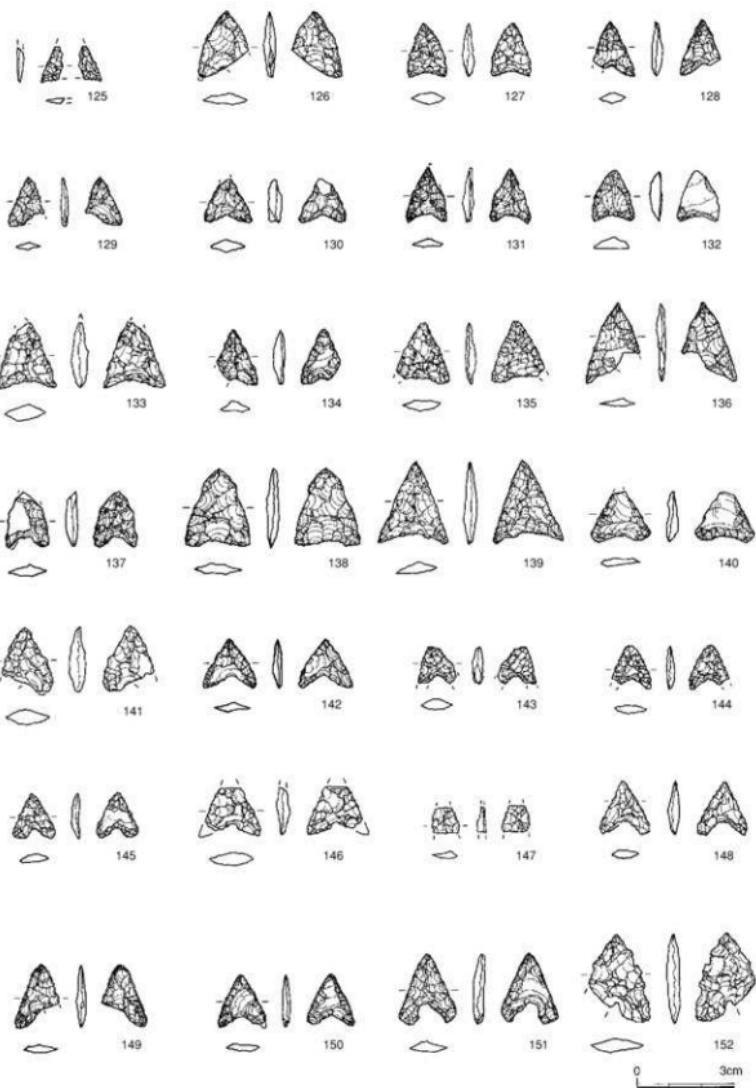


Fig.43 石炭実測図 6 (2/3)

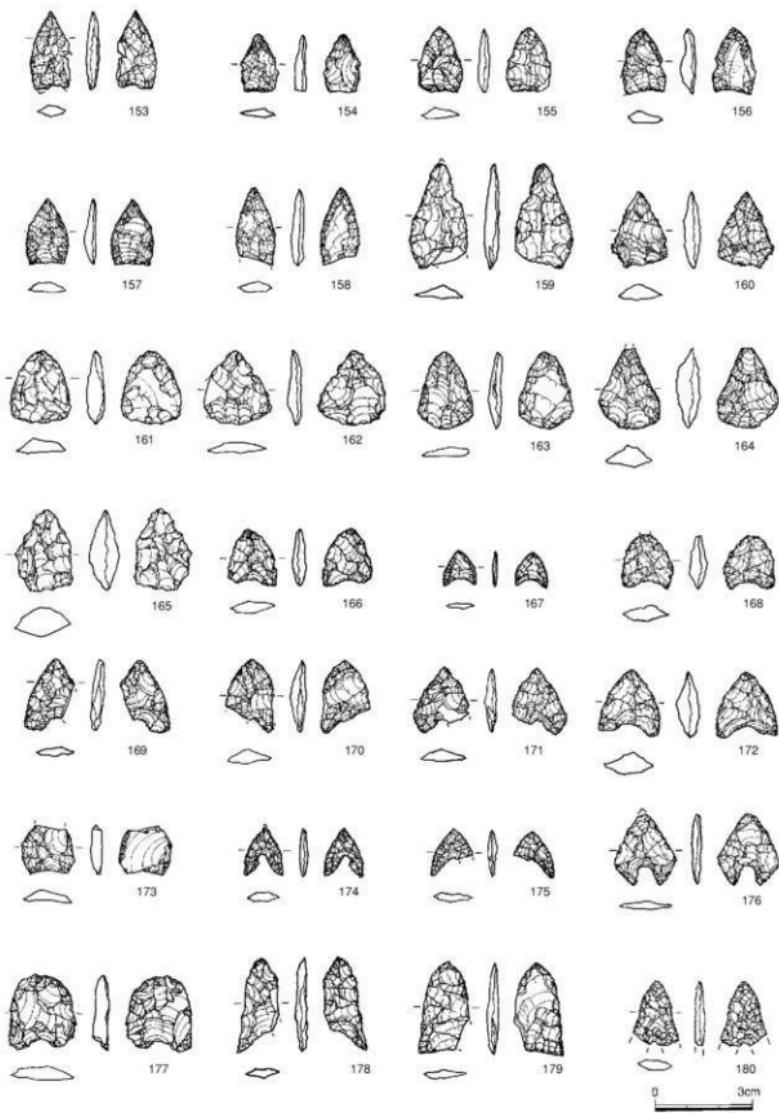


Fig.44 石器実測図 7 (2/3)

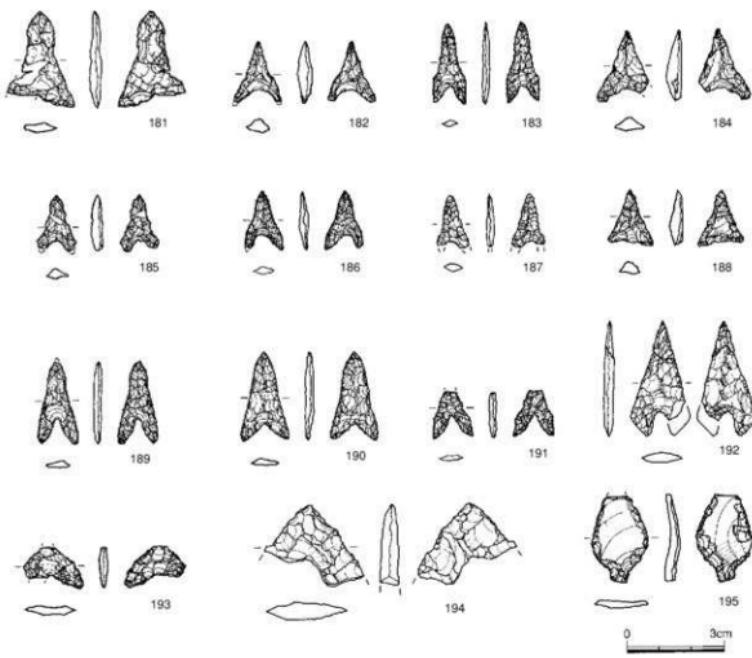


Fig.45 石器実測図 8 (2/3)

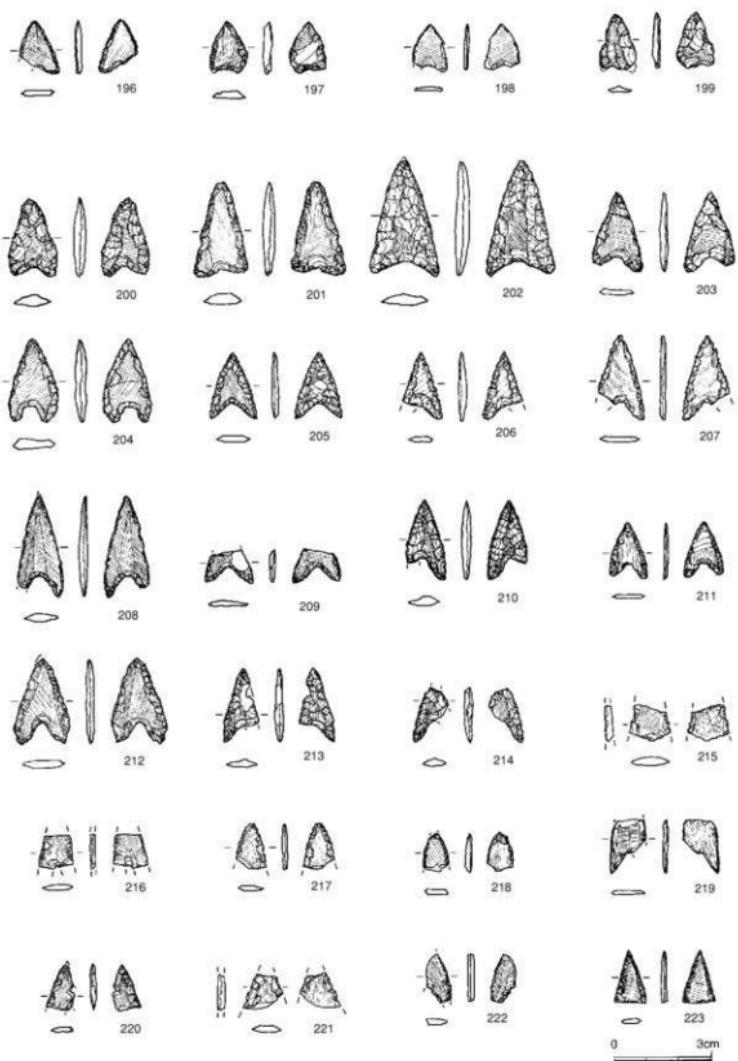


Fig.46 石器実測図 9 (2/3)

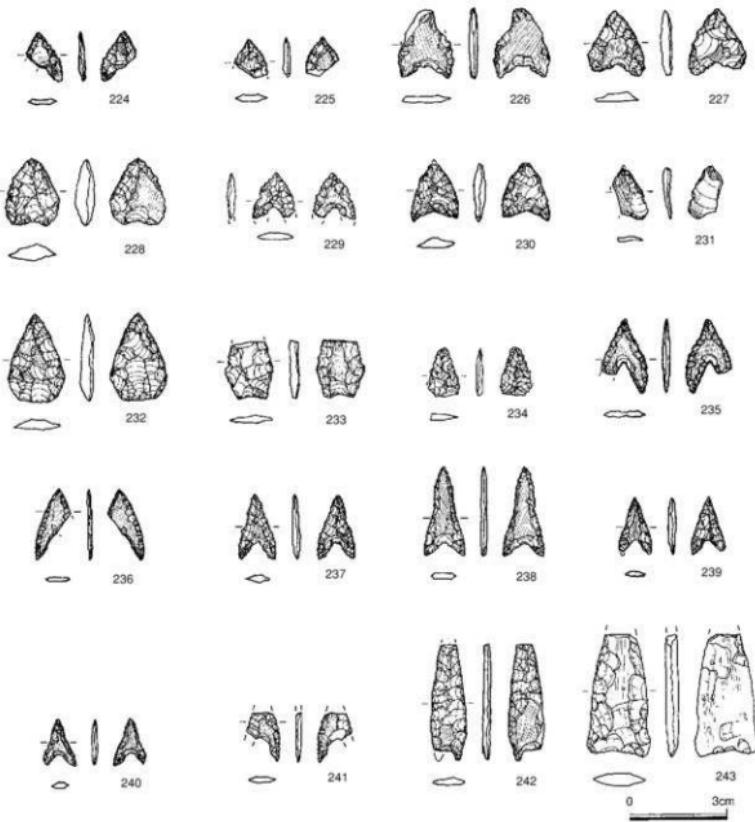


Fig.47 石器実測図10 (2/3)

tab.6 石燃観察表

図番号	図版番号	遺物番号	区(1~z)	層位、遺構	取上番号	石材	分類	特徴	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	X座標	Y座標	標高(m)	
39	1	13F	4層	11 OB 1	微形、中央で欠損	32.00	12.00	4.00	1.46	2476	1090	18.19				
39	2	14G	3層	29 OB 1	微形、先端・脚部欠損	25.00	12.00	2.50	0.42	2605	1204	17.89				
39	3	15L	上層	0 OB 1	微形、片脚欠損	21.00	12.00	4.50	0.10							
39	41	4 19H	4層	7 OB 1	微形、片脚欠損	24.54	17.89	2.69	0.96	3725	1540	16.86				
39	41	5 16K	1層(17.25cm)	0 OB 1	微形、片脚欠損	31.50	13.50	4.00	1.22							
39	41	6 19J	1層	13 OB 1	微形、完形、先端に新しい傷	31.36	25.60	5.07	2.63	3704	1895	16.60				
39	7	23M	1層(GL-20cm)	0 OB 1	微形、完形	19.00	13.50	3.50	0.68							
39	41	8 29J	1層(クリップ下赤提)	0 OB 1	微形、完形	33.50	17.00	4.50	1.13							
39	9	39J	3層	24 OB 1	微形、先端・片脚欠損	33.00	18.00	5.00	1.31	7686	1888	14.30				
39	10	47R	?	2 OB 1	微形、片脚欠損	21.50	14.50	3.50	0.65	9300	3430	12.07				
39	11	15L	L~M	0 OB 1	小型微形、片脚欠損	18.00	14.00	3.50	0.50							
39	12	16E	1層?	1 OB 1	小型微形、片脚欠損	18.25	15.09	3.09	0.59	3110	935	17.90				
39	41	13 16H	2層	6 OB 1	小型微形、完形	18.23	16.59	3.79	0.71	3070	1460	17.40				
40	14	13F	4層	21 OB 2a	完形	17.77	9.54	3.84	0.47	2560	1090	17.95				
40	15	14G	1層	0 OB 2a	片脚欠損	27.00	14.00	6.00	1.78							
40	16	32J	6層	197 OB 2a	先端欠損	18.95	14.17	3.97	0.94	8260	1873	13.82				
40	41	17 32J	6層	204 AN 2a	先端欠損	14.97	9.36	2.37	0.26	6298	1845	13.60				
40	18	34J	2層	19 OB 2a	先端欠損	10.84	11.66	2.64	0.40	6700	1978	14.80				
40	41	19 35H	7層	42 OB 2a	完形	18.26	11.90	3.77	0.64	8918	1542	14.93				
40	20	35J	3層	48 OB 2a	先端欠損	10.80	15.99	3.49	0.51	6848	1920	14.43				
40	21	35O	?	1 AN 2a	片脚欠損	17.72	7.83	2.30	0.32	6978	2816	13.43				
40	22	36G	9層	9 OB 2a	完形	24.33	13.18	5.66	1.31	7062	1254	15.31				
40	23	36I	6層	36 AN 2a	先端欠損	17.33	16.12	3.82	1.05	7189	1850	14.52				
40	41	24 36K	7層	13 OB 2a	完形	16.69	10.76	4.46	0.52	7092	2075	14.08				
40	25	37J	6~7層(1トレンチGL-120~140cm)	0 AN 2a	完形	23.00	13.50	5.00	1.37							
40	26	37L	?	31 OB 2a	先端欠損	14.11	13.67	4.02	0.53	7295	2354	13.33				
40	41	27 37L	?	32 AN 2a	完形	16.70	10.72	2.69	0.43	7295	2365	13.20				
40	28	38G	8層	12 OB 2a	先端欠損	23.00	14.00	5.00	1.18	7495	1262	15.19				
40	29	38G	8層	68 OB 2a	完形	24.30	12.89	3.75	0.86	7446	1271	15.02				
40	30	38G	8層	82 OB 2a	完形、先端に新しい傷	19.42	14.44	3.96	1.00	7460	1366	15.00				
40	41	31 38G	8層	83 OB 2a	完形	20.40	10.45	2.15	0.43	7525	1354	15.00				
40	32	38G	8層	96 OB 2a	完形	17.42	8.83	4.02	0.45	7543	1329	14.98				
40	33	38G	8層	126 OB 2a	完形	19.00	10.00	2.00	0.51	7460	1391	14.83				
40	34	38K	2層	16 OB 2a	完形	17.80	13.89	4.68	0.79	7443	2013	14.36				
40	35	38N	?	2 AN 2a	先端欠損	21.39	19.00	6.59	2.73	7420	2766	13.12				
40	36	39I	5層	80 OB 2a	完形	18.11	11.15	3.04	0.47	7676	1753	14.27				
40	37	39I	5層	83 OB 2a	先端欠損	12.59	10.67	3.34	0.44	7731	1629	14.26				
40	38	39K	8層	0 OB 2a	片脚欠損	16.00	13.00	2.00	0.36							
40	39	39L	?	48 AN 2a	未製品	20.00	19.00	5.00	1.04							
40	40	40I	7層	43 OB 2a	片脚欠損	17.00	12.00	3.50	0.50	7846	1710	14.03				
41	41	44N	3層	34 OB 2a	片脚欠損	20.00	10.00	3.00	0.56	8750	2768	12.46				
41	42	47N	?	18 OB 2a	完形	16.49	10.78	3.23	0.44	9263	2762	12.17				
41	43	48L	?	42 OB 2a	完形	15.35	11.04	2.71	0.40	9565	2326	12.23				
41	44	41F	4層	17 OB 2b	先端欠損	14.13	15.06	4.33	1.02	2180	1185	18.28				
41	45	41H	4層	40 AN 2b	片脚欠損	18.14	11.06	2.85	0.44	2150	1570	17.93				
41	46	45H	5層	58 AN 2b	脚部欠損	19.00	15.00	3.50	0.58	2985	1535	17.05				
41	47	46F	4層	16 OB 2b	片脚欠損	16.19	8.16	2.71	0.32	3017	1078	17.51				
41	48	46H	3層	0 OB 2b	完形	23.00	16.00	3.00	0.86							
41	49	49J	1層	1 AN 2b	先端欠損	26.65	19.90	5.39	2.05	5060	1880	16.36				
41	50	31I	5層	0 OB 2b	完形	27.00	19.00	3.00	1.33							
41	51	32I	5層	236 OB 2b	片脚欠損	20.53	12.39	4.12	0.77	6340	1727	14.20				
41	52	32M	7層	46 OB 2b	基部・先端欠損	23.87	14.09	5.26	1.45	6328	2565	13.46				
41	53	33K	3層	26 AN 2b	先端欠損	37.78	17.91	4.69	2.13	6469	2709	14.29				
41	54	34L	?(13.42cm)	0 OB 2b	完形	19.00	12.50	2.50	0.54							
41	55	34O	?	2 OB 2b	脚部欠損	24.00	12.00	3.00	0.82	6710	2914	12.26				
41	56	36K	5層	8 OB 2b	片脚欠損	18.38	9.70	3.64	0.45	7080	2022	14.38				
41	41	57	37F	?(1レンチ チボGL- 30~40cm)	0 OB 2b	完形	24.00	10.00	6.00	0.86						

tab.6 石礫観察表

標図番号	図版番号	遺物番号	区(1~60)	層位、遺構	取上番号	石材	分類	特徴	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	X座標	Y座標	標高(m)
41	58	37F	? (1トレンチGL-20~100cm)	0 OB 2b	基部欠損				21.00	10.00	3.00	0.54			
41	59	37G	10~12層か(グリッド1トレンチGL-20cm)	0 OB 2b	先端・基部欠損				17.00	9.00	4.00	0.44			
41	60	37G・H	10層か(1トレンチGL-110cm)	0 OB 2b	完形				19.00	9.00	5.00	0.72			
41	61	37J	3層	0 OB 2b	完形				26.00	12.00	3.00	0.64			
41	62	38H	4層	71 OB 2b	完形				20.39	10.86	3.41	0.46	7407	1403	14.98
41	63	38H	4層	91 OB 2b	片脚欠損				21.00	12.50	4.00	0.82	7429	1486	14.87
41	64	38I	2層	33 OB 2b	完形				18.49	11.20	1.95	0.39	7497	1614	15.08
41	65	39J	3層	43 OB 2b	先端欠損				7.79	10.37	2.88	0.22	7666	1959	14.30
41	66	42J	3層	7 AN 2b	先端欠損				1.84	11.91	3.21	0.38	8235	1953	14.03
41	67	43O	3層	20 AN 2b	完形				24.00	13.17	3.99	0.85	8470	2932	12.84
42	68	44N	3層	57 AN 2b	先端・脚部欠損				18.00	18.00	4.00	1.30	8608	2754	12.38
42	69	46N	4層	45 OB 2b	先端・片脚欠損				16.50	14.00	3.50	0.51	9122	2765	12.08
42	70	48O	?	18 OB 2b	完形				23.16	12.75	3.73	0.71	9498	2870	11.88
42	71	10F	?	38 OB 2c	先端・片脚欠損				16.00	14.00	4.50	0.63	1870	1192	18.37
42	72	11E	5層	3 AN 2c	片脚欠損、完形				19.54	12.59	3.41	0.64	2065	930	18.70
42	73	13 J~L	? (表様)	0 OB 2c	完形				14.00	9.00	2.50	0.22			
42	74	14L	1層(GL-30cm)	0 OB 2c	完形				28.50	12.00	2.50	0.32			
42	75	15I	5層	48 OB 2c	両脚欠損				13.50	11.50	2.50	0.31	2864	1665	16.69
42	76	15J	5層	7 AN 2c	片脚欠損				23.72	15.83	3.89	1.08	2985	1885	16.86
42	77	15L	上層	0 AN 2c	片脚欠損				11.50	8.00	2.00	0.54			
42	78	15M	L~M	0 OB 2c	先端・片脚欠損				21.00	12.00	3.50	0.41			
42	79	15M	1層(GL-10cm)	0 OB 2c	先端・片脚欠損				14.50	11.50	3.50	0.38			
42	80	16I	3層	4 OB 2c	完形				18.20	13.59	3.43	0.61	3180	1755	16.99
42	81	16I	3層	14 OB 2c	先端欠損				14.25	12.25	1.92	0.25	3092	1617	16.99
42	82	18G	1層	1 OB 2c	完形				20.98	14.14	2.25	0.47	3525	1620	18.23
42	83	18H	4層	23 OB 2c	片脚欠損				16.91	10.89	3.12	0.39	3575	1597	16.98
42	84	20O	SX003集石中	0 OB 2c	片脚欠損				17.00	11.00	3.00	0.30			
42	41	85	29J	4層	24 OB 2c	完形			23.06	11.88	2.93	0.62	5710	1865	14.87
42	86	30K	3~4層	0 OB 2c	片脚欠損				19.00	12.00	2.50	0.38			
42	87	38I	2層	31 OB 2c	片脚欠損				18.65	12.20	3.15	0.51	5743	1640	15.10
42	88	38I	2層	38 OB 2c	片脚欠損				18.85	10.81	3.02	0.41	7455	1705	14.96
42	89	38K	5層	69 OB 2c	片脚欠損				25.15	11.89	3.44	0.63	7483	2199	13.47
42	90	41J	2層	9 OB 2c	片脚欠損				19.00	14.00	3.00	0.58	8012	1940	14.15
42	91	42K	8層	103 OB 2c	片脚欠損				20.00	11.00	3.00	0.38	8222	2086	13.28
42	92	44L	1層	22 OB 2c	完形				16.86	11.91	2.81	0.41	8758	2238	12.95
42	93	45L	3層	61 OB 2c	片脚欠損				16.00	9.00	2.00	0.16	8918	2343	12.50
42	94	45O	?	2 AN 2c	完形				15.97	11.87	2.75	0.37	8980	2963	12.35
42	41	95	47N	?	35 AN 2c	完形			23.30	13.45	3.35	0.64	9364	2734	12.09
42	96	47N	?	56 AN 2c	片脚欠損				23.50	12.00	3.00	0.49	9348	2763	11.99
43	97	35G	7層	15 OB 2c	先端欠損				14.45	12.28	3.56	0.54	6991	1260	15.38
43	98	35H	7層	64 OB 3a	片脚欠損				21.27	13.44	4.84	0.94	6830	1463	15.12
43	99	35I	7層	40 OB 3a	片脚欠損				16.00	13.00	3.50	0.52	6964	1664	14.71
43	100	35J	4~5層	61 OB 3a	完形				13.04	12.49	3.01	0.35	6860	1820	14.05
43	101	36I	8層	62 OB 3a	片脚欠損、先端に新しい傷				12.36	12.36	3.20	0.39	7070	1733	14.20
43	102	37J	?	0 OB 3a	完形				14.00	13.00	4.00	0.50			
43	103	37J	J	0 OB 3a	先端欠損				15.00	15.00	3.00	0.64			
43	104	38H	4層	123 OB 3a	完形				13.68	10.67	3.58	0.38	7495	1528	14.69
43	41	105	38I	4層	76 OB 3a	完形			16.78	13.58	3.47	0.58	7491	1695	14.62
43	41	106	38L	5層	27 OB 3a	完形			14.09	11.01	4.29	0.43	7413	2389	13.13
43	107	38L	6層	29 OB 3a	完形				15.07	11.69	3.23	0.45	7435	2290	13.08
43	108	38M	?	2 AN 3a	完形				16.12	13.57	5.99	1.03	7417	2409	13.16
43	109	38M	?	3 OB 3a	完形				13.59	12.40	3.26	0.38	7410	2420	13.16
43	110	40J	4層	60 OB 3a	完形				14.35	15.41	2.18	0.43	7845	1880	13.76

tab.6 石燃観察表

排石番号	図版番号	遺物番号	区(1~60)	層位、遺構	取上番号	石材	分類	特徴	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	X座標	Y座標	標高(m)
43	111	40K	4層	78 OB 3a	完形				13.02	11.95	1.96	0.24	7935	2050	13.20
43	112	41P	6層	17 OB 3a	完形				23.14	18.95	3.58	0.99	8192	3158	12.45
43	113	47K	?	45 OB 3a	完形、先端に新しい傷				17.40	13.58	4.68	0.71	9240	2140	12.40
43	114	48N	?	22 OB 3a	完形				16.64	13.35	4.85	0.90	9416	2715	11.97
43	115	10E	?	2 OB 3b	両端欠損				14.73	14.77	2.47	0.47	1960	950	18.90
43	41	116	11G	4層	3 OB 3b	完形			14.95	15.20	3.23	0.47	2080	1217	18.31
43	117	11G	4層	12 AN 3b	完形				25.29	17.71	3.15	1.10	2128	1290	18.20
43	118	11H	1層?	13 OB 3b	片端欠損				15.69	10.49	2.58	0.38	2020	1565	18.13
43	119	11H	4層	52 OB 3b	片端欠損				21.31	18.93	3.48	0.92	2188	1465	17.74
43	120	12F	3層	5 OB 3b	片端欠損				13.86	10.44	3.26	0.38	2270	1018	18.64
43	41	121	13G	6層	11 OB 3b	完形、先端に新しい傷			16.66	15.92	4.10	0.63	2524	1395	17.80
43	122	13H	7層	11 OB 3b	先端・両端欠損				12.00	13.00	2.50	0.43	2530	1548	17.42
43	41	123	14E	3層	22 AN 3b	完形、先端に新しい傷			26.85	20.08	3.25	1.35	2700	947	18.09
43	124	14I	5層	0 OB 3b	完形				16.00	15.00	4.00	0.76			
44	125	15L	上層	0 AN 3b	先端・片端欠損				10.50	7.00	2.00	0.79			
44	126	36I	2層	29 AN 3b	片端欠損				20.34	13.54	3.77	0.82	7197	1668	14.98
44	127	37F	?	(1)レンチ 手(2)GL- 30~40cm)	0 OB 3b	完形			16.00	12.00	3.00	0.51			
44	128	38J	1層	4 OB 3b	片端欠損				16.86	11.54	3.80	0.55	7440	1918	14.95
44	129	38J	3層	19 OB 3b	片端欠損				14.73	9.88	2.66	0.30	7597	1882	14.58
44	130	38K	3層	5 OB 3b	先端欠損				13.61	14.71	4.29	0.59	7430	2070	14.41
44	41	131	39I	4層	10 OB 3b	完形、先端に新しい傷			16.74	12.45	3.56	0.48	7645	1646	15.13
44	132	40Q	?	14 AN 3b	完形				15.37	12.43	3.53	0.57	7988	2820	12.90
44	41	133	41H	3層	3 OB 3b	先端欠損			20.00	19.00	5.00	1.18	8085	1469	15.25
44	134	41J	7層	14 OB 3b	片端欠損				17.04	9.65	3.90	0.58	8054	1972	14.15
44	135	42P	8層	68 OB 3b	片端欠損				19.00	16.00	3.00	0.69	8326	3158	12.28
44	136	42Q	8層か	53 OB 3b	片端欠損				25.08	14.35	3.05	0.78	8348	3249	12.16
44	137	44N	3層	75 OB 3b	先端欠損				17.62	13.61	3.63	0.73	8788	2756	12.31
44	138	44O	?	57 OB 3b	完形				24.27	20.12	3.96	1.41	8780	2850	12.24
44	139	46N	4層	46 AN 3b	完形				24.96	21.41	4.19	1.34	9187	2779	11.99
44	140	46O	?	54 OB 3b	完形				15.54	18.41	3.45	0.77	9058	2865	12.25
44	141	47Q	?	2 OB 3c	片端欠損				15.00	15.50	6.00	1.18	9321	3232	12.10
44	142	11F	3層	3 AN 3c	完形				15.10	16.27	2.42	0.43	2195	1127	18.71
44	143	13J~L	(表様)	0 OB 3c	両端欠損				11.00	12.00	3.00	0.33			
44	144	13J~L	(表様)	0 OB 3c	片端欠損				13.00	12.00	2.00	0.28			
44	41	145	15I	1層	0 OB 3c	完形			13.50	13.00	3.00	0.30			
44	146	15L	(上層)	0 OB 3c	片端欠損				15.00	17.00	4.50	0.10			
44	147	16M	3層	6 OB 3c	先端・基部欠損				8.00	8.00	3.00	0.13	3082	2497	16.38
44	41	148	18E~H	?	(GL-25c) 0 OB 3c	片端欠損			16.00	15.00	4.00	0.56			
44	149	30J	7層	122 OB 3c	片端欠損				18.97	11.49	3.04	0.48	5963	1957	14.27
44	41	150	34J	1層	1 AN 3c	片端欠損			15.81	14.11	2.40	0.46	6685	1816	15.18
44	151	41K	4層	8 AN 3c	完形				21.92	17.71	4.02	1.02	8150	2068	13.74
44	152	43N	3層	7 OB 3c	片端欠損				27.00	19.00	4.00	1.24	8470	2730	12.80
45	153	30K	8層	265 OB 4a	片端欠損				24.19	12.29	3.99	1.04	5804	2438	13.75
45	154	32K	5層	19 OB 4a	完形				17.51	11.45	3.52	0.75	6288	2003	14.40
45	155	32M	5層	21 OB 4a	片端欠損				19.95	13.58	3.91	1.02	6297	2598	13.80
45	156	38G	8層	112 OB 4a	片端欠損				20.42	12.89	4.48	0.97	7468	1350	14.90
45	41	157	39N	?	1 OB 4a	完形			20.38	13.00	3.33	0.74	7755	2772	13.16
45	158	41I	7層	10 AN 4a	基部欠損				23.57	11.43	3.19	0.84	8010	2454	14.10
45	159	15G	4層	24 AN 4a	基部・一部欠損				32.34	17.71	4.84	2.28	2927	1295	17.36
45	41	160	17H	3層	5 OB 5a	片端欠損			23.80	16.47	5.39	1.56	3281	1540	16.81
45	161	30I	7層	74 AN 5a	未製品か				22.50	18.50	5.50	2.11	5875	1658	14.58
45	162	36I	2層	15 AN 5a	完形、側面に新しい傷				22.96	20.86	4.52	1.81	7147	1740	15.21
45	163	38H	4層	2 AN 5a	完形				23.82	16.77	4.27	1.57	7473	1538	15.33
45	164	41K	4層	20 OB 5a	完形				25.14	18.97	7.47	2.35	8070	2060	13.70
45	165	45M	3層	45 OB 5a	未製品か				25.00	13.00	9.00	3.06	8839	2499	12.42
45	166	9F	?	3 OB 5b	完形				17.84	14.71	4.33	0.89	1773	1145	18.63
45	167	12E	5層	12 AN 5b	完形				10.82	10.16	1.66	0.15	2315	919	18.65
45	168	18N	4層	20 AN 5b	完形、先端に新しい傷				15.79	15.94	5.31	1.26	3522	2625	15.80
45	169	19G	4層	2 OB 5b	片端欠損				22.03	12.56	4.06	1.11	3720	1245	17.08
45	170	31H	4層	35 OB 5b	片端欠損				22.26	14.77	4.68	1.15	6130	1530	15.18
45	171	40J	2層	29 OB 5b	完形、片端に新しい傷				20.80	10.82	3.64	1.02	7930	1840	14.10
45	41	172	41K	4層	15 AN 5b	完形			19.61	18.00	7.27	1.76	8035	2138	13.80
45	173	46M	2層	42 OB 5b	先端欠損				14.83	15.56	3.83	0.84	9139	2597	12.55

tab.6 石礫観察表

標団番号	因版番号	遺物番号	区(1~z)	区(a~z)	層位、遺構	取上番号	石材	分類	特徴	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	X座標	Y座標	標高(m)
45	174	18G	4層		3 OB 5c	完形			14.81	12.12	2.66	0.33	3551	1225	17.14	
45	175	19H			25 OB 5c	片脚欠損			14.39	11.42	3.02	0.28				
45	176	44L	1層		16 AN 5c	先端欠損			21.75	18.51	2.77	0.94	8757	2257	13.03	
45	177	12F	3層		14 OB 6	完形			22.95	20.74	4.96	2.44	2320	1071	18.53	
45	41	178	15G	4層	30 OB 7	片脚欠損			28.53	11.41	3.46	0.93	2910	1390	17.33	
45	41	179	16F	4層	56 チヤ7	片脚欠損			28.66	13.96	3.71	1.31	3062	1056	17.20	
45	180	42K	4層		30 OB 7	両脚欠損			19.50	14.00	3.00	0.72	8290	2110	13.70	
46	181	31M	5層		14 AN 8	片脚欠損			29.58	19.69	3.50	1.19	6053	2403	14.07	
46	41	182	32J	5層	59 OB 8	両脚欠損			18.19	14.81	4.59	0.58	6336	1955	14.59	
46	41	183	38H	4層	1 OB 8	完形			25.40	10.61	2.54	0.42	7435	1532	15.50	
46	184	39H	4層		1 AN 8	片脚欠損			22.35	14.49	4.69	0.98	7643	1512	15.38	
46	185	39J	3層		13 AN 8	完形			16.73	11.89	3.32	0.41	7735	1830	14.53	
46	186	39J	3層		58 OB 8	完形			18.23	11.91	2.90	0.39	7683	1818	14.48	
46	187	39J	3層		67 OB 8	両脚欠損			16.00	15.00	3.00	0.39	7732	1945	14.25	
46	188	39K	5層		74 OB 8	完形			16.58	13.86	4.10	0.55	7740	2140	13.12	
46	41	189	40K	1層	37 AN 8	完形			25.14	12.19	2.92	0.63	7896	2050	13.88	
46	41	190	41K	4層	33 AN 8	完形			27.11	14.44	2.88	0.76	8003	2055	13.77	
46	191	43L	3層		19 OB 8	完形,先端に新しい傷			14.09	12.47	2.45	0.29	8520	2261	12.61	
46	41	192	45M	3層	59 チヤ9	片脚欠損			36.00	17.00	3.00	1.31	8860	2425	12.30	
46	193	13U	4層		15 OB 10	片脚欠損			12.49	17.19	2.98	0.56	2482	1918	17.62	
46	194	43N	9層		15 OB 10	基部欠損			25.00	31.00	6.50	2.85	8480	2792	12.50	
46	195	16H	3層		66 OB 11	有茎,先端欠損			27.09	17.32	3.36	1.46	3136	1435	16.92	
47	196	12F	3層		8 AN 12b	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			16.18	10.97	1.89	0.37	2324	1050	18.64	
47	197	32J	5層		90 OB 12b	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			16.00	12.04	2.46	0.48	6377	1820	14.60	
47	198	35I	2層		17 OB 12b	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			13.96	10.08	1.29	0.20	6920	1736	15.22	
47	199	35J	2層		33 OB 12b	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			17.09	11.29	2.43	0.39	6973	1987	14.70	
47	41	200	40K	1層	26 OB 12b	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			24.56	15.02	3.74	1.22	7970	2135	14.04	
47	41	201	40O	?	1 OB 12b	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			29.18	16.83	3.58	1.65	7815	2940	12.94	
47	41	202	44P	?	8 AN 12b	局部磨製・先端欠損			34.86	20.72	4.79	2.55	8684	3020	12.30	
47	203	46O	?		66 AN 12b	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			24.48	15.28	2.55	0.80	9130	2904	12.16	
47	204	13F	4層		9 AN 12c	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			25.46	15.49	3.79	1.45	2500	1041	18.20	
47	41	205	13I	1層(GL-20cm)	0 OB 12c	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚の(研磨)、完形			20.00	14.00	2.00	0.41				
47	206	13J~L	表様		0 OB 12c	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			21.00	12.00	3.00	0.37				
47	207	13J~L	表様		0 AN 12c	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			26.00	14.00	2.00	0.63				
47	41	208	16I	6層	0 AN 12c	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			31.51	12.48	2.76	1.03				
47	209	16M	3層		11 OB 12c	磨製・周縁のみ調整剝離、先端欠損			10.34	14.40	1.87	0.22	3122	2567	16.20	
47	210	19O	?		4 OB 12c	局部磨製、片脚欠損			24.54	11.63	2.90	0.68	3664	2960	15.11	
47	211	38I	2層		2 OB 12c	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			17.25	11.36	1.62	0.26	7421	1696	15.11	
47	212	38I	2層		23 OB 12c	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			26.48	17.12	2.84	1.13	7435	1710	14.98	
47	213	44O	?		15 OB 12c	片脚欠損			22.91	16.85	2.60	0.42	8654	2956	12.44	
47	214	45L	3層		57 OB 12c	局部磨製、先端・片脚欠損			17.51	8.38	2.65	0.32	8958	2354	12.50	
47	215	13H	7層		10 OB 12	磨製・周縁のみ調整剝離、先端・片脚欠損			11.00	13.00	2.00	0.41	2545	1540	17.41	
47	216	16J	1層		40 OB 12	磨製・周縁のみ調整剝離、先端・基部欠損			10.00	11.00	1.50	0.28	3021	1808	16.85	
47	217	25J	4層		12 OB 12	磨製・周縁のみ調整剝離、片脚欠損			13.50	9.50	1.50	0.23	4928	1937	14.99	
47	218	31I	5層		116 OB 12	基部欠損			11.56	7.78	1.82	0.20	6100	1720	14.56	
47	219	31M	5層		31 OB 12	磨製・周縁のみ調整剝離、先端・基部欠損			16.85	10.69	1.37	0.25	6110	2408	13.87	
47	220	40K	1層		33 OB 12	磨製・周縁のみ調整剝離、基部欠損			14.21	9.50	1.88	0.29	7830	2050	13.98	
47	221	41J	2層		43 OB 12	先端・基部欠損			14.00	10.00	2.00	0.32	8127	1891	14.13	
47	222	43L	1層		15 OB 12	磨製・周縁のみ調整剝離、先端・片脚欠損			14.51	8.90	1.77	0.25	8479	2300	12.80	

tab.6 石器観察表

標図番号	図版番号	遺物番号	区(1~60)	区(a~z)	層位、遺構	取上番号	石材	分類	特徴	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	X座標	Y座標	標高(m)
47	223	46K	2層			4 OB	12	堆積(周縁のみ調査剥離)、先端欠損	15.72	9.54	1.66	0.26	9069	2030	13.65	
48	224	9F				10 OB	13	局部磨製、片端欠損	15.74	8.70	1.58	0.19	1770	1177	18.48	
48	225	11E	5層			8 OB	13	局部磨製、正三角形、基部欠損	11.97	10.00	2.05	0.20	2083	993	18.35	
48	41	226	12E		5層	8 OB	13	堆積(周縁のみ調査剥離)、先端に新しい欠損	20.99	16.96	2.59	0.89	2345	820	18.65	
48	227	15N	5層			10 OB	13	局部磨製、完形	20.75	17.24	3.26	0.88	2971	2672	16.18	
48	228	30K	7層			195 AN	13	局部磨製、完形	20.61	16.94	5.94	1.83	5943	2107	14.10	
48	229	38J	1層(GL-10cm)			0 OB	13	局部磨製、両端欠損	14.00	13.50	3.00	0.39				
48	230	41J	4層			68 OB	13	局部磨製、先端に新しい傷	17.72	14.57	3.62	0.71	8050	1960	13.88	
48	231	46P	?			78 OB	13	局部磨製、片端欠損	15.70	8.19	2.51	0.27	9069	3020	12.04	
48	41	232	39J	3層		85 OB	14	局部磨製、完形	27.09	17.30	4.16	1.74	7686	1836	14.06	
48	233	35H	7層			32 AN	14	局部磨製、先端欠損	17.70	15.06	3.15	1.06	6960	1480	15.13	
48	234	44K	3層			26 OB	14	局部磨製、完形	15.00	9.00	2.00	0.24	8720	2190	13.22	
48	235	15G	5層			70 OB	15	堆積(周縁のみ調査剥離)、片端欠損	22.64	13.99	2.06	0.46	2960	1290	17.09	
48	236	42K	4層			58 OB	15	堆積(周縁のみ調査剥離)、片端欠損	22.07	7.84	1.58	0.24	8300	2168	13.49	
48	237	15J	2層か(GL-30cm)			0 OB	16	堆積(周縁のみ調査剥離)、完形	19.90	11.56	2.25	0.35				
48	41	238	12F		3層	6 AN	16	堆積(周縁のみ調査剥離)、完形	27.72	12.21	2.03	0.59	2228	1065	18.64	
48	41	239	40N	4層		3 OB	16	局部磨製、完形	17.04	9.75	2.46	0.29	7937	2796	13.00	
48	240	44N	3層			43 OB	16	堆積(周縁のみ調査剥離)、完形	13.97	10.11	1.85	0.17	8720	2660	12.38	
48	241	14L	4層か(GL-30cm)			0 OB	16	局部磨製(周縁のみ調査)、先端欠損	15.00	10.50	2.00	0.24				
48	41	242	44N	3層		69 AN	17	局部磨製、先端欠損	35.95	11.44	2.80	1.28	8690	2634	12.20	
48	243	42J	3層			0 AN	18	堆積(周縁のみ調査剥離)、先端欠損	37.00	19.00	4.00	3.39				

OBは黒曜石、ANは安山岩

石器はもっとも数が多く、各層で出土している。石材は黒曜石、安山岩が用いられるが、前者が7割以上を占める。押型文土器を含む層からは主に鍬形器が出土しているが、下層から出土したものには長さ2cm前後のもので、形態は多様性に富んでいる。ただ、平基の二等辺三角形若しくは正三角形のものはより下層で出土する傾向は見られる。石器には研磨を施したものも見られるが、押型文土器の層ではほとんど見られず、下層出土のものが大半である。研磨の比率は1割程度である。研磨しているものには二等辺三角形で抉りが深く入るものが多く見られる。この平面形のものには研磨を施さないものもあり、出土層位でみても両者は共存している。同様の形態の石器は松木田遺跡の撫糸文土器に伴うものや柏原F遺跡のⅢ層の撫糸文土器、刺突文土器、条痕文土器を伴うものに見られる。局部磨製石器については時期的に先行する大原D遺跡第14地点の条痕文土器を伴う層で確認されている。この遺跡では600点を超える石器が出土しているが、形態は平基若しくは抉りの浅い二等辺三角形、正三角形というものが大半である。局部磨製のものはその形態のものに見られるが、数量的には9点ほどで比率は低い。形態・比率ともは他の遺跡とは様相が異なる。この段階では形態の再一性、局部磨製石器の出現等が看取される。この時期の石器については小畠弘己氏、町田勝則氏により変遷が指摘されているが、今回の資料はこの流れを確認することができた。

註) 小畠氏は柏原F遺跡の資料もとに、撫糸文土器、刺突文土器、条痕文土器の時期の局部磨製石器の盛行、押型文土器の時期の局部磨製石器の衰退、鍬形器の盛行という流れを指摘している。

町田氏は先行する段階の条痕文土器、無文土器の時期では平基若しくは抉りの浅い二等辺三角形、三角形の石器と、いう齊一性、局部磨製の出現などが上げられている。

### 石槍 (Fig.48、49、PL.42-1)

石槍は13点出土した。石材はいずれも安山岩である。平面形は木葉形を呈する。長さ10cm前後のものと5cm前後の小型のものがある。基部の形態は平坦になるもの、丸みを帯びるものなどがある。244～248は10cm前後の長さのものである。244は横長の剥片を素材とし、身は幅広で、基部は水平に整えられている。平面形は二等辺三角形を呈する。1層から出土している。245は完形品で、基部は平坦で、基部の両側面から抉りを加えている。福岡市松木田遺跡で撲糸文土器に伴って、同様の形態の石槍が出土している。246は完形品である。身は細く、基部はやや丸みを帯びる。247は完形品で、薄手である。身の中位が最大幅となる。基部は平坦である。248は両端が欠損している。断面形はレンズ状を呈する。

249～254は5cm前後の長さのものである。249は完形品で、先端は圭頭形を呈する。基部は丸みを帯びる。1層から出土した。250は完形品で、両面に研磨を施し、周縁を調整している。基部は平坦で、両側縁から抉りを加えている。245と同様の形態である。251は横長の剥片を素材とし、調整は主に側縁、基部に行われている。基部は丸みを帯びる。252は完形品である。素材面や整形段階の剥離を残し、周縁の調整剥離の角度が急であるため、断面形はレンズ状にならない。基部は調整を加え、尖り気味に整えられている。253は基部は欠損している。254は基部は丸みを帯びる。

### 尖頭器状石器 (Fig.49、PL.42-2)

255～260は長さ3cm前後、厚さは0.5cm以下の小型品で、平面形は柳葉形を呈する。260は安山岩で、他は黒曜石である。255は表面に研磨が見られる。259、260は非対称形で、半月状を呈する。260は片面に研磨を施し、周縁を加工する。これらは石槍の形態に類似するが、法量等から槍としての使用法よりは鎌や複数組み合わせた形での使用法を想定したほうが良いのかもしれない。261は基部は欠損しているが、木葉形を呈する。262～265は石鎌の可能性もあるが、調整などからここに含めた。平面形は歪な二等辺三角形を呈し、厚みがある。基部は平坦もしくはやや丸みをもった形態である。石材は安山岩である。

### 削器 (Fig.50～53)

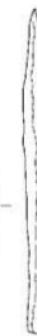
削器は横長の剥片や縱長の剥片を使用したものがあり、刃部は湾曲するものや直線的なもの、抉りを入れたものなどがある。このほか、素材の形状を生かし、刃部に明確な加工を加えていない使用痕のある剥片などは多数出土している。

266～274は横長の剥片を使用したもので、素材の形状を生かして刃部以外の調整はあまり行われていない。打面には自然面を残すものが多い。刃部の形状は湾曲するもの（266～268、270、273）、直線的なもの（269）、二ヶ所に刃部をもつもの（271、272、274）はある。刃部の調整は片面のみのものと両面のものがある。石材は安山岩、黒曜石がある。266～267は1層から出土した。275～281は縱長の剥片を使用したものである。直線的な側縁の一辺に調整を加えて、刃部としている。275～277は1層から出土した。280、281は片面に自然面を残し、湾曲した刃部に片側からの調整を加える。石材は安山岩、黒曜石がある。282～284は縱長の剥片を使用し、刃部に抉りを加えたものである。282は両面に成形の剥離を行い、側縁の一方に調整を加えて抉りを入れている。283は側縁と端部の二辺に調整が加えられている。285は縱長の剥片の素材で、打面には自然面が残る。摘みのつくような形態をしており、直線的な側縁には微細な剥離が見られる。湾曲した縁辺には片側からの調整が加えられる。石材は安山岩である。1層から出土した。286、287は大型の剥片素材で、側縁に調整を加えている。石材は安山岩である。いずれも1層から出土した。285～287のような大型のものは下層では見られない。



244

245



246

248



249

250

251

Fig.48 石器実測図 1 (2/3)

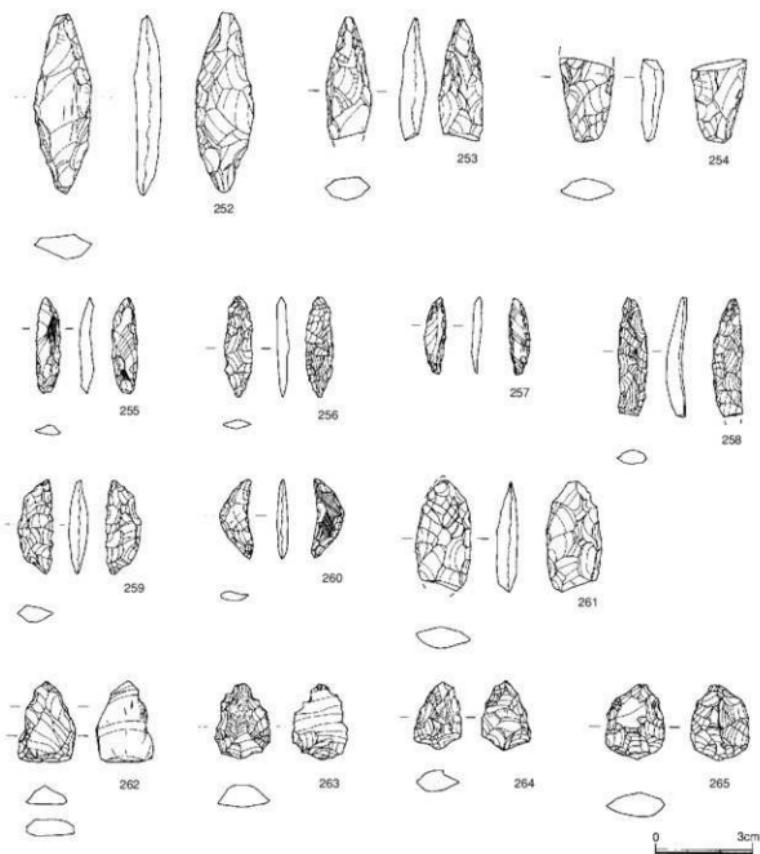
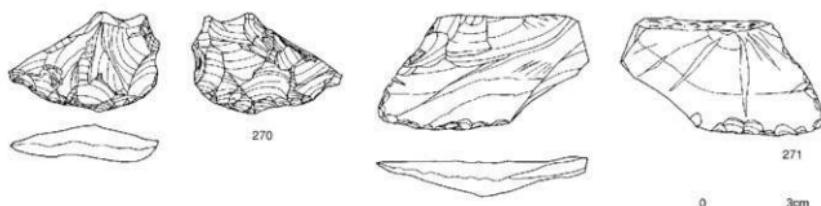
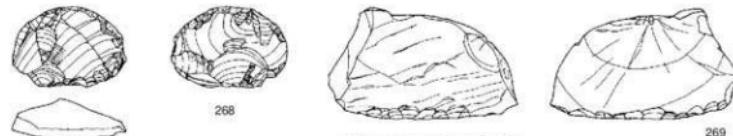
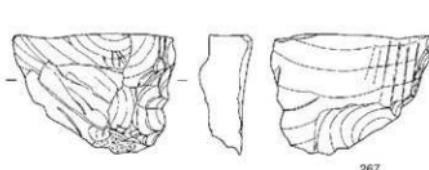
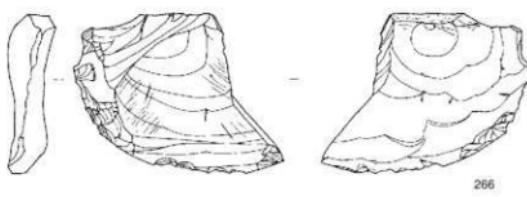


Fig.49 石器実測図 2 (2/3)



0 3cm

Fig.50 石器実測図 3 (2/3)

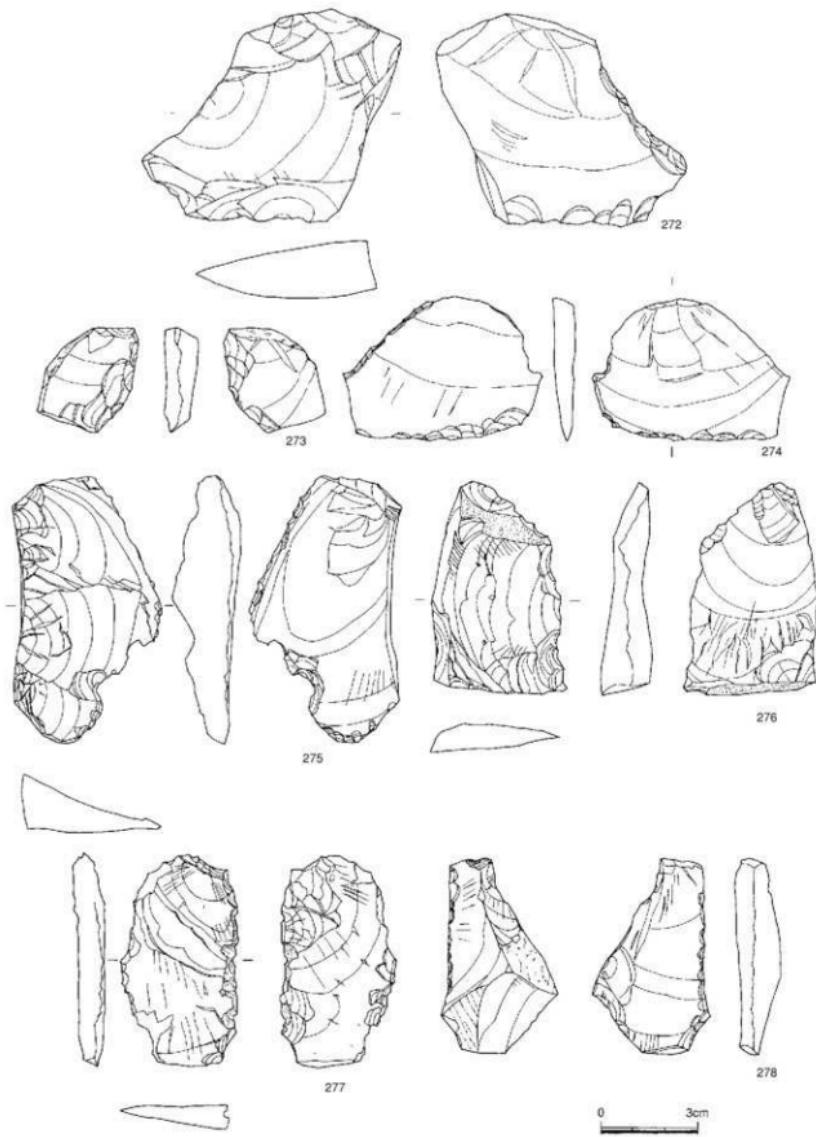
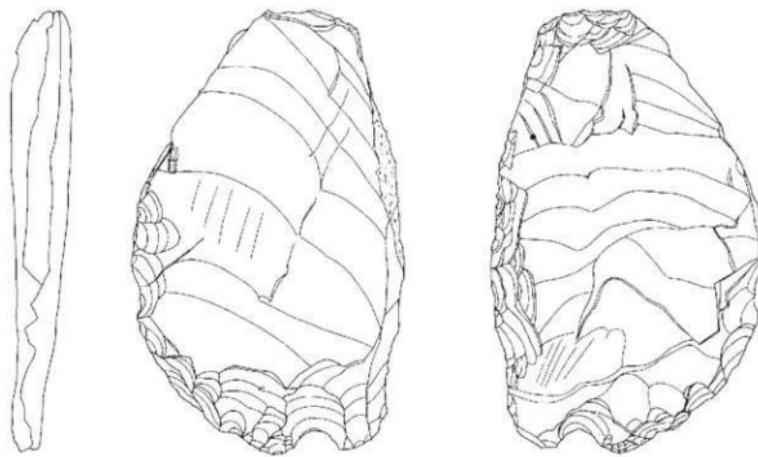


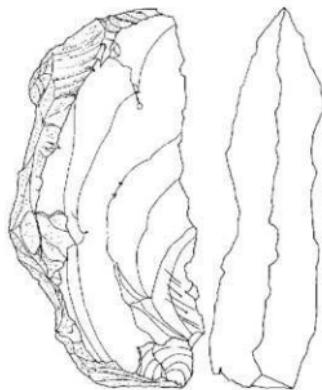
Fig.51 石器実測図 4 (2/3)



Fig.52 石器実測図 5 (2/3)



286



287



0 3cm

Fig.53 石器実測図 6 (2/3) Fig.53

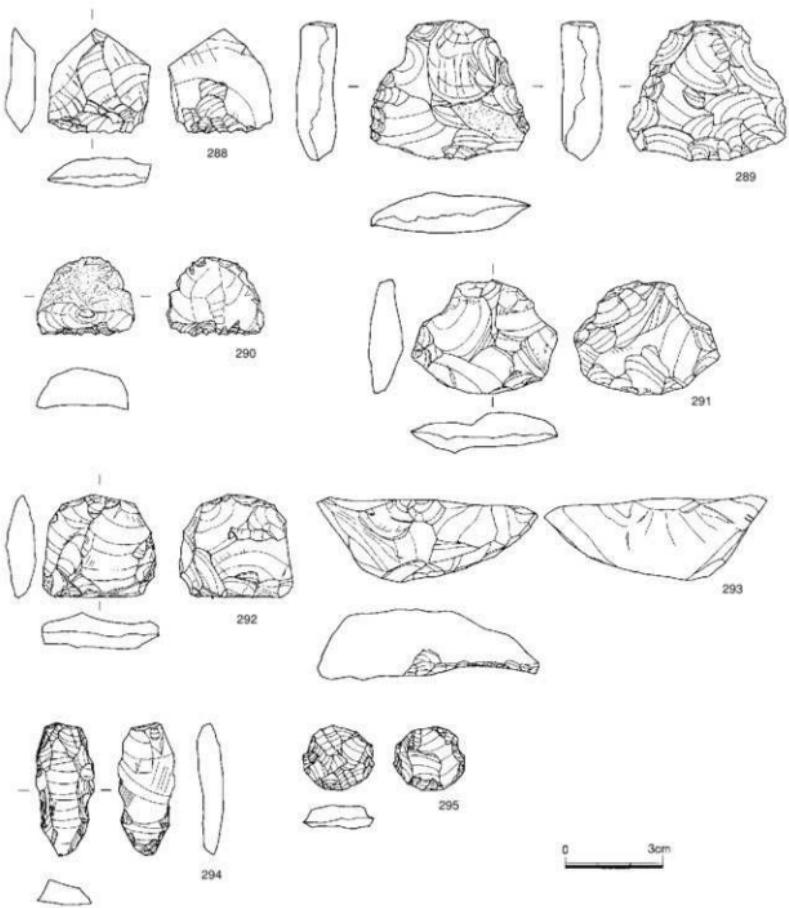


Fig.54 石器実測図 7 (2/3)

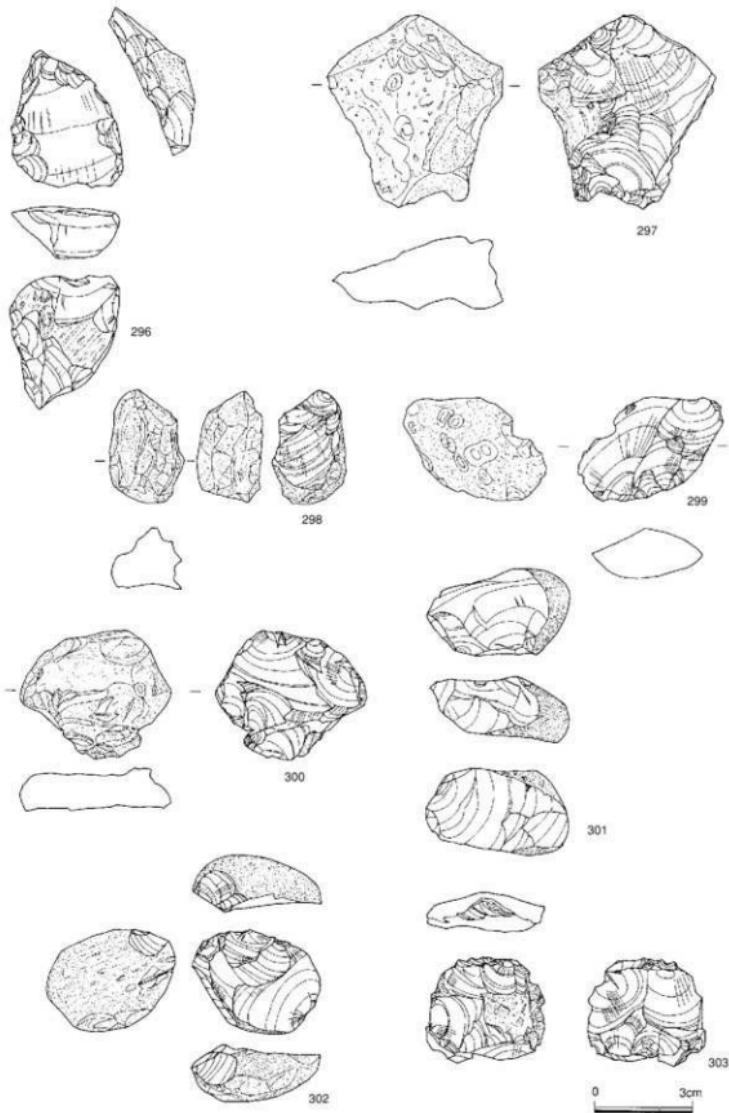


Fig.55 石器実測図 8 (2/3)

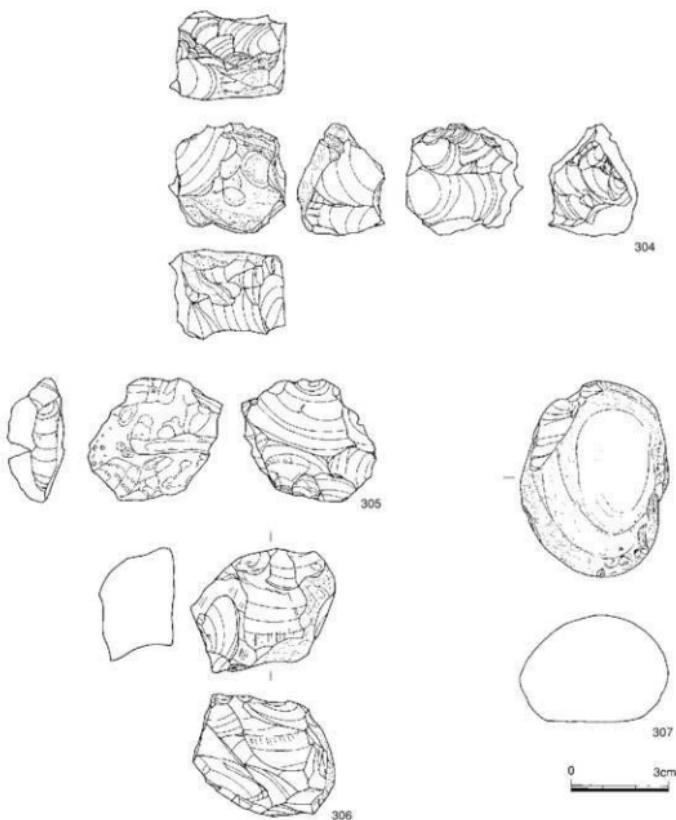


Fig.56 石器実測図 9 (2/3)

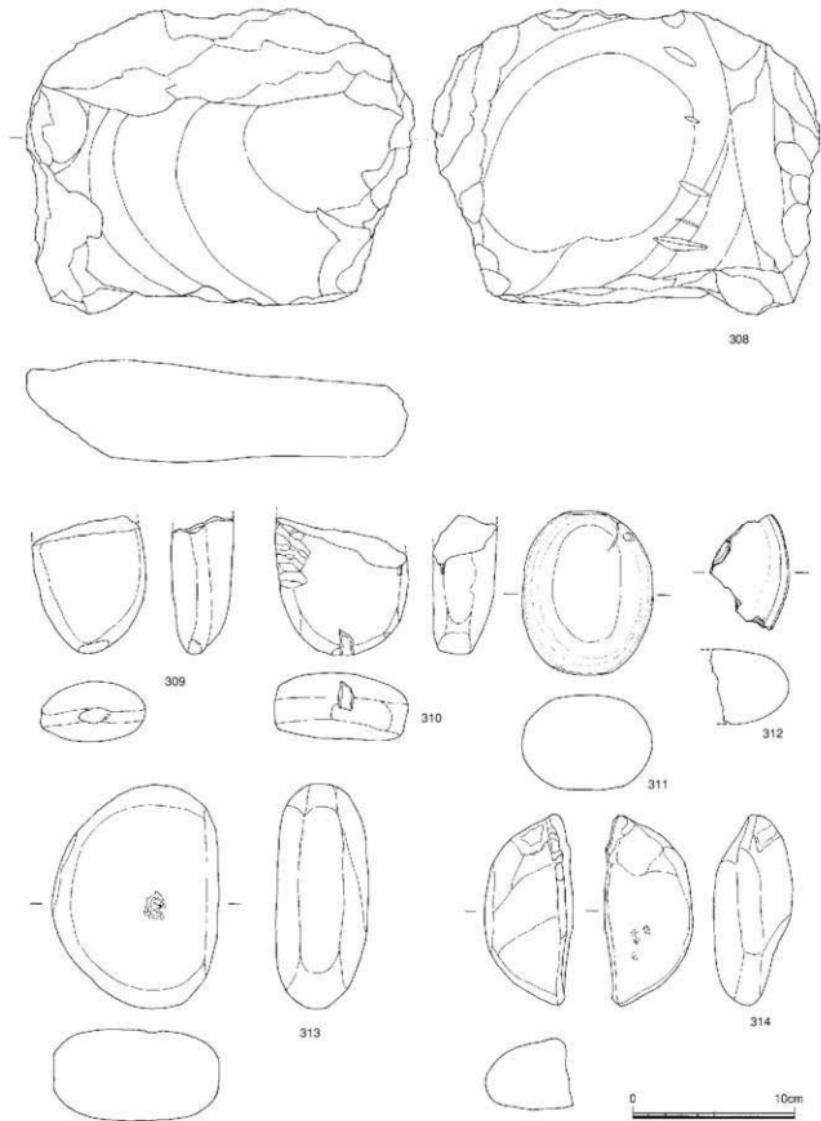


Fig.57 石器実測図10 (1/3)

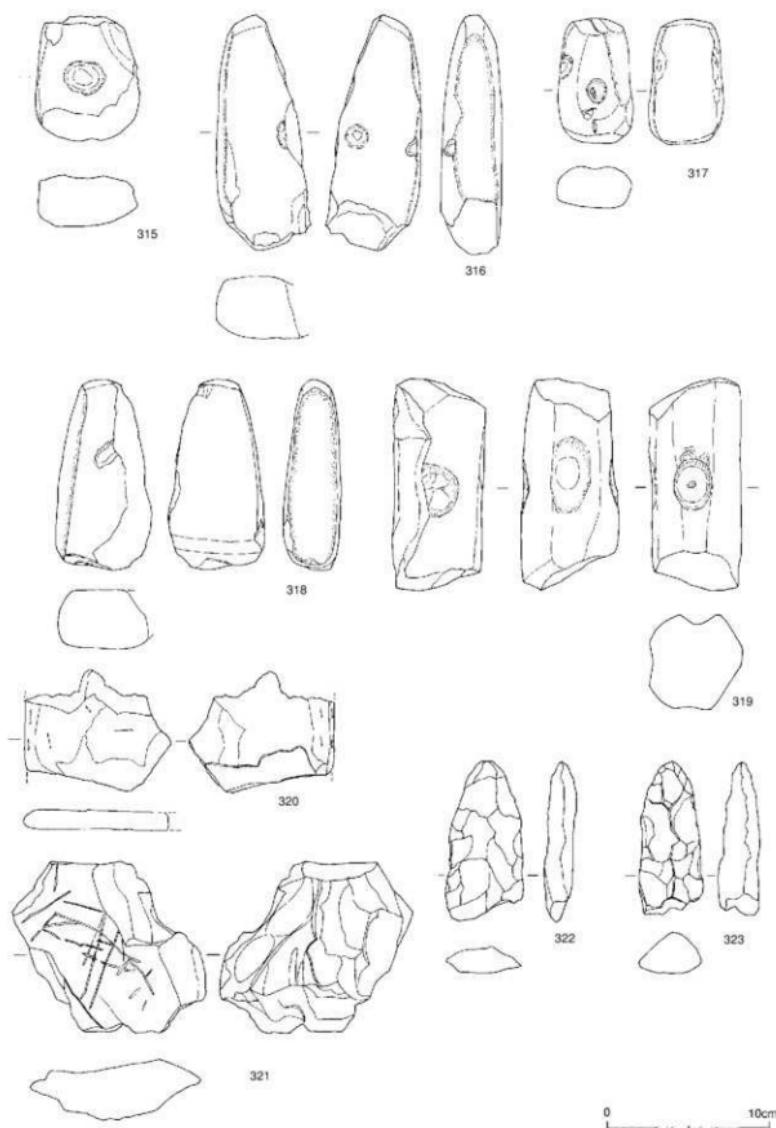


Fig.58 石器実測図11 (1/3)

tab.7 石器観察表

種別 番号	図版 番号	遺物番号	区(1 ~ 6)	区(a ~ z)	層位 (6)	取上 番号	器種器形	石材	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	X座標	Y座標	標高 (m)
48	42	244	11	E		1	石椎	AN	基部平坦、先端欠損	4.5	3.8	0.8	21.00	2180	1700	17.75
48	42	245	15	I	4層	42	石椎	AN	基部平坦、基部付近側面から丸抜き、完形	8.0	2.7	1.0	23.53	2999	1762	16.83
48	42	246	15	J	5層	1	石椎	AN	柳葉形、完形	14.9	2.0	1.0	23.32	2830	1937	16.86
48	42	247	41	K	1層	93	石椎	AN	柳葉形、完形	10.1	2.5	6.0	16.75	8057	2091	14.60
48	42	248	19	G	7層	12	石椎	AN	基部・先端欠損	5.3	2.6	0.8	12.98	3767	1396	16.34
48	42	249	14	F	1層	2	石椎	AN	尖頭形、完形	5.6	2.2	0.7	10.89	2640	1095	18.45
48	42	250	34	J	2層	37	石椎	AN	複製(圓錐を複数削制)、基部平坦、基部付近側面から丸抜き、完形	6.2	1.9	0.7	8.83	6743	1959	14.60
48	42	251	32	J	5層	145	石椎	AN	複製形、先端欠損	4.3	1.9	0.6	5.70	6308	1922	14.40
49	42	252	31	K	5層	69	石椎	AN	柳葉形、完形	5.6	1.7	0.8	8.54	8166	2009	14.17
49	42	253	41	K	4層	35	石椎	AN	柳葉形、基部欠損	3.8	1.4	0.8	3.74	8008	2077	13.72
49	42	254	47	R	?	5	石椎	AN	柳葉形、基部平坦、先端欠損	2.8	1.7	0.7	2.81	9330	3454	11.82
49	42	255	32	I	5層	36	尖頭器状 石器	OB	局部磨耗(片面)、完形	3.0	0.8	0.3	0.94	6366	1770	14.88
49	42	256	32	K	5層	29	尖頭器状 石器	OB	完形	3.1	0.8	0.3	0.75	6244	2030	14.40
49	42	257	45	O~ P	最上層	0	尖頭器状 石器	OB	完形	2.4	0.7	0.3	0.39			19.00
49	42	258	45	P	?	31	尖頭器状 石器	OB	基部欠損	3.8	0.9	0.5	1.76	8960	3057	12.17
49	42	259	32	I	5層	196	尖頭器状 石器	OB	半月形、完形	2.9	1.0	0.5	1.33	6283	1762	14.50
49	42	260	36	J	2層	16	尖頭器状 石器	AN	局部磨耗(片面)、半月形、 完形	2.4	1.0	0.3	0.62	7023	1837	14.97
49	42	261	40	J	2層	14	石椎	AN	木節形、基部欠損	3.4	1.7	0.7	3.95	7945	1825	14.31
49	42	262	32	H	4層	39	尖頭器状 石器	AN	二等辺三角形、平基	2.5	1.8	0.5	3.03	8285	1440	15.45
49	42	263	33	I	第2層	0	尖頭器状 石器	OB	二等辺三角形、凹基	2.3	1.7	0.7	2.62			
49	42	264	40	L	4層	18	尖頭器状 石器	OB	二等辺三角形、凹基	2.1	1.5	0.7	2.06	7850	2345	12.83
49	42	265	41	O	?	2	尖頭器状 石器	OB	二等辺三角形、凹基	2.3	1.8	0.7	3.08	8082	2848	15.83
50		266	16	I	1層	2	削透A	AN		4.5	4.9	1.2	28.50	3121	1744	17.91
50		267	17	I	1層	2	削透A	AN		5.0	3.7	1.4	26.35	3300	1725	17.85
50		268	13	I	7層	9	削透A	OB		3.6	2.4	1.2	9.40	2448	1775	17.40
50		269	16	F	4層	70	削透A	AN		5.8	3.4	0.9	17.13	3113	1180	17.07
50		270	14	F	3層	21	削透A	OB		4.6	2.1	1.1	12.32	2665	1035	18.02
50		271	14	F	3層	9	削透A	AN		6.5	3.6	1.1	21.23	2749	1100	18.05
51		272	28	P	13.2m	0	削透A	AN		6.5	7.7	1.8	83.91			
51		273	38	G	10層	31	削透A	AN		3.2	3.2	1.0	11.31	7615	1330	15.11
51		274	48	R	?	4	削透A	AN		4.4	6.1	0.6	16.68	9460	3445	11.94
51		275	17	J	1層	3	削透C	AN		8.2	4.2	1.9	43.14	3340	1885	17.48
51		276	19	I	1層	8	削透C	AN		6.4	4.0	1.6	36.97	3630	1630	17.01
51		277	26	J	1層	3	削透C	AN		6.5	3.4	1.0	19.84	5120	1880	15.80
51		278	15	G	4層	22	削透C	AN		6.0	3.7	1.4	23.54	2979	1340	17.37
52		279	38	L	8層	4	削透C	AN		6.2	2.7	1.1	13.08	7499	2252	13.26
52		280	40	L	4層	4	削透C	AN		5.2	3.8	1.2	24.26	7953	2235	13.27
52		281	45	P	?	3	削透C	OB		4.4	3.1	1.2	12.28	8932	3045	12.42
52		282	15	M	16.55mm	0	削透D	AN		8.5	3.5	1.6	42.12			
52		283	41	K	1層	88	削透B	AN		5.8	5.0	1.0	32.94	8125	2115	14.55
52		284	38	H	5層	80	削透D	AN		5.8	3.9	1.8	31.23	7465	1445	14.93
52		285	16	I	1層	1	削透A	AN		8.6	5.7	1.4	41.04	3114	1698	17.85
53		286	12	G	1層	4	削透A	AN		13.7	8.5	1.9	216.44	2235	1684	18.65
53		287	20	H	1層	5	削透A	AN		11.7	5.9	3.2	179.00	3870	1445	16.98
54		288	14	E	3層	6	削透C	AN		3.2	3.2	0.9	9.73	2642	960	18.30
54		289	35	I	2層	5	削透C	AN		4.9	4.3	1.2	25.51	7065	1650	15.33
54		290	36	I	2層	4	削透C	OB		2.8	2.4	1.1	9.00	7130	1708	15.35
54		291	44	L	1層	13	削透C	AN		3.5	4.5	1.0	13.46	8693	2222	12.98
54		292	44	P	?	21	削透C	OB		3.2	3.6	1.0	11.89	8630	3105	12.39
54		293	45	M	3層	111	削透C	AN		6.8	3.6	2.1	27.90	8976	2417	12.45
54		294	14	E	3層	211	削透A	OB		4.1	1.8	0.7	5.78	2695	935	18.11
54		295	45	O	?	341	削透B	OB		2.0	2.2	0.7	3.02	8860	2898	12.18
55		296	14	I	2層	51	石椎	AN		4.1	3.4	1.6	21.39	2655	1666	17.43
55		297	16	G	1層?	11	石椎	OB		5.9	5.4	2.1	54.77	3075	1205	17.81
55		298	16	E	1層?	2	原石	OB		3.4	2.3	1.7	14.98	3110	950	17.64
55		299	16	K	セタ ン	0	石椎	OB		4.4	3.2	1.6	18.18			
55		300	17	J	1層	16	石椎	OB		4.6	3.9	1.2	23.60	3358	1818	16.95
55		301	32	I	5層	210	石椎	OB		4.4	2.7	2.0	21.14	8215	1780	14.57
55		302	33	J	2層	28	石椎	OB		4.0	3.2	1.8	19.50	8568	1845	14.89
55		303	36	J	2層	311	石椎	OB		3.3	3.9	2.7	12.57	7047	1835	14.86
56		304	36	J	2層	301	石椎	OB		3.5	3.1	1.2	31.78	7037	1868	14.73

tab.7 石器観察表

博団 番号	図版 番号	遺物 番号	区(I ~ 60)	区(a ~ z)	層位	取上 番号	器種器形	石材	特徴	長さ (cm)	幅(c m)	厚さ (cm)	重さ (g)	X座標	Y座標	標高 (m)
56	305	36	H 3層		15石核	OB				4.1	3.8	1.8	22.29	7010	1483	15.22
56	306	45	K 1層		12石核	AN				4.5	3.7	2.3	43.48	8890	2151	12.83
56	307	36	J 2層		3原石	OB		円礫、剥離あり		3.3	3.2	2.7	115.00	7008	1839	15.10
57	308	12	H 4層		23石皿	花崗岩				23.5	18.0	6.0	3620.00	2206	1487	18.01
57	309	12	E 5層		27磨石	花崗岩				8.4	8.9	3.7	327.00	2203	980	18.57
57	310	16	J 1層		4磨石	花崗岩				8.4	8.0	4.0	354.00	3180	1923	17.22
57	311	20	M 2層		0磨石	花崗岩							766.00			
57	312	44	P		28磨石	花崗岩				7.5	5.2	5.0	204.57	8862	3015	12.27
57	313	18	M 1層		6磨石	不明				13.7	10.2	5.5	1260.00	3458	2470	16.10
57	314	48	M ?		46磨石	不明				11.7	5.4	4.7	415.00	9440	2460	12.30
58	315	16	M 最下層		0敲石	不明				8.0	8.5	3.5	287.00			
58	316	44	P ?		15磨石	不明				14.4	9.8	3.7	506.00	8736	3027	12.25
58	317	45	M 3層		44磨石	不明				7.7	4.8	2.5	189.00	8991	2447	12.35
58	318	46	P ?		96.1磨石	花崗岩				11.7	8.0	3.7	405.00	9070	3000	12.01
58	319	48	P ?		24敲石	片岩				13.0	6.6	6.2	801.00	9470	3130	11.82
58	320	15	H 5層		70砥石	砂岩				7.4	8.9	1.2	98.00	2854	1575	17.09
58	321	16	G		28砥石	砂岩		縦刻あり		11.0	11.0	3.5	547.00	3031	1246	17.40
58	322	12	H		1石斧	不明				9.8	4.7	1.5	94.00			
58	323	46	O		115石斧	不明				9	4.7	2.5	103.00			

### 搔器 (Fig.54)

削器に比べると、搔器の数量は少ない。削器には不定形な剥片を利用し、刃部の一辺に加工を加えたものが多く、円形や楕円形に成形したものはほとんど見られない。

288~292は不定形の剥片を素材とし、周縁の一辺に角度のある調整を行い、刃部としている。294は縦長の剥片を素材とし、端部の一方に主剥離面側から調整を加え刃部としている。刃部の剥離面の風化は他の剥離面と異なっており、異なる時期の石器の再利用の可能性がある。295は円形に成形し、周縁に調整を加え刃部としている。このタイプの搔器は今回の調査ではほとんど出土していない。

### 石核 (Fig.55, 56)

石核は裸素材のものが多い。剥離工程は分割後、自然面や剥離面を打面として、転移しながら剥片剥離を行う。背面に自然面を残す。296、306は安山岩、それ以外は黒曜石である。黒曜石の大半は表面にアバタ状の窪みが見られる円礫で、307に見られるような5cm前後の小型のものである。原石の多くは、一、二ヶ所剥離痕が見られる。石器や石核を見る限り、角礫の素材のものはほとんどない。

### 石皿 (Fig.57)

308は調査区東端の12-H区で出土したもので、窪んだ面を上にして出土した。据えられていた状態に近いものと考えられる。周辺には集石遺構や炭化物、遺物なども多数出土している。石材は花崗岩である。磨石、敲石は一定量、出土しているが、石皿は少ない。

### 磨石・敲石 (Fig.57, 58)

309~314は磨石である。両面に擦痕があり、周縁に敲打痕が見られる。315~319は敲石である。柱状を呈し、表面には擦痕も見られるが、側面や端面には敲打痕がある。敲打によって円形に深く窪んだ部分が見られる。

### 砥石 (Fig.58)

320、321は砥石である。両面に研磨が見られる。321は片面に線刻が見られる。

### 石斧 (Fig.58)

322、323は打製石斧である。刃部は欠損している。基部は尖り気味に仕上げられる。いずれも1層、もしくは上層からの混入の可能性のある地点での出土で、縄文時代早期以後に位置づけられる可能性はある。

#### その他の遺物 (Fig.59~61)

ここでは後世の造構や包含層に混入して出土した遺物を掲載した。

#### 縄文土器 (Fig.59)

1は曾畠式土器の胴部で、ヘラ描きの菱形文が見られる。胎土には滑石が混入する。2は阿高式土器の口縁で、端部には刻目が、外面にはヘラ描きの曲線文が施される。3は磨消縄文の胴部片である。4は条痕調整の深鉢である。外面には斜め方向の貝殻条痕を、内面には横方向の条痕を施す。

#### 石器 (Fig.60, 61)

1～3は削器である。石材は安山岩である。4は石鎌である。縱長の剥片を使用する。5は石斧である。未製品か。6、7は局部磨製で石斧である。6の基部は欠損している。7は完形品である。8は打製石斧である。9は石皿である。両面が窪んでいる。石材は花崗岩である。10～16は磨石である。17～21は石錐で、両端に打ち欠きがある。

#### 出土遺構

1 001 1区西側造構面、2 001 1区西側造構面、3 1 トレンチ北造構面、4 2号墳墳丘、  
5 001 3区北側、6 001 4区下層、7 005 2区、8 009 1区下層、9 001 8区下層、  
10 2号墳、11 016 P2、12 001 7区上層、13 001 7区上層、14 005 1区、15 009 3区、  
16 001 3区上層、17 001 5区上層、18 表採、19 005 P3、20 001 8区上層、21 005 2区

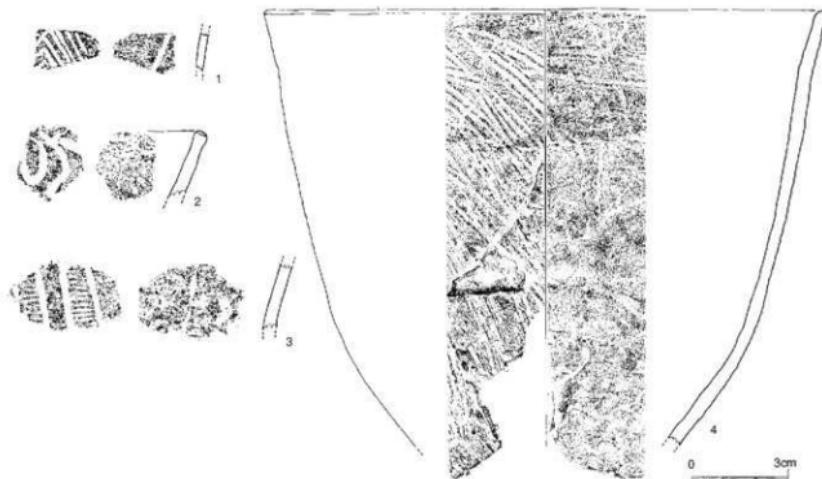


Fig.59 その他の遺物実測図 1 (1/3)

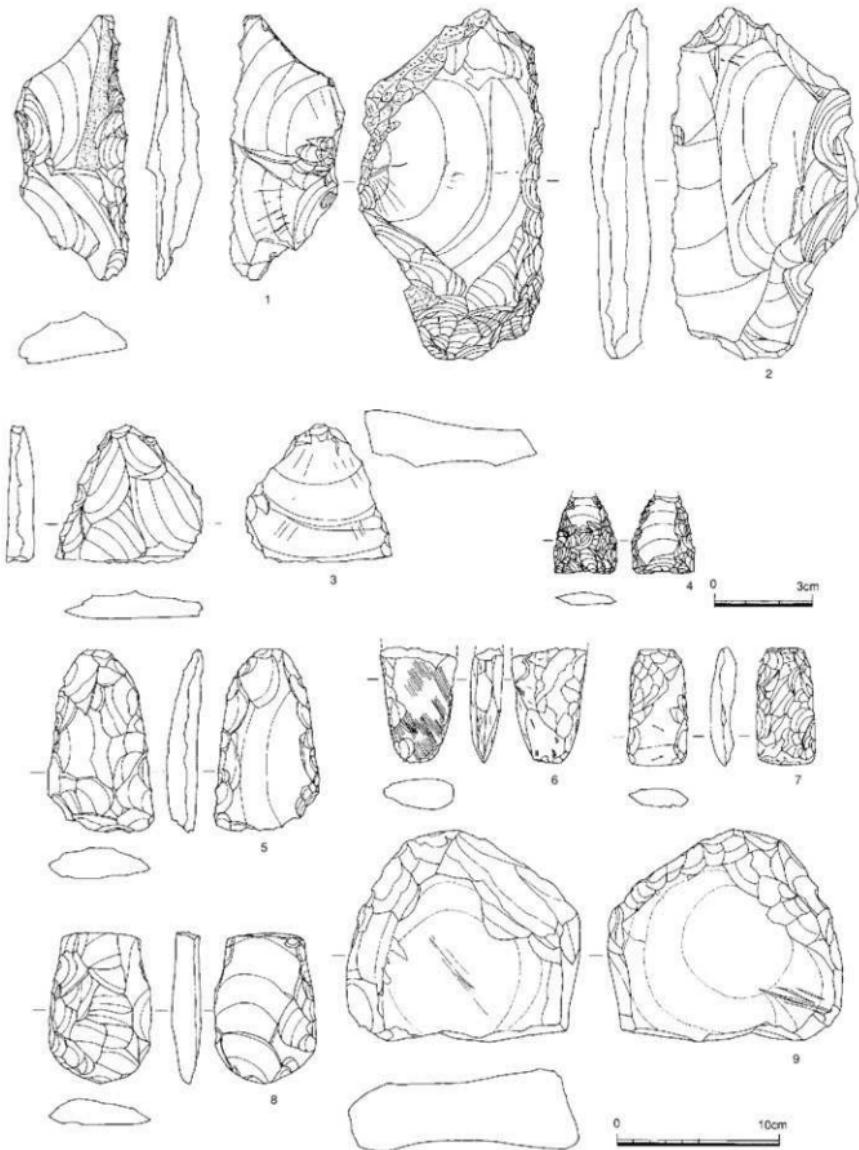


Fig.60 その他の遺物実測図 2 (2/3, 1/3)

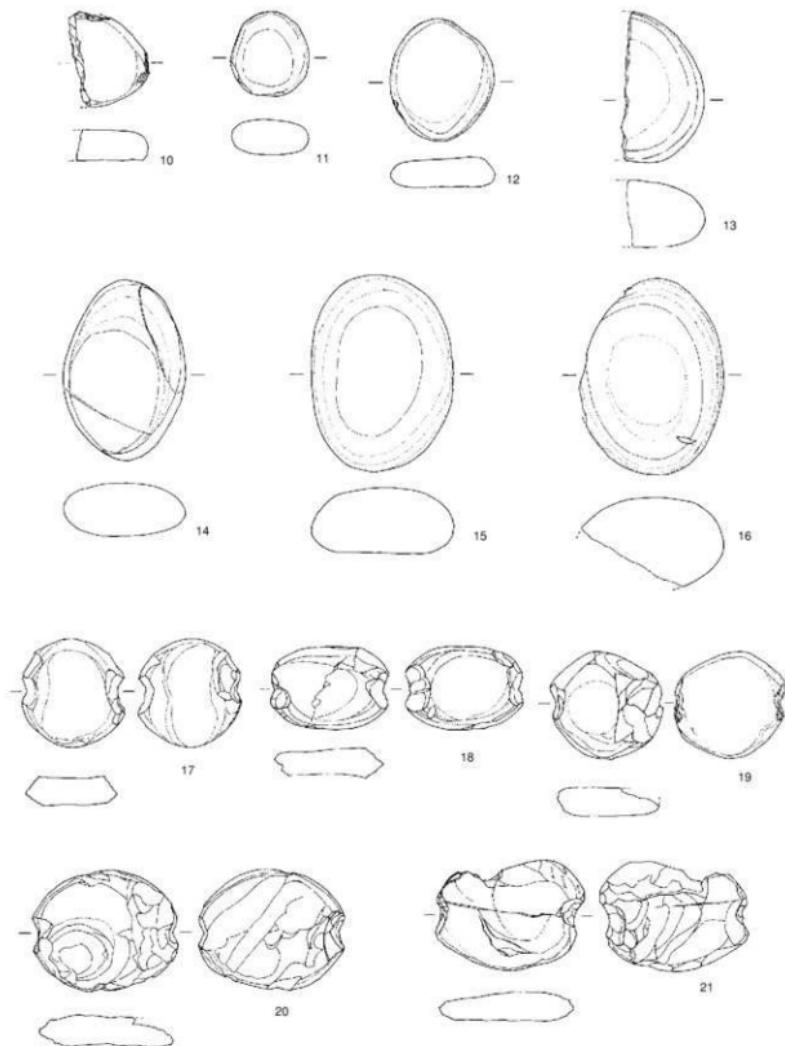


Fig.61 その他の遺物実測図 3 (1/3)



## 6) 後期旧石器～縄文時代草創期の石器類

後期旧石器～縄文時代草創期の石器類と推定できる資料はほとんどが縄文時代早期の遺物包含層から出土した。該期の明確な遺構、包含層は検出できなかった。出土位置はTab.8に示した。

後期旧石器～縄文時代草創期の石器類と推定できる資料の内訳は、ナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器（角錐状石器）、細石刃核、同母核（コアブランク）、削片、剥片、石核、くさび形石器、原石などがある。剥片、石核、くさび形石器、原石は時間、紙数の制約もあり今回は詳述できていないが、本地域の石器生産や石材供給状況を探る上で重要な資料である。所属時期の特定を含め何れ稿を改めて検討されるべきであろう。

**出土石器（Fig.62～64）** 1はナイフ形石器である。切出し形を呈する。調査時に先端を僅かに欠損する。石材は漆黒色不透明黒曜石であり、表面の風化が進んでいる。背面にアバタ状の円礫原石面を残す。横長の不定形剥片を素材とし、二側縁にプランティングを施す。腹背両面に僅かな平坦剥離が認められる。現状で長さ4.6cm、幅2.6cm、厚さ0.8cmである。

2はナイフ形石器である。先端、基部、右側縁の一部を欠損する。石材は黒色半透明黒曜石である。縦長剥片を素材とし、二側縁にプランティングを施す。現状で長さ2.9cm、幅1.6cm、厚さ0.5cmである。

3はナイフ形石器である。小型であり完形品である。縦長剥片を素材とし、二側縁にプランティングを施す。石材は黒色不透明黒曜石である。背面基部側に僅かな自然面が残る。長さ2.6cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmである。

4はナイフ形石器である。小型であり先端部を欠損する。石材は黒色不透明黒曜石である。縦長剥片を素材とし、二側縁にプランティングを施し、腹面基部側に平坦剥離を施す。現状で長さ2.2cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmである。

5は台形石器である。石材は黒色不透明黒曜石である。腹背両面共にポジティブ面で構成される。石核素材の主剥離面を取り込んだものであろう。両側縁と基部に調整剥離がみられる。調整は剥離角が浅い。また先端の刃縁には鋸歯状の微細剥離がみられる。現状で長さ1.9cm、幅1.3cm、厚さ0.5cmである。

6は三稜尖頭器（角錐状石器）である。基部を作り出し剥片尖頭器に類似する形態をもつ完形品である。石材は漆黒色不透明黒曜石であり、風化が強い。背面には平坦な自然面が残り、腰岳産黒曜石に類似する角礫状の原石とみられる。厚みのある横長剥片を素材とし、周縁を粗い剥離で整え、基部のみ入念な調整を施す。先端部にも細かい剥離がみられる。現状で長さ5.7cm、幅2.6cm、厚さ1.2cmである。

7は三稜尖頭器（角錐状石器）の可能性がある。ほぼ完形品である。石材は暗灰色不透明黒曜石である。針尾島産黒曜石に類似する。腹背両面と二次調整剥離面の風化度合いに差異があり、いわゆる二重バティナをなす。縦長剥片を素材とし、両側縁と腹面に粗い調整剥離を施す。側縁の調整はプランティングではなく鋸歯状を呈する。形態から見て古段階のナイフ形石器を再利用して角錐状の石器を形成したと考えられる。現状で長さ5.7cm、幅1.0cm、厚さ0.6cmである。

8は三稜尖頭器（角錐状石器）である。基部を欠損する。石材は漆黒色不透明黒曜石である。主剥離面は最も狭い右側縁に位置し、他の二面に平坦調整を施す。先端には微調整を施す。現状で長さ4.0cm、幅1.6cm、厚さ1.4cmである。

9は三稜尖頭器（角錐状石器）である。ほぼ完形品である。石材は黒色弱透明黒曜石である。厚みのある横長剥片を素材とし、周縁を粗い剥離で整え、基部腹面、稜部に入念な調整を施す。現状で長

さ3.9cm、幅1.8cm、厚さ1.1cmである。

10は細石刃核である。石材は漆黒色不透明黒曜石である。打面～作業面上部を調査時に破損する。右側は円礫面であり、左側のみに入念な石核調整を施す。打面は側面から形成される。細石刃剥離面は4面残る。最終の作業面左側からは側縁の石核調整が行われており、再び母核形成が試みられている。現状で長さ4.6cm、幅3.6cm、厚さ1.5cmである。

11は細石刃核である。打面再生に失敗し、石核上半を欠失する。石材は漆黒色不透明黒曜石である。両面共に周縁から調整され「楔形」を呈する。細石刃剥離面は4面残り、中央が最終である。現状で長さ3.3cm、幅2.8cm、厚さ1.5cmである。

12は細石刃核の下半部破片である。石材は漆黒色不透明黒曜石であり、風化がある。両面共に周縁から調整され「楔形」を呈する。細石刃剥離面は4面残る。現状で長さ1.3cm、幅1.7cm、厚さ1.0cmである。

13は細石刃核である。石材は漆黒色不透明黒曜石であり、風化がある。一面に平坦な自然面が残る。両面共に周縁から調整され「楔形」を呈する。細石刃剥離面は6面残る。現状で長さ3.3cm、幅2.9cm、厚さ1.5cmである。

14は細石刃核の可能性がある。石材は漆黒色不透明黒曜石である。一部に自然面が残る。両面は粗い剥離で構成され、打面は側刃から形成される。細石刃様の剥離面は2面残るが、上部に階段状剥離が発生する。また上下端に打撃による潰れが発生し、最終段階は「くさび形石器」となる。現状で長さ2.3cm、幅2.0cm、厚さ1.4cmである。

15は細石刃核の可能性がある。打面部を破損する。石材は黒灰色不透明黒曜石であり、風化が強い。右側は円礫面のままである。左側は粗い剥離で構成される。細石刃様の剥離面は3面残る。また上下端に打撃による潰れが発生し、最終段階は「くさび形石器」となる。現状で長さ2.5cm、幅2.5cm、厚さ1.2cmである。

16は細石刃核の可能性がある。打面部を破損する。石材は漆黒色不透明黒曜石である。両側下半に「楔形」を呈する調整が残る。細石刃様の剥離面は3面残る。打面は頂部から桶状剥離で失われる。上下端に打撃による潰れが発生し、最終段階は「くさび形石器」となる。現状で長さ2.5cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmである。

17は細石刃核打面形成時の削片である。石材は黒色弱透明黒曜石である。両側には調整剥離があり、背面には先行する削片剥離面が2面ある。本削片は母核に対して三回目の剥離となる「スキースポール」である。現状で長さ3.5cm、幅1.2cm、厚さ1.4cmである。

18は細石刃核の母核（コアプランク）と考えられる。石材は漆黒色不透明黒曜石である。背面には円礫面が大きく残る。腹面の主剥離面は風化が進み、二重バティナを呈する。腹面縁から調整剥離が施され、端面に急角の剥離があり削片剥離の打面形成とみられる。現状で長さ4.0cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmである。

19は細石刃核の母核（コアプランク）と考えられる。石材は漆黒色不透明黒曜石である。背面には円礫面が大きく残る。周囲から調整剥離が施される。既に削片剥離が行われ、打面形成まで達している。現状で長さ3.7cm、幅2.1cm、厚さ1.4cmである。

### まとめ

以上報告した石器類については北部九州の該期石器群の型式や組成に対応すると大きく二時期に区分される。まず、ナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器（角錐状石器）は後期旧石器時代後半期に所

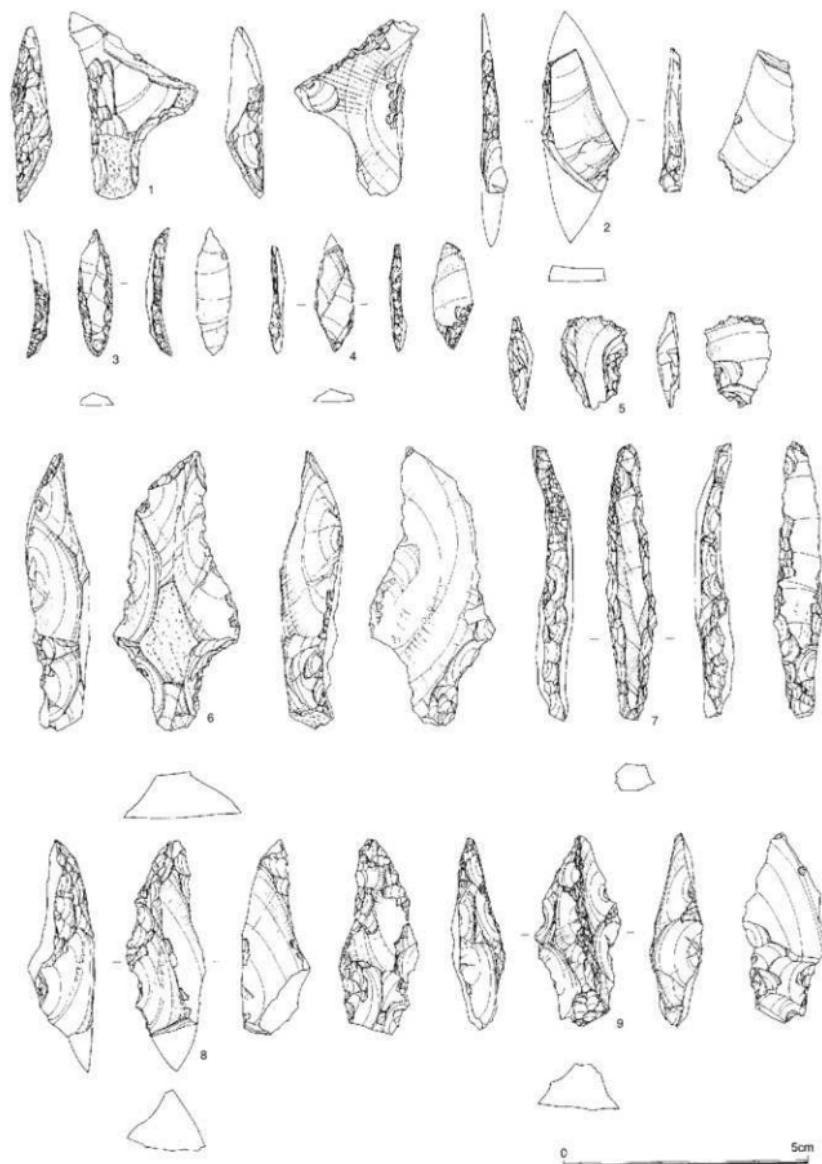


Fig.62 後期旧石器時代～縄文時代草創期の石器実測図（1）（1/1）

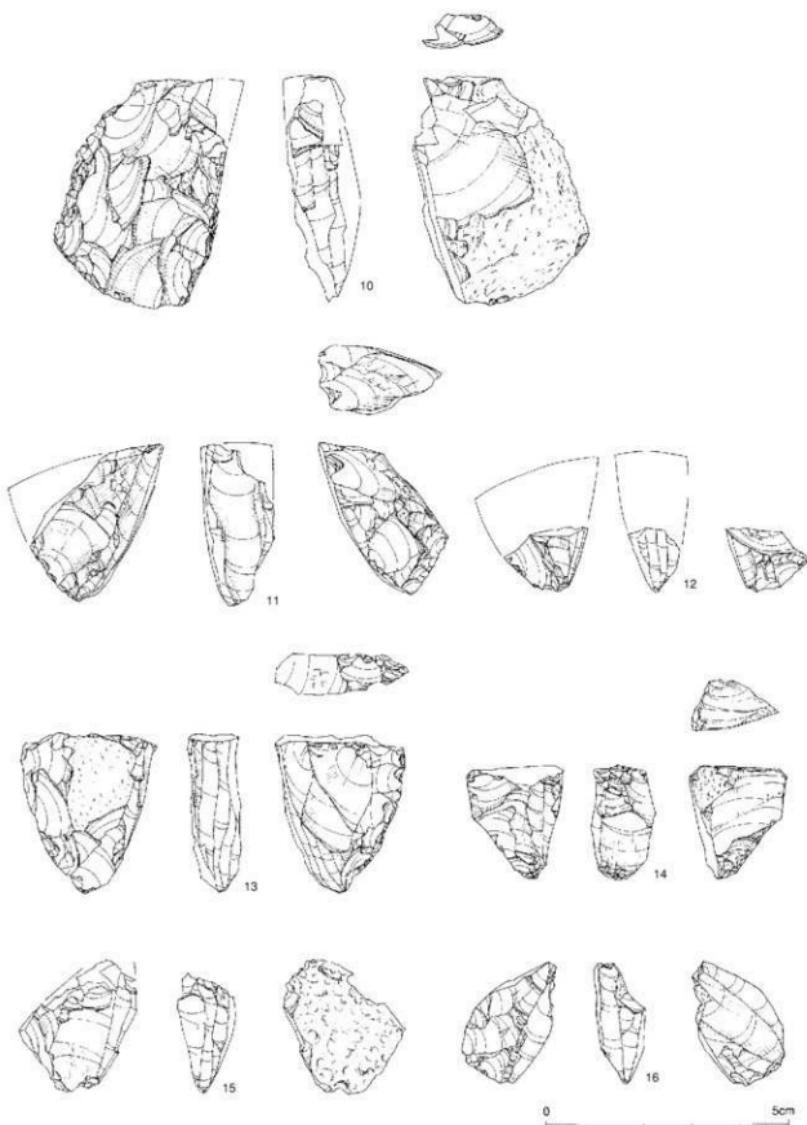


Fig.63 後期旧石器時代～縄文時代草創期の石器実測図 (2) (1/1)

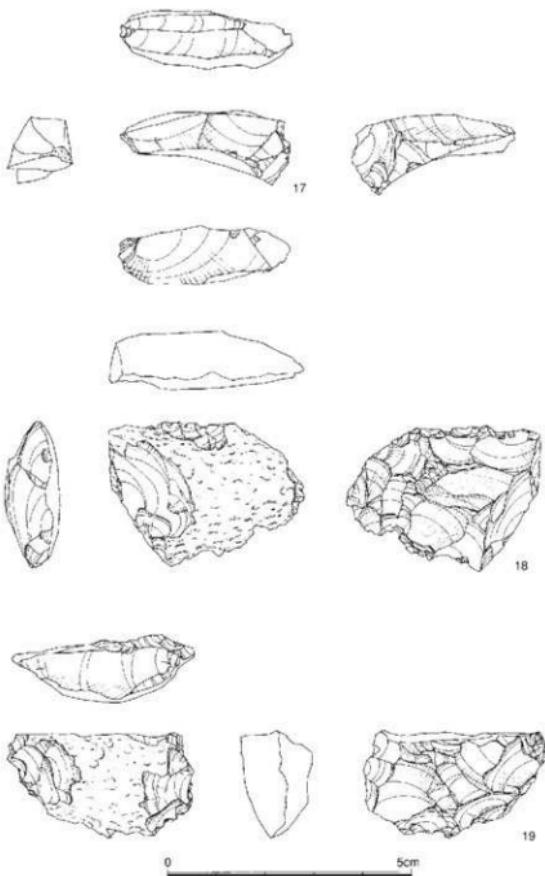


Fig.64 後期旧石器～縄文時代草創期の石器実測図 3 (1/1)

tab.8 後期旧石器～縄文時代草創期の石器一覧

標記番号	因版番号	遺物番号	灰(1～60)	灰(a～c)	層位	出土番号	種類	石材	X座標	Y座標	標高(m)
62	40	1	33 G		15.8m～16.1m		0・ナイフ形石器	OB			
62	40	2	39 J		第3層		0・ナイフ形石器	OB			
62	40	3	32 J		5層	162	ナイフ形石器	OB	8238	1858	14.37
62	40	4	42 L		5.5m～8.5m		0・ナイフ形石器	OB			
62	40	5	24 N		2層		0・細石核	OB	4630	2785	14.88
62	40	6	25 L		6層		0・細石核(角質状石器)	OB			
62	40	7	40 K		2層	54	細石器(角質状石器)	OB	7974	2050	13.72
62	40	8	43 M		発生名古屋		0・細石器(角質状石器)	OB			
62	40	9	16 M		G1～30cm		0・細石器(角質状石器)	OB			
62	40	10	29 H		3層	2	細石核	OB	8675	1527	15.68
62	40	11	31 M		5層	34	細石核	OB	8150	2507	13.83
62	40	12	36 G		2層	4	細石核	OB	7090	1295	15.48
62	40	13	27 O		2層	15	細石核	OB	8045	2417	15.48
62	40	14	43 G		5層	5	細石核	OB	8235	1727	12.71
62	40	15	36 H		5層	40	細石器か	OB	7486	1420	14.88
62	40	16	38 I		5層	62	細石器か	OB	7545	1805	14.50
64	45	17	44 K		1層		1・細石打削産生屑片	OB	8741	2003	13.80
64	45	18	29 I		3層		1・細石核ブランク	OB	5722	1723	15.38
64	45	19	32 I		5層	188	細石核ブランク	OB	6254	1789	14.49

属する。このうち切出し形(1)と小型のナイフ形石器(3・4)はそれ以外の石器類に対しより古段階となることも考えられる。

次に細石刃核、同母核(コアブランク)は縄文時代草創期に所属する資料である。典型的な「楔形」細石刃核と不整形な舟底形細石刃核の組成は本地域では共伴例が多く、単一時期の資料と見ても矛盾はない。なお母核と削片剥離に関わる資料があわせて一括出土した例は本地域で少ない。細石刃石器群としては本地域で最も新相に位置づけうる資料と考えている。なお14～16を舟底形細石刃核から「くさび形石器」へ展開した資料としたが、なお問題も残る。今後類例を注意して再検討したい。

### 3. 弥生時代の遺構・遺物

現況の旧耕作地の表土30~60cmを除去した黄灰色粘質土の面で、弥生時代~古墳時代の遺構・遺物を検出した。標高は13~19mを測る。地形は背後に石ヶ元古墳群が立地する丘陵の南向きの緩斜面あたり、東側に向ても傾斜している。また、斜面の南側は深い谷部となっている。表土を除去した結果、遺構面は開墾のため、段造成がなされていた。また、南側の谷部を大きな段差がついており、全体に遺構の遺存状況は悪くなかった。谷部に向かう南側斜面は比較的削平もなく、弥生土器を多量に含む包含層が検出できた。弥生時代の遺構はこの部分を中心に中期の竪穴住居跡9軒以上、掘立柱建物跡、柱穴等を検出した(Fig.65)。

#### 1) 竪穴住居跡

弥生時代の竪穴住居跡は斜面を造成して掘り込まれている。斜面の下側は削平されている。竪穴住居跡の平面形は方形もしくは隅丸方形を呈する。全体に遺構の遺存状態は悪く、壁溝と主柱穴のみのものが多い。

##### SC002 (Fig.66, PL.21-2)

調査区東側に位置する。SC003に東側を切られる。また、谷側は削平されている。平面形は方形を呈し、残存する遺構の南北長3.5m、東西長5.2m、深さ35cmを測る。壁際には幅約30cmの壁溝が巡る。住居の中央には60×40cmの炉がある。主柱穴2個検出できた。住居の床面には炭化物が見られる。遺物は埋土から弥生土器、黒曜石等が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

##### 出土遺物 (Fig.69 1~10)

1~4の甕は鋤先口縁を呈する。器面に赤色顔料が塗布されたものもある。5は袋状口縁壺で、袋部の下に突帯がつく。10は器台で若干掘開きの形態を呈する。

##### SC003 (Fig.66, PL.21-2)

調査区東側に位置する。SC002を切る。また、谷側は削平されている。平面形は方形を呈し、残存する遺構の南北長2.0m、東西長5.2m、深さ40cmを測る。主柱穴2個検出できた。遺物は埋土から弥生土器、黒曜石等が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

##### 出土遺物 (Fig.69 11~16)

11~16は甕である。11はくの字形を呈する口縁で丸みを帯びた体部となる。12~16は鋤先口縁で、口縁外面に断面三角形やM字形の突帯がつくものがある。16は赤色顔料が塗布される。

##### SC005 (Fig.67, PL.21-3, 22-1)

調査区東側に位置する。SC003を切る。谷側は削平されている。平面形は方形を呈し、残存する遺構の南北長4.2m、東西長9.0m、深さ90cmを測る。壁際には幅約40cmの壁溝が巡る。柱穴は壁寄りに3箇分、谷側に1箇分検出された。谷側の削平を考えると、2×3箇の柱配列と考えられる。柱の配列や規模等から竪穴住居跡ではなく、造成した斜面に造った掘立柱建物の可能性もある。遺構は平面的に西から4分割して掘り下げ、それぞれの区ごとで遺物を取り上げた。埋土中や床面から弥生土器が多数出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

##### 出土遺物 (Fig.71~74 33~87)

33~56は1区、57~77は2区、78~87は3区、88~108は4区から出土した。区毎の遺物の様相に相違はみられない。甕は鋤先口縁を呈し、口縁下に突帯がつくものがある。器面に赤色顔料を施したものもある。壺は広口壺、鋤先口縁を呈する壺、袋状口縁壺がある。器面には赤色顔料を施すものが

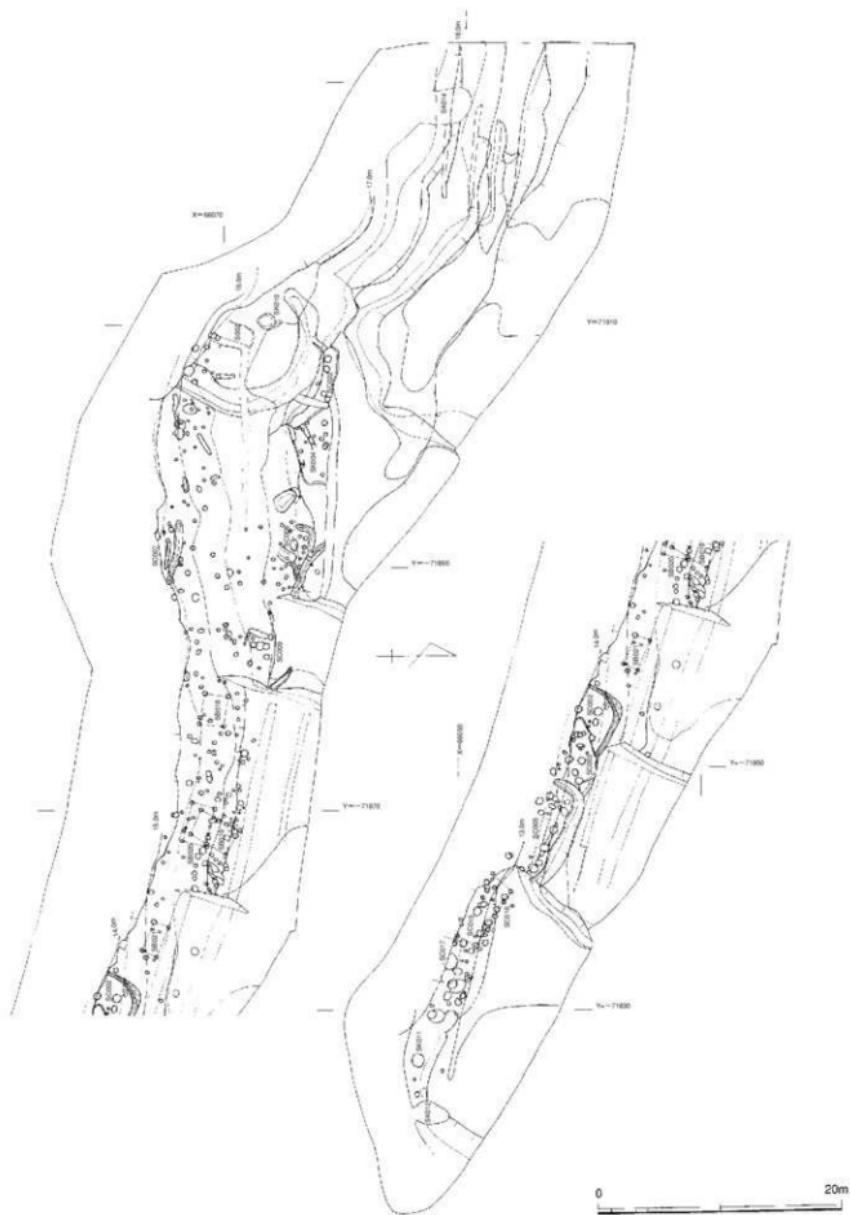
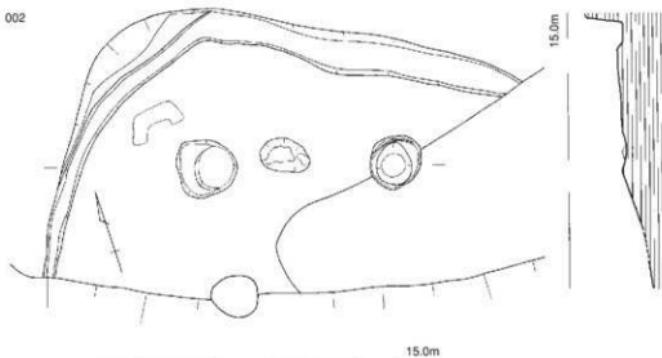


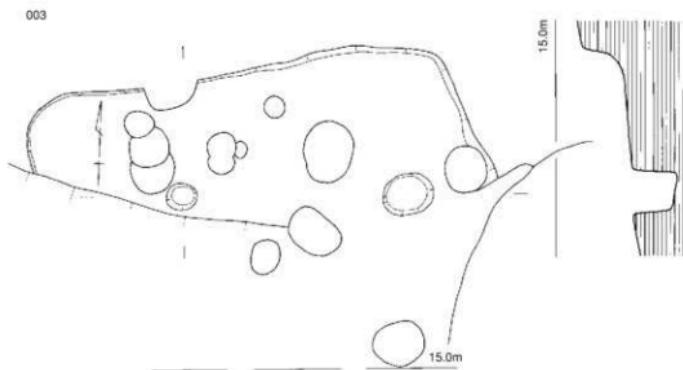
Fig.65 弥生～古墳時代遺構配置図（1/300）

002



15.0m

003



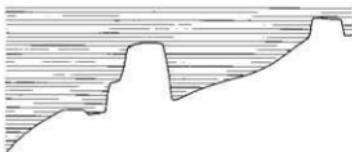
15.0m



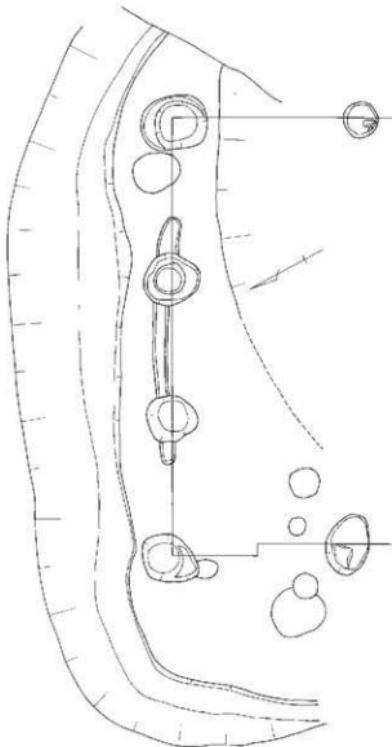
0 2m

Fig.66 竪穴住居跡遺構実測図 1 (1/60)

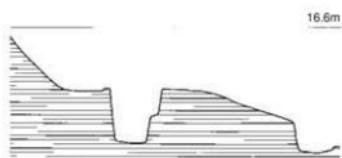
005



16.6m



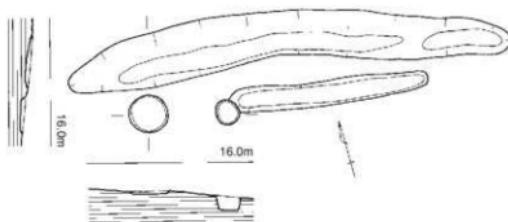
16.6m



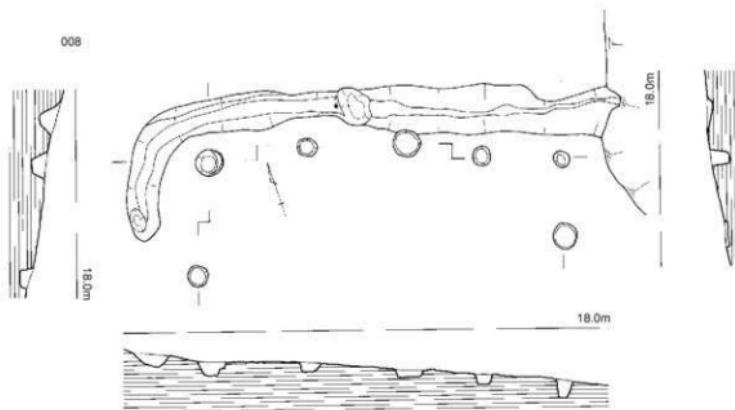
0 2m

Fig.67 竪穴住居跡遺構実測図 2 (1/60)

007



008



022

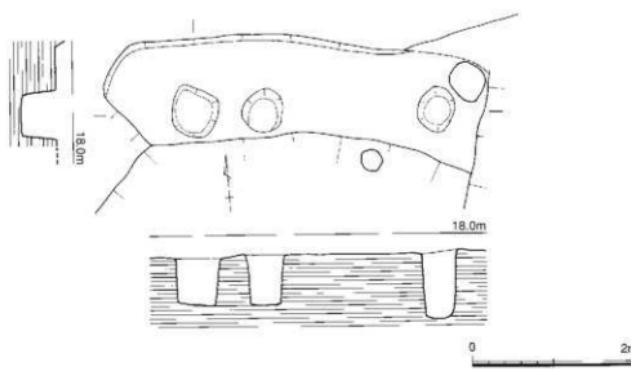


Fig.68 竪穴住居跡遺構実測図 3 (1/60)

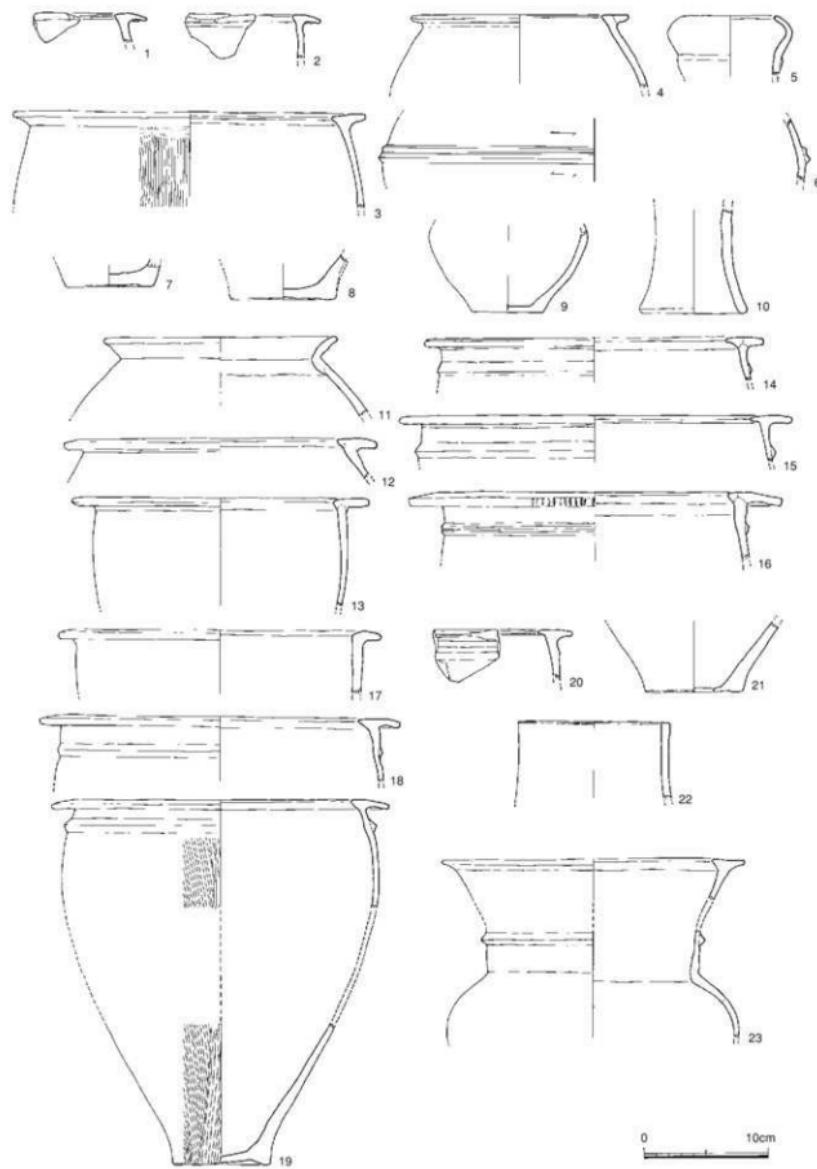


Fig.69 積穴住居跡出土遺物実測図 1 (1/4)

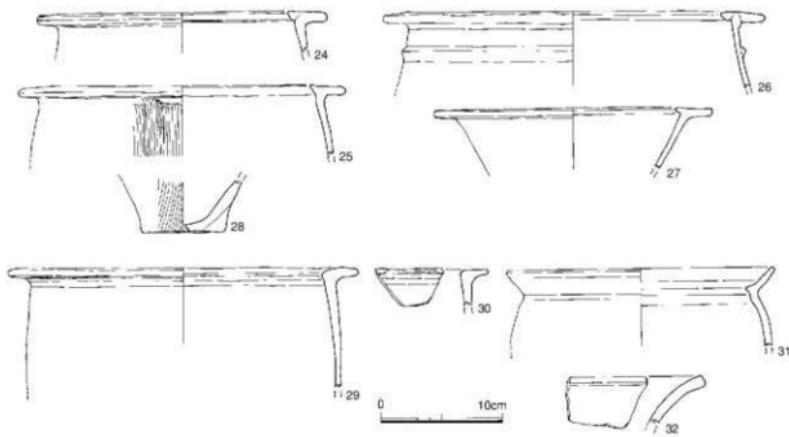


Fig.70 竪穴住居跡出土遺物実測図 2 (1/4)

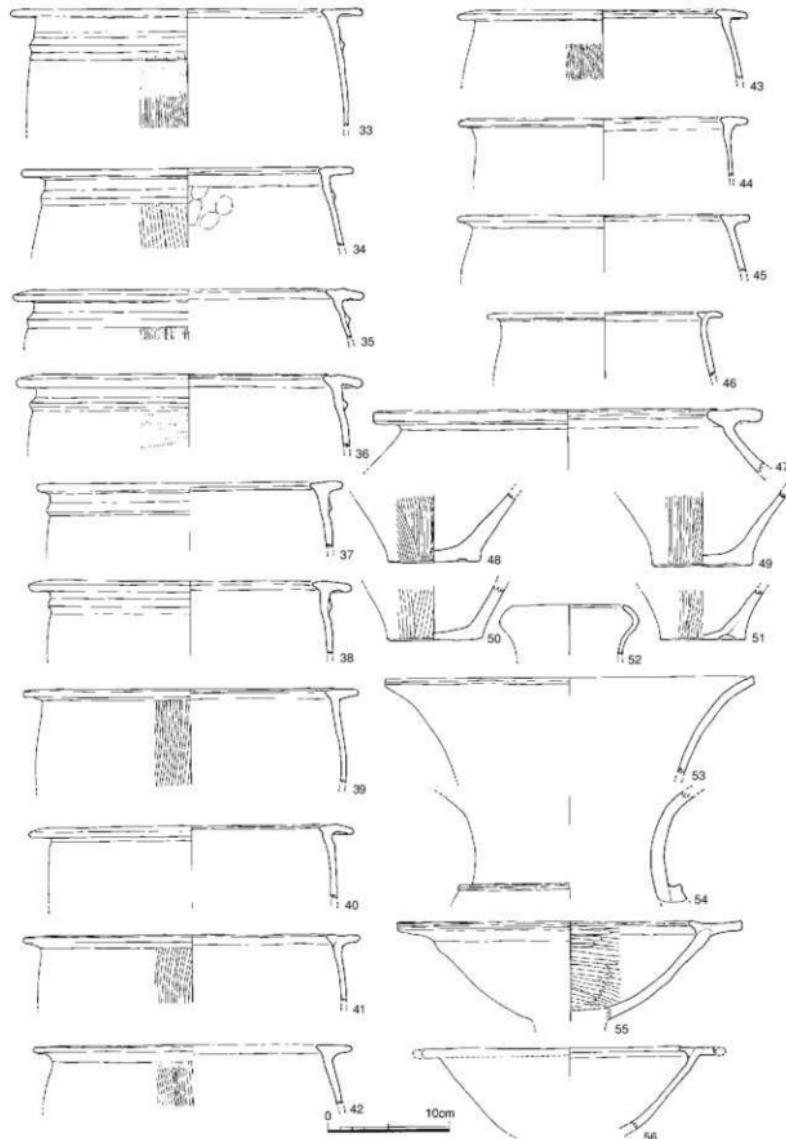


Fig.71 積穴住居跡出土遺物実測図 3 (1/4)

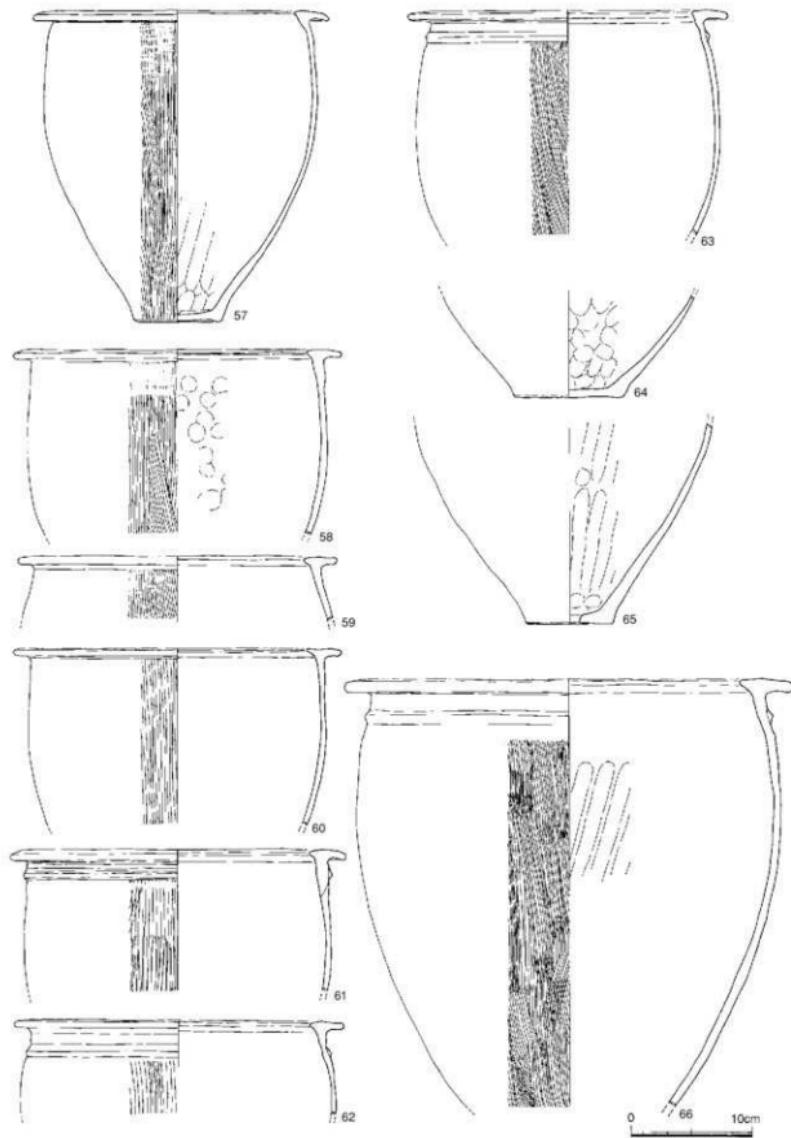


Fig.72 積穴住居跡出土遺物実測図 4 (1/4)

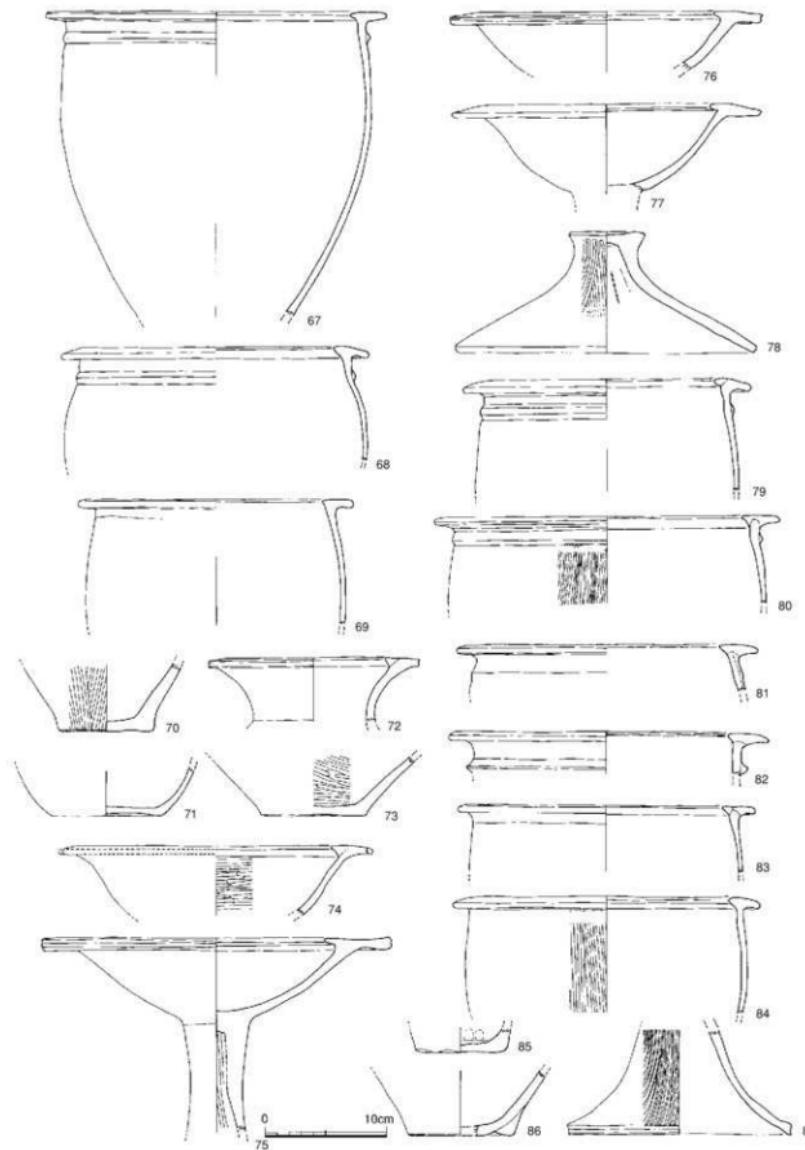


Fig.73 積穴住居跡出土遺物実測図 5 (1/4)

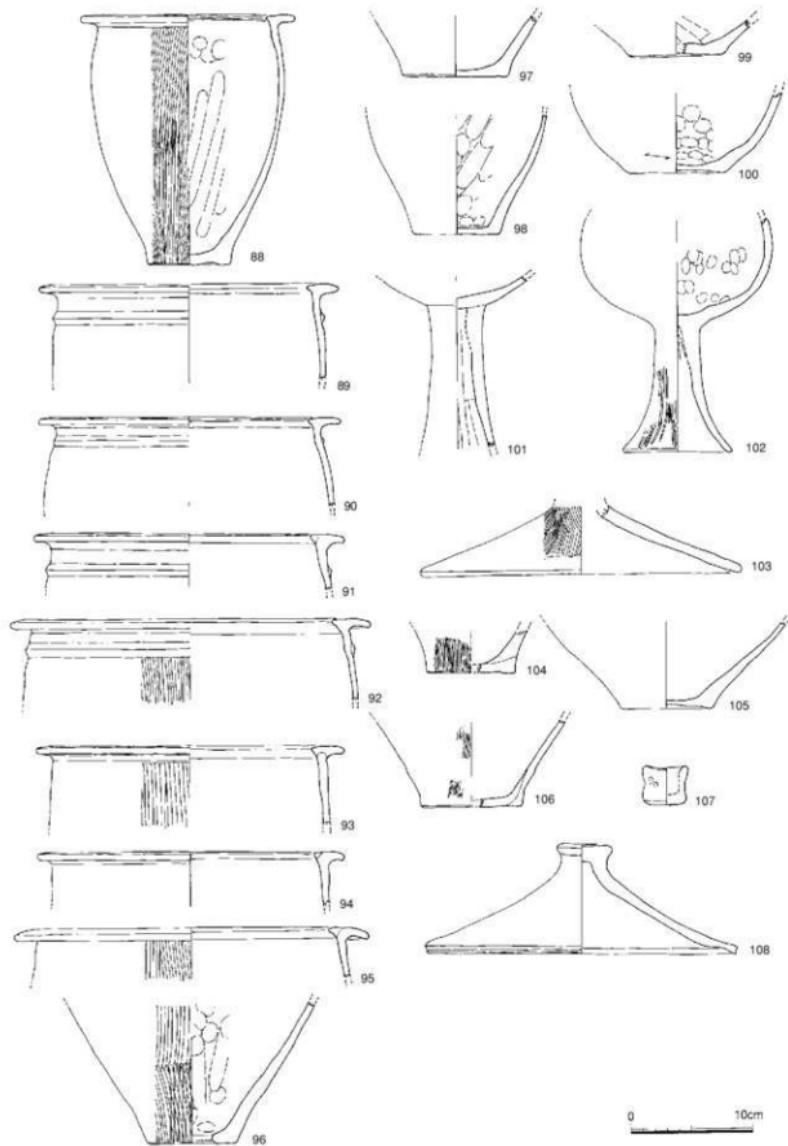


Fig.74 竪穴住居跡出土遺物実測図 6 (1/4)

多い。高坏は鋤先口縁を呈し、柱状の脚が取り付く。102は楕形の坏部を持つ。脚部にははけ目が残る。色調は淡橙色を呈する。78、103、108は蓋である。器形は傘形を呈する。107は手捏ね土器である。平底で、器高3.2cm、口径3.5cmを測る。

#### SC007 (Fig.68)

調査区西側に位置する。削平が著しく、壁溝のみ遺存する。幅60cm、長さ550cm、深さ5cmを測る。柱穴を1個検出した。SC003に東側を切られる。また、谷側は削平されている。遺物は埋土から弥生土器、黒曜石等が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

#### 出土遺物 (Fig.69 17~23)

壺は鋤先口縁を呈する。18~20は口縁下に断面三角形の突帯が巡る。22は直口壺で、ほぼ直立する。23は鋤先口縁の広口壺である。頸部には断面三角形の突帯がつく。

#### SC008 (Fig.68)

調査区西側に位置する。遺構は削平されており、壁溝と柱穴が遺存するのみである。平面形は方形を呈し、残存する壁溝の南北長1.6m、東西長6.1m、深さ20cmを測る。柱穴は壁溝寄りに4間分、谷側に1間分検出した。谷側の削平を考えると、2×4間の柱配列と考えられる。SC005と類似する柱配列である。柱の配列や規模等から竪穴住居跡ではなく、造成した斜面に造った掘立柱建物の可能性もある。遺物は埋土から弥生土器、黒曜石等が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

#### 出土遺物 (Fig.70 24~28)

壺は鋤先口縁である。26は口縁下に断面三角形の突帯がつく。27は鋤先口縁の広口壺である。器面には赤色顔料が塗布される。

#### SC022 (Fig.68)

調査区西側に位置する。M2号墳に切られる。平面形は方形を呈し、残存する遺構の南北長1.2m、東西長4.8m、深さ15cmを測る。床面で柱穴を3個検出した。遺物は埋土から弥生土器、黒曜石等が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

#### 出土遺物 (Fig.70 29~32)

29、30は鋤先口縁を呈する。31はくの字形を呈し、内側に若干突出する。32は広口壺である。

SC015~018は柱穴のみ遺存する。柱配列から掘立柱建物とも考えられるが、SC005、008と同様の柱配列を持つことからここで報告する。

#### SC015 (Fig.75, PL.22-2)

調査区東端に位置する。SC016と重複関係にある。斜面の傾斜に平行して3間分検出した。谷側は削平のため、検出できなかった。長さは4.2mを測る。柱穴は東端とひとつおいた三番目の柱穴は深く、他は浅く掘られている。SC005等と同様の構造と考えられる。遺物は弥生土器等が出土した。時期は出土遺物から弥生時代中期に位置づけられると考える。

#### SC017 (Fig.75, PL.22-2)

調査区東端に位置する。斜面の傾斜に平行して柱穴を2個検出した。柱穴の径は約60cm、深さ約50cmを測る。間隔は2.7mを測る。柱の間に焼土、炭化物がみられる。谷側は削平のため、検出できなかった。SC002等と同様の構造と考えられる。遺物は弥生土器等が出土した。時期は出土遺物から弥生時代中期に位置づけられると考える。

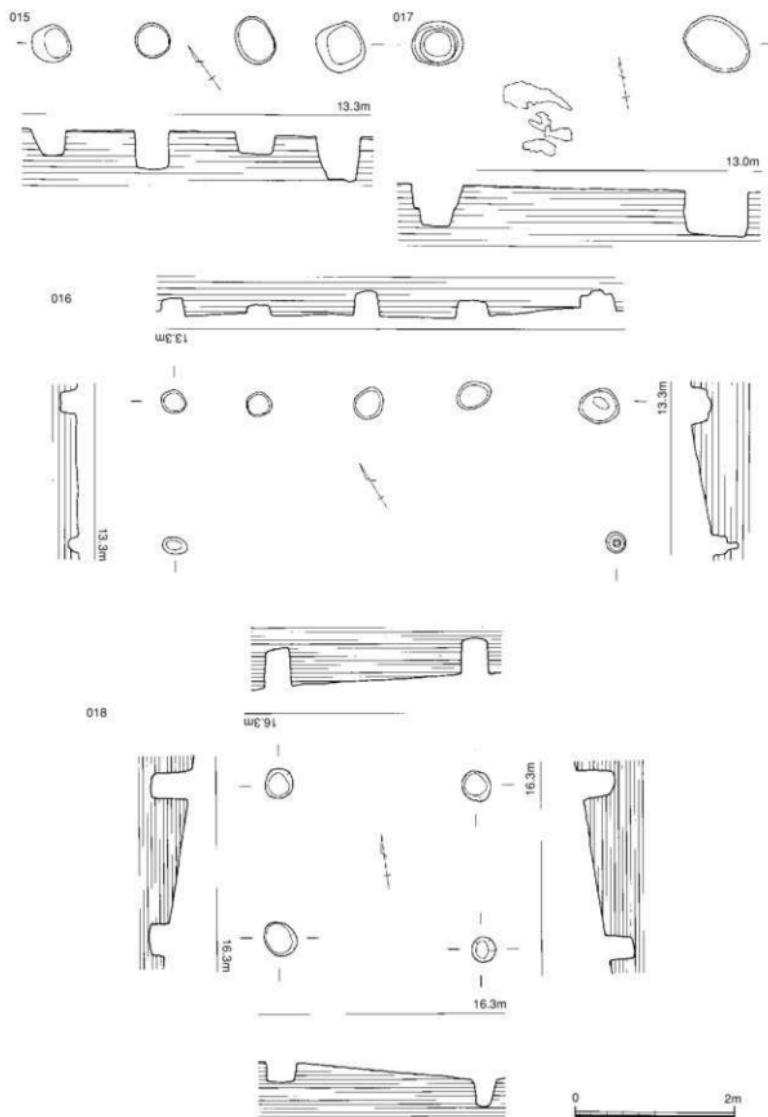


Fig.75 竪穴住居跡遺構実測図 4 (1/60)

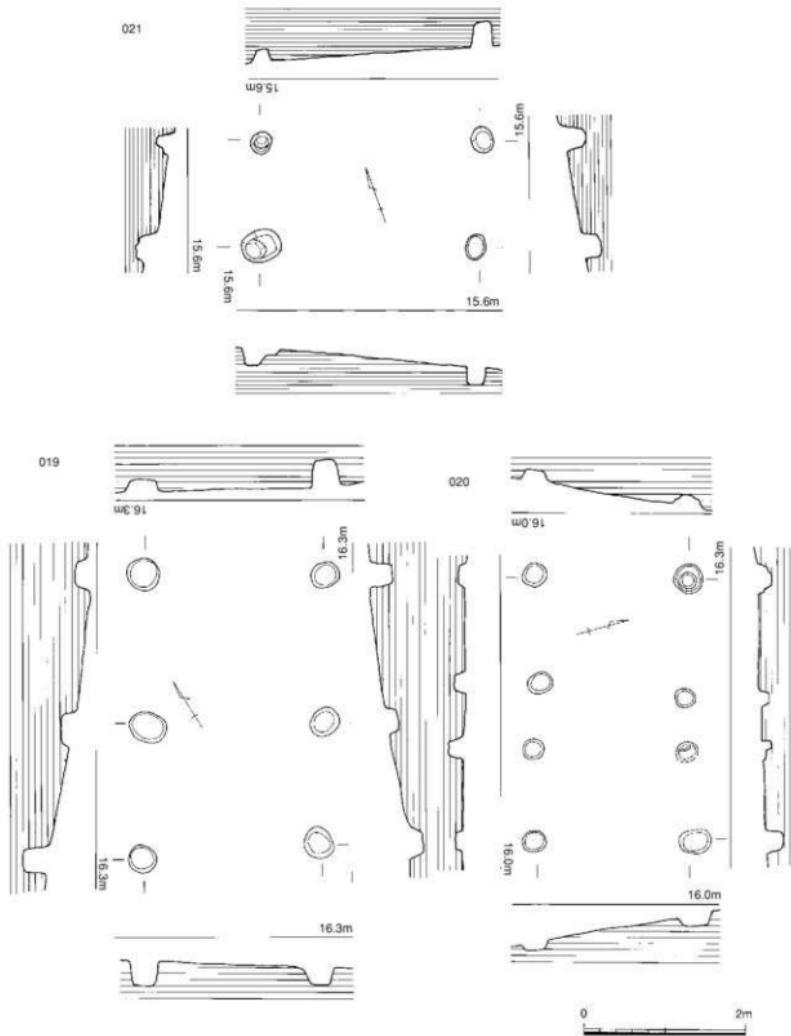


Fig.76 掘立柱建物跡遺構実測図 (1/60)

#### **SC016 (Fig.75、PL.22-1)**

調査区東端に位置する。SC015と重複関係にある。斜面の傾斜に平行して4間分、谷側に1間分検出した。2×4間の構造を持つと考えられる。長軸長5.7m、短軸長2.0mを測る。柱穴は両端と中央の柱穴が深く、その間の柱穴が若干浅く掘られている。柱穴の径は20~30cm、深さ10~30cmを測る。SC008と同様の構造と考えられる。遺物は弥生土器等が出土した。時期は出土遺物から弥生時代中期に位置づけられると考える。

#### **SC018 (Fig.75、PL.23-1)**

調査区中央に位置する。柱穴は1×1間分検出した。壁は削平されたと考えられる。東西長2.8m、南北長2.3mを測る。柱穴の径は30~40cm、深さ20~40cmを測る。遺物は弥生土器等が出土した。時期は切り合い関係から弥生時代中期に位置づけられると考える。

### 2) 挖立柱建物

#### **SB021 (Fig.76、PL.23-2)**

調査区中央、SC002等の東側に位置する。1×1間で柱配列は長方形を呈する。柱穴は径20~40cm、深さ20~30cmを測る。規模は東西長2.9m、南北長1.0mを測る。竪穴住居跡の主柱穴の可能性もある。遺物は弥生土器が出土した。時期は出土遺物から弥生時代中期に位置づけられると考える。

#### **SB019 (Fig.76、PL.22-3)**

調査区中央側に位置する1×2間の建物である。桁行は斜面に直行して配置される。柱穴は径30~40cm、深さ30~40cmを測る。規模は梁行の全長3.6m、桁行の全長2.5mを測る。遺物は弥生土器が出土した。

#### **SB020 (Fig.76、PL.22-3)**

調査区中央側に位置する1×3間の建物である。桁行は斜面に対して平行して配置される。柱穴は径20~30cm、深さ10~20cmを測る。規模は梁行の全長2.2m、桁行の全長3.5mを測る。遺物は弥生土器が出土した。

### 3) その他の遺構

#### **SX009 (PL.23-3)**

調査区西側、SC008の東側で検出した土器溜まりである。土器溜まりは径約10mの不整円形を呈し、堆積の厚さ約30cmを測る。明確な掘り方や柱穴は検出できなかったため、土器溜まりとした。土器は西側から1~6区に区分し、上層と下層で分けて取り上げた。上層、下層で大きな時期差は見出せなかった。土器を概観すると、甕、壺、高坏、器台、蓋の機種が見られる。土器は弥生時代中期後半のものがコントナ箱30個分出土した。

#### **出土遺物 (Fig.77~80 109~190)**

109~121は1区上層から出土した。109~111は甕で、鋤先口縁を呈する。110は口縁端部に刻み目を施し、口縁下に突帯を巡らせる。121は筒状の器台である。器壁は厚い。122~128は1区下層から出土した。117~121は甕口縁で、121は内湾していく字形に折れる口縁をもつ。127は高坏の脚部である。器面に赤色顔料を塗布する。128は器台で、裾部は緩やかに広がる。129~135は2区から出土した。131は鋤先口縁の広口壺である。132は鋤先口縁を呈し、丸みを帯びた体部で鉢か。133~135は筒状の器台である。器面には指頭痕がある。器壁は厚い。136~146は3区上層から出土した。136~139は甕口縁で、137はくの字形を呈する。このタイプの口縁は少ない。142は袋状口縁壺の体部と考えられる。

頸部と胴部中位に断面M字形の突帯が巡る。器面には赤色顔料が塗布される。143、144は鋤先口縁の高坏である。145、146は蓋の摘み部分である。147～159は3区下層から出土した。147～156は鋤先口縁の壺である。口縁下に突帯がつくものもある。144は口縁端部に刻み目を施す。158はくの字形口縁の無頭壺である。口縁には円形の孔が穿たれており、蓋がつくものと考えられる。159は傘形の蓋である。160～167は4区から出土した。164は口径が胴部径を上まわらない広口壺である。頸部には断面三角形の突帯が巡る。器面には赤色顔料が塗布される。167は筒状の器台である。器壁は厚いが、受部は裾部に比べ、細くなっている。168～176は5区下層から出土した。175は口径が胴部径を上回らない広口壺である。器面には赤色顔料が塗布される。176はくの字形口縁の無頭壺である。口縁には円形の孔が穿たれる。器面には赤色顔料が塗布される。177～181は6区から出土した。182～190はベルトから出土した。189は器台である。器面には指頭痕が見られる。受部は裾部に比べて細くなっている。

出土した土器は壺は大半が鋤先口縁で、くの字形を呈するものが若干見られる。赤色顔料をほどこしたもののは少ない。壺は広口壺、袋状口縁壺、無頭壺などが見られる。壺には頸部や胴部に突帯を巡らせるものが多い。高坏は鋤先口縁である。器台は粗い成形で、筒状を呈するものである。蓋は傘形で、天井部に摘みがつく。

#### SX014

SX014は調査区前面の谷から分かれて北側に広がる浅い谷状を呈する。深さ約1～2mを測り、埋土は暗褐色粘質土である。埋土中から弥生土器が多量に出土した。遺物は中央で二分し、西側を1区、東側を2区として取り上げた。

#### 出土遺物 (Fig.81、82 191～239)

191～203は1区、204～239は2区から出土した。191～198は壺で、鋤先口縁である。202は広口壺で、頸部に断面台形の突帯がつく。器面には赤色顔料が塗布される。204～216は鋤先口縁の壺である。226は大型の壺で、胴部に2条の断面M字形の突帯が巡る。器面には赤色顔料が塗布される。235、236は高坏で、鋤先口縁である。239は筒状の器台である。

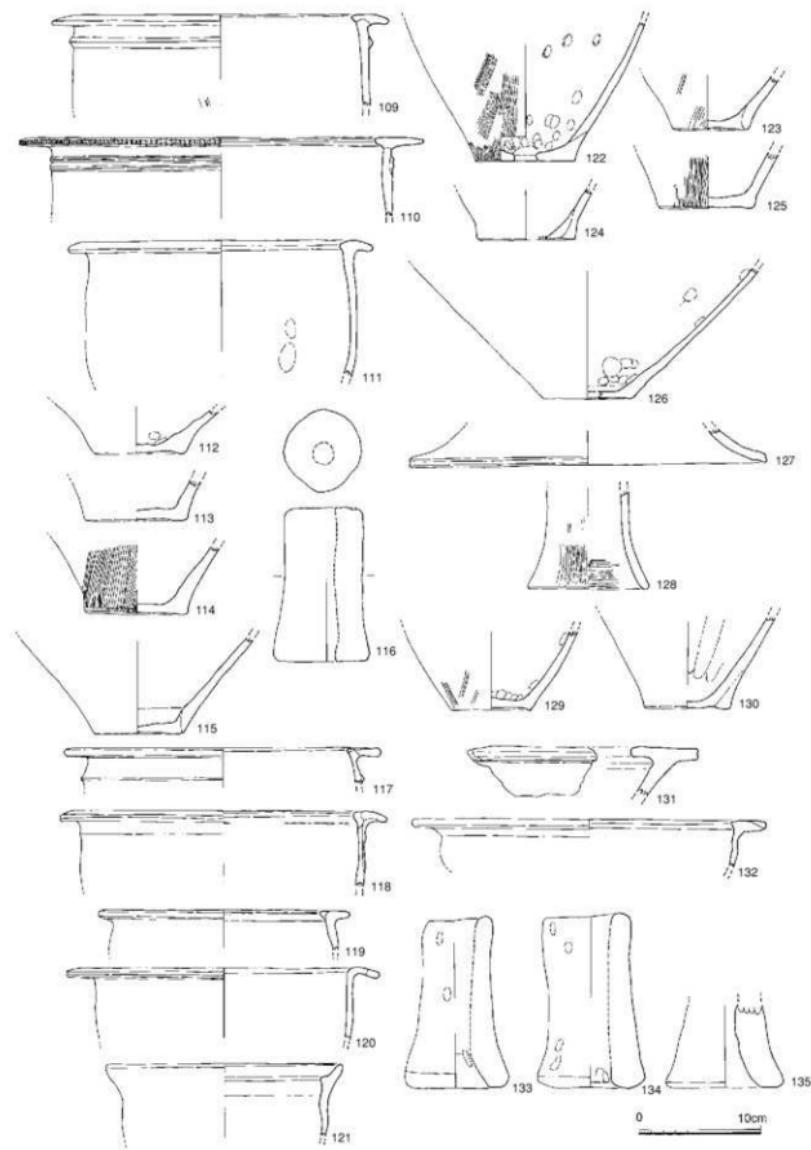


Fig.77 SX009出土遺物実測図 1 (1/4)

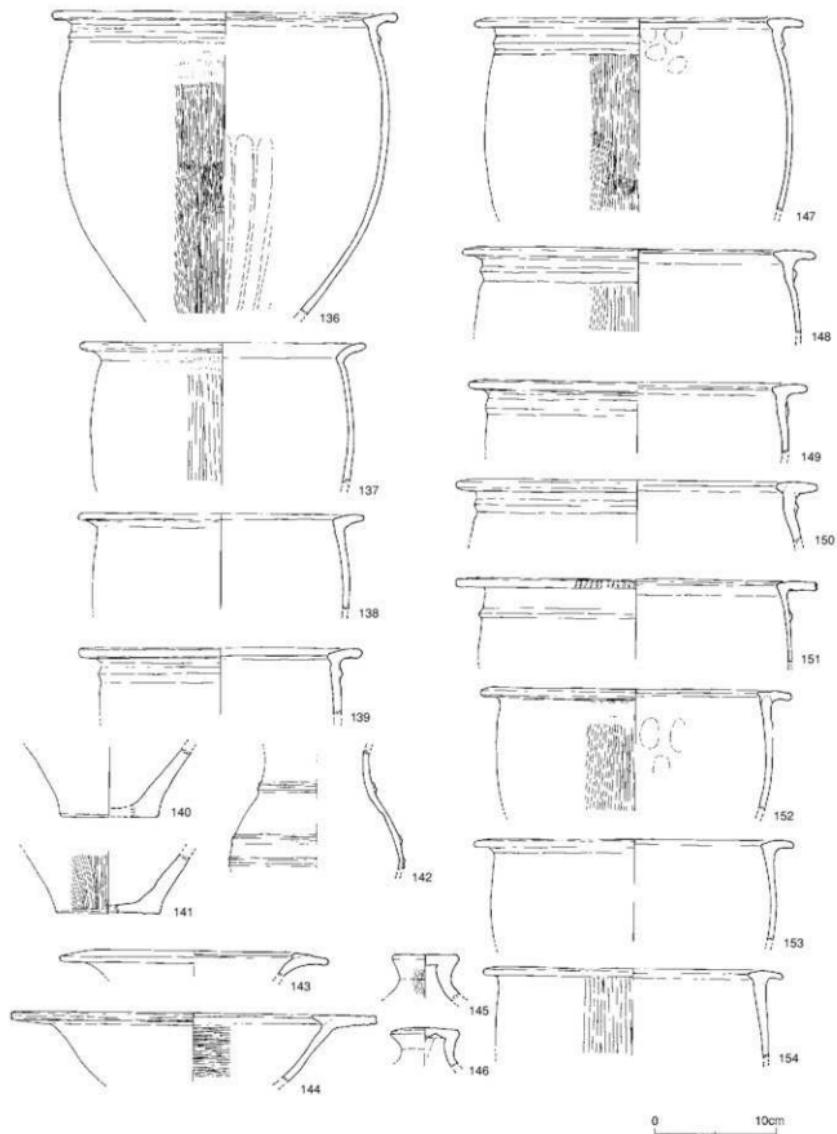


Fig.78 SX009出土遺物実測図 2 (1/4)

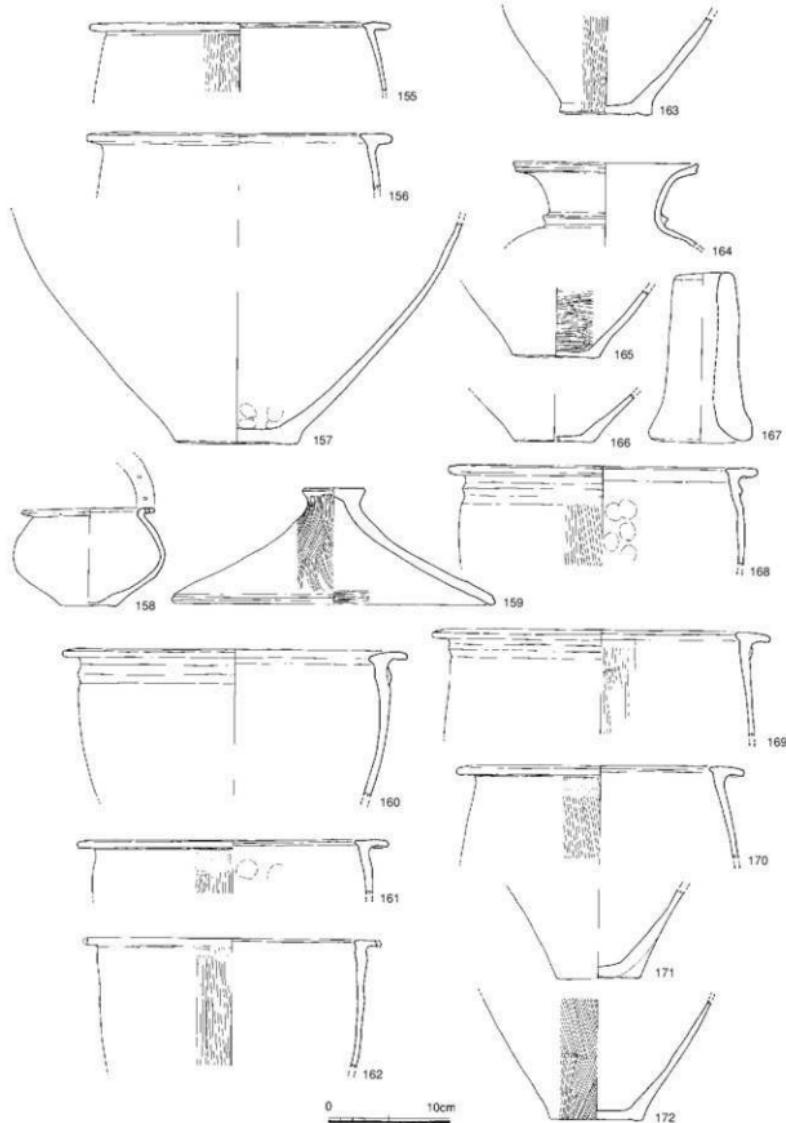


Fig.79 SX009出土遺物実測図 3 (1/4)

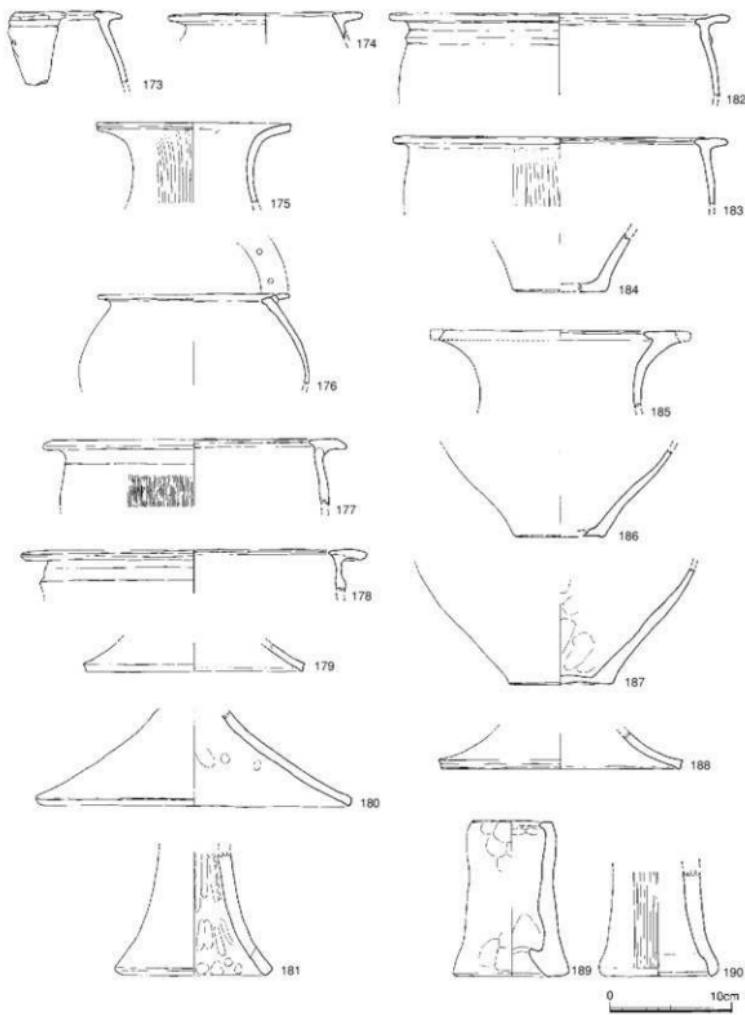


Fig.80 SX009出土遺物実測図 4 (1/4)

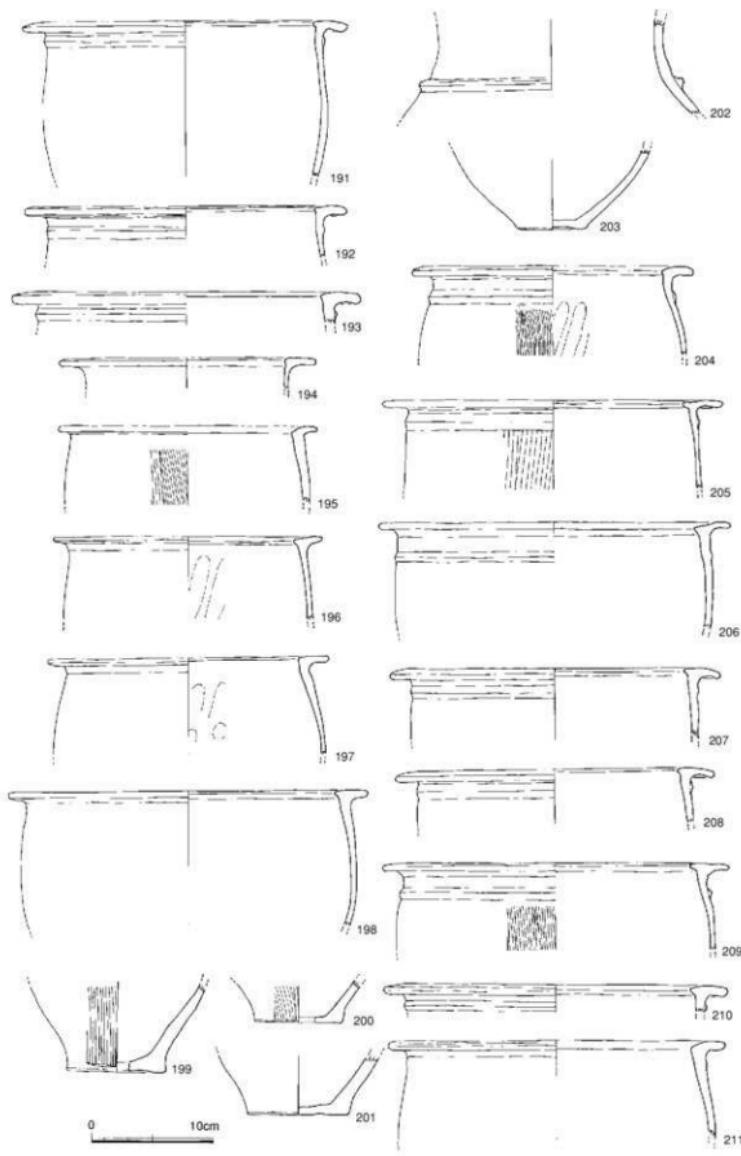


Fig.81 SX014出土遺物実測図 1 (1/4)

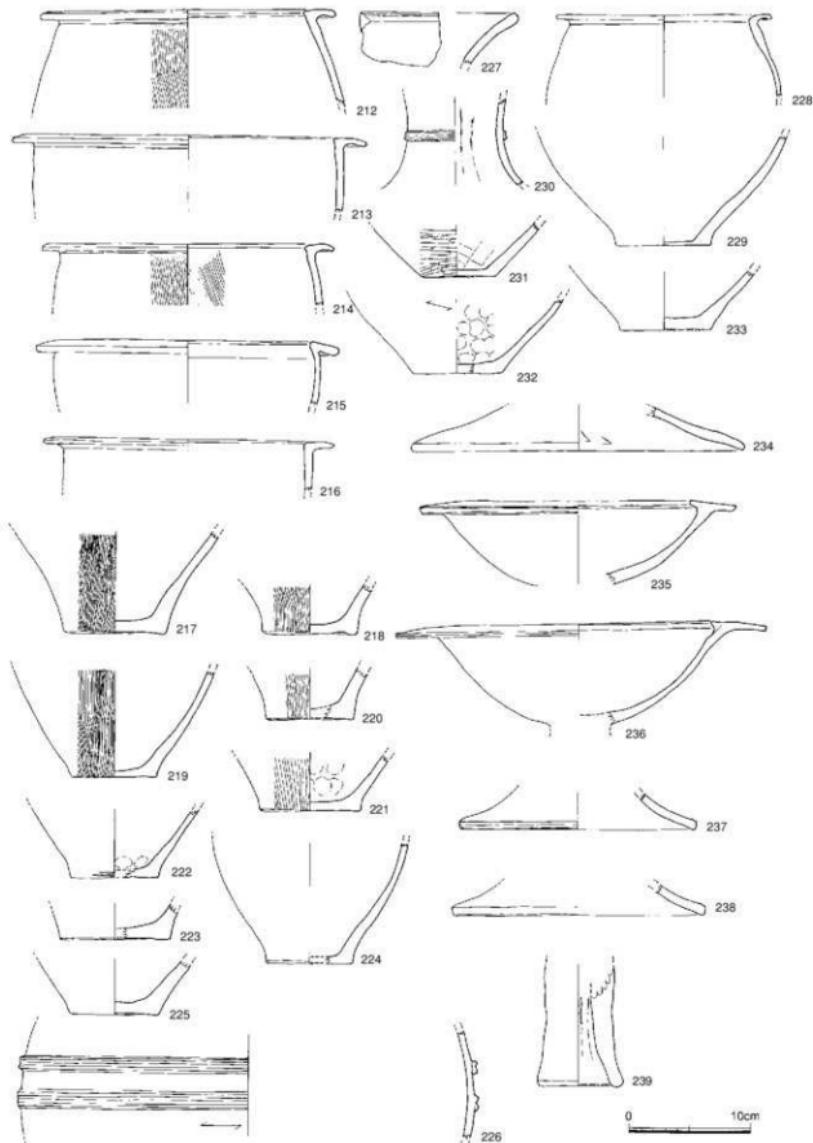


Fig.82 SX014出土遺物実測図 2 (1/4)

## 4. 古墳時代の遺構・遺物

### 1) 元岡古墳群M群2号墳

#### 位置と現状 (Fig.65, PL.24-1)

元岡古墳群M群2号墳は調査区西側の谷に面した斜面に位置する。本墳は表土剥ぎをした後に発見された古墳で調査前の踏査では確認されていなかった。調査地点の北側の丘陵には桑原石ヶ元古墳群が立地する。この古墳群は大半が丘陵の尾根線上に作られており、2号墳の様に低地に近い斜面に造られるものは見られない。そのため、本墳は調査区東側の丘陵上にあるM群に含めた上で、1号墳(第8次調査)に続き、M群2号墳(以下報告では2号墳とする)とした。古墳の標高約17mを測る。畠の開墾のため、墳丘や石室の削平が著しい。

#### 墳丘 (Fig.83, PL.24-2 24-3, 25-1-3)

古墳は南側に傾斜する斜面を造成して造られているが、遺存状況は極めて悪い。谷部に面した部分は大きく削平を受けて、段差がついている。墳丘の盛土も削平でほとんど残っていない。北側に周濠の一部が残るのみである。墳丘径は南側が削平をうけているため、不明瞭だが、周溝の内側で直径約9mを測る。周溝は幅約2m、深さ30~70cmを測る。西側から南側にかけては削平されて残っていない。周溝の北東側で須恵器の大甕、ハソウ、短頸壺等が出土した(Fig.84)。

#### 埋葬施設 (Fig.85, PL.26, 27)

本墳の埋葬施設は主軸をN20°-Eにとり、南側に開口する横穴式石室である。石室は丘陵斜面に対し直行して構築される。石室は腰石が残るのみで、天井石と壁石の上部は抜き取られている。羨道部及び墓道は削平されており、遺存していない。また、玄室の床面には旧耕作地の暗渠排水の土管が埋め込まれている。玄室は現存の奥壁幅1.8m、左壁長2.2m、右壁長2.3mを測る。平面形は長方形を呈する。奥壁は幅40~50cm、高さ40cm程の転石を3石、側壁は幅30~50cmと幅170~180cm、高さ50cmの転石を2石立てて配置し、腰石としている。玄室の現存の高さは約0.3mを測る。床面にはこぶし大の敷石が遺存する。床面の状況から3面確認できた。初葬時はこぶし大の礫を全面に敷いていた。玄室の中央、短軸方向に人頭大の礫を敷き詰めた高まりがある。幅70cm、長さ150cm、高さ10cmを測り、死床と考えられる。最終面は人頭大の礫を全面に敷き詰めている。初葬時の床面の標高16.7m、最終面の標高16.9mを測る。

#### 遺物の出土状況 (Fig.86, PL.26, 27)

玄室内は攪乱をうけていたが、遺物は奥壁側で出土した。特に左隅を中心に須恵器の短頸壺、蓋、土師器の蓋付きの高坏等がまとまった形で出土した。また、最終面の敷石をはがしたところで、鉄鎌、刀子、鎌等を検出した。遺物は最終床面の構築の際にまとめられたものと考えられる。

#### 出土遺物 (Fig.87~88 1~34, PL.46)

1~8、22~34は玄室から、9~21は主に周溝から出土した。

玄室出土遺物 1、2は須恵器である。1は蓋で2の短頸壺とセットになる。口縁端部は内側に傾斜する。天井部には回転ヘラ削りが施される。色調は暗灰色を呈する。器高4.5cm、口径10.7cmを測る。2は短頸壺で、体部にはカキ目を施す。底部には回転ヘラ削りが施される。色調は暗灰色を呈する。器高12.6cm、口径7.5cmを測る。3~7は須恵器を模倣した土師器である。3は器台である。坏部と脚部は欠損している。坏部は口縁は緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。口縁外面には2条の沈線を施し、その上下に斜線文を施す。下半部は回転ヘラ削りを施す。内面には当て具の痕跡が見られる。脚部はラッパ状に開き、裾端部は玉縁状を呈する。色調は黄橙色を呈する。口径26.8cm、

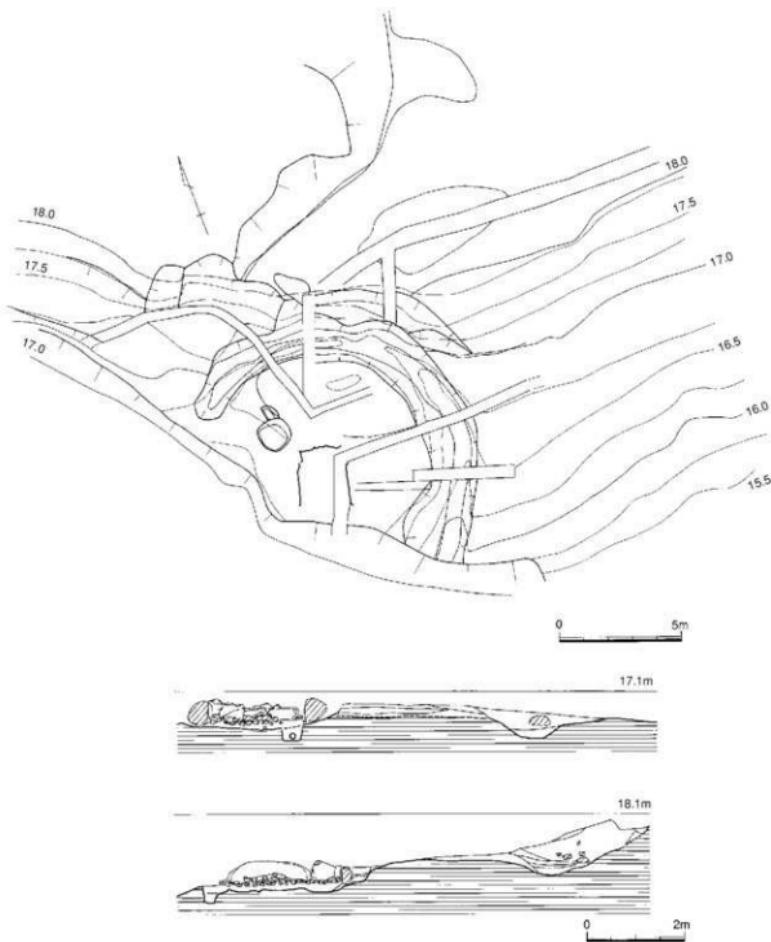


Fig.83 元岡古墳群M群 2号墳墳丘遺存状況測量図 (1/200) 及び土層実測図 (1/100)

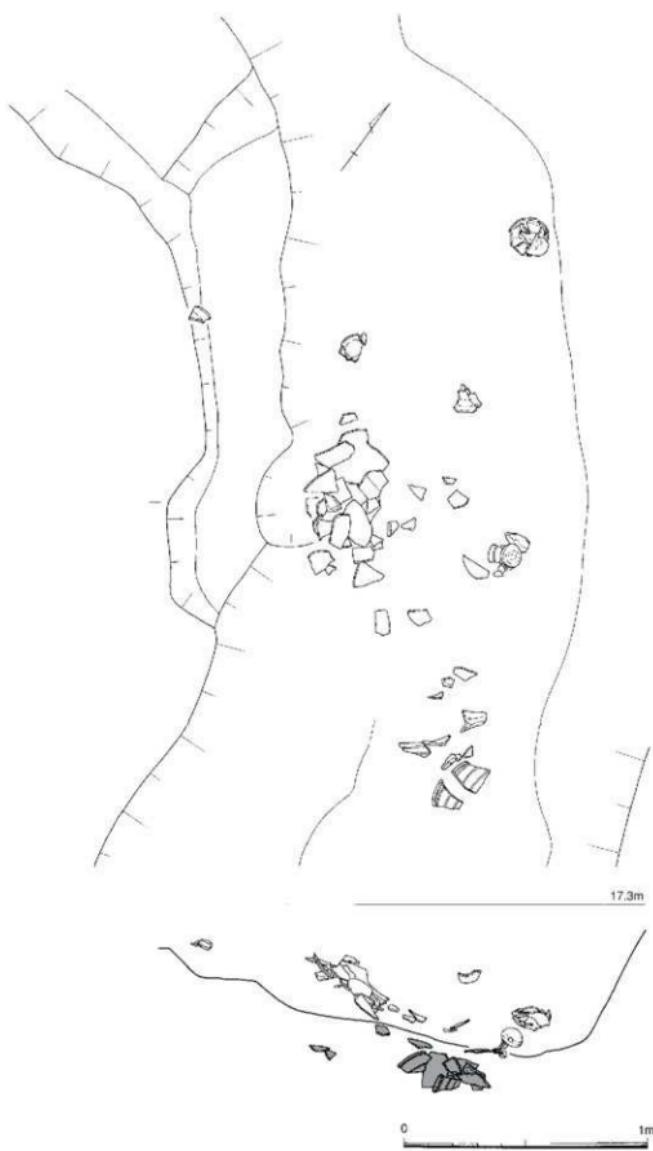
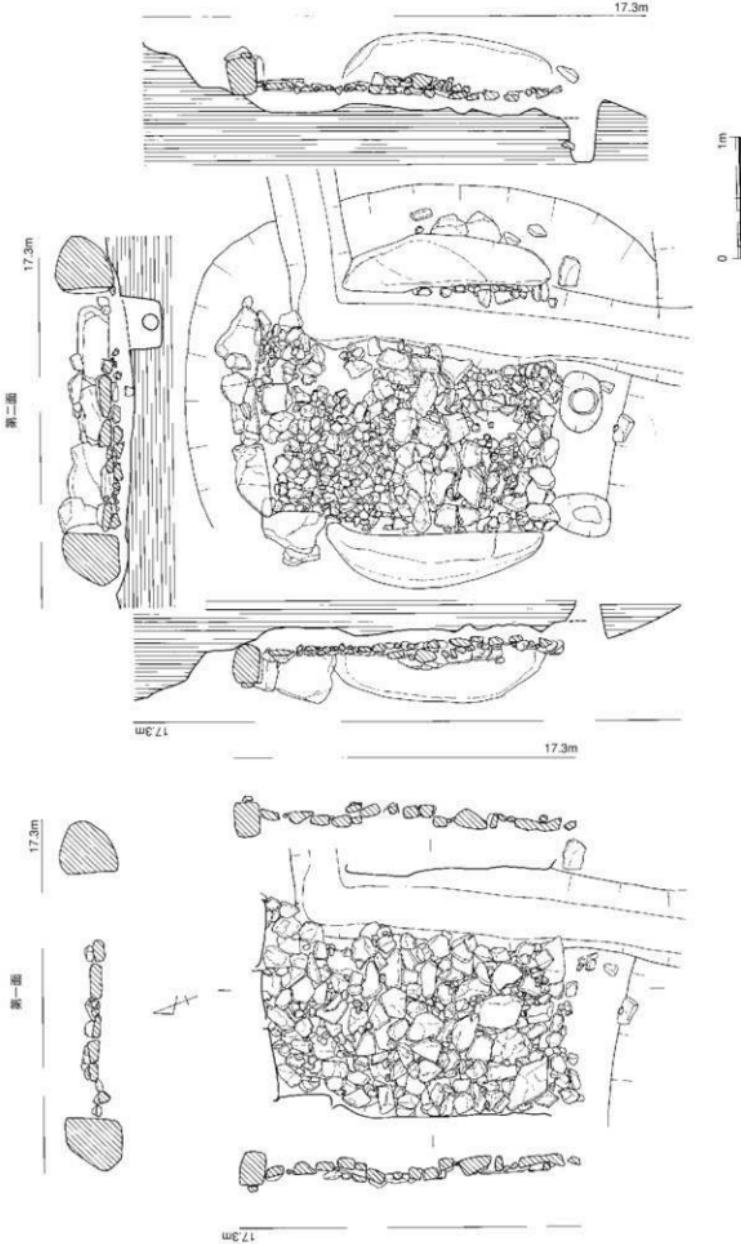


Fig.84 2号墳周溝遺物出土状況実測図1 (1/20)

Fig. 85 石室測量図 (1/40)



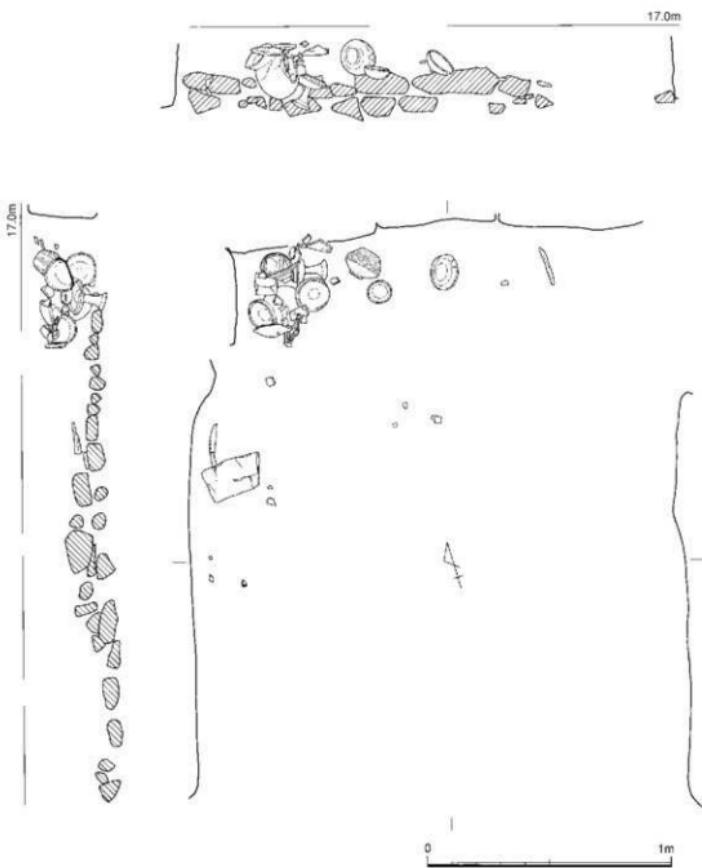


Fig.86 石室遺物出土状況実測図 (1/20)

裾部径19.0cmを測る。4～7は蓋付きの高坏である。4と5、6と7がセットとなる。4は蓋で天井部には回転ヘラ削りを施し、短い筒形の摘みがつく。色調は・黄橙色を呈する。器高6.9cm、口径14.4cmを測る。5は高坏で、坏部は直立する受け部がつく。受け部の内側には沈線が巡る。底部は回転ヘラ削りを施す。脚部は筒形で、裾部付近で折れて広がる。器面には縱方向のナデ調整が施される。色調は黄橙色を呈する。器高13.0cm、口径12.7cm、裾部径9.8cmを測る。6は蓋で天井部には回転ヘラ削りを施し、短い筒形の摘みがつく。色調は黄橙色を呈する。器高7.0cm、口径14.1cmを測る。7は高坏で、坏部は直立する受け部がつく。受け部の内側には沈線が巡る。底部は回転ヘラ削りを施す。脚部は筒形で、裾部付近で折れて広がる。器面には縱方向のナデ調整が施される。色調は黄橙色を呈する。器高12.7cm、口径12.2cm、裾部径9.8cmを測る。8は土師器の壺である。口縁は外湾していく字形に折れる。体部は球形を呈するが、胴部径は口径を上回らない。底部は丸底である。外面は縱方向のハケ目、内面はヘラ削りを施す。色調は黄褐色を呈する。器高18.3cm、口径13.8cmを測る。

22～33は鉄器である。28～30は最終床面で、それ以外はその下から出土した。22～24は長頭鎌である。22は鎌身は三角形で、断面両丸造りである。茎部は断面方形で、鎧被はつかない。矢柄材が残存する。現存長24.0cmを測る。23は鎌身は三角形で、断面両丸造りである。関は直角を為す。茎部は断面方形で、鎧被はつかない。現存長25.3cmを測る。24は鎌身は主頭形で、断面両丸造りである。茎部は断面方形で、鎧被はつかない。矢柄材が残存する。現存長25.2cmを測る。25～30は鎌身部である。26、27は身は三角形で、断面両丸造りである。茎部は断面方形である。28は主頭形で、断面両丸造りである。茎部は断面方形で、鎧被は棘状を呈する。29、30は茎部である。29は緩やかに開き、茎部で窄まる鎧被がつく。31は刀子である。茎部は欠損している。現存長9.8cmを測る。32、33は鎌である。32は曲刃の鎌で、先端は欠損している。現存長12.5cm、幅2.1cmを測る。33は折り返した部分である。34は銀製の耳環である。細身で厚さは0.2cm、径は1.8cmを測る。

**周溝出土遺物** 9～20は須恵器、21は土師器である。9は坏蓋である。口縁と天井部の境に段がつく。口縁端部は内側に傾斜する。色調は灰白色を呈する。口径12.1cmを測る。10は坏身である。受け部は短く内傾して立ち上がる。端部は丸く仕上げる。色調は灰褐色を呈する。口径11.4cmを測る。11は高台付きの坏である。高台は欠損している。色調は・を呈する。12はハソウである。頭部は長く、器高の1/2以上を占める。口縁内側には段がつく。口縁と頭部の外面には櫛描きの波状文を施す。体部中央には二条の沈線に挟まれた部分に櫛描列点文を施す。体部下半にはカキ目を施す。色調は暗灰色を呈する。器高14.2cm、口径12.6cmを測る。13は短頸壺である。体部下半には回転ヘラ削りを施す。色調は暗灰色を呈する。器高14.2cm、口径12.6cmを測る。14は把手付きの壺である。把手部分が残存する。色調は灰色を呈する。15は提瓶の体部で外面にはカキ目を施す。色調は青灰色を呈する。16～18は小型の壺である。16は玉縁状の口縁である。頭部にはカキ目を施す。色調は灰色を呈する。口径17.0cmを測る。17は口縁端部に凹線が巡る。体部にはカキ目を施す。色調は灰色を呈する。口径17.0cmを測る。18は玉縁状の口縁である。頭部にはカキ目を施す。色調は暗灰色を呈する。器高13.2cm、口径11.6cmを測る。19は大壺である。口縁は玉縁状を呈し、頭部には沈線で区分された部分に櫛描波状文を施す。体部は歪んでいる。色調は灰色を呈する。口径43.8cmを測る。20は壺である。口縁は玉縁状を呈する。色調は灰色を呈する。口径26.4cmを測る。21は土師器碗である。外面には粗いミガキが施される。器高4.9cm、口径12.4cmを測る。

2号墳は谷部に面した斜面に単独で造られており、本遺跡群の古墳群の立地の在り方と異なる様相が見られる。出土遺物では石室から須恵器模倣の土師器が出土した点は注目される。時期は石室や周溝から出土した遺物などから6世紀前半から中ごろに築造されたものと考えられる。

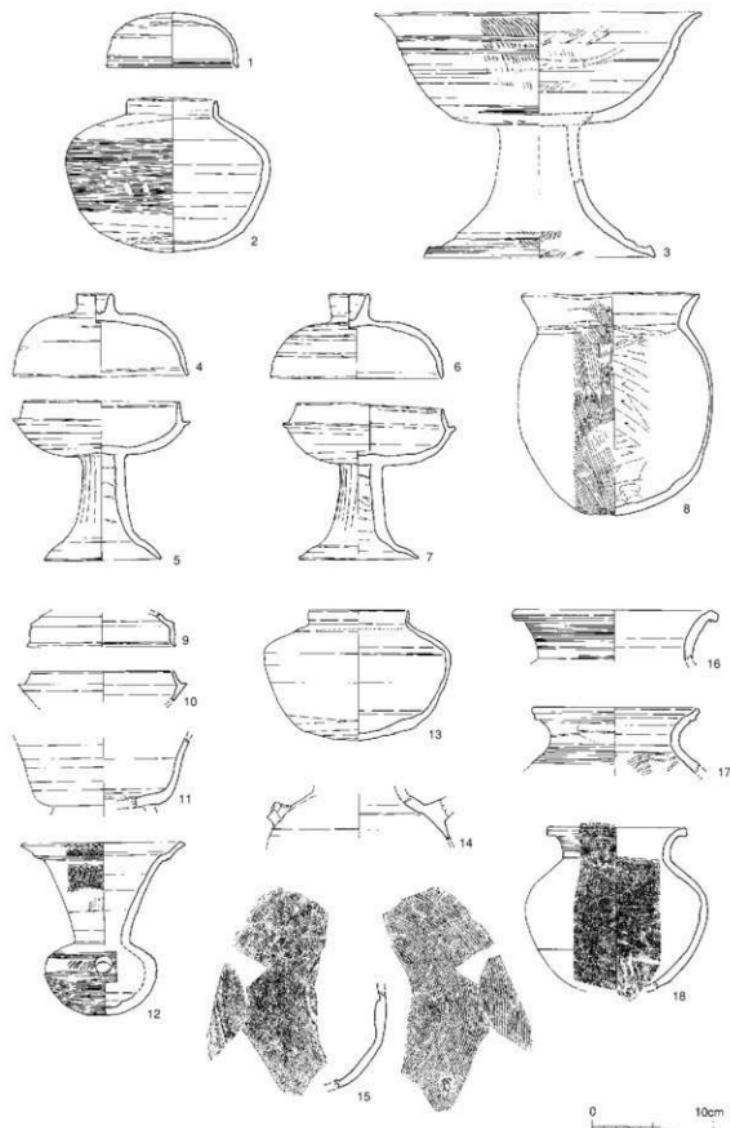


Fig.87 石室及び墳丘出土遺物実測図 1 (1/4)

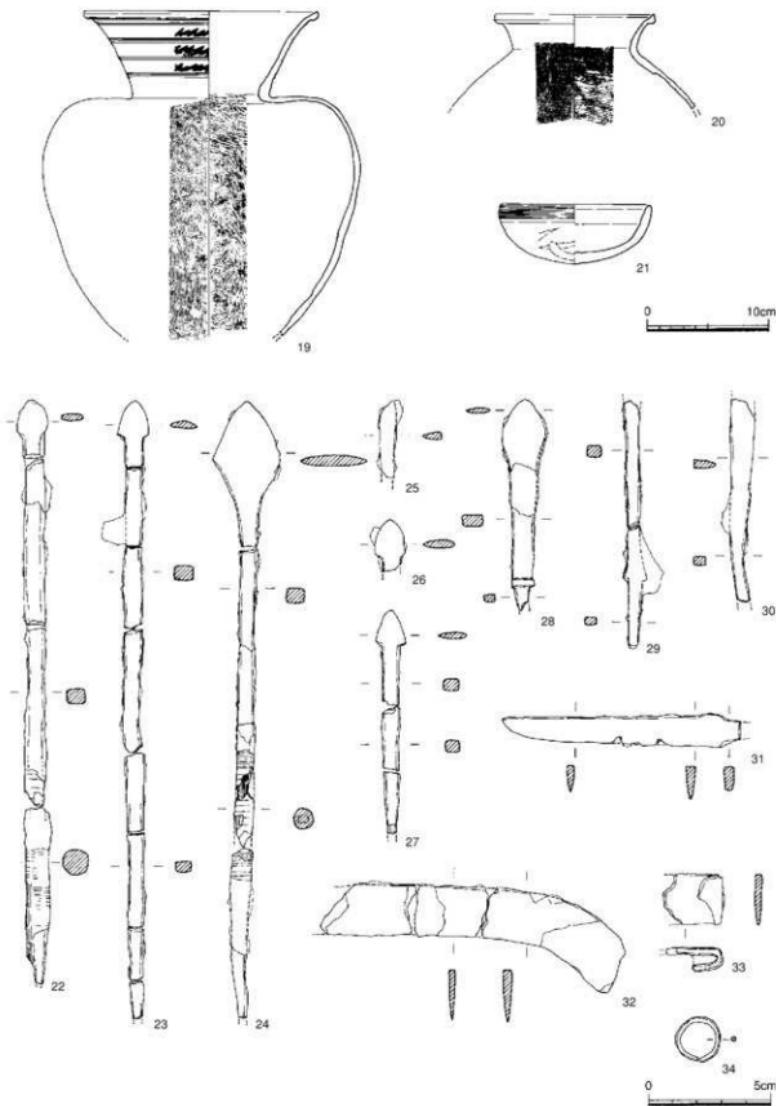


Fig.88 石室及び墳丘出土遺物実測図 2 (1/4, 1/2)

## 5. その他の遺構・遺物

ここでは前節で報告した遺構以外の遺構・遺物について触れる。

### SX010 (Fig.89)

SX010は2号墳の石室の西側で検出した。隅丸方形を呈し、長さ125cm、幅125cmを測る。埋土は青灰色粘質土で、深さ20cmを測る。遺構の在り方から埴丘が削平された後に掘り込まれた遺構と考えられる。埴丘に掘り込まれていたと考えられる。埋土からは弥生土器、土師器片と共に、犬形土製品が出土した。

### 犬形土製品 (Fig.94)

1は犬を模倣した土製品である。前足の一方が欠損しているが、ほぼ完形である。頭の部分は刺突目、鼻、口等が表現される。尻尾は短く、上を向いている。色調は灰白色である。体長5.9cm、高さ3.8cm、幅2.5cmを測る。時期は特定できないが、古墳時代以降のものと考えられる。

### 包含層出土遺物 (Fig.91~95)

弥生～古墳時代の遺構の検出面では谷部に面した斜面に土器、石器を多く含む包含層が見られた。この包含層は2号墳の東側から調査区東端で検出でき、西から8区分して掘り下げを行った。

### 土器 (Fig.91~93)

土器は大半が弥生土器であるが、3区～4区にかけて奈良時代の須恵器、土師器などが出土している。該期の遺構は調査では該期の遺構は確認できなかった。

1～9は1区北側上層で出土した弥生土器である。壺、広口壺、無頸壺などがある。10～18は1、2区で出土した。8～17は弥生土器である。18は土師器壺である。外面には平行叩き、内面は当て具痕が残る。19～30は3区で出土した。19～26は弥生土器である。27は須恵器壺蓋である。天井部は欠損している。28は高台付の壺である。29、30は移動式の竈である。30は底部分である。31～34は4区で出土した。31は須恵器壺蓋である。天井部には扁平な宝珠摘みがつく。32は高台付の壺である。33は壺蓋で、内面にはかえりがつく。34は弥生土器で、無頸壺の壺蓋である。円形の穴が穿たれる。器面には赤色顔料が塗布される。35～43は7区で出土した弥生土器である。44～47は8区で出土した弥生土器である。

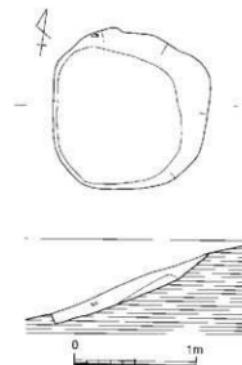


Fig.89 SX010遺構実測図 (1/40)

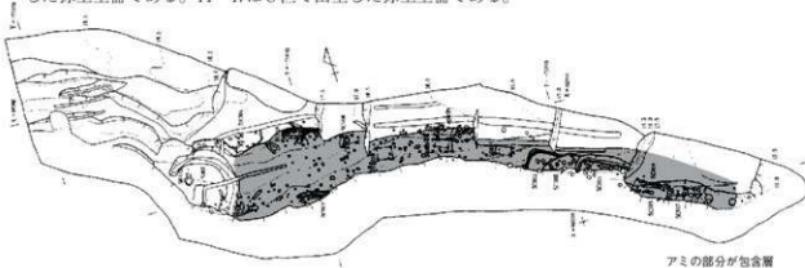


Fig.90 包含層位置図 (1/800)

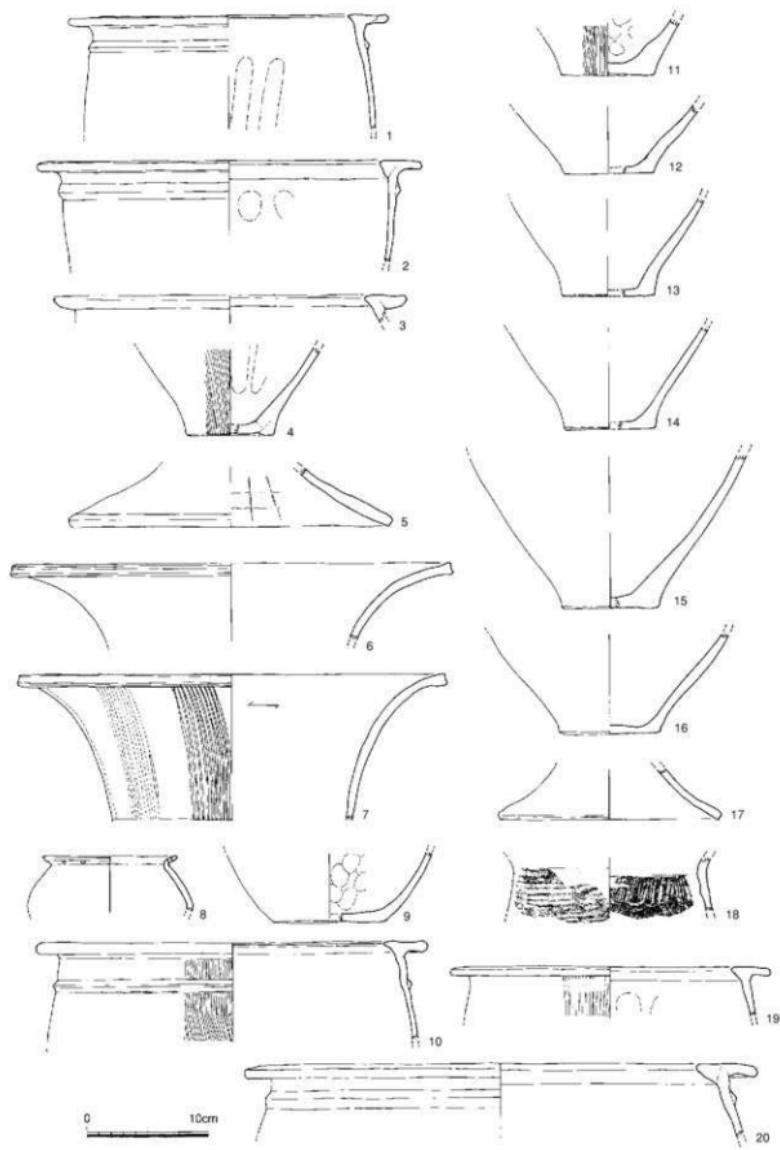


Fig.91 包含層出土土器実測図 1 (1/4)

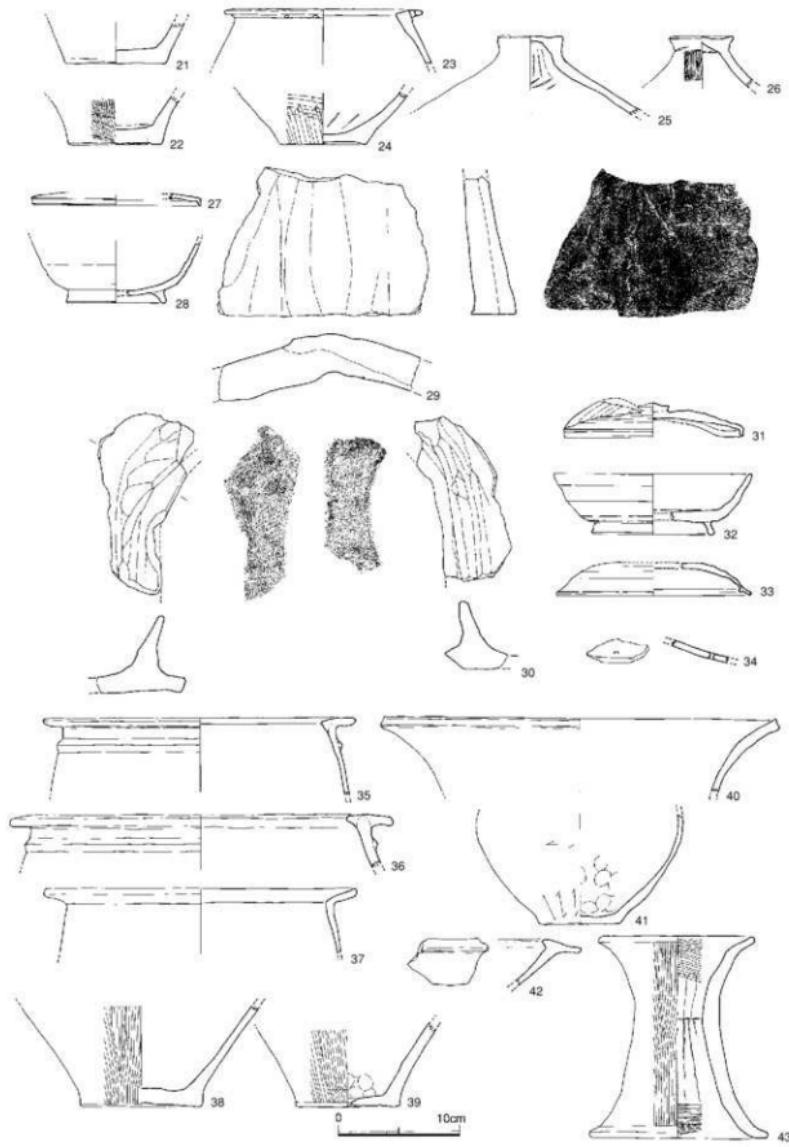


Fig.92 包含層出土土器実測図 2 (1/4)

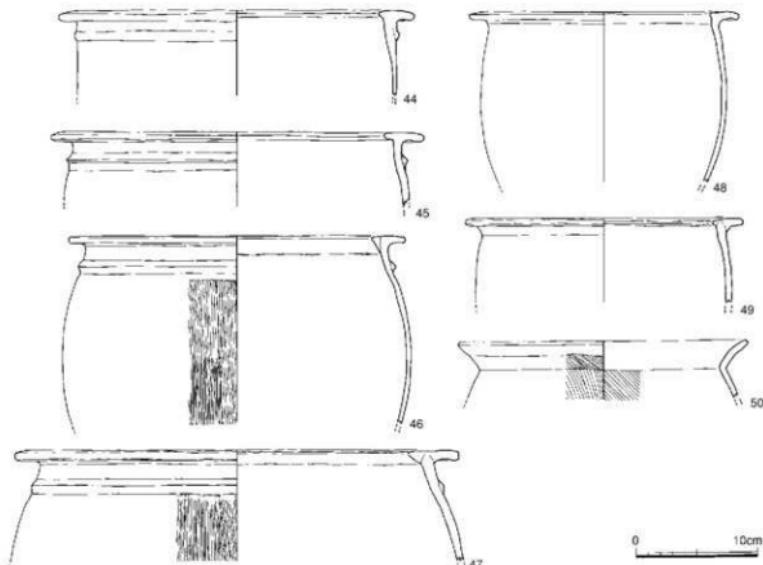


Fig.93 包含層出土土器実測図 3 (1/4)

石製品 (Fig. 94~95)

2～4は紡錘車である。2は2号墳墳丘、3、4は包含層6区で出土した。石材は滑石である。2は径4.6cm、厚さ0.5cmを測る。3は径4.0cm、厚さ0.5cmを測る。4は径3.9cm、厚さ1.1cmを測る。5、6は大型の有孔石錘である。いずれもSX009から出土した。石材は滑石である。敲打により、円形に成形している。両面は研磨されている。中央には両面から穿たれた穴がある。5は径13.4～15.8cm、厚さ3.5cm、6は径11.8～12.4cm、厚さ6.2cmを測る。7は7～9は有溝石錘である。7はSC003、8は包含層5区、9はSP046で出土した。石材は滑石である。7は長軸方向、8、9は短軸方向にも溝が掘り込まれる。7は長さ3.6cm、幅1.5cm、8は長さ3.8cm、幅1.7cm、9は長さ4.4cm、幅2.2cm、を測る。10は投弾である。包含層5区で出土した。土製で、長さ3.8cm、径2.0cm、を測る。11はガラス製小玉である。SC002の埋土から出土した。径0.5cm、厚さ0.3cmを測る。12～13は砥石である。包含層1区で出土した。12は片面が、13は両面使用される。14～19は玄武岩製の石斧である。14、15は未製品である。包含層6区で出土した。16～17は基部で、19は刃部である。包含層1区で出土した。20は磨製片刃石斧である。包含層7区で出土した。長さ10.4cm、幅5.8cm、厚さ1.4cmを測る。

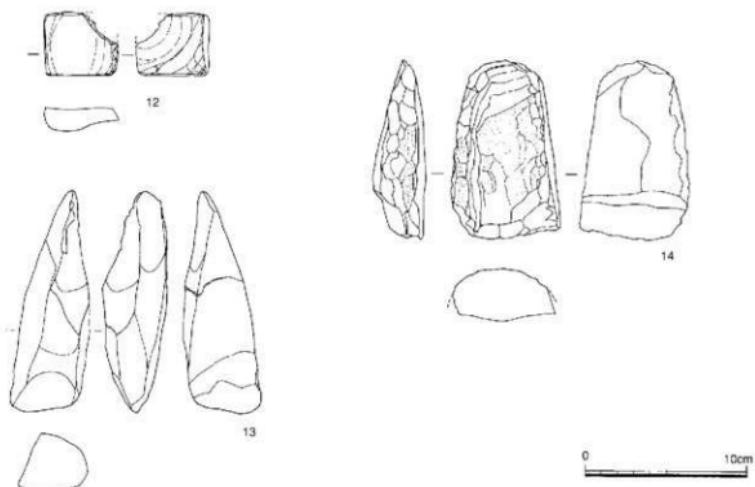
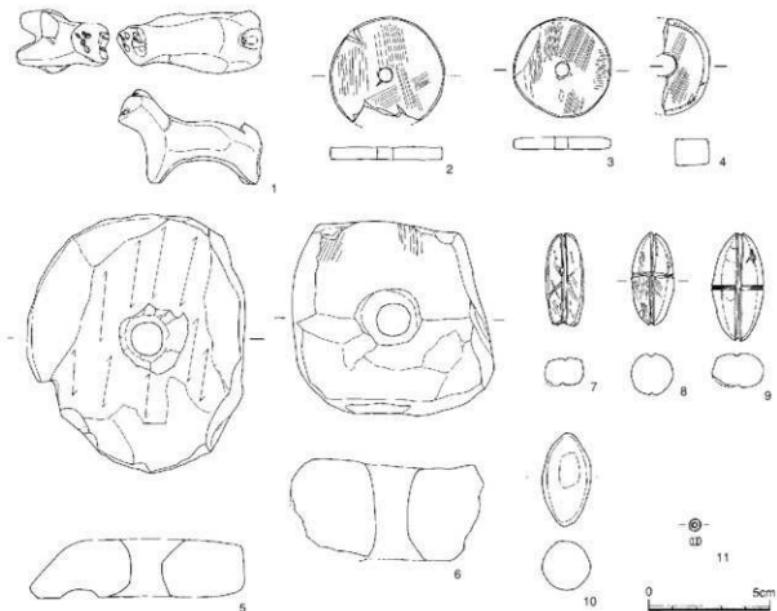


Fig.94 その他の遺構出土遺物実測図 1 (1/2, 1/1, 1/3)

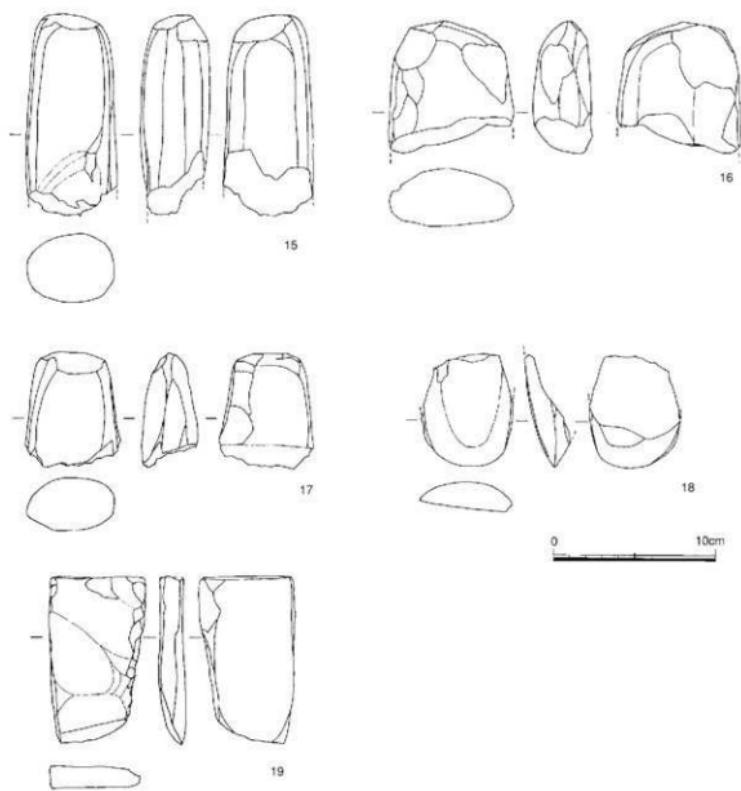


Fig.95 その他の遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

## 6. 付 編

福岡市元岡・桑原遺跡第3次調査における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

### 2. 試料

分析試料は、27グリッドから採取された7点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-3}\text{g}$ ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属（ヨシ）の換算係数は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

### 4. 分析結果

#### （1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

#### 〔イネ科〕

ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、Bタイプ（ヌマガヤ属？）

### 〔イネ科—タケ亜科〕

クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

### 〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

### 〔樹木〕

クスノキ科、その他

### （2）植物珪酸体の検出状況

最下位の黄灰色粘質土（試料7）では、ヨシ属が比較的多く検出され、スキ属型、ウシクサ族A、クマザサ属型なども検出された。黒褐色粘質土（試料6）から暗褐色粘質土（試料4、撚糸文土器包含層）にかけても、おおむね同様の結果であるが、やや暗い茶褐色粘質土（試料5）ではヨシ属が減少し、クマザサ属型は見られなくなっている。黄灰色砂質土（試料3）では、ウシクサ族Aなどが検出されたが、いずれも少量である。やや暗い黄褐色粘質土（試料2、押型文土器包含層）では、ヨシ属が比較的多く検出され、スキ属型、ウシクサ族A、樹木起源（その他）なども検出された。淡黄褐色粘質土（試料1）ではクスノキ科が比較的多く検出され、イネ科はほとんど検出されなかった。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると、試料2、4、6、7では、ヨシ属が優勢となっていることが分かる。

## 5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

最下位の黄灰色粘質土層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺ではスキ属やチガヤ属、およびクマザサ属などのササ類が生育していたと推定される。クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、スキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難である。したがって、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったと推定される。撚糸文土器包含層にかけても、おおむね同様の状況であったと考えられるが、この時期には何らかの原因でクマザサ属などのササ類はほとんど見られなくなったと推定される。

押型文土器包含層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺ではスキ属やチガヤ属などが生育していたと推定される。最上位の淡黄褐色粘質土層の堆積当時は、遺跡周辺にクスノキ科などの樹木（照葉樹）が分布していたと考えられ、イネ科草本類はあまり見られなくなったと推定される。

### 文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.  
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究、38（2）、p.109-123.  
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社、p.189-213.  
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9、p.15-29.

表1 福岡市、元岡遺跡における植物生體分析結果  
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料						
		1	2	3	4	5	6	7
禾本科	Gramineae (Grasses)							
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		38	45	8	53	38	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type			8	15	8		8
ワシクサ族A	<i>Andropogoneae A</i> type	8	38	15	23	8		15
Bタイプ	B type						8	
クサ油草科	Bambusoideae (Bamboo)							
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Myohosasa</i> )						8	8
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Miyakozasa</i>						8	
未分類等	Others	8			8		23	
その他のイネ科	Others							
穀皮毛起源	husk hair origin	8		7				
穀皮球形体	Round-shaped	8	68	30	23	30	91	8
未分類等	Others	38	53	105	30	38	53	38
樹木起源	Aroreal							
クヌキ科	Lauraceae	53						
その他	Others	15	8					
植物生體總数	Total	135	212	157	143	98	234	113

3次分類群の検定生産量 (単位: kg/ai·cm)

ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	2.39	2.84	0.47	3.33	2.37
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.09	0.19	0.09		0.09
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Myohosasa</i> )				0.06	0.06
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Miyakozasa</i>				0.02	

タケ亞科の比率 (%)

メタケ属型	<i>Pleidoblastus</i> sect. <i>Muluku</i>					
スサ属型	<i>Pleidoblastus</i> sect. <i>Nasza</i>					
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Myohosasa</i> )				100	100
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Miyakozasa</i>				100	

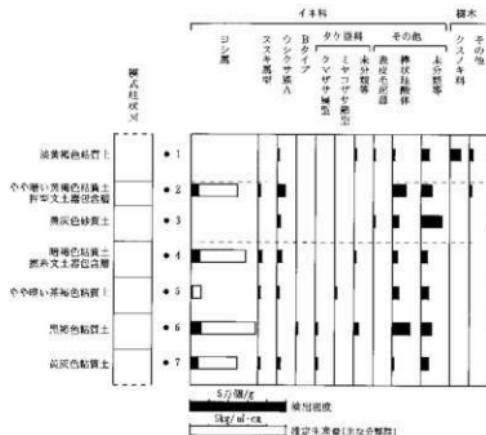
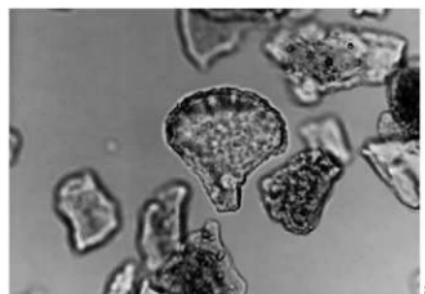
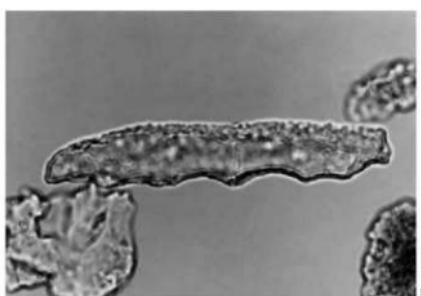
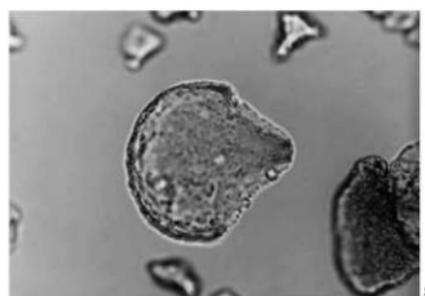
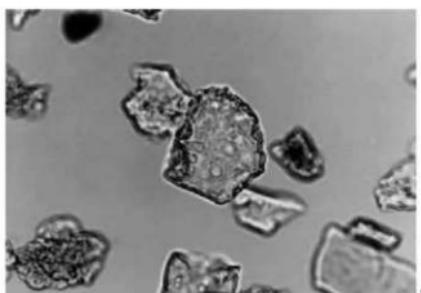
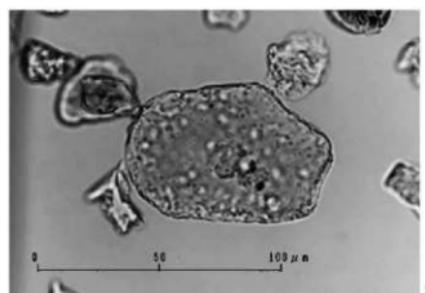


図1 元岡遺跡、27グリッドにおける植物生體分析結果



植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真  
(倍率はすべて600倍)

No	分類群	試料名
1	ヨシ属	6
2	ヨシ属	4
3	イネ科（その他）	6
4	クマザサ属型	5
5	クスノキ科	1
6	クスノキ科	1

## 福岡市元岡・桑原遺跡第3次調査における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

## 1. 試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No 1	SK023 集石遺構	炭化物	酸-7% <sup>14</sup> C-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No 2	SK024 集石遺構	炭化物	酸-7% <sup>14</sup> C-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No 3	SK033 集石遺構	炭化物	酸-7% <sup>14</sup> C-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No 4	SK034 集石遺構	炭化物	酸-7% <sup>14</sup> C-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No 5	SK042 集石遺構	炭化物	酸-7% <sup>14</sup> C-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No 6	SK045 集石遺構	炭化物	酸-7% <sup>14</sup> C-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No 7	SK050 集石遺構	炭化物	酸-7% <sup>14</sup> C-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No 8	SK056 集石遺構	炭化物	酸-7% <sup>14</sup> C-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

## 2. 測定結果

(1)  $\delta^{13}\text{C}$  測定値

試料の測定  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(2) 補正  $^{14}\text{C}$  年代値

試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、現在 (1950年AD) から何年前かを計算した値。 $\delta^{13}\text{C}$  測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比の測定値に補正值を加えた上で算出した。 $^{14}\text{C}$  の半減期は5,568年を用いた。

## (3) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中  $^{14}\text{C}$  濃度の変動を補正することにより算出した年代 (西暦)。補正には、年代既知の樹木年輪の  $^{14}\text{C}$  の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と  $^{14}\text{C}$  年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース ("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al. 1998, Radiocarbon 40 (3)) により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

曆年代の交点とは、補正  $^{14}\text{C}$  年代値と曆年代補正曲線との交点の曆年代値を意味する。 $1\sigma$  (68% 確率)・ $2\sigma$  (95% 確率) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の  $1\sigma$ ・ $2\sigma$  値が表記される場合もある。

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No PMNU-
No 1	-24.2	8630±35	交点: cal BC7600 1 $\sigma$ : cal BC7675~7665, 7655~7590 2 $\sigma$ : cal BC7740~7685	9917
No 2	-26.1	9245±40	交点: cal BC8520, 8510, 8470, 8455 1 $\sigma$ : cal BC8540~8490, 8485~8430, 8425~8415 BC8390~8385, 8370~8360, 8355~8335 2 $\sigma$ : cal BC8590~8575, 8555~8295	9918
No 3	-25.1	8675±35	交点: cal BC7650, 7640, 7630, 7620, 7610 1 $\sigma$ : cal BC7720~7695, 7680~7610 2 $\sigma$ : cal BC7785~7595	9919
No 4	-28.2	8565±40	交点: cal BC7585 1 $\sigma$ : cal BC7600~7575 2 $\sigma$ : cal BC7655~7530	9920
No 5	-25.6	9405±40	交点: cal BC8720, 7810, 8690, 8660, 8645 BC8640, 8635 1 $\sigma$ : cal BC8735~8630 2 $\sigma$ : cal BC8790~8595, 8585~8555	9921
No 6	-26.9	8495±40	交点: cal BC7575, 7560, 7545 1 $\sigma$ : cal BC7575~7520 2 $\sigma$ : cal BC7590~7520, 7495~7490	9922
No 7	-23.5	9120±45	交点: cal BC8290 1 $\sigma$ : cal BC8410~8395, 8375~8370, 8355~8355 BC8330~8265 2 $\sigma$ : cal BC8450~8255, 8245~8245	9923
No 8	-25.8	9385±40	交点: cal BC8685, 8670, 8630 1 $\sigma$ : cal BC8725~8705, 8695~8605 2 $\sigma$ : cal BC8780~8765, 8745~8545, 8490~8490	9924

## 7. 小 結

### 1) 周辺の関連遺跡

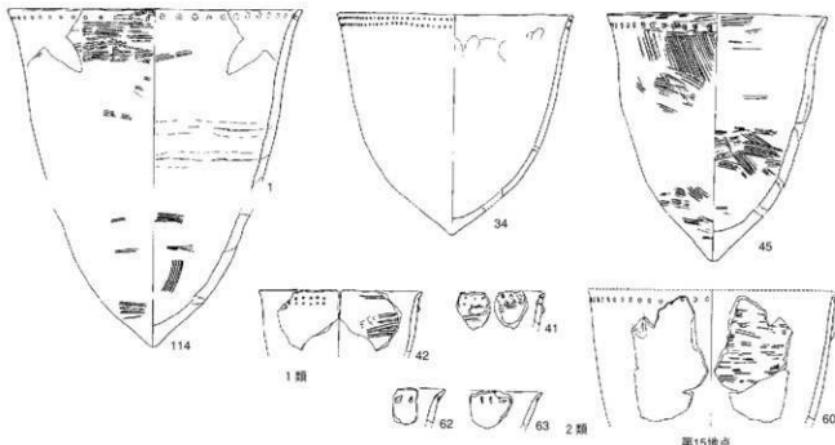
今回の調査では縄文時代早期の遺構・遺物が多数検出された。近年、福岡市内では草創期末から早期前半に位置づけられる資料が増加してきた。これらは弥生時代や古墳時代の遺構面の下層に埋没した地形で検出されることが多く、特に南区柏原遺跡群、早良区松木田遺跡群、西区大原D遺跡群では今回報告した第3次調査出土資料と関連が深い。ここではそれらの遺跡の概要を記述していく。

**柏原遺跡群** 遺跡は福岡平野と早良平野の境界に当たる油山から延びる低丘陵に位置する。この丘陵は油山、片纏山に源を発する樋井川に開析された狭小な冲積地が形成される。68万m<sup>2</sup>に及ぶ大規模な開発により、丘陵上から沖積地にかけて数多くの遺跡が確認された。特に柏原E遺跡、F遺跡は小規模な河岸段丘に立地するが、遺跡が丘陵側からの流土やかけ崩れによって覆われたため、現地表面から1~3m程下がった深さで草創期から早期の資料が多数検出された。柏原F遺跡は65~80mの河岸段丘に位置する。表土を除去した面で古墳を検出したが、古墳は押型文土器を含む包含層上面に造



柏原F遺跡、E遺跡出土土器 (1/6)

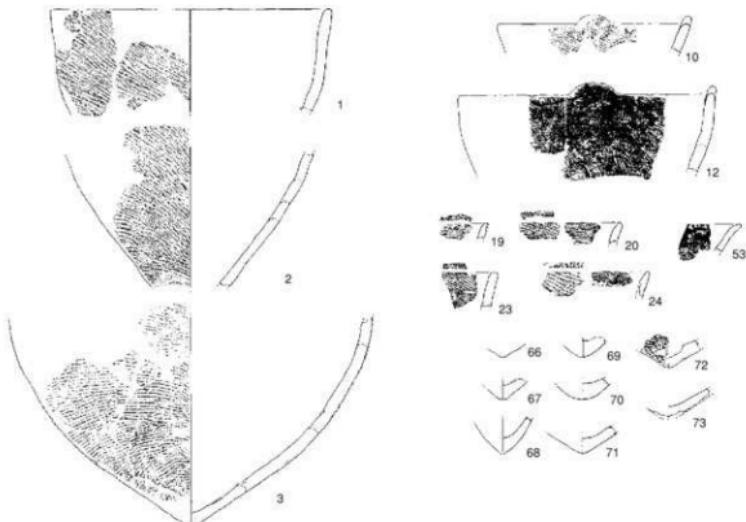
られており、その下層に2mを超える包含層が確認された。遺構は河川の浸食によって丘陵が抉られた窪地に形成されており、洞窟、岩陰遺跡との立地上の共通点が指摘されている。このような遺跡立地は後に触れる大原D遺跡でも見られ、注目したい。遺物は大きく3層に分けられた包含層から多数出土しており、Ⅲ層は竪穴3基、撲糸文土器、刺突文土器、条痕文土器等の土器類、石錐、スクレーパー等の石器類、Ⅱ層は炉址15基、押型文土器、無文土器、条痕文土器等の土器類、石錐、スクレーパー等の石器類、Ⅰ層は押型文土器、撲糸文土器、沈線文土器、平格式土器、条痕文土器、無文土器等の土器類、石錐、スクレーパー、石斧、磨石等の石器類が出土した。F遺跡で出土した土器の内、Ⅲ層で出土した刺突文土器は大型・小型の二種が見られる。器壁は厚く、口縁はわずかに外反する。器面調整は棒状工具等を用いた条線とナデ、貝殻条痕である。文様は口縁外面に一列の刺突が施される。刺突は先の丸い工具で円形を呈するものや棒状工具による押引状になるものがある。刺突の下には粘土を貼り付けるものもあり、縱長を呈するもの、横長のものがある。この層からは他に撲糸文土器、条痕文土器が出土している。出土状況から撲糸文、刺突文、条痕文土器の流れが示されているが、器壁や胎土、器面調整など共通点もあり、大きな時期差はないと考えられる。



大原D遺跡群出土土器 (1/6)

柏原E遺跡は標高46~53mの河岸段丘にあり、堅穴住居跡と考えられる土坑104基、土壙49基等が検出され、遺物は刺突文土器、撚糸文土器、櫛歯文土器等の土器類や石錐、スクレーパー、磨石等の石器類が出土した。このうち、刺突文土器は器壁は比較的薄く、口縁がわずかに外反する。大きさは比較的小型で、器面調整は内外面とも貝殻条痕を施す。文様は口縁外面に一列若しくは二列の列点状の刺突を施す。さらに刺突の下には豆粒状の粘土を貼り付ける。刺突の施文には棒状工具や竹管状の工具、貝殻殻頂部を用いている。これらの土器には撚糸文土器、条痕文土器が伴うようである。

**大原D遺跡群** 遺跡群は博多湾西岸部の糸島半島北東部に位置する。本遺跡は柑子岳（標高254m）から派生する丘陵の北東端にあたる。丘陵の先端は小河川により開析され、小さな谷が入り込む。遺跡は柏原遺跡群と同様、小さな谷に面した南向きの斜面に形成された河岸段丘に立地する。この遺跡群はこれまで16地点の調査が行われ、特に第14、15地点で縄文時代草創期~早期の資料が出土している。第14地点では標高30~35mの段丘面に無文土器、条痕文土器を主体とする時期の住居跡5軒、集石遺構、焼土面等が検出された。住居跡の内、SC003は焼失住居で、屋根を土で覆う構造の住居が想定されている。住居内の炭化材のC14年代測定では $10840 \pm 90$ 年BPの数値が得られた。遺物は無文土器、条痕文土器等の土器類、石錐、スクレーパー、磨石等の石器類が出土した。特に石錐の出土量が多く、総数600点を超える。第14地点で出土した土器は上層のI層では撚糸文土器が出土している。この土器には口縁端部からやや下ったところに施文原体による押圧が見られる。下層のII、III層からは条痕文土器、無文土器が出土している。層位的にはIII層に無文土器が多く、II層で条痕文土器が増加するという傾向が見られる。条痕文土器は器壁は薄く、内外面とも貝殻条痕を施すものが多い。底部に上げ底になるものがあり、特異である。無文土器はナデ調整のもので、器壁が1cm以下の薄いものと1.5cm前後の厚いものとがある。これらの中には縦長や豆粒状の粘土を貼り付けるものが見られる。



松木田遺跡群出土土器 (1/6)

第15地点では標高24~25mの埋没谷で刺突文土器等を含む包含層を検出した。この調査で注目されるのは土器類で、刺突文土器を主体としており、器形を復元できるものがかなり含まれている。土器は刺突文の施文方法から二タイプに分けられる。1類は棒状の工具の先端で横方向から施文したもので、円形、方形を呈する刺突となる。刺突は深さにより、内側が持ち上がるものもある。また、二列に刺突が巡るものもある。粘土を貼り付けるものは少ないが、横長の粘土を貼り付けるものもある。調整は貝殻条痕やナデである。器形はやや外反するものと直口するものがあり、底部は乳房状の尖底である。器壁は厚いものが多い。2類は押引状に施文するもので、縱長の長方形を呈する刺突である。刺突が二列に及ぶものもある。粘土の貼り付けは少ないが、縱長の貼り付けを持つものもある。調整は条痕調整、ナデである。器形は1類と同様である。この地点からは所謂「政所式土器」や貝殻文円筒土器、丸ノミ等他地域との関係を考える上で重要な資料が出土している。

**松木田遺跡群** 遺跡は早良平野の南部にあり、油山山塊と飯盛山・長垂山山塊が最も迫った狭隘地に位置する。東側は室見川が北流する。遺跡は沖積扇状地と西側から延びる砂礫台地に立地する。標高は約45m程で弥生時代の堅穴住居跡等を検出したが、この遺構面は西側から流れてきた土石流によって形成されたもので、その面から1.5m下層で撚糸文土器を主体とする時期の包含層を確認し、集石遺構3基、土坑13基、撚糸文土器等の土器類、石鎌、石槍、スクレーパー等の石器類を検出した。この遺跡で注目されるのは土器類ではなく撚糸文土器の単純な組成で出土した。撚糸文土器の特徴は器壁が厚く、斜め方向の撚糸文が施される。器形は外反味に立ち上がるものの、直口するものなどがある。口縁端部に山形の突起が付くものも見られる。数は少ないが、外面に刺突を施すものもある。底部は乳房状を呈する。この他、石鎌、石槍に局部磨製のものが多いことも注目される。

## 2) 繩文時代早期の遺構について

**立地** 繩文時代早期の遺構面は丘陵側の流土等で埋没していたが、本来は花崗岩の基盤に疊層が堆積して形成された小規模な河岸段丘面であったと考えられる。段丘面に堆積した土壤（土層ベルト7）のプラントオパール分析では繩文時代以前と考えられる黄灰色粘質土層の堆積当時はヨシ属などが生育する湿地的な環境で、周辺ではスキ属やチガヤ属、およびクマザサ属などのササ類が生育していたと推定された。当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったようである。また、その上層の撚糸文土器等の包含層においても、おおむね同様の状況であったが、クマザサ属などのササ類はほとんど見られなくなっている。気候の変動等を示すものか、注目される。

**集石遺構** 集石遺構の分布状況は東エリアと西エリアの2つに分けられ、各エリアの中で更に小さな纏まりが見られる。遺構の周囲では土器や石器が集中して出土する状況があり、それを中心とした生活空間が想定される。東側のエリアでは押型文土器の時期の資料はほとんどなく、その段階では西側が主な生活空間であったと考えられる。集石遺構は掘り込みをもつものとものがある。掘り込み面の確認は縁を検出した段階で行っていることが大半であるため、本来の深さではないと考えられる。掘り込みを持つものは壁に沿って石が配置されるもの（I類）と配置されないもの（II類）とがある。掘り込みを持たないものは自然堆積のものと区別が困難であったが、縁の被熱や周辺の炭化物の分布状況から遺構として認定した。

I類はSX034、SX045等がある。SX034は深い掘り込みで、壁際に配置された石の傾斜は急である。底には石を敷かない。石で囲まれた部分には後から入れられたと考えられる縁が見られる。SX045は浅い掘り込みで、壁際に配置された石の傾斜は緩やかである。底には石が敷かれる。内部にはやはり

後から入れられた礫が見られる。SX033、035等は前者のように明確な礫の配置ではないが、礫が掘り込みの周辺に集中し、内部に空間が見られる点は類似している。いずれも炭化物は出土するが、堆積層を為すような状況ではない。SX024は掘り込みの中に礫が密に入っていたが、それを除去しながら掘り下げると、壁際に沿うように礫の配置が見られ、底の部分に石が敷かれていた。石は中央が空間になるように配置されていた。底石の下には炭化物層が堆積していた。これらの石の下には同様な配置の石が検出された。他の遺構ではSX024のような炭化物層の堆積は見られなかった。壁際には熱を受けた痕跡は確認できなかった。これらの状況から推測すると、掘り込みの底に石を敷き、周りを石で囲み、火を焚いていたと考えられる。底の石の配置状態から土器を据えるような使用法も想定される。なお、この遺構については底石を検出した状態で型取りし、遺構の複製を作成した（PL18、19）。

II類は壁際に石が配置されないものである。掘り込みの中の礫の状態から拳大から人頭大の礫が密に入るるものとまばらなものがある。炭化物は出土するが、層を為す状況のものはない。SX056は浅い掘り込みの底近くに熱を受けた石が敷かれたように出土している。SX041、042、029は深い掘り込みの中に礫が密集するが、礫の堆積状態から一時に入れられたのではなく、幾度か入れられたと考えられる。SX052、053、023等は礫に熱を受けているが、掘り込みの上面にまばらに出土する。

I類、II類を比較すると、I類は周間に礫を配置するという形態から掘り込みの内部での火を焚く等の使用法が予想されるが、II類の場合は礫の出土状況に差が見られ、I類同様の使用形態の他、礫の廃棄土壤等多様な性格が想定される。遺構の時期は遺物をほとんど伴わないため、明確ではないが、検出面の深さから大きく2時期分けられる。押型文土器を主体とするⅠ期とそれ以前の撲糸文、刺突文、条痕文土器を主体とするⅡ期である。Ⅰ期にはSX023、033、034、035、037、041、043、045、046、049、051、055、060がある。Ⅱ期には024、029、032、042、044、052、053、054、056、059がある。Ⅰ期の遺構では掘り込みの壁際に石を貼り付けるように配置するSX034、045のようなタイプのものがあるが、Ⅱ期では見られない。柏原F遺跡では押型文土器の時期のⅡ層でこのタイプが見られ、この時期の特徴的な形態と言える。遺構内から出土した炭化物のC14年代測定ではⅠ期としたSX023はBP8630±35、SX033はBP8675±35、SX034はBP8565±40、SX045はBP8495±40、Ⅱ期としたSX024はBP9245±40、SX042はBP9405±40、SX056はBP9385±40という数値が得られた。

**炉穴** SK050は調査区西端で検出した。包含層の掘り下げの途中で、焼土や炭化物が出土することから精査し、検出した遺構である。したがって、遺構の掘り込み面はもう少し上であったと考えられる。遺構は斜面に直行するように造られる。先端の両壁の上面は被熱で赤変している。埋土には炭粒子が含まれるが、炭化物の堆積層は見られない。形態などから南九州で多く見られる炉穴と判断した。SK050では遺構の上面がブリッジ状になっていたかは確認できなかった。周囲には集石遺構も分布しており、両者の機能差が注目される。遺構の時期は検出面の深さからⅡ期の撲糸文土器、条痕文土器等を主体とした時期と考えられる。埋土中の炭化物のC14年代測定ではBP9120±45の数値が得られた。炉穴は福岡県内では初めての検出例であるが、南九州では早期の時期を主体に数百基以上が検出されている。用途については焼製施設や煮沸など諸説があるが、今回の資料については確定できない。

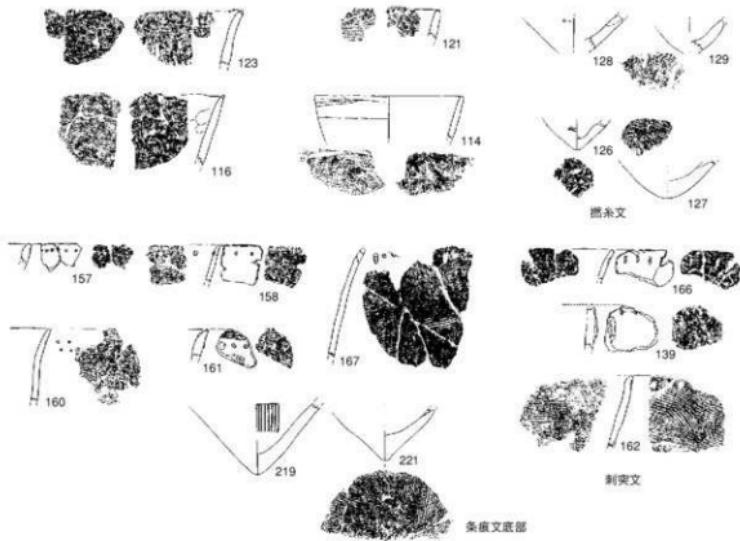
### 3) 縄文時代早期の遺物について

出土した土器には押型文土器、無文土器、撲糸文土器、刺突文土器、条痕文土器がある。分布状況を見ていくと、押型文土器は主に西エリアで出土した。押型文土器には稻荷山式、早水台式、下菅生B式等がある。東エリアではほとんど見られない。また、層位的に西エリアに広がる礫層の上層で出

土し、下層は押型文土器を含まない。下層の土器は無文土器、撚糸文土器、刺突文土器、条痕文土器からなる。これらの土器の分布域は重なっており、層位的にも西側では明確には分離できない。東エリアでは最下層で条痕文土器が主体となるグリッドも若干見られるが、押型文土器以前の土器についてはこれらが共存する様相を示しているものと考えられる。

無文土器はナデ調整の文様を持たないものを無文土器で、押型文土器に伴うものとそれ以前のものがある。押型文土器に伴うものは尖底と呈し、胎土は押型文土器に類似し、色調は黄橙色を呈する。口縁内面に斜め方向の短い沈線が施されるものもある。大原D遺跡第16地点で類例が見られる。

撚糸文土器は判別できるものは胴部片も掲載したが、傾きや施文原体が不確かな部分が多い。大半は押型文土器以前と判断される。撚糸文土器は条痕文土器、刺突文土器と比べると、色調、胎土に違いが見られる。色調は赤褐色～淡燈色を呈し、胎土の砂粒も細かいものが多い。器形が復元できるものはないが、口径15cm前後の小型のものと20cmを越える大型のものがありそうである。口縁は外側に開くものが多く、直口するものも見られる。口縁端部に山形を持つものもある。底部形態は広角気味の尖底である。器壁は1cm程の薄手のものが多い。撚糸文は太さ1～2mm、間隔3mm程度で、口縁付近では横行若しくはやや右下がりのものが大半である。松木田遺跡の撚糸文土器と比較すると、器壁の厚さや撚糸文の太さなどに相違は見られるが、外反気味の口縁や広角気味の尖底、また、口縁端部に山形の突起がつくものや口縁端部に刻目を施すもの等、類似点も多く見られる。単独の組成で出土した松木田遺跡の資料と今回の資料では厳密に比較するのは困難であるが、型式的に大きな差はないものと考えられる。



元岡・桑原遺跡群第3次出土土器 (1/6)

刺突文土器は口縁付近に刺突による文様を巡らせるものである。器形は外側に開くもので、口縁端部付近で更に外反するものもある。直立気味に立ち上がるものは少ない。器壁は1cm程で薄い。器面調整にはナデ調整、条痕調整、撲糸文施文のもの等がある。胎土は無文土器や条痕文土器に近い。刺突文様は形状、刺突の方向でいくつかで分けられる。文様で分類すると、I類は棒状工具や竹管状工具で正面もしくは斜め下から刺突したものである。刺突の形状には丸、三角形、四角形を呈するものがある。刺突の深さによっては土器の内側が瘤状に盛り上がるものもある。刺突を2段に巡らせるものもある。器面調整には条痕、ナデが主体であるが、撲糸文を施したものも見られる。ただ、胎土や色調は砂粒を多く含み、暗褐色を呈する等、先で触れた撲糸文土器とは相違が見られる。刺突文の下方に粘土を貼り付けるものは少ないが、径1cm程の円形の粘土を近接して貼り付けるものもある。このタイプのものは柏原E遺跡や筑紫野市原遺跡等で見られる。II類は棒状工具で縱方向に押引状の刺突したものである。刺突の幅や長さには差が見られるが、形状はくさび形、楔円形を呈する。器面調整は横方向の貝殻条痕を施すものが多い。刺突文の幅は5mm程のものと5mm以下のものがある。I類と同様、粘土を貼り付けるものは少ないが、外面には長さ2cm、幅1cm程の縱長の粘土貼付をもつものがある。調整はナデを施す。今回の資料では刺突文土器に伴う底部は確定できなかったが、後に触れる条痕文土器には広角若しくは広角の乳房状尖底が多いことからそのような底部であったと推測される。第15地点の資料は広角の乳房状底部を持ち、口縁形態、文様の施文方法等、類似している。I類にある円形の粘土を近接して貼り付けるものは第15地点では見られないが、それ以外のものについてはI類、II類は大原D遺跡第15地点で分類された刺突文1、2類にはほぼ対応すると考えられる。また、これらは柏原F遺跡のⅢ層の資料に近い様相を示すと考えられる。柏原F遺跡Ⅲ層のものには刺突文の下に粘土を貼り付けるものとつけないものとがあるが、今回の資料は後者の方に近い。

条痕文土器には押型文土器に伴うものもあるが、今回掲載したものは下層出土のものを主体とした。器壁は1cm程度で、器形は開き気味に直線的に立ち上がる。端部は丸く仕上げるものが多い。器面調整は大半が二枚貝による横方向の条痕で、ナデを加えるものが若干見られる。色調は赤褐色や淡橙色を呈し、胎土には1~2mm程の砂粒を多く含む。底部形態は広角若しくは乳房状の尖底が大半である。撲糸文土器、無文土器に共通する形態である。また、少量ではあるが、外開きの上げ底の底部も見られる。これらの底部は36~38区の包含層の下層から出土しており、古く位置づけられる可能性はある。この種の底部は大原D遺跡第14地点で類例が見られる。

**編年の位置づけ** 今回の調査では押型文土器以前の資料が得られたことは大きな成果である。包含層出土の資料で制約があるが、ある程度の傾向を示すことができる。土器に関しては無文土器、撲糸文土器、刺突文土器、条痕文土器がある。量的に主体となるものは条痕文土器で、刺突文土器は量は少ないが、胎土、器形は条痕文土器に類似する。一方、撲糸文土器は量的に少なく、胎土も異なり、客観的と言える。形態的特徴（口縁や底部）や文様（刺突文を施した撲糸文土器等）、出土状況等を見ると、両者には共通性があり、明確な時期差を示すものではないと考える。それぞれの土器を見ていくと、撲糸文土器については先に示したように松木田遺跡出土資料に器形等で共通性が見られる。刺突文土器については一部を除き、大原D遺跡第15地点、柏原F遺跡Ⅲ層のものに類似する。柏原F遺跡では底部形態は丸底とされるが、底部部分の状況は不明確な点もあり、第15地点や本例等から同様の底部形態を持つ可能性が高い。また、柏原F遺跡Ⅲ層では分層される可能性はあるものの、撲糸文土器、条痕文土器も出土しており、今回の資料に近い様相を示すものと考えられる。石器に関しては特に石鎌、石槍等（石鎌、石槍の形態の多様性、局部磨製のものが一定量見られる）に共通性が見られる。近年、綿貫俊一氏は底部の型式的觀点と二日市洞穴での層位的事例から、平底形、丸平底形、

丸底形、広角尖底形、広角乳房状尖底形、狭角乳房状尖底、尖底という変遷過程を示し、当該期の土器について編年案を提示している。綿貫氏はこれらの資料に関しても言及しており、柏原F遺跡については大原D遺跡第15地点等の状況から広角乳房状尖底とした上で、東九州の野田山式土器に並行させている。松木田遺跡については広角尖底形や広角乳房状尖底形を含む点で類似するものの、前者には狭角乳房状尖底形や尖底を含むという点で後出する資料として位置づけている。第3次調査では両者の先後関係は明らかにできなかったが、先に触れたように層位の出土状況や刺突文をもつ撫糸文土器の存在等から大きな時期差はないものと考えられる。これらのことから第3次調査の資料は厳密な同時性を示す資料ではないが、それぞれの諸要素等から、松木田遺跡、大原D遺跡第15地点、柏原F遺跡Ⅲ層に共通する様相を持つものとして位置づけられる。従来、柏原F遺跡の刺突文土器は大塚達郎氏により円孔文土器に後続する型式として、「柏原式土器」と提唱され、草創期末に位置づけられていたものである。刺突文を施した土器は押型文土器等にも見られることからも長く続いた型式と考えられ、今後、変遷を含めて位置づけについては再検討が必要であろう。なお、大原D遺跡第14地点の資料では条痕文土器、無文土器が主体で、撫糸文土器、刺突文土器等は含まないこと等からこれらに先行する資料と考えられる。

最後に 第3次調査は1997年に行い、1年半の歳月をかけて調査した。その後、整理に6年近く掛かり、ようやく報告書の刊行となった。これまでに多くの方々のご教示を得たが、報告書に十分反映できなかつたことはお詫びしたい。ただ、報告書を刊行することで資料は埋蔵文化財センターに収蔵され、今後の多くの方々に見ていただきけると思う。最後にご教示いただいた方々を記して謝意を表したい。

荒牧安行、池田祐司、上杉彰紀、小畠弘己、遠部慎、川道寛、杉原敏之、辻田直人、水の江和同、宮田英二、矢野健一、山崎純男、吉留秀敏、渡辺康行、綿貫俊一

#### 引用・参考文献

- 大塚達郎 1989 「草創期の土器」『縄文土器大観』1
- 綿貫俊一 1999 「九州の縄文時代草創期末から早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集
- 綿貫俊一 2003 「九州の縄文時代早期前半の土器－岡田憲一氏の原稿を読了した感想－」『利根川』24・25
- 町田勝則 2003 「押型文化の石器を考えるにあたり」『利根川』24・25
- 上杉彰紀 2003 「北部九州の縄文時代早期初頭の土器（1）」「九州縄文時代早期研究ノート」第1号
- 上杉氏は該期の資料を検討した中で大原D遺跡第15地点の資料をI～III式に分け、柏原F遺跡の資料をそれぞれに対応させている。また、E遺跡の資料は貼付の粘土粒の形態等からこれに後続する型式として位置づけている。
- 福岡市教育委員会 1983 「柏原遺跡群 I - 縄文時代遺跡F遺跡の調査ー」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第90集
- 福岡市教育委員会 1987 「柏原遺跡群 IV - 縄文時代遺跡A-1・E遺跡の調査ー」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第158集
- 福岡市教育委員会 2003 「大原D遺跡群 4 - 大原D遺跡群第4次・第5次・第6次調査報告 - 縄文時代編」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第741集
- 福岡市教育委員会 2001 「松木田遺跡群 2 第3次調査下層（縄文時代早期）遺物編」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第686集



1 調査区全景（北から）



2 調査区全景（南から）



3 調査区東側全景（南から）



1 調査区全景（西から）



2 25グリッド  
セクションベルト  
(東から)



3 27グリッド  
セクションベルト  
(東から)



1 27グリッド  
セクションベルト  
(東から)



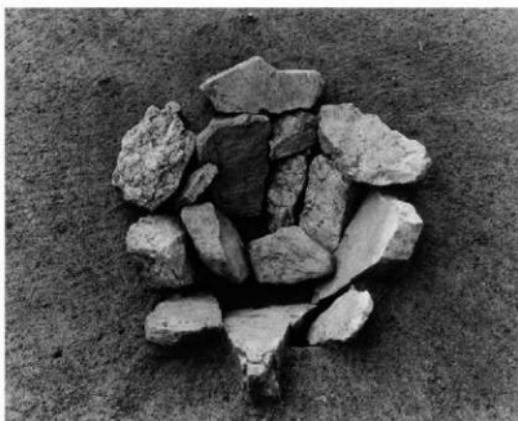
2 15~20グリッド  
出土集石全景  
(南から)



3 調査区西側全景  
(南から)



1 16-Iグリッド  
SX034検出状況  
(西から)



2 16-Iグリッド  
SX034炉内稼除去後  
(北から)



3 16-Iグリッド SX034完掘  
(北から)



1 16-Iグリッド  
SX034断ち割り  
(西から)



2 26-Jグリッド  
SX045周辺 (東から)



3 26-Jグリッド  
SX045 (東から)



1 26-JグリッドSX045  
炉内礫除去後



2 17-Iグリッド  
SX033 (北から)



3 18-IグリッドSX035  
検出状況 (西から)



1 14-Lグリッド  
SX037検出状況  
(北から)



2 19-MグリッドSX041  
(西から)



3 17-LグリッドSX042  
(北から)



1 17-LグリッドSX042第2面  
(北から)



2 11-EグリッドSX043  
(西から)



3 12-HグリッドSX059  
(北から)



1 12-HグリッドSX046、047  
(西から)



2 12-HグリッドSX052  
(南から)



3 23-JグリッドSX053  
(北から)



1 24-MグリッドSX054  
(西から)



2 24-NグリッドSX055  
(西から)



3 17-FグリッドSX056  
(東から)



1 17-JグリッドSX060  
(北から)



2 11-GグリッドSX049  
(西から)



3 39-HグリッドSX023  
(東から)



1 34-IグリッドSX024  
炉内集石（北から）



2 34-IグリッドSX024第2面  
(東から)



3 34-IグリッドSX024支石  
(東から)



1 34-IグリッドSX024支石  
(東から)



2 34-Iグリッド024底石  
(北から)



3 34-Iグリッド024底石  
(北から)



1 42-JグリッドSX029  
(東から)



2 43-LグリッドSX031  
(北から)



3 36-JグリッドSX032  
検出状況 (北から)



1 11-EグリッドSX050  
検出状況（西から）



2 11-FグリッドSX050  
(西から)



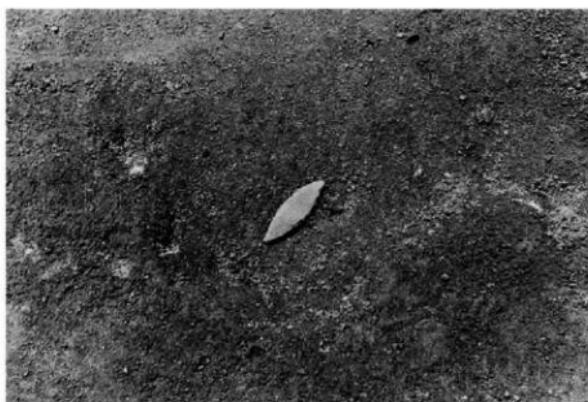
3 11-FグリッドSX050完掘  
(南から)



1 15-Iグリッド出土石槍  
(南から)



2 41-Kグリッド出土石槍  
(東から)



3 31-Kグリッド出土  
石槍 (南から)



1 15-Jグリッド出土  
石槍（南から）



2 36-Jグリッド出土  
黒曜石（南から）



3 12-Hグリッド出土  
石皿（北から）



1 13-IグリッドSX024  
型取り製作風景  
(北から)



2 SX024型取り製作風景



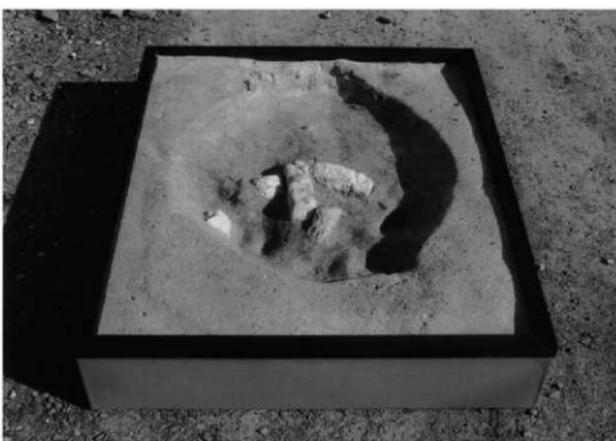
3 SX024型取り製作風景



1 SX024  
型取り製作風景



2 SX024  
型取り製作風景



3 SX024  
型取りレプリカ



1 全景空撮（東から）



2 全景空撮（西から）



3 全景空撮（南から）



1 SC002、003、005、  
015~017完掘空撮  
(南から)



2 SC002、003完掘  
(南から)



3 SC005遺物出土状況  
(北から)



1 SC005完掘（南から）



2 SC015～016完掘（南から）



3 SB019, 020完掘（南から）



1 SC018発掘（南から）



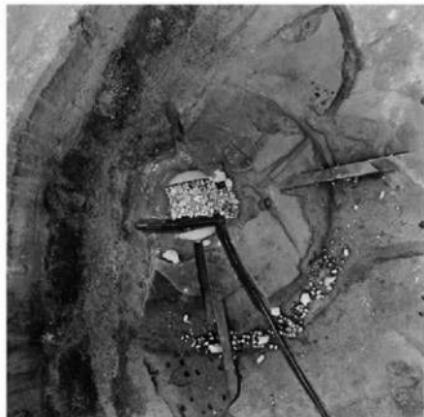
2 SB021発掘（南から）



3 SX009遺物出土状況  
(北から)



1 M-2号墳石室  
掘り下げ前  
(南から)



2 M-2号墳空撮 (南から)



3 M-2号墳周濠出土状況  
(南から)



1 M-2号墳周濠Ⅲ区  
遺物出土状況（北から）



2 M-2号墳周濠Ⅲ区  
遺物出土状況（西から）



3 M-2号墳周濠Ⅲ区  
遺物出土状況（西から）



1 M-2号墳石室完掘（北から）



2 M-2号墳石室遺物出土状況  
(東から)



3 M-2号墳石室遺物  
出土状況(東から)



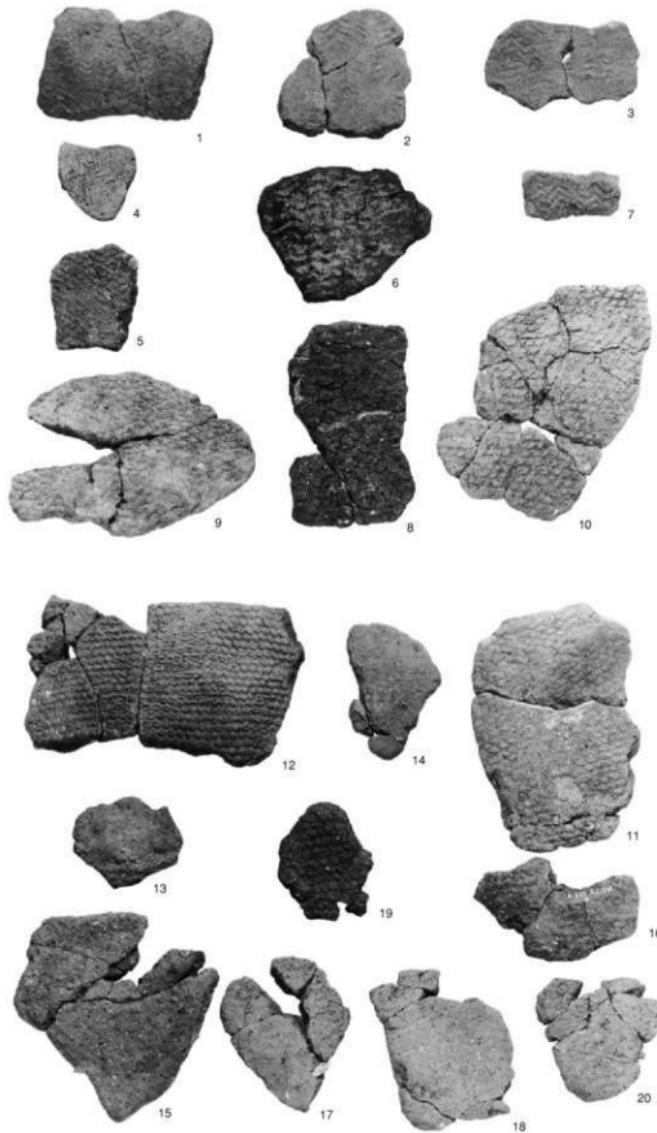
1 M-2号墳石室遺物  
出土状況（東から）



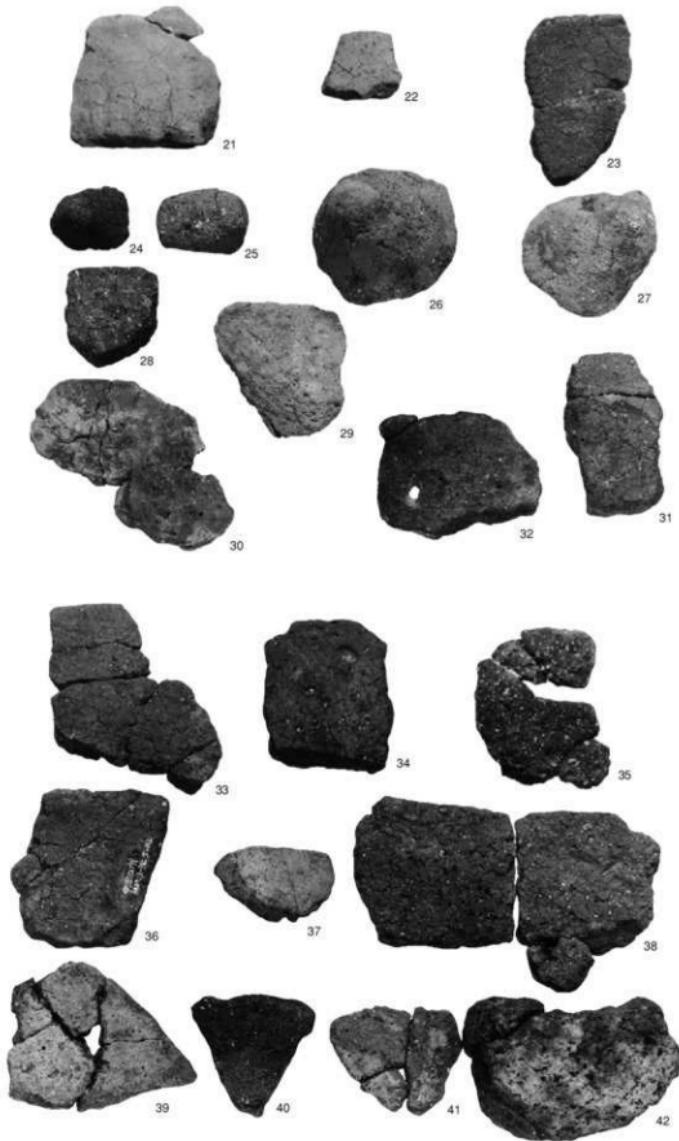
2 M-2号墳石室  
第2面近景（北から）



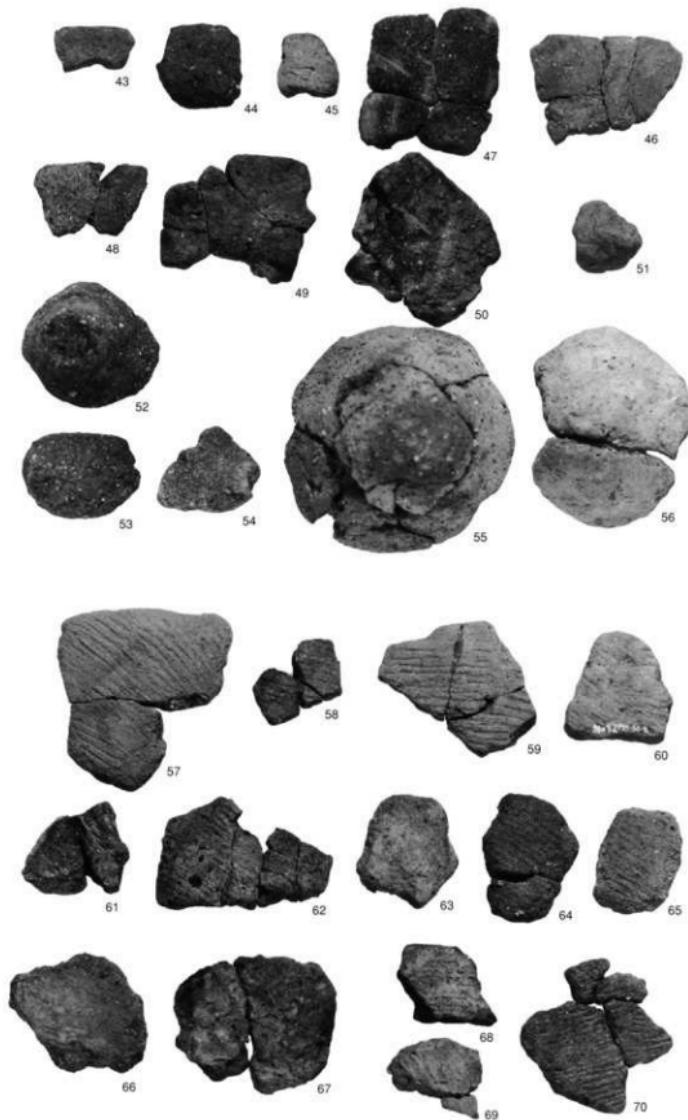
3 M-2号墳石室敷石  
第3面（北から）



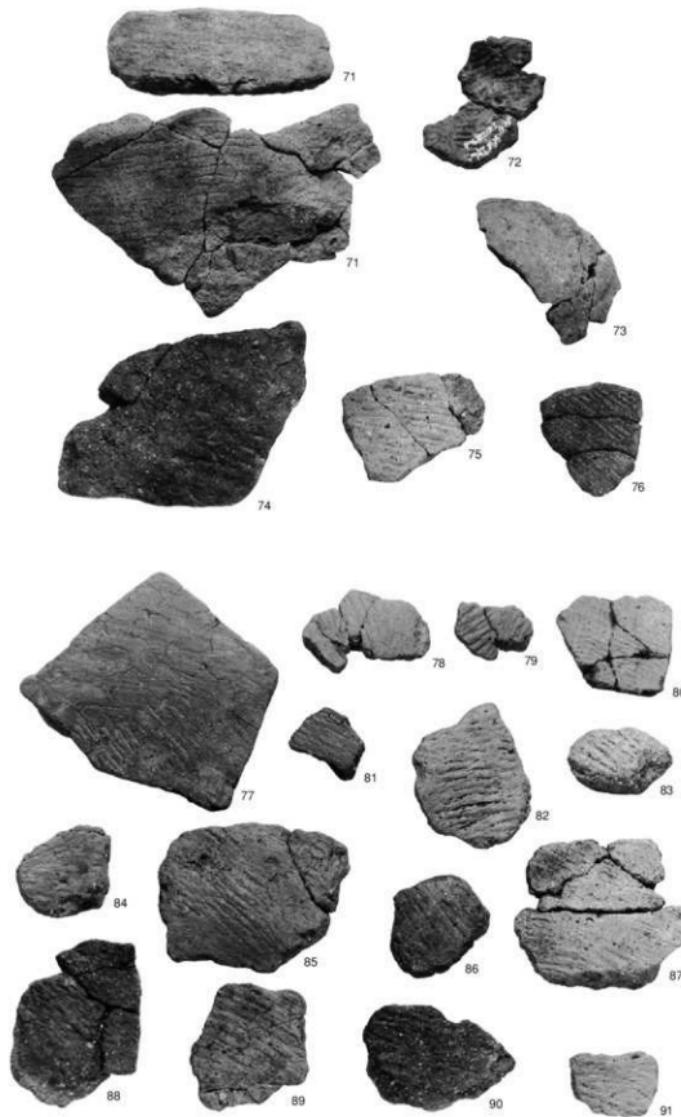
绳文土器 1



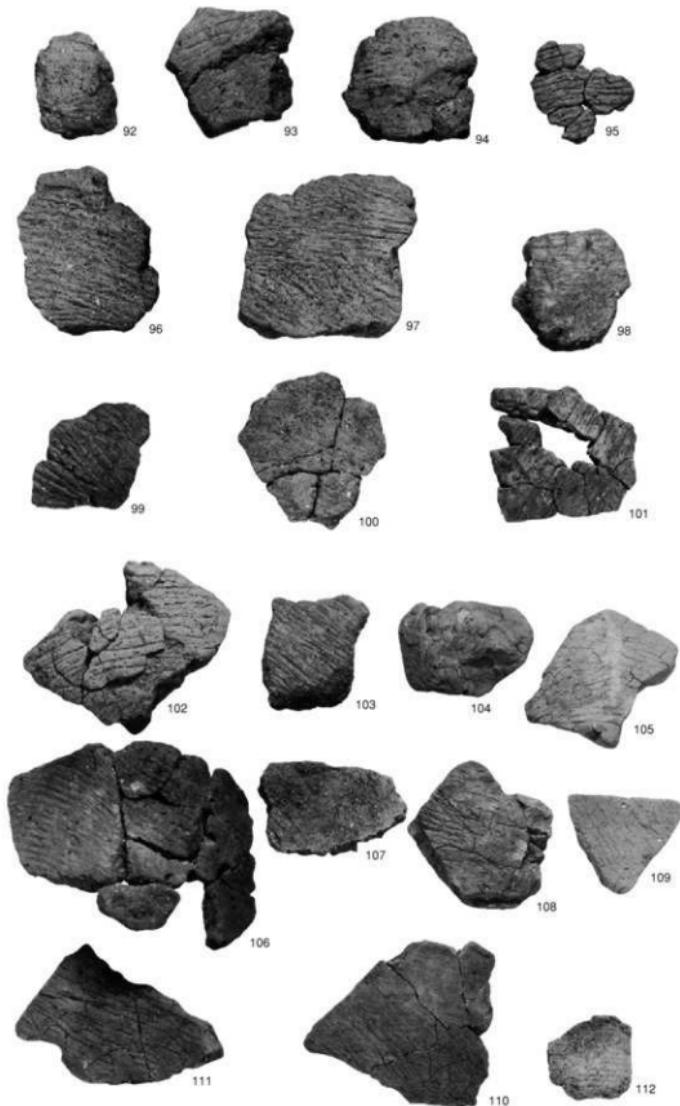
縄文土器 2



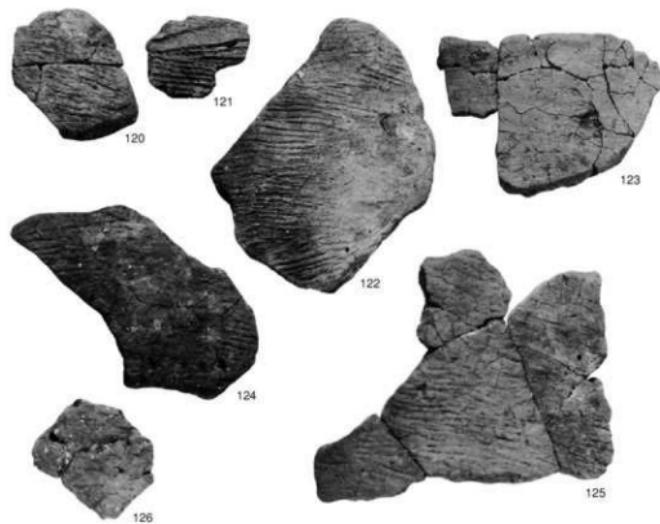
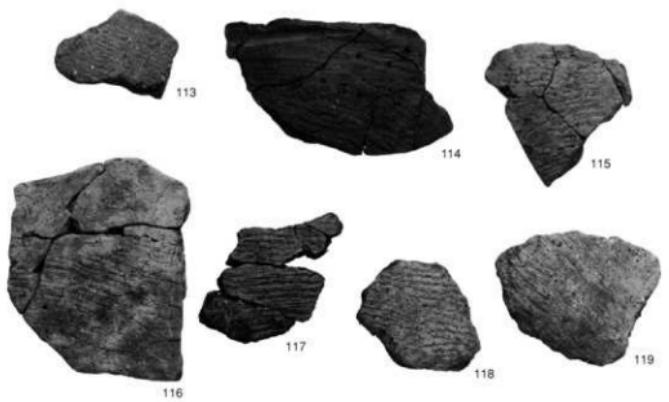
縄文土器 3



縄文土器 4



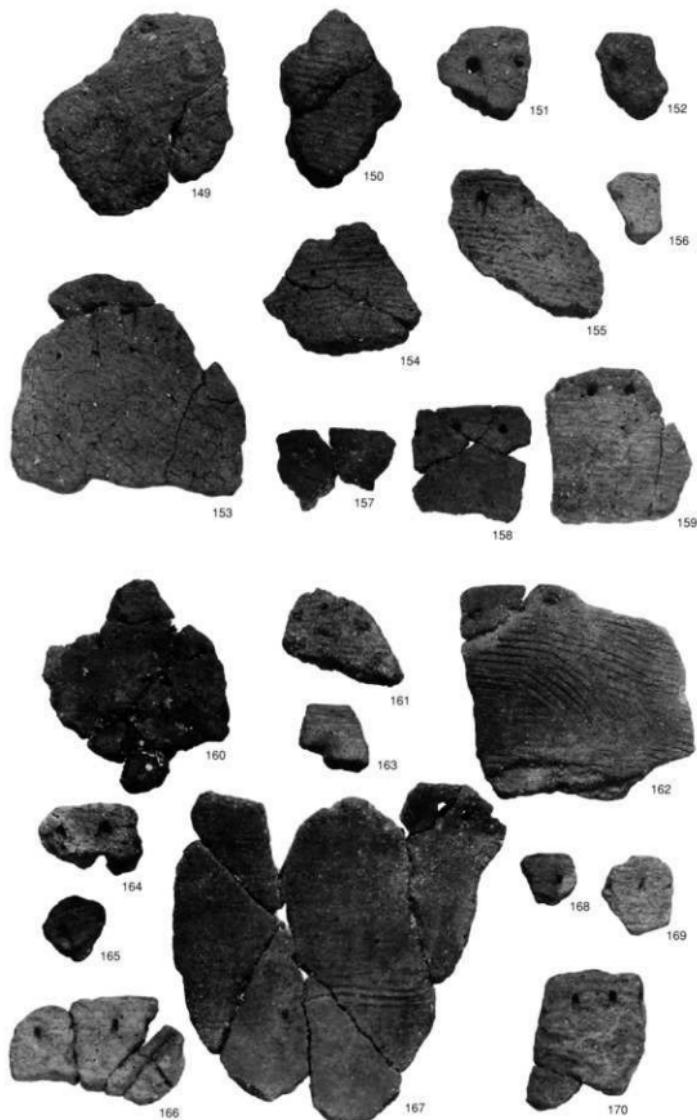
绳文土器 5



縄文土器 6



绳文土器 7



縄文土器 8



171



172



173



174



175



176



177



178

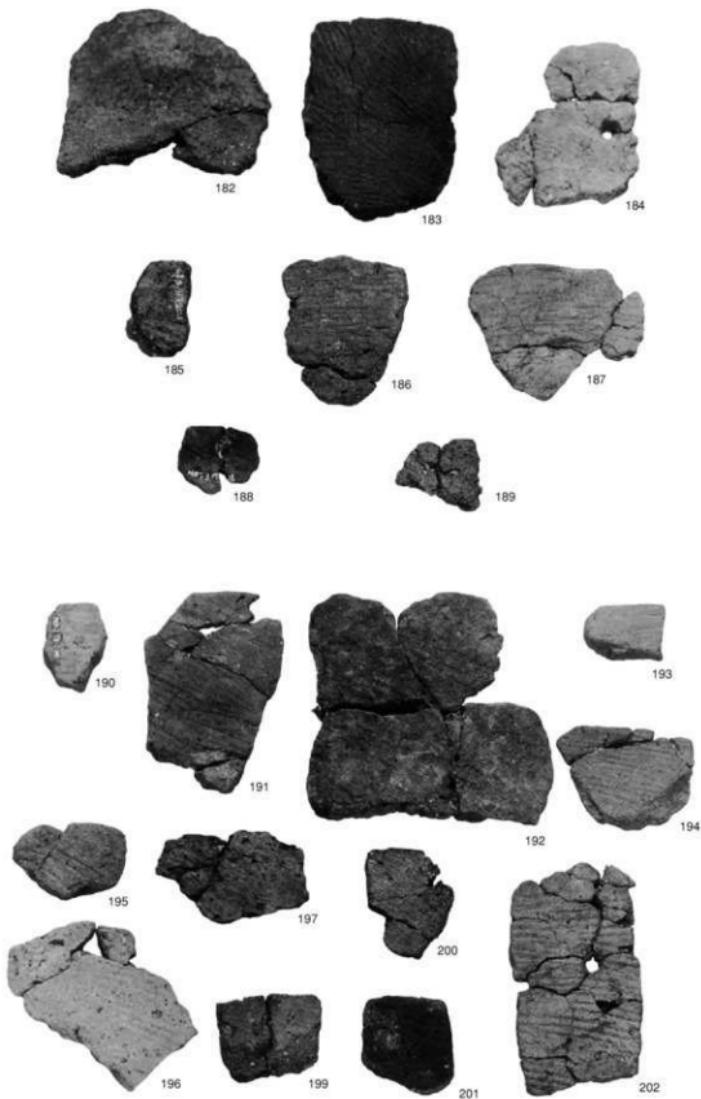


179

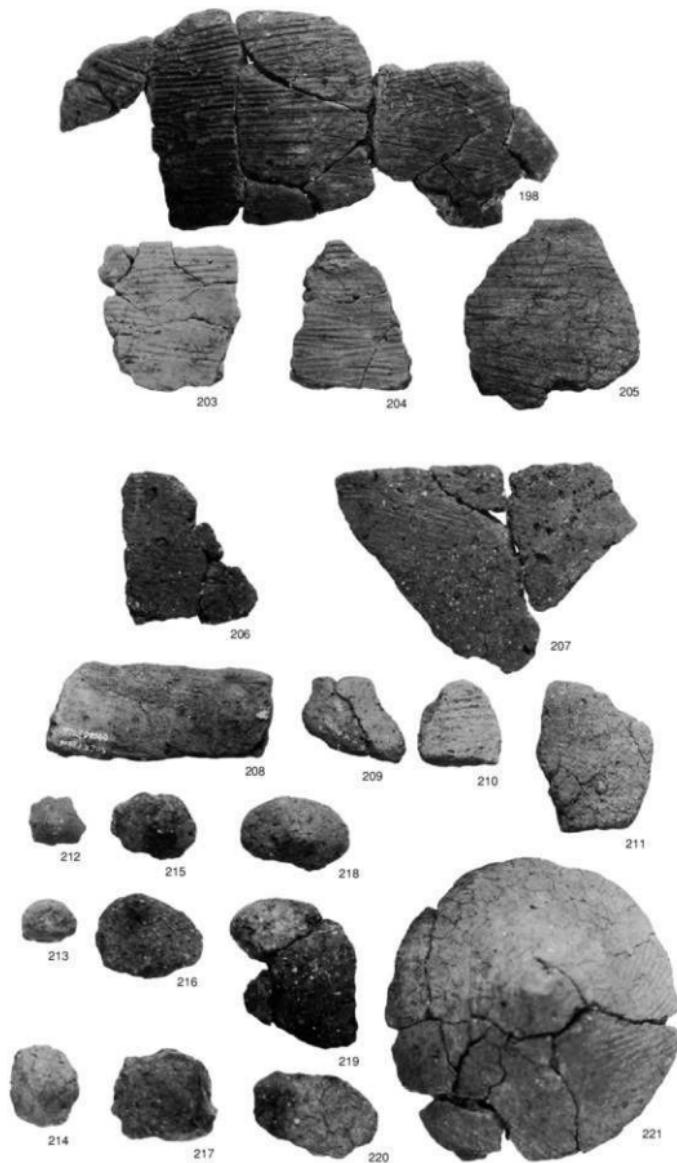


180

縄文土器 9



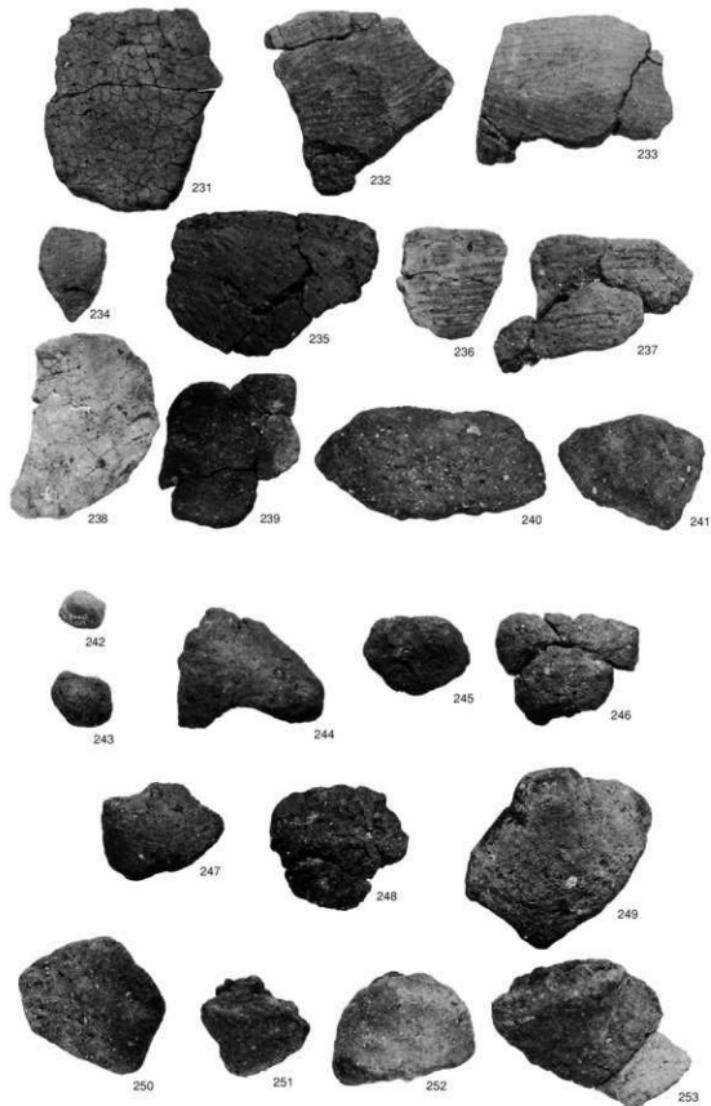
## 縄文土器10



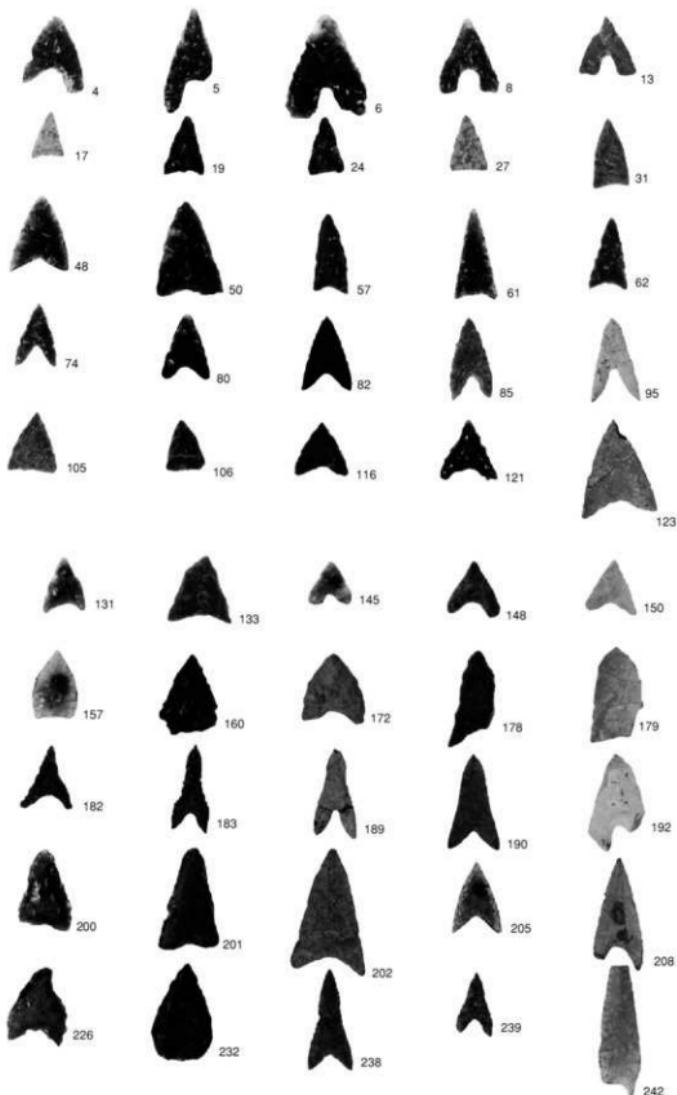
縄文土器11



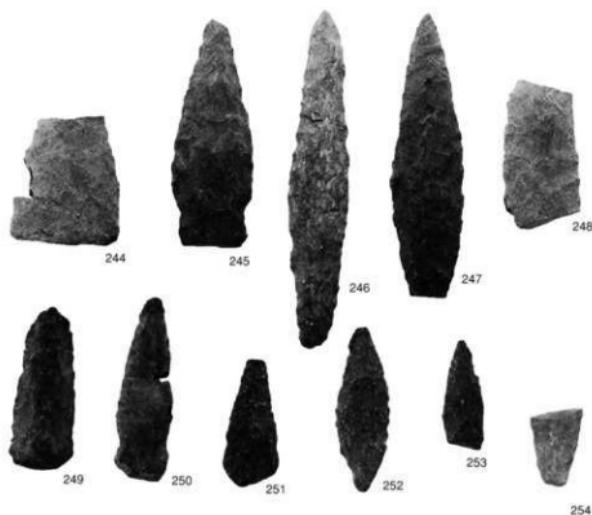
縄文土器12



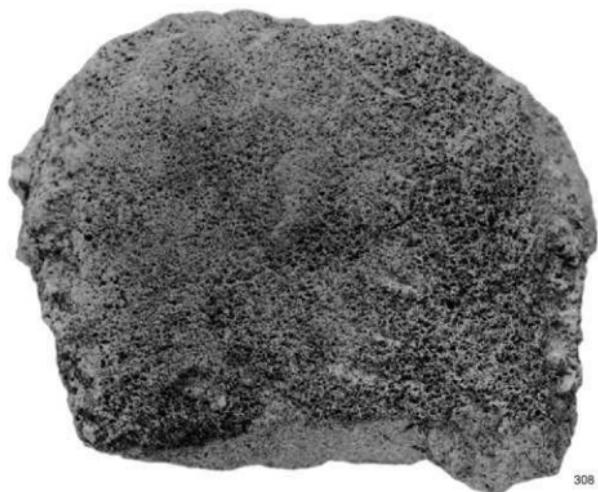
縄文土器13



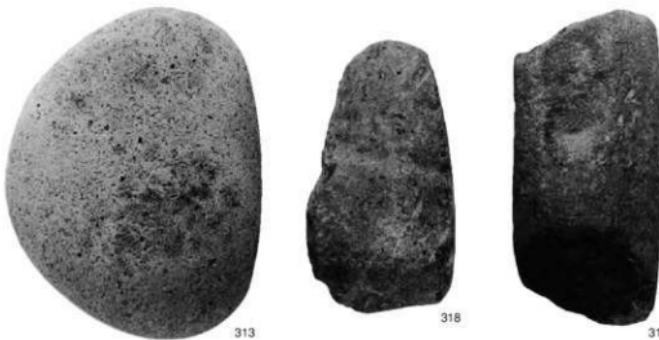
石鏃



石槍・尖頭器狀石器



308

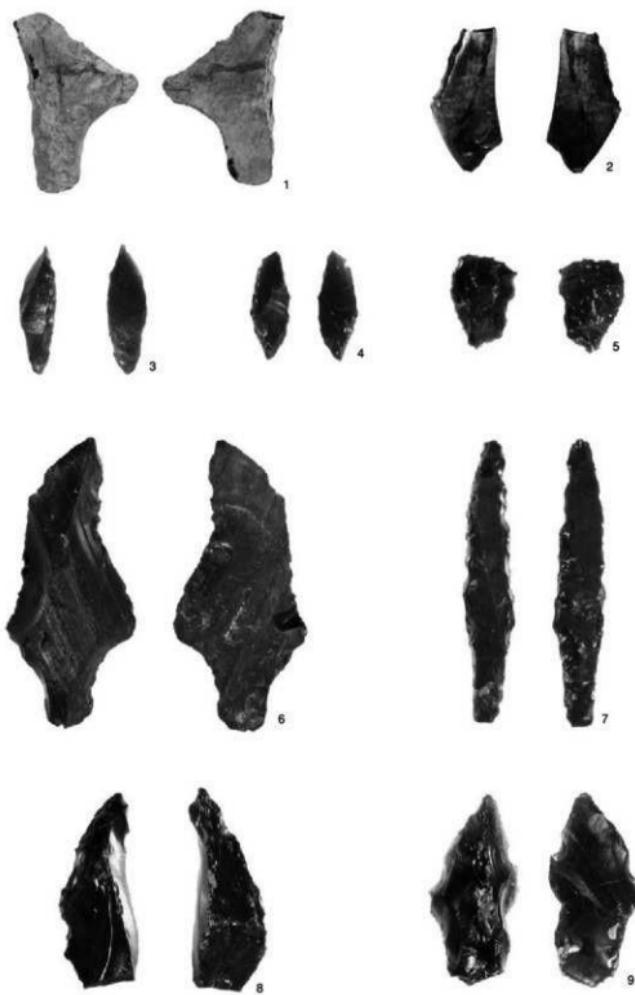


313

318

319

石皿・磨石



後期旧石器～縄文時代草創期の遺物 1



後期旧石器～縄文時代草創期の遺物 2



2号墳及びSX010出土遺物

### III 第4次調査の記録



### III 第4次調査の記録

#### 1. はじめに

第4次調査地点は、平成7～8年度に実施した九州大学移転用地内の埋蔵文化財詳細分布調査にともなう試掘調査により確認された、C区3遺跡である。試掘調査の結果、中世陶磁器、焼土、鉄滓等が確認できたため中世遺跡の存在が想定され、調査対象地とした。

現状は谷間の段々畑の形状を持ち、以前は柑橘類果樹園および畠地であった。石ヶ元古墳群調査のために伐採した大量の孟宗竹の集積場所としていたため、その移動から開始した。表土除去はバックホーで行ったが、地盤が軟弱で困難を極めた。表土除去後は、軟弱地盤での調査を可能とするため、やむを得ず先行して水抜き用の溝を縱横に巡らせ、乾燥までのしばらくの期間をおいて発掘作業に着手した。表土除去の段階で大規模な崩落が起きたが、以後作業の安全と濁り水を排水せぬよう細心の注意を払い、事故無く調査を完了することができた。

所在地 福岡市西区桑原字石ヶ元

調査期間 平成9年12月1日～平成10年3月31日

調査面積 1219m<sup>2</sup>

調査補助員 調査補助 柳山範一（現筑穂町教育委員会）

整理補助 濱石正子 撫養久美子

発掘調査に当たっては、寒中にもかかわらず多くの作業員さんの協力を得ました。ここに感謝の意を表します

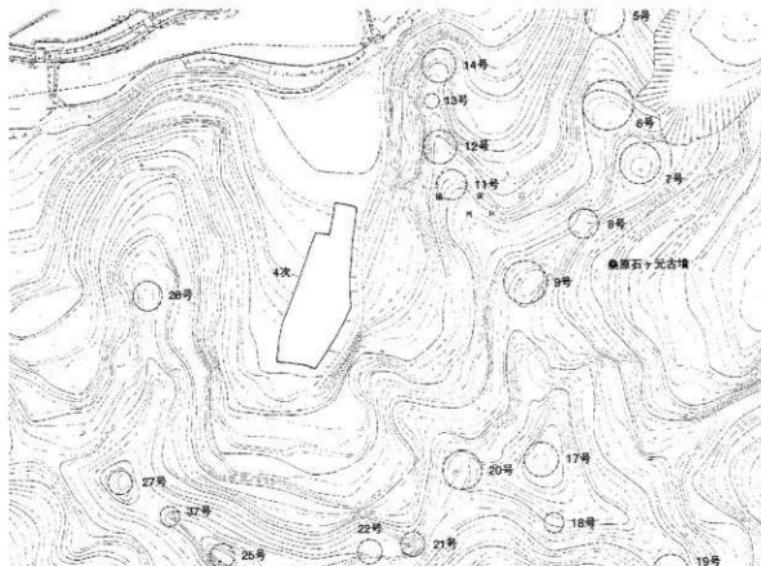


Fig.1 第4次調査地点周辺地形図 (1/2000)



Fig.2 第4次調査地点遠景（北から）

## 2. 調査地点の立地

九州大学移転用地の福岡市西区元岡・桑原地区は、水崎山城、志摩城の営まれた標高100m前後の山を最高位し、周辺に40~70m前後の花崗岩を基盤とする丘陵が広がっている。この丘陵は浸食が進み、尾根はやせ八つ手状に広がっている。尾根と尾根の間には、南北に狭い谷が形成されており、丘陵裾部を削って谷を埋め立て、狭小ながら平坦地を作りて段々畑状の耕地や生活面を確保している。

第4次調査地点は、尾根上に桑原石ヶ元古墳群が営まれた東西に走る丘陵と、それから北側に延びる2本の小支丘に挟まれた、北側に開析する谷の南側最奥部分に位置している。北側半分はかつて谷端部に築堤され昭和の頃まで貯水池が営まれており、現平坦面は埋め立てにより畠地となつものである。試掘調査の結果からも現地表下3.5m以上に灰青色シルトが堆積しており、遺構遺物は検出できず、遺跡無しと判断した。調査対象は、試掘で中世陶磁器等が出土し、中世段階の埋め立て整地遺構であると想定できた谷の南側半分とした。

谷頭部分のため、湧水が激しく、対応に苦慮した。



Fig.3 第4次調査地点全景（空中写真）

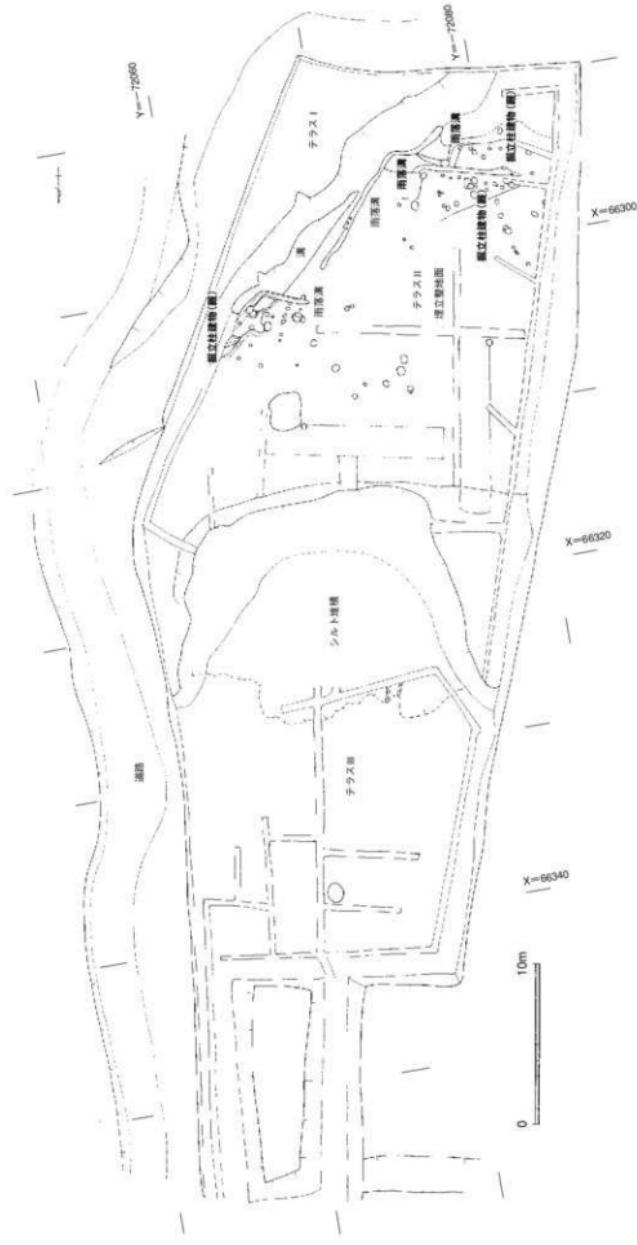


Fig.4 第4次調査遺構全体平面図（1/300）

### 3. 調査概要

調査対象地の内、中世の埋め立て造成が行われ、建物等の遺構が確認された谷上半部を1区、北側の段落ちにあたり、埋め立て造成の見られない下半部を2区と呼んでおく。

1区はおよそ次の3つの平坦面から成っている。

テラスI=谷頭南東端部に部分的に見られる。花崗岩の風化岩（真砂土）を削りだし平坦面を作ったものであるが、遺構は確認できない。

テラスI'=谷頭南西部に部分的に見られる。テラスIより一段低く、テラスIIより一段高い跳り場的な平坦面である。花崗岩の風化岩礫が露出するまで削りだしている。明確な遺構は確認できないが、テラスI法下との南東境にはかすかな窪みがあり、排水溝の役割を果たしたものと思われる。

テラスII=谷頭の地山（花崗岩風化岩）をアーチ形に削り込んで平坦面を作り、さらに削りだした土で谷部分を埋め立て、平坦面を拡幅したものである。

このうち、確実な遺構が確認できるのはテラスIIだけであり、埋め立て造成後に營まれた遺構を上面遺構、埋め立て造成前および造成段階に營まれた遺構を下面遺構として以下説明する。

上面遺構 (Fig.5・6)

埋め立て整地された平坦面に、3棟の掘立柱建物と建物を巡る雨落ち溝、土坑、柱穴、地床



Fig.5 1区（テラスI・I'・II）全景（空中写真）

炉が検出できた。谷頭を埋め立てた平坦面であり、周辺からの水の流れ込みが激しいため、排水には配慮がなされ、平坦面南東辺にあたるテラスⅠ、Ⅰ'、Ⅱとの境界法面下端には排水溝SD14、15が掘られている。以下主要遺構について述べる。

#### SB26、27 (Fig. 7・8)

テラスⅡ南端部で検出された掘立柱建物である。少なくともSB26、27の2棟の重複が確認出来る。北側は後世の耕作等により削平され、全容は不明である。SB26はテラスⅠ'の基盤を削り込み、法面下端に雨落ち溝SD16を巡らす。南側では明確な掘方は見られないが、かすかな窪みとして認識できる。東側に廂をもつものと思われ、東西が柱間1.35mで2間以上、南北が柱間1.5mで2間以上の規模をもつ。柱穴SP18から瓦質三脚付き土鍋の脚部破片 (Fig.11-12)、SP20



Fig.6 1区(テラスI・I'・II)上面遺構全体平面図 (1/200)

からは径8～9cmの糸切り底土師小皿（Fig.11—13～16）、SP21から東播系須恵質鉢が出土している（Fig.11—17・18）。SB27はSB26の廃絶後につくられたもので、東南面に明確な雨落ち溝（SD10）を巡らしている。南面、東面に廟をもち、東西が柱間1.6～1.7mで3間以上、南北が柱間1.6mで少なくとも1間の規模をもつ。SD10からは幅広の鎌蓮弁をもつ龍泉窯系青磁碗（Fig.11—5）が出土している。さらに東南側にも雨落ち溝と思われるSD14・17があり、柱穴は確認できないものの、さらにもう1棟の建て替えがあった可能性もある。

#### S828 (Fig.11—17・18)

テラスⅡ東端で確認できた掘立柱建物で、柱穴列からは南側と東側に廟を持つ建物と考えられるが、柱穴が一部しか残っておらず、全容は不明である。南側と東側に鈍角に屈曲する雨落ち溝（SD13）があり、テラスⅡ全体に対する排水溝（SD15）を切っている。雨落ち溝の軸線と建物軸線とは一致せず、また、柵状の直線に並ぶ柱穴列も建物跡を斜断しており、建物と雨落ち溝、柵はそれぞれに時期を異にするもので、数時期の建て替えがあったと考えられる。建物柱穴には柱抜き取りによると思われる掘方が観察される。SP21から外底に板目压痕を持つ糸切り底の土師器皿片（Fig.11—17・18）が出土している。

#### SX05 (PL.7—4)

SB2の西側整地層内に営まれた小規模な地床炉である。木炭を多量含む浅い皿状の窪みの周囲が被熱により赤化している。特段の遺物はみられない。埋め立て整地作業を行った段階での作業にともなうものであろう。

#### SK06 (Fig.11—1～4、PL.7—4)

テラスⅡ北東部にみられた1.8×2.2m程の平面不整形をした土坑で、浅い皿状の窪みをなし、



Fig.7 SB26、27全景（北から）

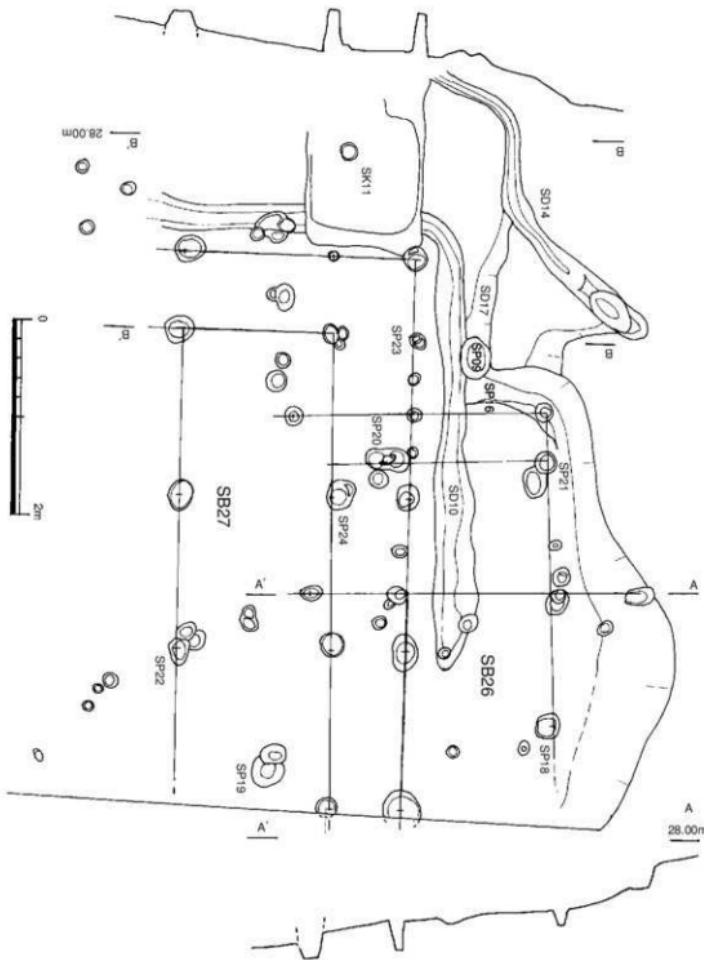


Fig.8 SB26、27 実測図 (1/50)

底に2個の柱穴がみられる。炭化物を含む黒褐色土の覆土中に遺物が含まれ、1は糸切り底の土師器皿、2は須恵器高坏の脚部破片、3・4は東播系須恵器陶器鉢である。

SK11 (Fig.11-6・7、PL.6-2)

テラスⅡ南東部にみられた1.5×2.5m程の平面不整長方形をした土坑で、浅い壺状の窪みをなす。SB27の雨落ち溝S D10を切り、同じく雨落ち溝とみられるSD14に接する。東側はなだらかに傾斜し遺構の境界は明確でない。炭化物を含む黒褐色土の覆土中に遺物が含まれ、6は糸切

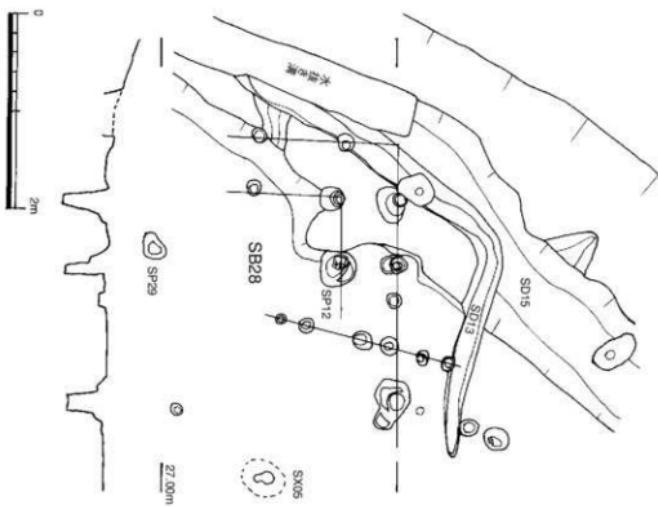


Fig.9 SB28実測図 (1/50)



Fig.10 SB28全景 (西から)

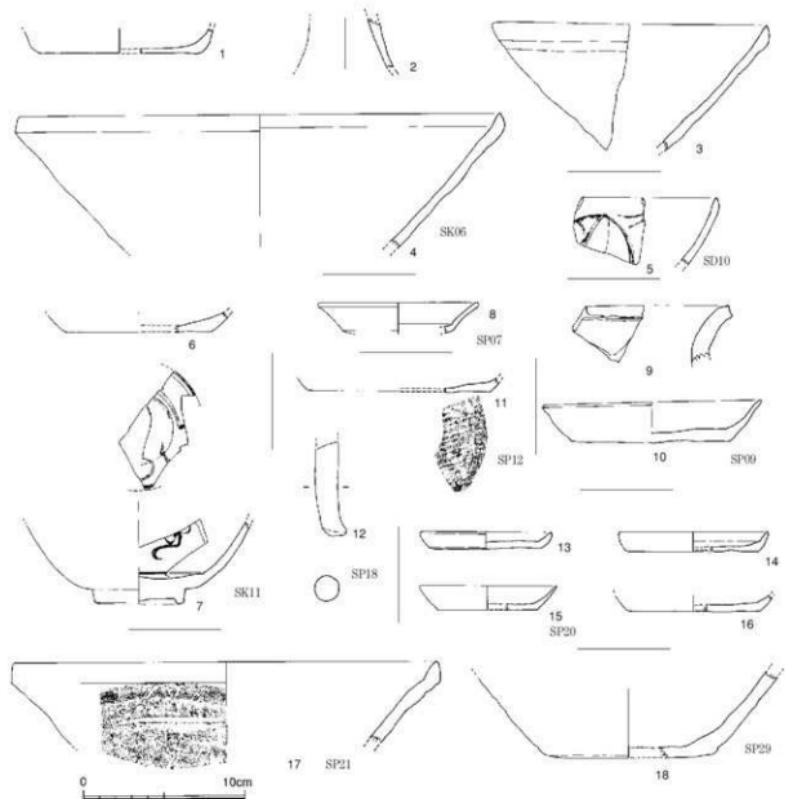


Fig.11 テラスⅡ 遺構出土遺物

り底の土師器皿、7は龍泉窯系青磁碗で、内面に片切り彫りの文様を施す。

SP09 (Fig.11-9・10, PL.7-2)

テラスⅡ南部の掘立柱建物群のなかで検出された。SB27の雨落ち溝SD10の南に接している。花崗岩風化岩を掘り込んだもので、覆土から須恵器甕破片(9)などとともに、ほぼ完形の糸切り底の土師器皿(10)が出土している。柱穴と思われるこの遺構とSB26・SB27とは直接関連づけられないが、あるいは雨落ち溝とみられるSD14をともなう掘立柱建物の柱穴の一部かもしれない。

#### 下面遺構 (Fig 5・6)

テラスⅡは谷頭の地山（花崗岩風化岩）をアーチ形に削り込んで平坦面を作り、さらに削りだした土で谷部分を埋め立て平坦面を拡幅し、掘立柱建物等を営なんだものである。この埋立整地にかかる遺構を下面遺構とし、以下主要遺構について述べる。

埋立状況はFig.13の土層断面図に示す。南北土層断面図2-1・2、4-6に示すように南側から北側に向けて埋立作業の進められたことが見て取れる。整地後も完全に水平な平坦面では

なく、南北で1m強の比高差のある傾斜した平坦面となっている。あるいは排水を強く意図した結果であるかもしれない。東西方向についてはほぼ水平である。埋立以前の状況は、土層図4に示すとおり、南側から岩盤由来の花崗岩礫が流れ込み堆積し、その上にシルト層があり上面に酸化鉄層が形成される水溜まり状態であった。この谷地形の埋立はおよそ3段階にわけておこなわれている。すなわち土留めの機能を持つ3列の捨て石列が検出されている(Fig.14、PL.2~4)。これらの捨て石列を北側から順にSX01~03と呼ぶ。捨て石列はあたかもアーチ式ダムのような形状に配している。先ず中央のSX02を土手(堤)状に築造し、その南側を水溜とした後、水溜部分にSX03をもうけ、その南側を埋立て、最終的にSX02の北側にSX01を配し、そ

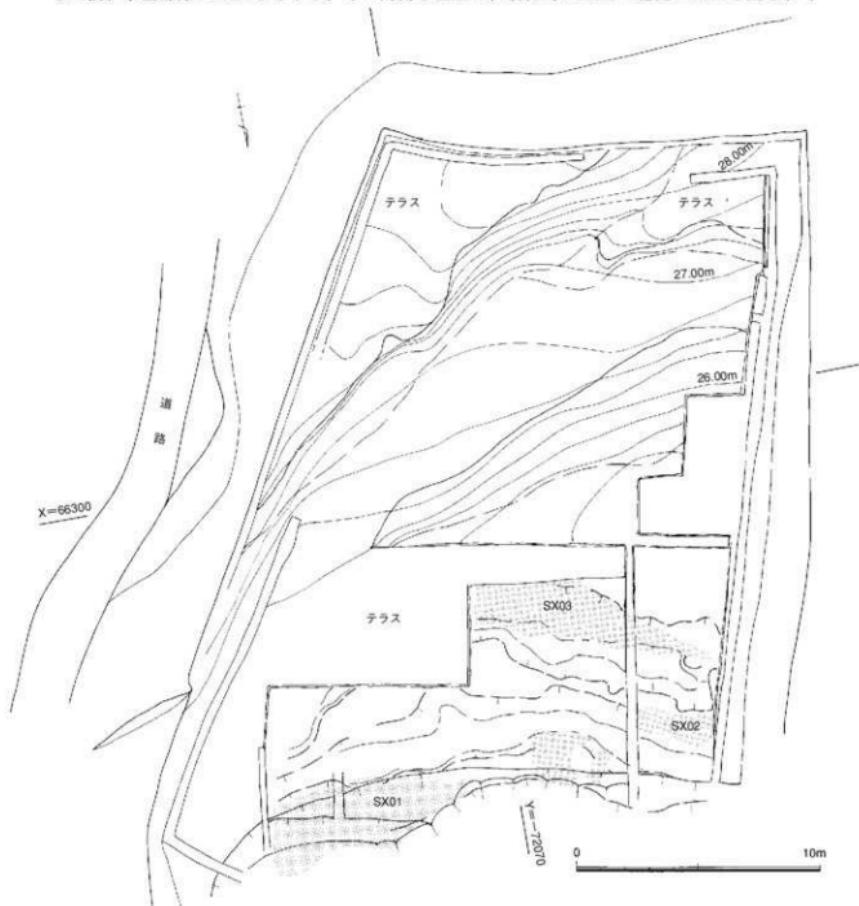


Fig.12 1区(テラスI・I'・II)下面構造全体平面図(1/200)

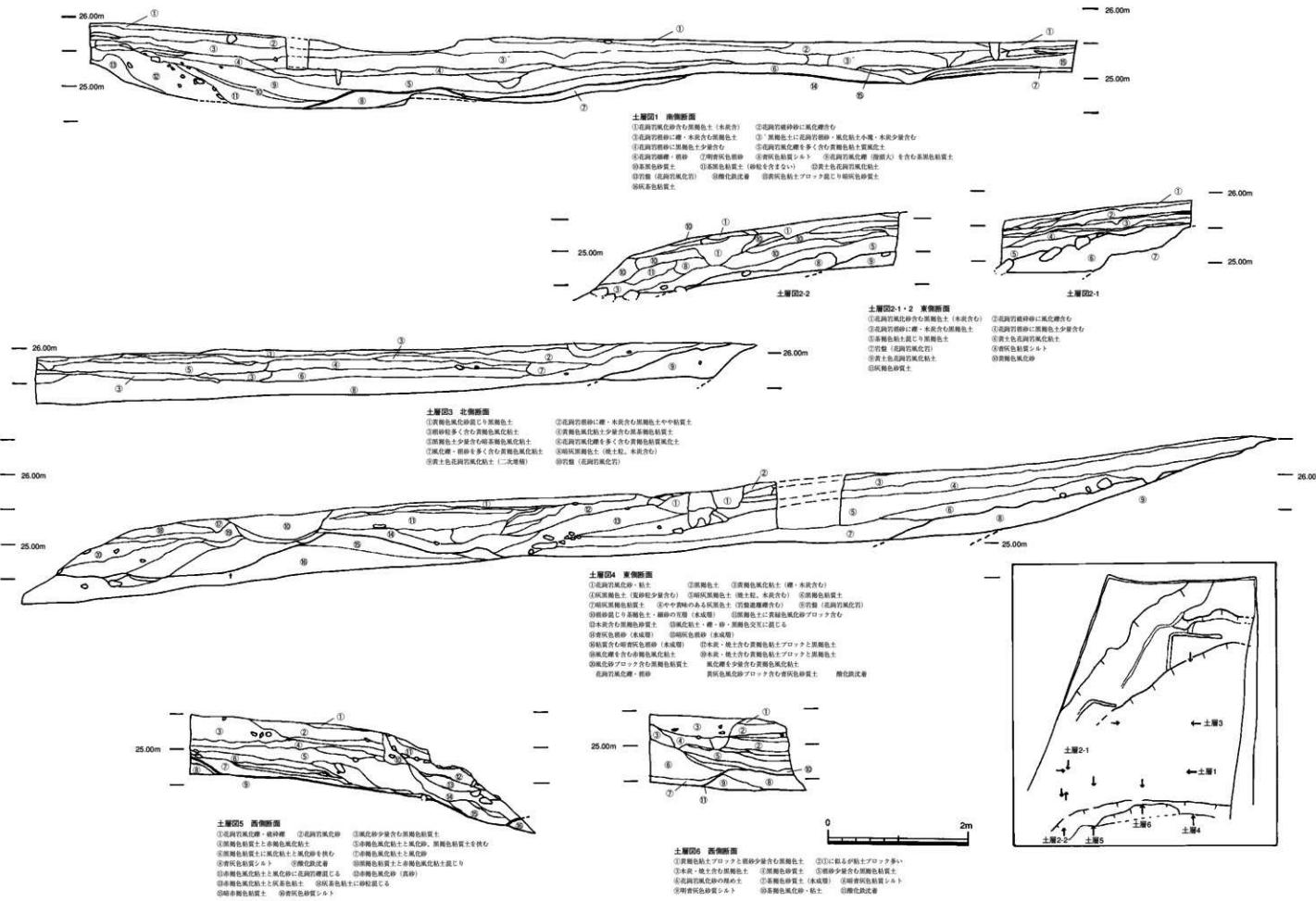


Fig.13 テラスⅡ埋め立て整地土層実測図 (1/50)

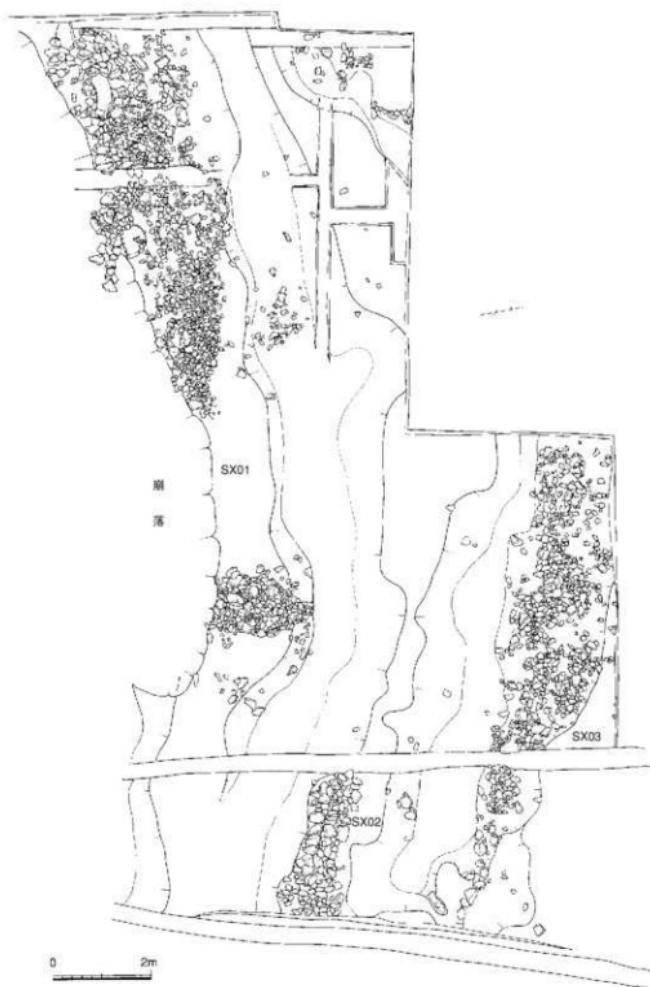


Fig.14 テラスⅡ 埋め立て整地下面捨て石列実測図 (1/100)

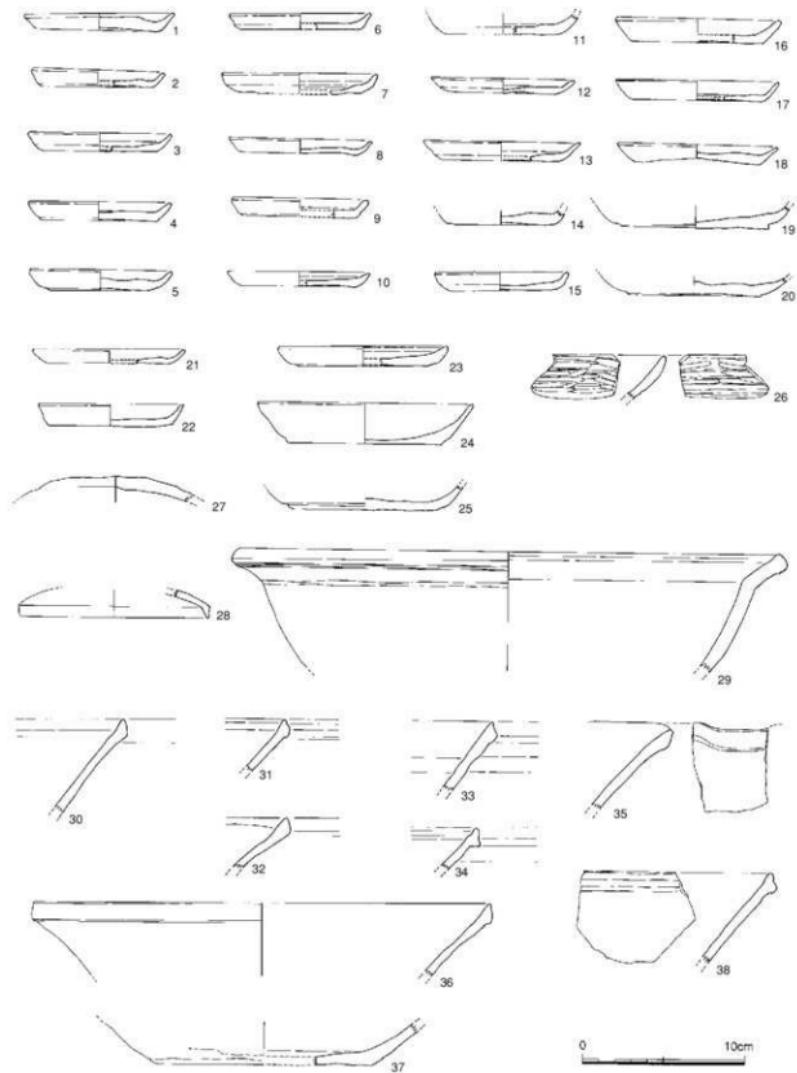


Fig.15 テラスⅡ 整地層出土遺物(1)

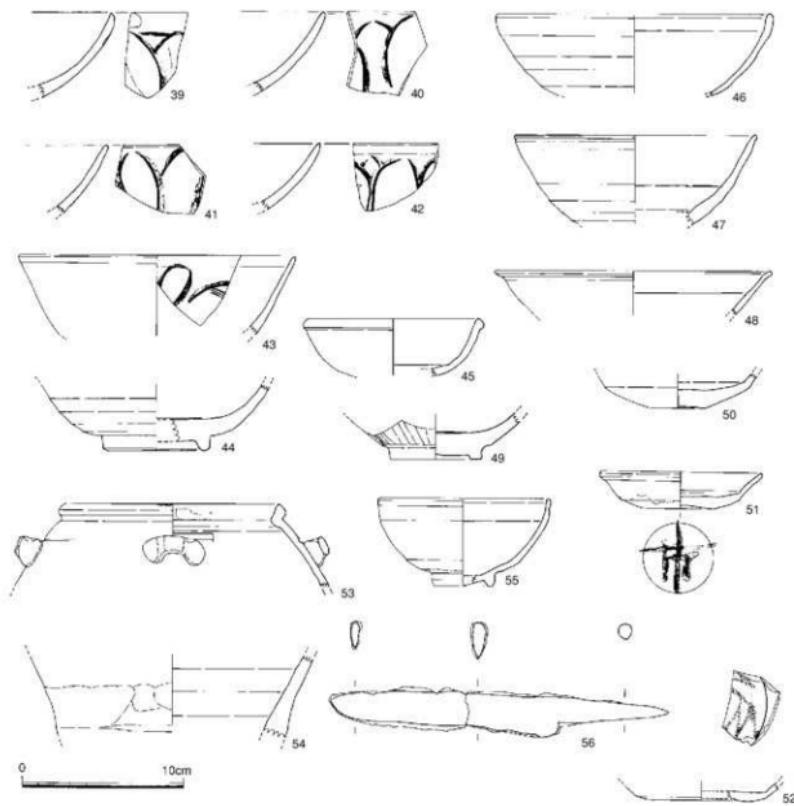


Fig.16 テラスⅡ 遺構整出土遺物(2)

の南側を埋立て、この平坦面の埋立を完了させている。

**SX02 (Fig.14・17-9, PL.3-2, 4-1・3~5, 5-5)**

谷の自然堆積上に作られた土手(堤)状の遺構である。西側にのみ大振りでやや扁平な碟をほぼ平坦に配している(PL.4-4)。一部未調査であるが、谷中央部には捨て石が見られず、水成青灰色粗砂の堆積で、土手(堤)状の高まりとして認識される。不整碟を大量に堆積させているSX01・03とは性格を異にするものであろう。上面には酸化鉄層が見られる。埋立前には谷部分を横断する通路の役割もあったものと思われる。図示したFig.17-9は青灰色粗砂から出土したもので、糸切り底土師器皿で、ほぼ13世紀代のものであり、埋立造成の始まる直前の時期を示すものである。

**SX03 (Fig.14・17-10~17, PL.4-1・2, 5-2)**

埋立に関する最初の捨て石列である。一部未調査であるが、谷中央部を中心に北側に傾斜し

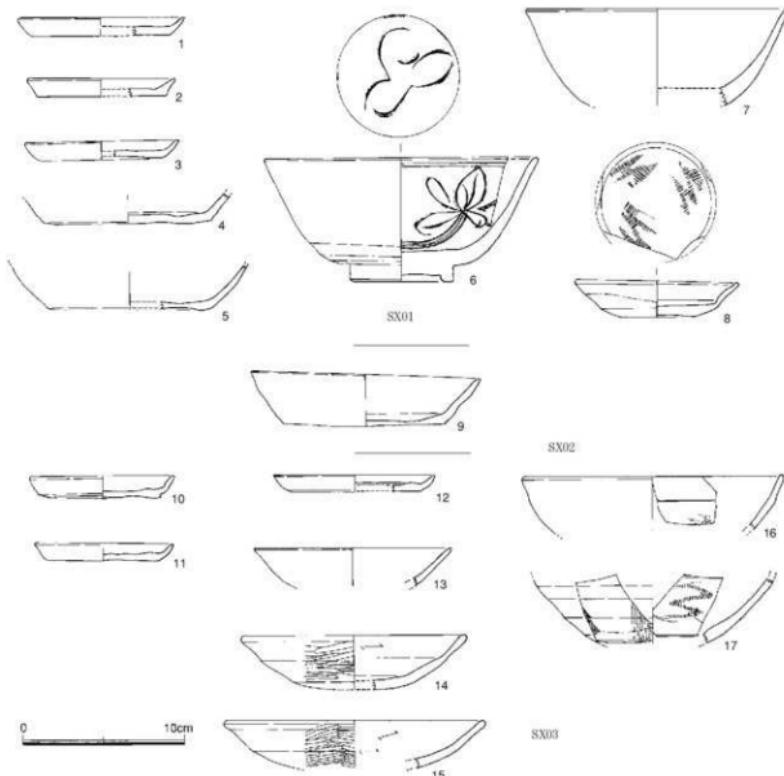


Fig.17 テラスⅡ 捨て石列出土遺物

た形で大量の礫が幅約2mで堆積し、東西の地山に接する部分については薄くなる。東端では地山傾斜の裾部に少量の礫が散漫に見られる(PL.5—2)が、西端では大振りの礫が目地をそろえ石垣状に並ぶ(PL.4—2)。礫堆積の中からFig.17に図示した遺物が出土している。10・11は礫堆積上面から出土したもので、いずれも外底に板目圧痕をもつ糸切り底土師器小皿、12~17は礫堆積中から出土したもので、11が糸切り底土師器小皿、13~15が瓦器碗、16・17が内外面に櫛描き文をもつ同安窯系青磁碗である。

#### SX01 (Fig.14・17—1~8、PL.2・3)

テラスⅡ埋立造成の最終段階の石垣状石列である。南から流れ込んだ水成シルト堆積の北端部にアーチ状に大量の礫を配している。東西の両端は傾斜がきついものの地盤が安定しており、特に西側はテラスⅡ'の平坦面につながり礫は見られない。東側では大きく北側に屈折する。シルト堆積で地盤が不安定な谷中央部分には、より強固な構造として全面に大振りの礫を石垣状に配置し、その背面に2~3回に分けて裏込め石を埋めている。しかし、テラスⅢの表土除

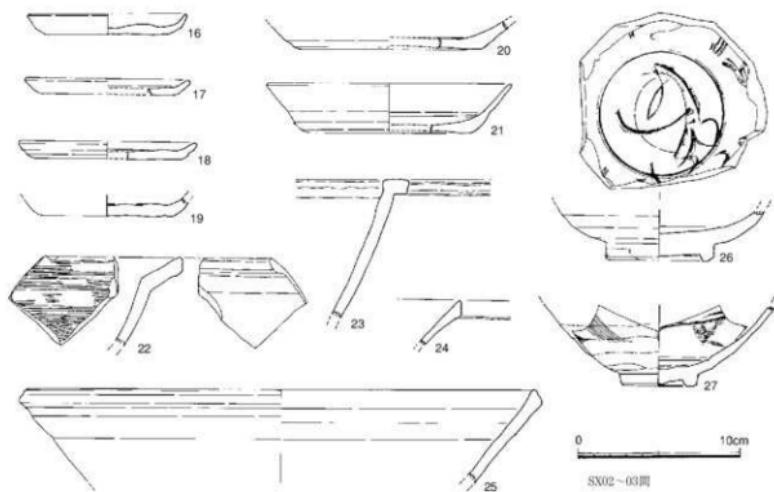
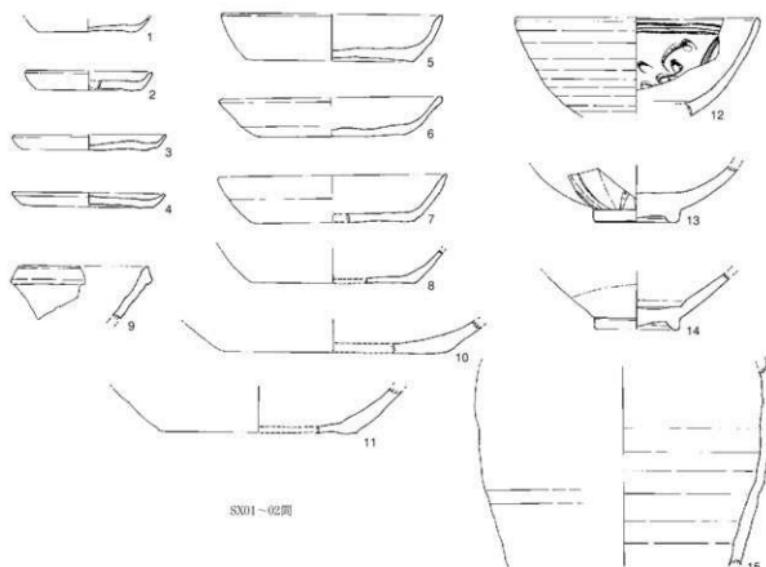


Fig.18 テラスⅡ 捨て石列間出土遺物

去の際、水の滲出による影響でシルト堆積が大きく崩落し、石列の一部も崩落した。現況では前面の石は最下段しか見られないが、この地盤の不安定な状況からすると、本来は棚田状の石垣構造であったものが北側に崩壊し、現況を呈しているものと思われる。裏込めの礫に混じって遺物が出土しており、Fig.17-1～8に図示した。

1～5は糸切り底の土師器皿で、口径10cm弱の小皿と15cm弱の2種類がある。6・7は龍泉窯系青磁碗で、6の内底と体部に片切り彫りの花文があり、7は文様不明である。8は同安窯系青磁皿で内底に櫛掻き雷光文をもつ。

#### 埋立整地

テラスIIは前述のSX01・03の築造と並行して埋め立てられ平坦面となった。この埋立整地層からは多量の遺物が出土しており、以下整地層（Fig.15・16）、SX01～02間・SX02～03間（Fig.18）に分けて述べる。

#### 整地層出土遺物（Fig.15・16）

1～25は土師器皿でいずれも糸切り底である。口径は概ね9cm、10cm、13cm前後の3種類がある。26は瓦器碗、27・28は須恵器杯蓋である。29は土師質土鍋である。30～38は東播系須恵質陶器鉢で、35は片口の注口である。39～45・49は龍泉窯系青磁碗である。外面に鎬をもつ蓮弁文を描くもの（39・49）と、鎬をもたないもの（40～42）や、内面にヘラ描き花文をもつもの（43・44）、口縁部が外側に肥厚する小碗（45）などがある。46～48は白磁碗で46は口縁部がやや肥厚するもの、47は内底の釉を輪状に搔き取るもの、48は薄手で口縁端が外反するものである。50は龍泉窯系青磁皿、51・52は内底に櫛掻き雷光文をもつ同安窯系青磁皿で、51の外底には「市」ともみえる墨書がみられるが、明確ではない。53・54は中国製陶器四耳壺である。55は国产の天目碗で体部は丸みを持ち、底作りは浅い。56は刃渡り15cmの鉄製刀子である。55・56は整地層内で隣接して出土している（PL.7-3）。

#### SX01～02間・SX02～03間整地層出土遺物（Fig.18）

1～15はSX01～02間出土遺物である。1～8は土師器皿で、口径8cm、10cm、14cm前後の3種類がある。9～11は東播系須恵質陶器鉢である。12・13は龍泉窯系青磁碗で、12は内面に割花文、13が外面に鎬蓮弁文をもつものである。14は白磁碗で内底と体部間に段をもつ。中国製陶器壺の胴部破片である。16～27はSX02～03間出土遺物である。16～21は土師器皿で、口径10cm、15cm前後の2種類がある。22・23は土師質土鍋で、22は内面ハケ目調整で口縁は「く」の字形に外反する。25は口縁端が水平に短く外反する。24・25は東播系須恵質陶器鉢である。26は龍泉窯系青磁碗で内面にヘラ描き花文をもつ。27は同安窯系青磁碗で外側に櫛掻き文をもつ。

#### テラスI' 整地層出土遺物（Fig.19）

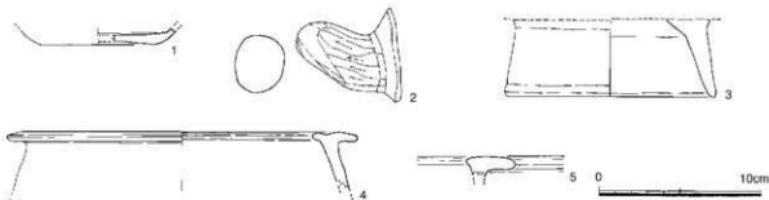


Fig.19 1区（テラスI'）出土遺物

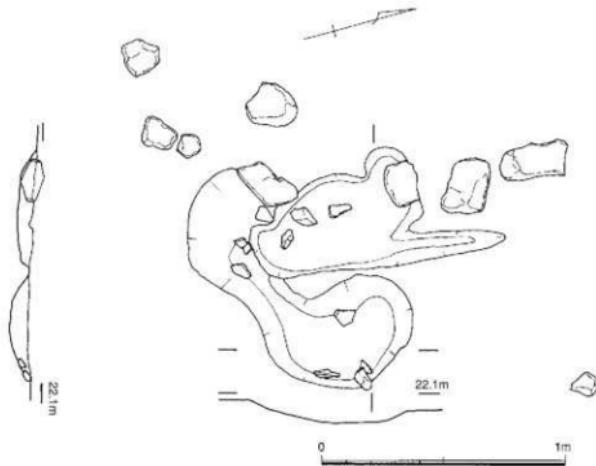


Fig.20 2区(テラスⅢ) SX01 (1/20)

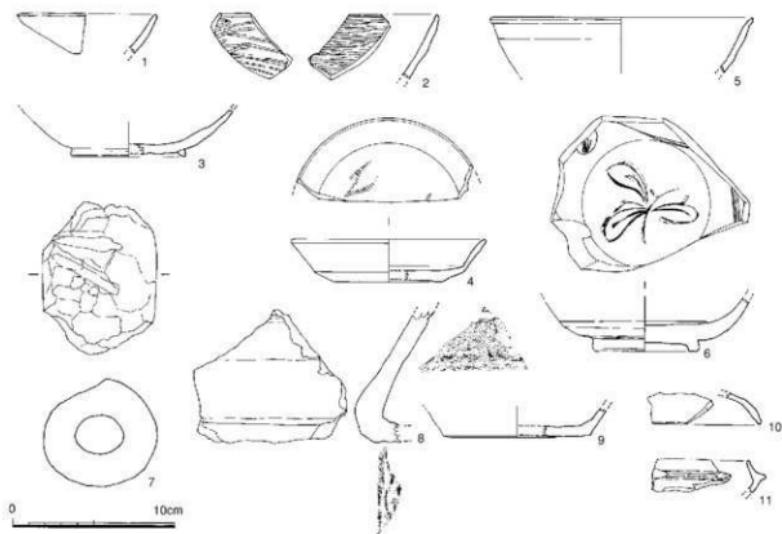


Fig.21 2区(テラスⅢ) 出土遺物

テラスⅠ'では遺構は検出されていないが、整地層から少量の遺物が出土している。1は口禿になる白磁皿の底部破片、2・3はそれぞれ土器の把手、皿の脚部破片である。4・5は弥生中期の甕の口縁部破片である。遺物量は少ないものの、周辺に弥生時代遺構の存在した事

を示しているが、造成によりすでに遺構は存在しないものと思われる。

### 3) 2区(テラスⅢ)の調査

2区(Fig.22・23)は、中世の埋め立て造成が行われ建物等の遺構が確認された谷上半部(1区)の、北側の段落ちにあたり、埋め立て造成は見られず、東西の丘陵裾に挟まれた狭い谷部に、水成砂が堆積して出来たやや平坦な面で、テラスⅢと呼ぶ。テラスⅢの南側、テラスⅡとの境は先述したように谷地形に通例の水道となり、またシルト質の地盤は不安定であったため、表土除去の段階で崩落を起こし状況を明確にすることは出来ない。しかし中央部に谷を東西に直線的に横断する土手状の高まりがみられ、テラスⅡにおけるSX02のように、この南側は水溜状になっていたものと思われる。テラスⅢは湿地状の地形から遺構は少なく、わずかに2基を擬遺構として遺構番号を付した。また、テラスⅡとの境西側に地山を削った小さな平坦面(テラスⅡ')もつくられているが遺構はみられない。以下検出遺構と出土遺物について述べる。なお遺構番号は区ごとに付したため、1区と重複する。

SX01 (Fig.20, PL. 7-5)

土手状高まりの北側に接して検出したもので、不定形の浅い2つの窪みからなり、大振りの



Fig.22 2区全景(空中写真)

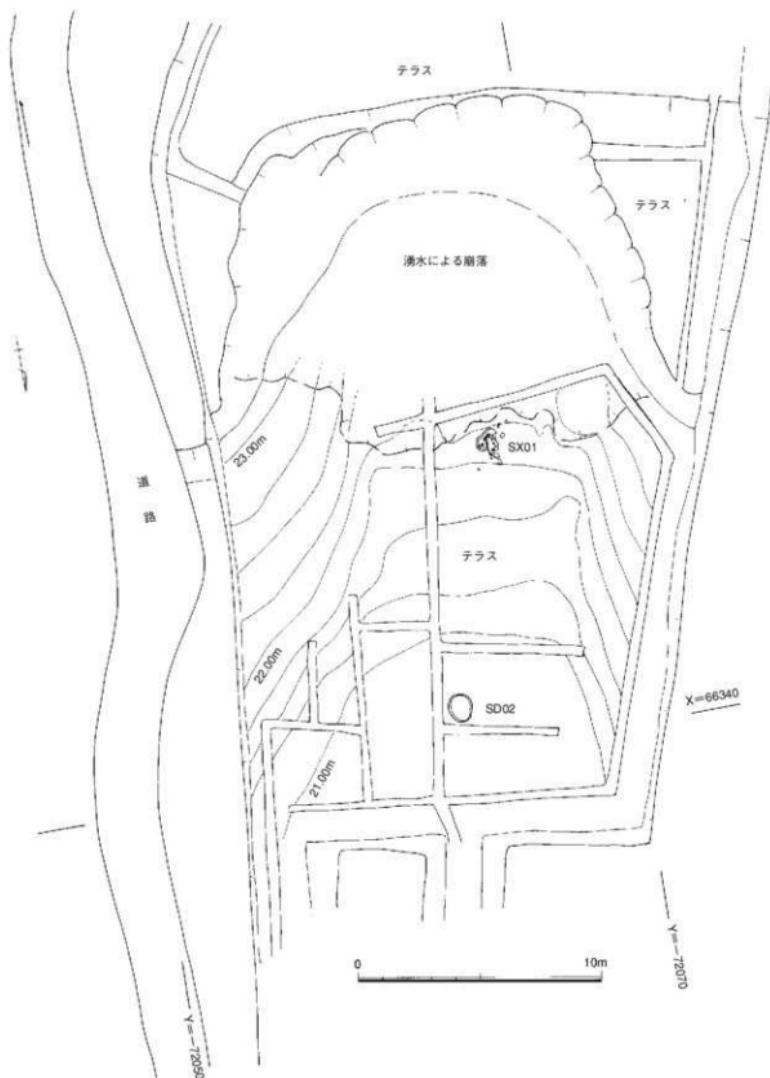


Fig.23 2区全体平面図 (1/200)

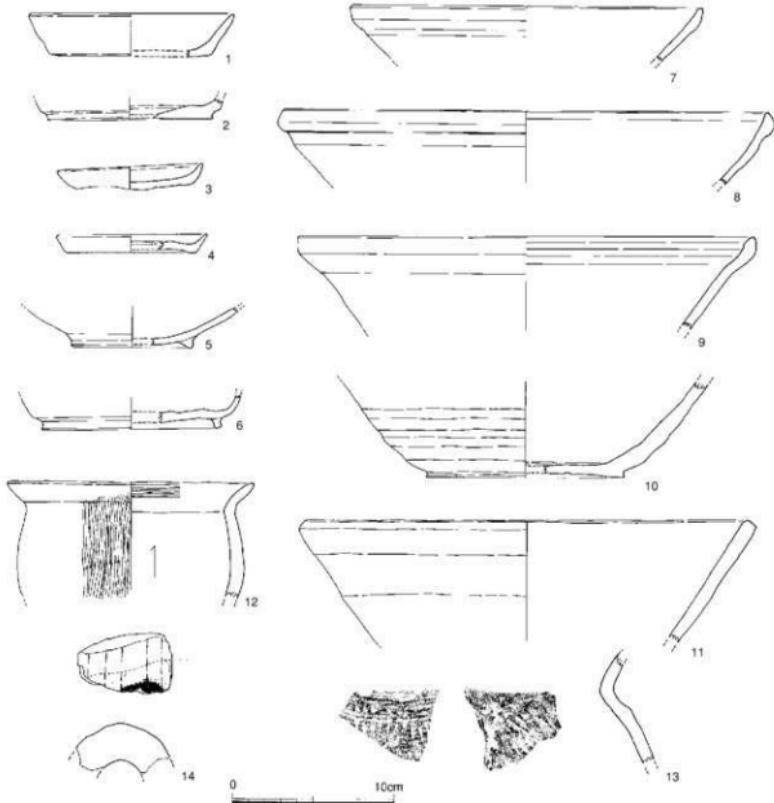


Fig.24 表土採集遺物 (1)

火熱を受けた花崗岩礫が周辺に散在する。窪みの中から輪の羽口 (Fig.21-7) や若干の鉄滓が出土しており小規模な鍛冶炉を思わせるが、立地からして炉の存在は想定しがたく、むしろ周辺に存在した炉の構成部分が水路の窪みに堆積したものとするのが妥当であろう。

#### SK02 (PL. 7-6)

径 $1.4 \times 1$  m、深さ 5 cm 程の、シルト質砂の堆積にみられた浅い皿状の窪みで、黒褐色土が堆積する。微細な土器片が出土しているが、人為的な遺構とは考えにくい。

#### 2区（テラスⅢ）出土遺物 (Fig.21)

確実な遺構は検出できなかったものの、確認作業段階で遺物が採集されている。これらはいずれも流れ込みによるものである。1～3は瓦器碗、4が内底に櫛描き雷光文をもつ同安窯系青磁皿、5が小破片で文様不明であるが、同安窯系青磁碗、6は内面にヘラ描き花文を施す龍泉窯系青磁碗である。7はSX01の窪みから出土した輪の羽口である。8・10・11はそれぞれに須

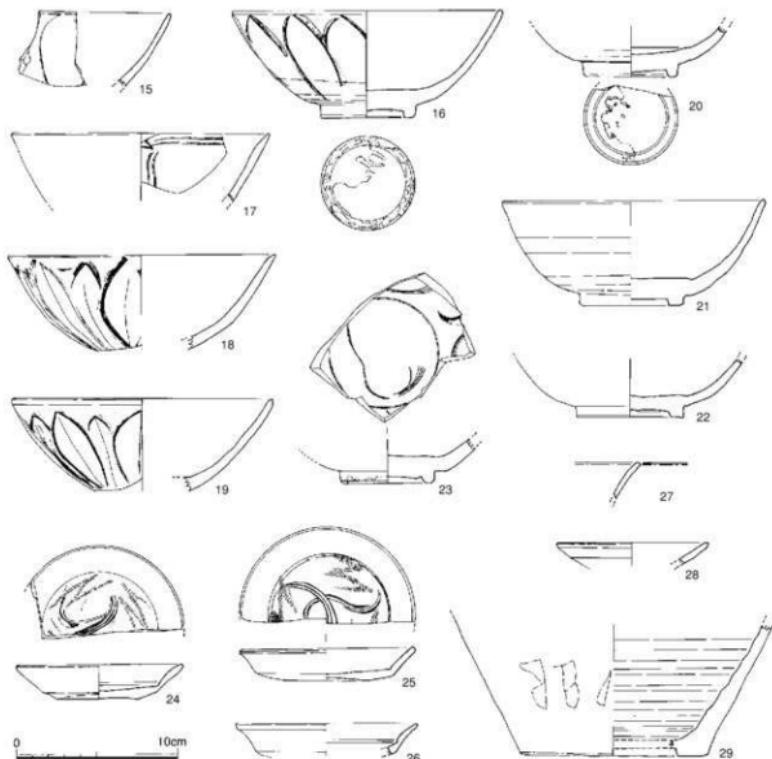


Fig.25 表土採集遺物（2）

恵器の壺、杯蓋、杯身である。これらの古墳時代遺物は、谷を囲む丘陵状に所在する桑原石ヶ元古墳群に由来する遺物である。9は東播系須恵質陶器鉢の底部破片である。

#### 4) 遺構外出土遺物

以上、遺構及び整地層から出土した遺物について述べたが、表土除去の段階で採集された遺物も多く、ここではそれらについて紹介する (Fig.24・25)。

1～4が糸切り底土師器皿、5が貼り付け高台をもつ瓦器碗、6が高台付きの須恵器杯身、7～10が東播系須恵質陶器鉢である。11は土師質の鉢である。12が土師器壺で内面ヘラ削り、外面ハケ目調整を行う。13が須恵器壺、14が輪羽口である。15～22は龍泉窯系青磁碗である。15・16は外面にヘラ描きの単弁の蓮弁文をもつもの、18・19は複弁の鎧蓮弁文をもつもの、17・23は内面に劃花文をもつもの、20～22は無文である。24～26は同安窯系青磁皿で内底に描書き文をもつ。27は口禿の白磁皿、28も白磁皿、29が中国陶器壺で、抉り込みにより幅広の高台をつくるものである。

## 4.まとめ

第4次調査地点は、九州大学移転用地275haという広大な面積の中で、丘陵に囲まれた谷頭ごく一部にすぎないが、鎌倉時代末から室町時代にかけての元岡丘陵の歴史的環境を示唆する資料が得られた。遺物は中世を中心に、弥生時代から室町時代までのものが出土しており、以下各時代ごとに簡単にまとめておきたい。

弥生時代の遺物は、中期の壺破片が2点みられたにすぎない。地勢から集落があったとは考えにくく、周辺の小規模な壺棺墓地からの流れ込みの可能性がたかく、南側丘陵尾根に築造された桑原石ヶ元古墳群21号墳丘盛土に当該期の壺破片がみられること（文献1）から、丘陵尾根が故地と考えられる。既に古墳築造時に壺棺墓地は破壊されているものと思われる。

須恵器など古墳時代遺物も出土しているが遺構はみられず、前述のように丘陵尾根に築造された桑原石ヶ元古墳群に由来するものであろう。

古代の遺物としては、奈良時代を中心として土師器壺、須恵器、輪羽口、鉄滓等がみられるが明確な遺構は検出できていない。九州大学移転用地内では、これまでの第7次、12次、24次調査などで大規模な製鉄遺構が確認され、この地域が一大鉄製産地であったことが確認されているが、本地点での出土量は少ないものの、小規模な鍛冶炉等があった可能性がある。

本地点で検出できた遺構と遺物のはほとんどは、ほぼ鎌倉時代から室町時代（13~14世紀）にかけてのものである。一般集落の居住空間としては実に条件の悪い、日当たりが悪く水気の多い谷頭を、埋立整地してまで平坦面をつくったのはどのような理由によるものであろうか。

出土遺物には一般集落と同じように土鍋やコネ鉢、片口などの生活用具も多いが、一方中国製の陶磁器の量がきわめて多いのが特徴的であり、また国産品ではあるが天目碗の存在も見逃せない。遺物のあり方からすれば、貿易陶磁を多量に受容し、茶を嗜む階層、すなわち武士の居住空間であったと推定される。

中世の各時期において糸島半島は軍事的な要衝とされ、本地点の北側には郡内の拠点城郭である「柑子岳城」、東に隣接した桑原字別所には単郭構造の小規模な山城である「戸山城」、その南にある元岡水崎山には同様の「水崎城」など、志摩郡内に十指に余る城が知られている。また、南北朝初期の元岡に関する史料の一つに「筑前国本岡城郭・志登社領家・同地頭職を松浦佐志源藏人披に充行う」觀応元年（1350）九月十一日足利尊氏充行状案（有浦文書、『南北朝遺文』二八四五）があり（文献2）、尊氏と直義・直冬が対立した觀応擾乱の時期「本岡城郭」の存在したことでも知られている。「本岡城郭」の具体的な位置、構造は明らかでないが、古今津湾に面した元岡の丘陵、特に石ヶ元古墳の営まれた痩せた丘陵尾根が総体として城郭の役割を担ったものと思われる。古墳の破壊、すなわち尾根の急峻化がこの時期に行われていることは、古墳周辺から中世陶磁器が出土している（文献1）ことから明らかである。

これらのことから、本地点の中世遺構の性格は「本岡城郭」の守備に当たった武士団の兵営的なもので、掘立柱建物も居住のみならず既に役割も兼ねていたものと考えたい。

ともあれ、元岡丘陵の中世遺跡の一部を調査したにすぎず、今後の調査の進展を期待したい。

### 参考文献

1. 「元岡・桑原遺跡群2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第744集 福岡市教育委員会 2003
2. 「筑前国怡土庄故地現地調査速報」地域史料叢書4 服部英雄編 1999



第4次調査地点全景（空中写真、北から）



1 捨て石列SX01検出状況（北から）



2 捨て石列SX01検出状況（北から）



3 捨て石列SX01検出状況（北から）



4 捨て石列SX01検出状況（西から）



5 捨て石列SX01検出状況（東から）



6 捨て石列SX01部分（西から）



1 捨て石列SX01～3全景（北から）



2 捨て石列SX01～3全景（西から）



1 捨て石列SX03全景（東から）



2 捨て石列SX03全景（西から）



3 捨て石列SX02上面（北西から）



4 捨て石列SX02下面（西から）



5 土層断面4 北半（北西から）



6 土層断面5（東から）



1 土層断面1（北西から）



2 土層断面1・2-1（北西から）



3 土層断面4 北半（西から）



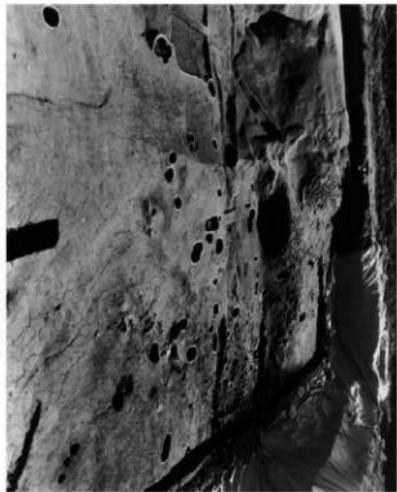
4 土層断面5（東から）



5 捨て石列SX02検出状況（北西から）



6 土層断面5・6（東から）



1 SB26, 27全景（西から）



2 SB26, 27全景（東から）



3 SB26, 27全景（北から）



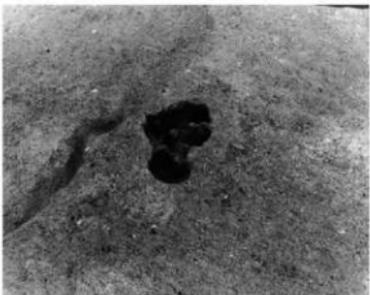
1 1区 SK06 (南から)



2 1区 SP19遺物出土状況 (北から)



3 1区 天目碗出土状況 (西から)



4 1区 SK05 (東から)



5 2区 SX01 (北から)



6 2区 SK02 (北から)



Fig.15-5



Fig.15-24



Fig.15-25



Fig.15-20



Fig.16-45

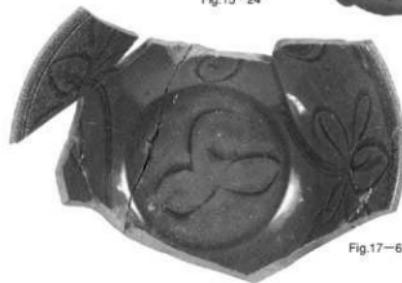


Fig.17-6

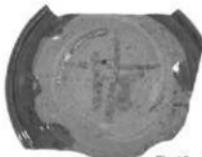


Fig.16-51



Fig.18-26



Fig.18-27



Fig.17-8

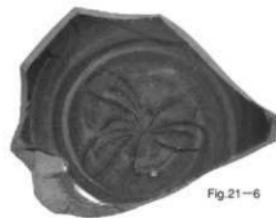


Fig.21-6



Fig.21-7

出土遺物

## IV 第8次調査の記録

(元岡古墳群M-1号墳)



## 1. はじめに

第8次調査は平成10年9月16日に調査に着手した。調査地点は一度伐採がなされていたが数年の間放置され、孟宗竹が全面を覆っていたので、その除去に手間取り掘り下げ始めたのは10月に入ってからであった。現況は古墳中央部の石室のある部分が大きく陥没していた。まず石室内の搅乱を取り除き、石室の遺存状況を確認した。側壁が一石遺存するだけで石材のほとんどが持ち去られていた。同時に地形測量を行う。その後石室の調査、墳丘の調査を行い平成10年12月25日に終了した。

## 2. 位置と現状

調査地は大学移転予定地のほぼ中央部に位置する。市道の元岡から桑原へ抜ける学園通り線の西側丘陵の尾根上には石ヶ元古墳群32基が展開する。その17~19号墳から南東に派生する丘陵の先端に元岡古墳群M-1号墳があり標高32m前後を測る。この古墳は1基だけ、群を構成することなく丘陵先端部に単独で占地する円墳である。丘陵の頂部は自然地形を留めるが、傾斜面は果樹園造成により、階段状になっていたが果樹園の放棄により竹林へと変貌し、鬱蒼とした山林となっている。

古墳の盛り土は比較的良好に遺存しているが、墳丘中央部を南北に貫通する搅乱坑がある。福岡城築城に伴なう石抜きと思われ、石室は大きく破壊され石材もほとんど残っていない、側壁が一個残存するのみである。

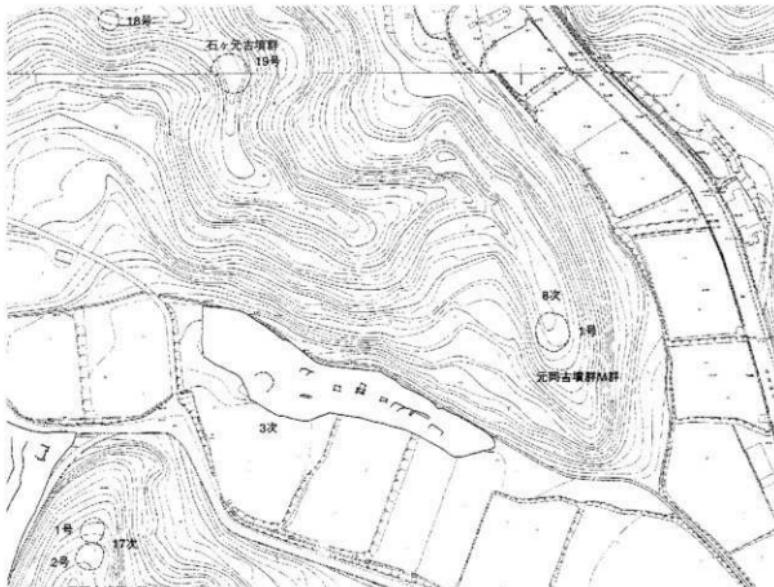


Fig.1 第8次調査地点周辺地形測量図 (1/1,000)



Fig.2 1号墳現況地形測量図 (1/200)

### 3. 古墳の調査

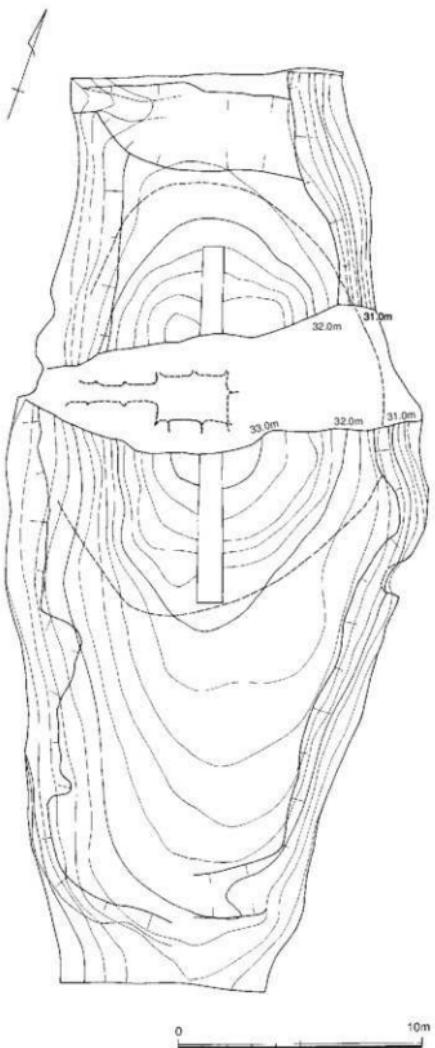


Fig.3 1号墳墳丘遺存状況図 (1/200)

#### 1) 墳丘 (Fig.2、PL.2)

北側から南に緩やかな傾斜を示す脊尾根に構築されているため、北側に浅い周溝を巡らし、中央部に地山削り出しと盛土からなり、南北17.5m、東西14.0mを測る、ほぼ楕円形の古墳である。地山削り出し部と盛土部からなる。北側は幅3.0mの浅い周溝で限られるが、南側は溝状の窪みが僅かに見られるだけで、明確な周溝はない。この窪みを墳丘を限るものとすれば、平面形は南側へ大きく張り出す長楕円形をなし石室中央から南端までの長さが21mを測り、北端までの長さの倍近くになり、異様な古墳となる。墳丘の裾としたところまでを古墳の範囲としたほうが妥当であろう。東西の裾部は開墾により削平を受け、現状で径14.0mを測るが、本来は17、18mの規模であろう。墳丘の高さは2.3mを測るが、大部分は地山削り出しで、盛土は最も厚い墳頂部で0.6mを測るに過ぎない。盛土は基盤層の赤褐色～黄褐色土と黒褐色土を互層に積み上げ、版塗状となるが、突き固めた状態は観察できなかった。漢道の前方と奥壁側、すなわち丘陵の東西斜面側は後世の掘削により旧状を留めていない。

#### 周溝 (Fig.5)

周溝は浅い溝状の掘り方である。古墳が瘠せ尾根上に立地するため馬蹄形の溝は構築していない。丘陵の高い方、すなわち北側に東西方向に丘陵を切断するように直線的に延びる溝がある。尾根中央部で幅3.2m、深さ15cmを測り、断面は皿状をなす。地山が岩盤の礫層であるためか浅い掘り方で、東、西の端は幅を狭め浅くなって収束し全長約15mである。南側は墳丘裾を削り出したままで周溝は

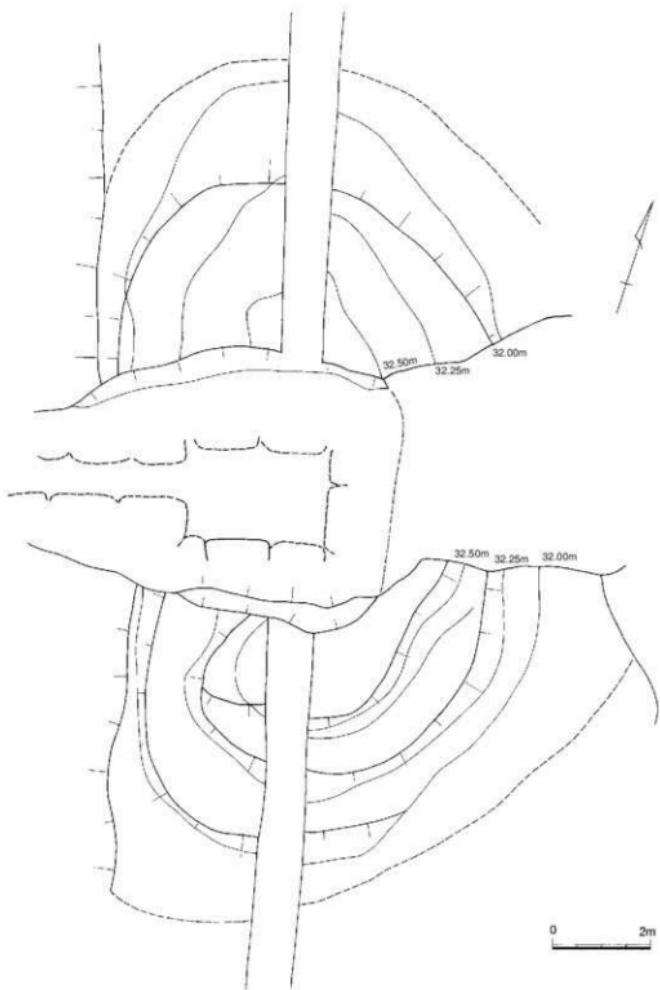


Fig.4 1号墳地山整形測量図 (1/100)

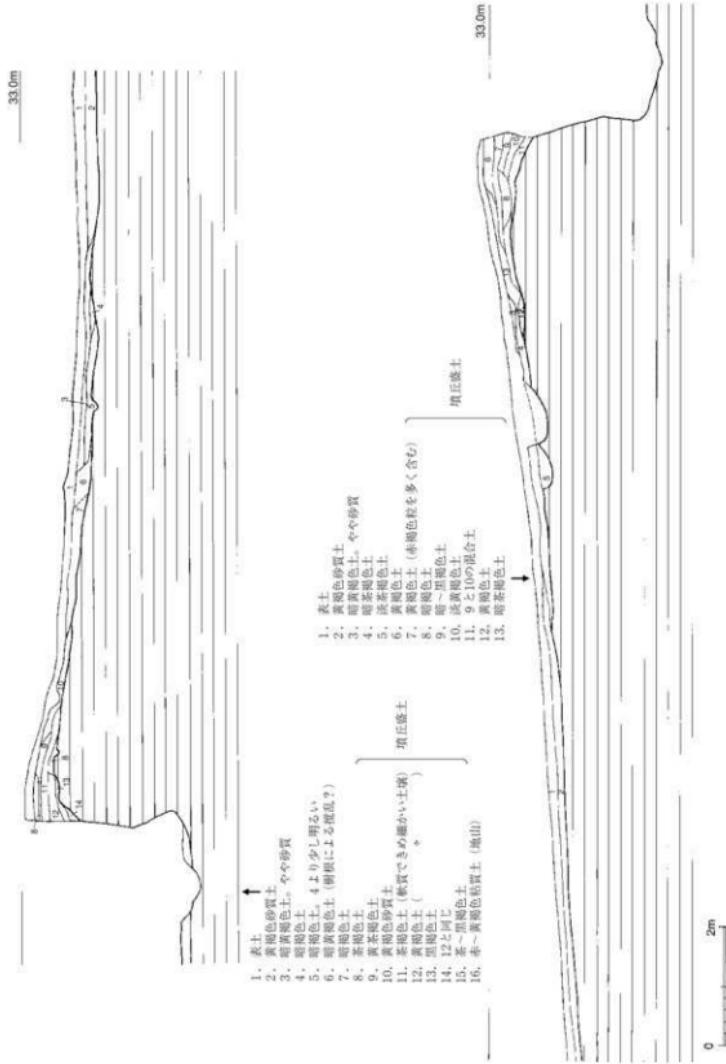


Fig.5 1号堆積丘土壤実測図 (1/80)

設けない。そのため古墳の範囲が不明瞭であり、当初は丘陵先端の周溝状の浅いくぼみを周溝と考えていたが、あまりに南側へ張り出し変形になること、また墳丘盛土が中央部だけしかないことから、この窪みは周溝とは考えない方が妥当であろう。

#### 地山整形 (Fig.4)

古墳は石ヶ元古墳群から南東に派生する脊尾根の丘陵先端頂部に位置し、丘陵の延びる方向と直交して石室を築いたものである。古墳築造のための地山整形は北側丘陵基部を周溝状の深い溝で区画している。盛土のある古墳中央部は標高32.5m前後の高さで平坦にし、その周囲を削り出すことで墳形を整えている。北側は石室中心点から2.85mの位置で石室の掘り方が掘り込まれ、その北側は6.3m付

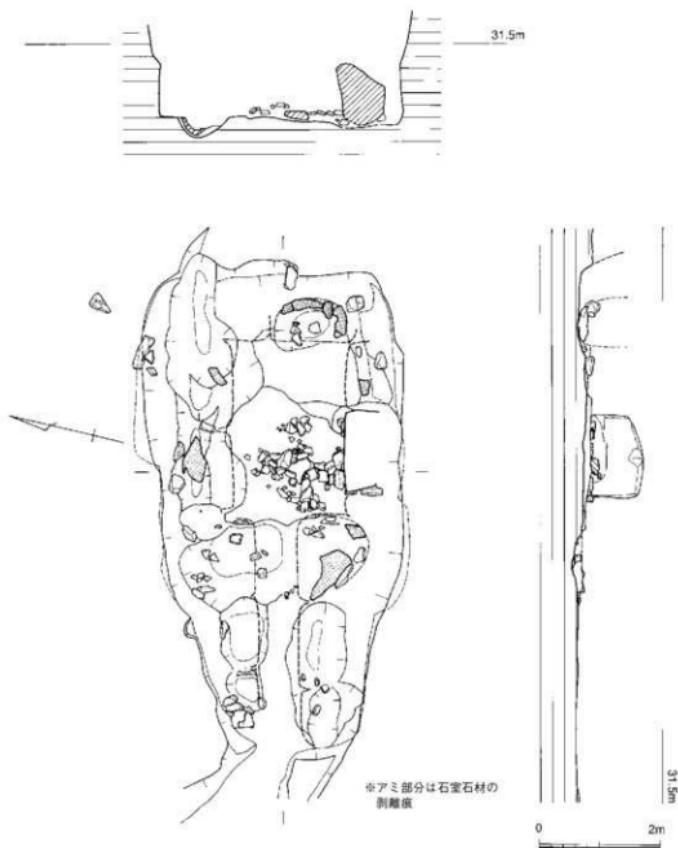


Fig.6 1号墳石室実測図 (1/80)

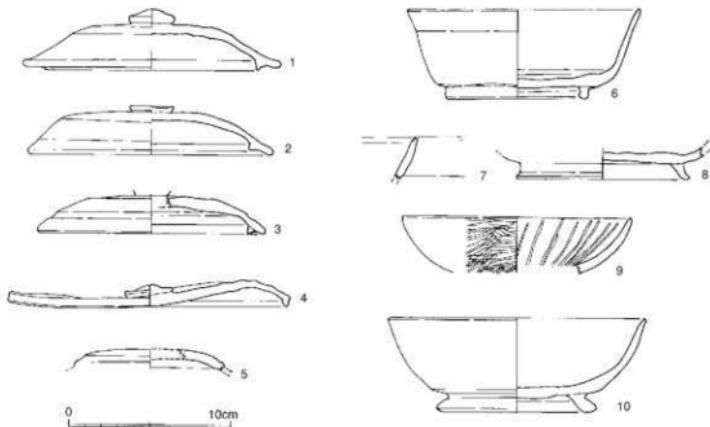


Fig.7 1号墳出土遺物実測図1 (1/3)

近まで平坦となる。北側の周溝との間は傾斜をもって削られ周溝へと続く。南側の造成もほぼ同じ状況を示すが、三段に整形する。一段目は墳頂部の狭い範囲である。二段目の段との間を浅い溝状のくぼみを設ける。三段目は緩やかに地山を整形し墳丘端部へと続く。

## 2) 埋葬施設

### 石室の掘り方

墓壙は石室より一回り大きく掘り込まれている。東側の掘り込みは擾乱により不明であるが、平面形は羽子板状である。玄室の壁面はほぼ垂直であるが、羨道部はやや傾斜を持つ。石室の掘り方の規模は長辺5m、短辺5.5m、羨道部は幅3.2m、長さ3.5mである。もっとも深いところで地山を2.2m掘り下げているが、地山の上に60cmの盛土を行い、見かけ上はかなり大きな古墳である。

### 石室 (Fig.6, PL.3)

石室は中央部を東西に貫通する大きな擾乱があり、石室の長軸に沿うよう掘削され大きく陥没し、石材はほとんど遺存していない。南側の側壁とその部分の床石が僅かに遺存し、また石材の抜き取り時の側壁基底部の石材剥離痕から大まかにその平面形態が理解出来る。

主軸をN-78°Wにとり、西方に開口する両袖の横穴式石室である。側壁一枚しか残っていないが、石材の抜き跡からおおよそ全長4.8m、玄室幅1.8m、長さ2.8m、羨道部幅0.8m、長さ3.8mを測るものと推測される。掘り方から奥壁二枚、南、北壁三枚を用いていたものであろう。南側の遺存している側石は横1.41m、縦0.98m、厚さ0.72mを測る大振りな石材であることから、他の腰石にも同様の規模の石材を用いて石室を構築していたものであろう。玄室の形状は長方形を呈しており、長幅比1:1.5である。南側壁周辺の部分には敷石が残り20~30cm位の扁平な板石や、その上に拳大の小砾が一部残ることから礫敷きの床で数回の追葬が行われたことが推測できる。羨道はその掘り方から幅は0.8mと推測したがもう少し広くなる可能性もある。長さは3.8mと長く、直線的に延びる。両側壁とも三石を用いたものと推測できる。墓道は地山を掘り込み、断面「U」字状をなす。幅1.2mほど

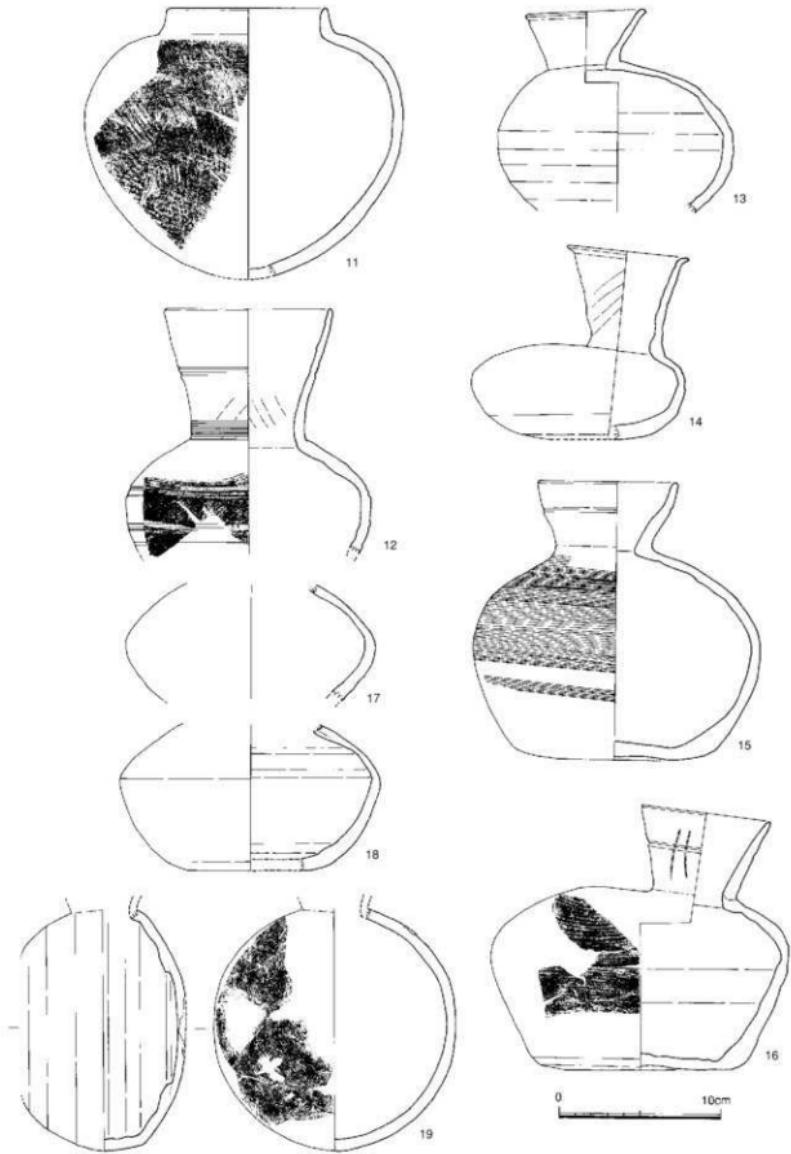


Fig.8 1号墳出土遺物実測図 2 (1/3)

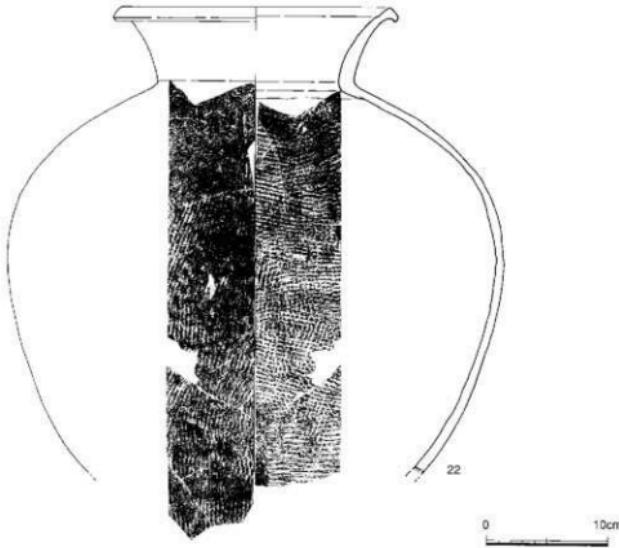
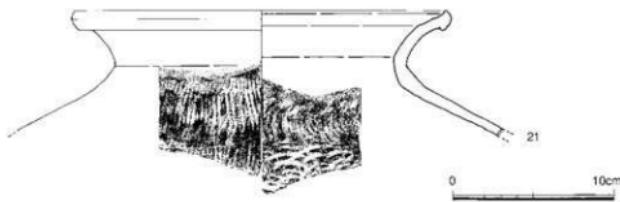
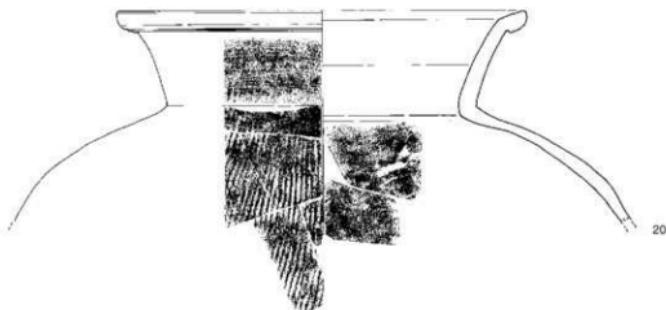


Fig.9 1号墳出土遺物実測図3 (1/3・1/4)

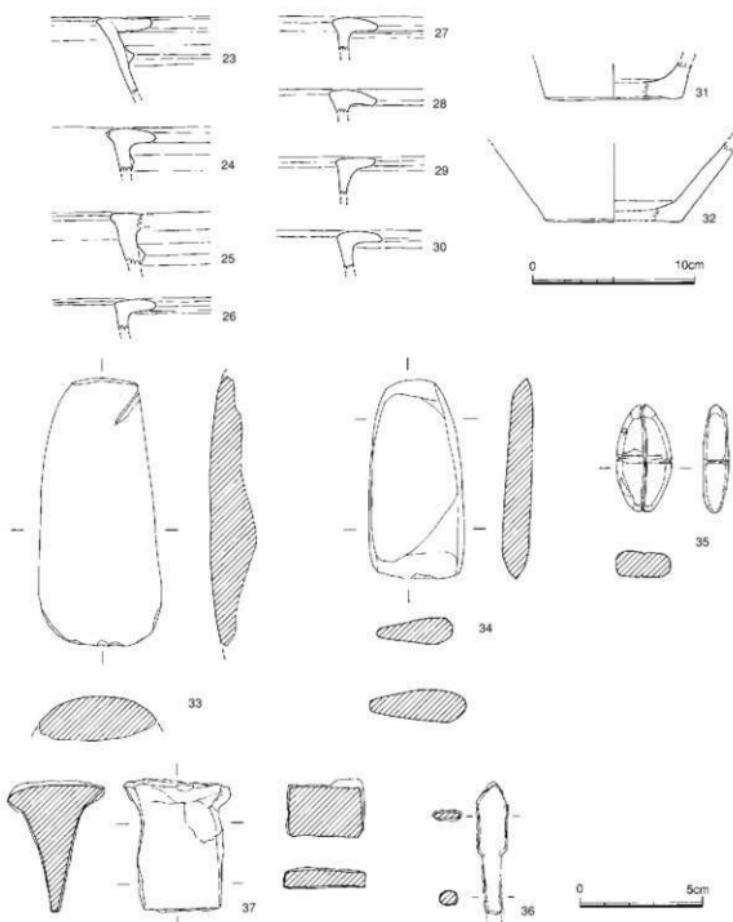


Fig.10 1号墳出土遺物実測図 4 (1/2・1/3)

残り、少し西側へ振れているが、その先は削平により消失している。以上のように玄室、羨道の構造や構築方法も不明で閉塞施設も遺存していない、さらには出土遺物も本来の位置を保ったものではなく、土器類は羨道の南側埴丘上に掻き出されて、うずたかく積まれた土砂の中からの出土である。よって古墳の規模や形態、時期については不明なところが多い。

### 3) 出土遺物 (Fig.7~10)

出土遺物は本来の位置を保つものではなくすべてが石室の搅乱土および石室から搔き出されて墳丘に廃棄された土砂の中からの採集品である。

#### 須恵器 (Fig.7~9)

1~3はかえりのある壺蓋である。1は中央が尖った低い菱形のつまみがつく蓋である。口径15.8cm、器高3.7cmを測り、天井部と体部の境に緩やかな棱をもち、かえりは浅い。天井部はヘラケズリ、体部から口縁は回転ナデ、内面はナデ調整である。2も同様な蓋であるがかえりが小さく、つまみが扁平となる。口径15cm、器高3cmを測り、調整は同じ。3は口径14cm、器高2.3cmを測り、やや小振りな蓋である。つまみは取れて、かえりはやや大きい。4は天井部が扁平で、口縁端部を折り曲げ断面三角形に仕上げる。焼き歪んでいるが、本来扁平な形態であろう。6、8は高台付壺である。6は復元完形で口径14.3cm、器高5.5cmである。低い高台から体部は直線的に開く。底部をヘラケズリし、高台を貼り付けるが、雑にしているため、その平面形が梢円形を呈し、また底部と高台との接合の痕跡が明瞭に残る。8は高台から底部にかけての破片である。ヘラキリ後、高台を貼り付け外側へ大きく聞く。焼成は良好で黒褐色である。11は短頸壺である。丸底で球形に近い胴部に直立する口縁部がつく。口径9.8cm、器高16.5cm、胴部最大径19.6cmを測る。外面は底部から胴部上半まで平行タタキ、胴部上半はカキ目調整、口縁部は回転ヨコナデである。内面の胴部上半には一部櫛状工具で下から上へ搔きあげている。胎土には白色砂粒を多く含み、焼成良好で白灰色ないし黒褐色を呈する。12は胴部下半から脚部にかけて欠損しているが脚付壺であろう。球形の胴部に少し外傾する口縁部がつく形態である。胴部の下に1条、上に二条の幅広の沈線に挟まれた間に斜行の工具による文様を描く。頸部にはカキ目、その上に二条の沈線をもつ。内外面とも回転横ナデ、胎土には砂粒を少し含み、焼成良好で灰黒褐色である。13~16は平瓶である。13は胴部から口縁部にかけての破片で小型品である。胴部は丸みをもち、下半部にヘラケズリ状の痕跡を残し稜線を留める。14も小型の平瓶で扁平な胴部に長い口縁部を接合する。胴部下半から底部にかけてヘラケズリしている。底は丸底である。15は口縁部が一方によっているので平瓶とした。全体に厚ぼったい造りで底部は雑なヘラケズリ、胴部はカキ目調整である。口縁部は中位に沈線を巡らし外に聞く。16は最大径を胴部上半にもつ、口縁下に沈線をめぐらす短い口縁部を接合する。沈線は浅く、全周しない。また部分的に縱方向のヘラ書き文が見られる。胴部は粗いカキ目、胴部から底部の縁辺にかけてはヘラケズリ、底部中央部には指痕が残る。胎土には白色砂粒を含むが良く、焼成堅緻で小豆色を呈する。17、18は胴部から底部にかけての破片であるが平瓶類のものであろう。19は小型の提瓶の胴部破片である。扁平な胴部側面に粘土板を貼り付け、外面をカキ目調整している。20~22は壺の口縁部から胴部にかけての破片である。20は丸い胴部から外に聞く口縁部となり、端部を玉縁状に肥厚させ、内面は傾斜を強め平坦にする。胴部外面は縱方向の平行タタキ、内面は当て具痕をナデ消す。胎土には砂粒を少量含むが良好で、焼成も良く外面は灰白色、内面は黒褐色である。21は胴部から短く外反する口縁部である。口縁部は上、下につまみ出された様に尖り、外面は丸くなる。胴部の内外面にタタキの痕が残り、口縁部はヨコナデ調整である。22は比較的の残りが良く、胴部下半から口縁部までの形態を知ることができる。倒卵形の胴部で、最大径を胴部上半にとり40.6cm、残存器高38.3cm、口径23.2cmを測る。口縁部は短く外反し、端部は斜めに垂下し、平坦面を作る。胴部の内外面には平行なタタキの痕が残る。

#### 土師器 (Fig.7~9,10)

9は体部から口縁部にかけての壺の破片である。胎土は精選され、緻密で、焼成もよく明橙色を示す。外面は丁寧なヘラ研磨、内面はヨコナデの上から縱方向の暗文がある。10は復元完形の高台付

坏である。口径15.9cm、器高5.7cmを測る。坏部の底部をヘラキリして高台を貼り付けるが、底部の径より高台の径が小さいので、体部にその痕跡が残る。底部から内湾しつ、立ち上がり、口縁部は少し外反する。

#### 弥生式土器 (Fig.10-23~32)

いずれも墳丘及び表土からの出土である。遺構は伴なわないこと、小さな破片であることから古墳築造時に運ばれたものであろう。第9次調査例のように丘陵頂部に小規模な集落が存在したものであろう。23~31は壺の口縁部と胴部の破片である。23~25は口縁下部に三角突帯を貼り付け、口縁部上面を平坦にしている。26~30は口縁部上面に丸みをもたせ外端を丸く收めている。31は平底の底部、32は壺の底部である。

#### 石器 (Fig.10-33~35, PL.4)

33は粘板岩の大型磨製石斧の破片である。身の片面だけの遺存で、基部、刃部は欠損している。34は緑色片岩の扁平な小型の石斧である。刃部の一部を欠損するがほぼ完形品で全長8.1cm、幅3.9cm、重さ46gを測る。35は切目石錐である。全長4.4cm、幅2.3cm、重さ13gを測る。

#### 鉄器 (Fig. 10-36,37)

36は尖根錐の先端部の残欠である。残存長5.3cm、幅1.1cmを測り、茎の断面は長方形をなす。37は石矢で、石室からの出土である。断面が二等辺三角形で頭部が殴打のため潰れている。近世の石抜き時のものであろう。

## 4.まとめ

石室はほとんど破壊され、その構造は不明なところが多い。また出土遺物も本来の位置を保つものは無く、時期的に新しいものばかりで、築造の時期を示すものかどうか明らかではない。立地からはいわゆる群集墳では無く、終末期古墳に見られる単独に占地するものである。

これまで市域内で調査された終末期に築造された古墳を見て見よう。

柏原古墳群<sup>31</sup> - 1号墳は丘陵斜面に単独で立地する7世紀後半の古墳である。長幅比が1.2前後の矩形の石室で玄室長に等しい長い羨道をもっている。柏原古墳群は24基からなる古墳群で、その終末期築造の古墳である。

西山A古墳群<sup>32</sup> 1号墳は丘陵斜面に1基だけ単独で構築された円墳である。搅乱がひどく石室の形態は不明であるが、前面に二段の外護列石が見られる。鉄滓が副葬され、製鉄の工人集団との関連を窺わせる。

堤ヶ浦古墳群<sup>33</sup>は20基からなる古墳群で6~7世紀後葉まで築造されている。その中で8号墳は7世紀後半の築造であるが群集墳の中の1基として築かれている。石室は片袖の石室で遺物は追葬のもので築造の時期は古いと思われる。

三郎丸古墳群<sup>34</sup>は19基の円墳で構成され、その内13基の古墳を調査したが、数基を除き7世紀代の築造である。各々の古墳は2~3基単位で丘陵斜面に築かれている。石室はほぼ正方形で石室と同じかそれ以上の羨道を有している。遺物に鉄釘があり釘付けされた木棺の使用が窺われる古墳もある。

羽根戸B古墳群<sup>35</sup> 5号墳は7基の円墳で構成されるが各古墳はかなりの距離をおいて構築され、単独に占地している状況である。7世紀中頃の古墳とされ、石室プランはほぼ正方形で、羨道は石室よりも長いがその幅が石室の幅より少し狭い程度である。

7世紀前半以降に構築された古墳の概略を見てきたがそのあり方から三種に分類できる。①柏原

古墳群や西山A古墳群などのように単独で構築されるもの。②三郎丸古墳群のように2、3基で群を形成し、それが幾つか集まって大きな古墳群になるもの。③堤ヶ浦古墳群8号墳のように6世紀代から続く古墳群の中に構築されるもの。

今回調査した桑原古墳群M-1号墳は①の分類になるが、出土遺物からすると時期的には8世紀代になる。そうすれば第12次、第20次調査と同時期に並存していることになる。ただ石室内は荒らされ遺物の量は極めて少なく、図示した遺物が構築時の土器ではなく、追葬時の遺物である。

[註]

- 註1 福岡市教育委員会「柏原遺跡群Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集 1986
- 註2 福岡市教育委員会「室見が丘」福岡市埋蔵文化財調査報告書第614集 1999
- 註3 福岡市教育委員会「堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集 1987
- 註4 福岡市教育委員会「三郎丸古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第495集 1996
- 註5 福岡市教育委員会「羽根戸古墳群4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第317集 1993



(1) 調査区遠景



(2) 調査区全景（南から）



(1) 調査前墳丘全景（南から）



(2) 調査前石室の状況（西から）



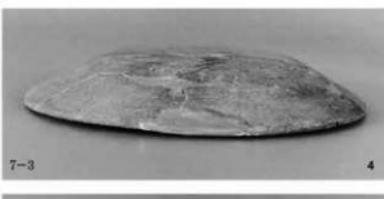
(1) 石室完掘状況（西から）



(2) 石室全景（南から）



7-1



7-3



7-2



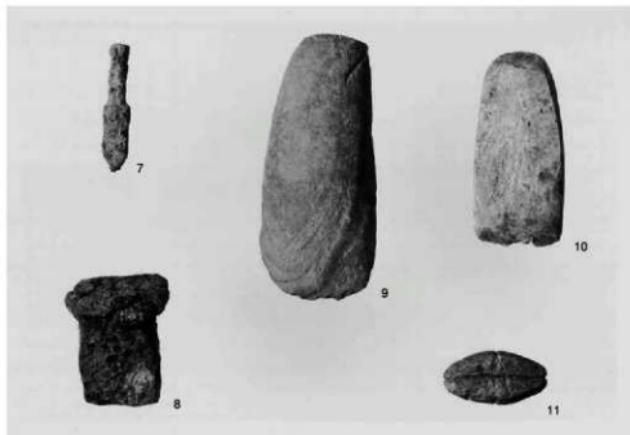
7-6



7-10



8-14



7



9



10



8



11

出土遺物 (1) 左の数字は挿図番号



出土遺物（2）

## V 第11次調査の記録



## 1. 遺跡の位置と現状

第11次調査は平成11年1月6日に表土剥ぎに着手し、同年3月25日に終了した。調査地点は第6次調査の西約200mに位置する。大原川の上流部にあたり、東西を低位丘陵に挟まれ、北に開口する谷の上流部にある。現況は南から北へ開析された谷部を平坦にした階段状の水田であるが、一枚の水田面積はやや広いが、狭い谷部の両側の丘陵裾を削り埋め立てた結果であり本来の形状は保っていない。調査地点はその水田の中腹にあたり、西側の標高45mを測る丘陵頂部から東へ傾斜する丘陵裾部から谷部の沖積地にかけて位置する。大原川の対岸には第2次、やや上流に第12次、第15次調査地点がある。北東方向の丘陵上には桑原石ヶ元古墳群が位置する。

## 2. 土層 (Fig.2,3)

調査区の南壁の土層である。調査区全体でもほぼ同様な層序を示す。第1層はごく近年の盛り土で花崗岩のマサ土である。厚さ約1m。第2層はグライ化した土壤である。青灰色砂質土で縦まりがなく軟質の、人為的盛土で層厚約90cm。第3 A層は均質な灰褐色砂質土で単一層である。一時的に埋ったのか縦まりがなく無遺物層である。第3 B層は茶灰褐色であるが層間に細分することができるが、マサ土の粒子が細かくなつた状況で、全体に縦まりがなく軟質で崩落しやすい共通の性質をもつ土壤から同一層とした。この第3層は元岡・桑原遺跡群の谷部の調査において表土直下を2m前後の

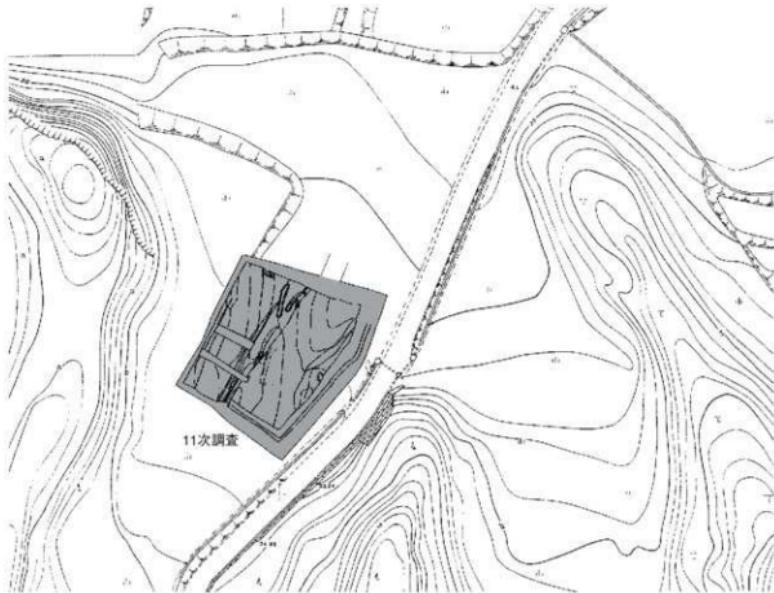


Fig.1 第11次調査地点周辺地形測量図 (1/1,000)

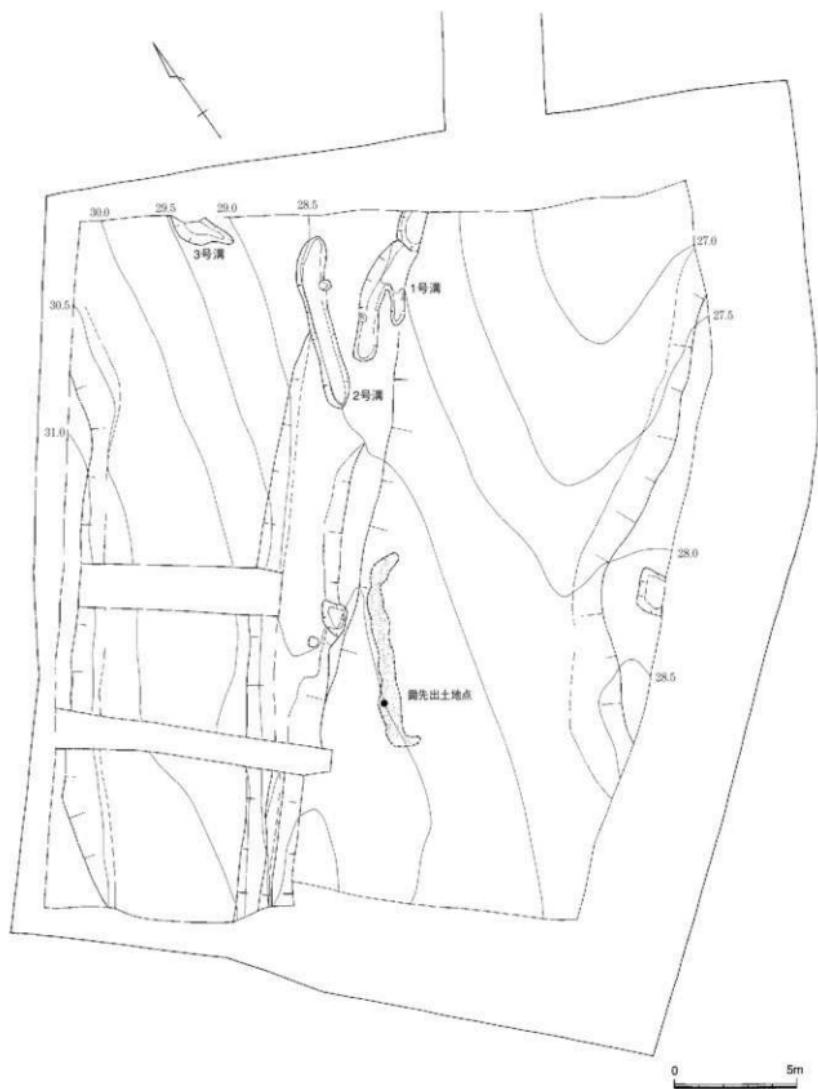


Fig.2 第11次調査遺構全体実測図 (1/200)

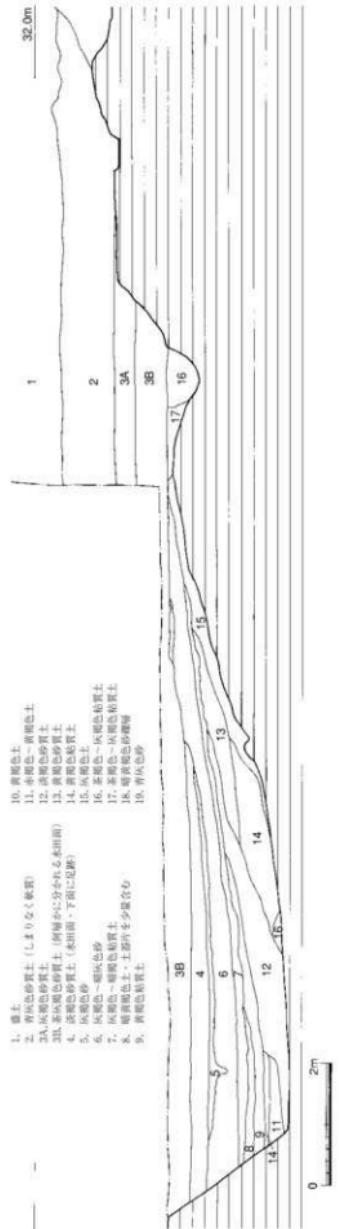


Fig.3 南壁土層実測図 (1:80)

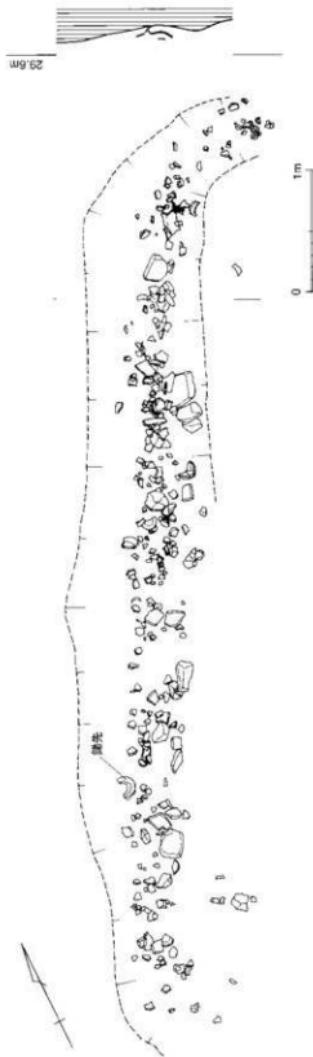


Fig.4 土器割り出土状況実測図 (1:40)

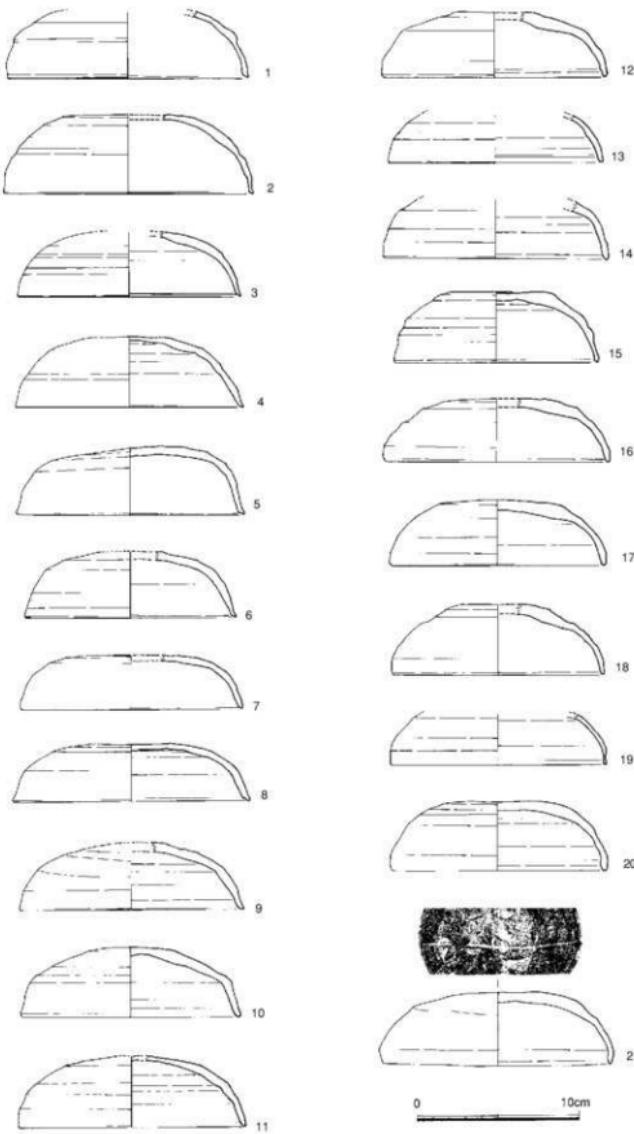


Fig.5 土器漏り出土土器実測図 1 (1/3)

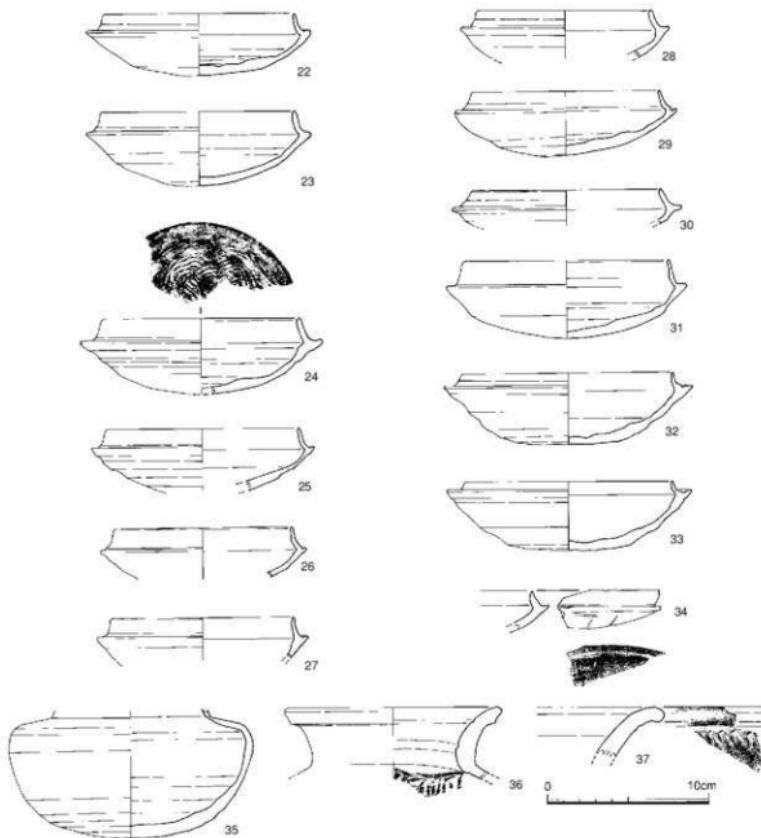


Fig.6 土器溜り出土土器実測図 2 (1/3)

厚さで覆うものであり、この地域一帯が大雨などの自然的要因で谷部が埋没したものであろうか。第4層は淡褐色砂質土で下面に足跡が多く見られる。第5層は灰褐色砂質土である。中央部だけに堆積し、10cm程の厚さである。第6層は灰褐色～暗灰色砂質土である。第7層は灰褐色～暗褐色粘質土である。遺物包含層であるが、その量は少なく、小さな破片だけである。土器溜りとした造構はこの層に対応する面の台地縁で確認した。第8層は淡褐色砂質土、第9層は黄褐色砂質土、第10層は黄褐色粘質土、第11層は灰褐色土で、中央部分にだけ堆積する。第12層は茶褐色土～灰褐色粘質土で西から東え流れ込む。第13層も遺物包含層であるが、上層から細片のみの出土であり、上層からの混入か。暗黄褐色土である。第14層は基盤層の砂礫層の上を覆う黄褐色粘質土である。

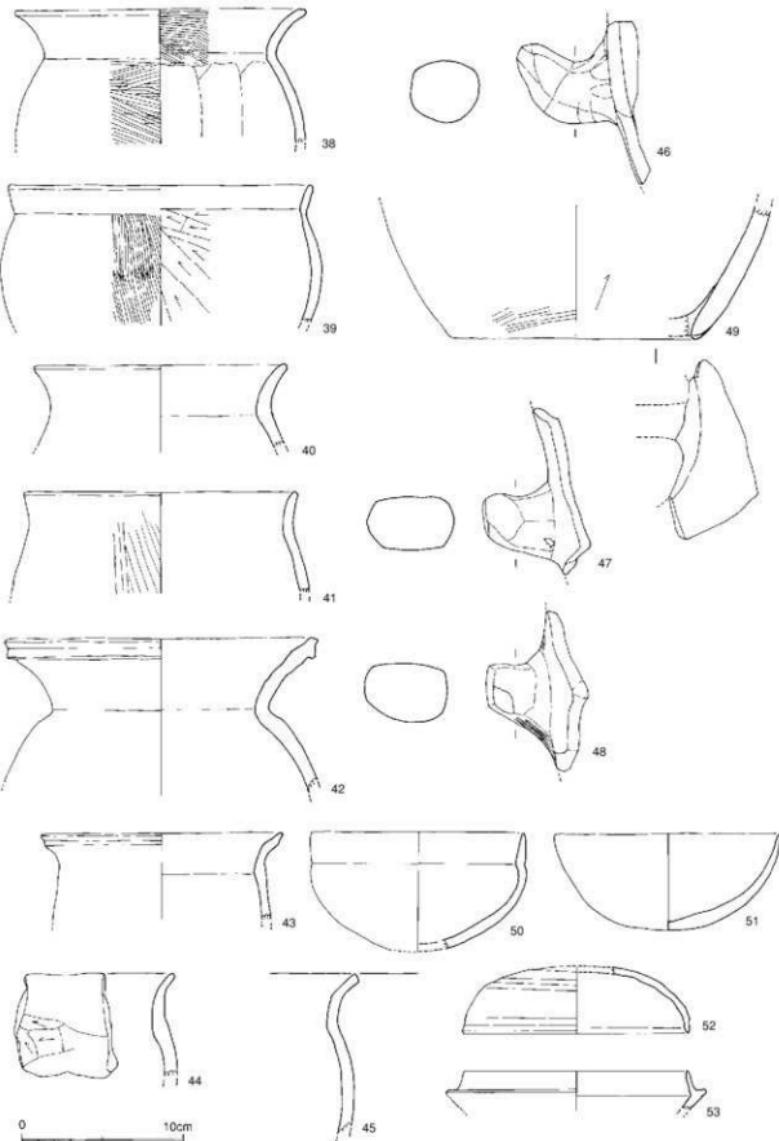


Fig.7 土器溜り出土土器実測図 3 (1/3)

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### 1) 土器溜り

(Fig.4, PL.2)

調査区の西側斜面の裾に沿って細長く土器の分布がみられる。丁度地形の変換点、傾斜面から平坦になる部分に遺物が観察できた。規模は幅0.6m、長さ7.6m、深さは最も深い部分で0.1mを測る。北側は浅い溝状であるが南方に行くに従い東側の肩がなくなる。床面は地形に沿って南から北方に緩やかな傾斜を示す。遺物には土師器、須恵器の出土が大部分を占め、大小の自然礫とともに小さな破片として散布している。それらに混じって鏃先や鐵など鉄器も少量出土した。西側の丘陵部は大きく削ぎされ、平坦になっているのでその部分に集落があつたか否かは不明であるが、その方向からの投棄であろうか。

#### 出土遺物

須恵器 (Fig.5, 6-1~37, PL.3, 4)

1~21は壺蓋である。1は天井部と口縁部との境に段をもつ古い形態である。口径14.8cm、器高4.6cm前後を計る。口縁部の内面にも段をもつ。外面は天井部の大半はハラケズリ、段の近くから口縁にかけて回転ナ

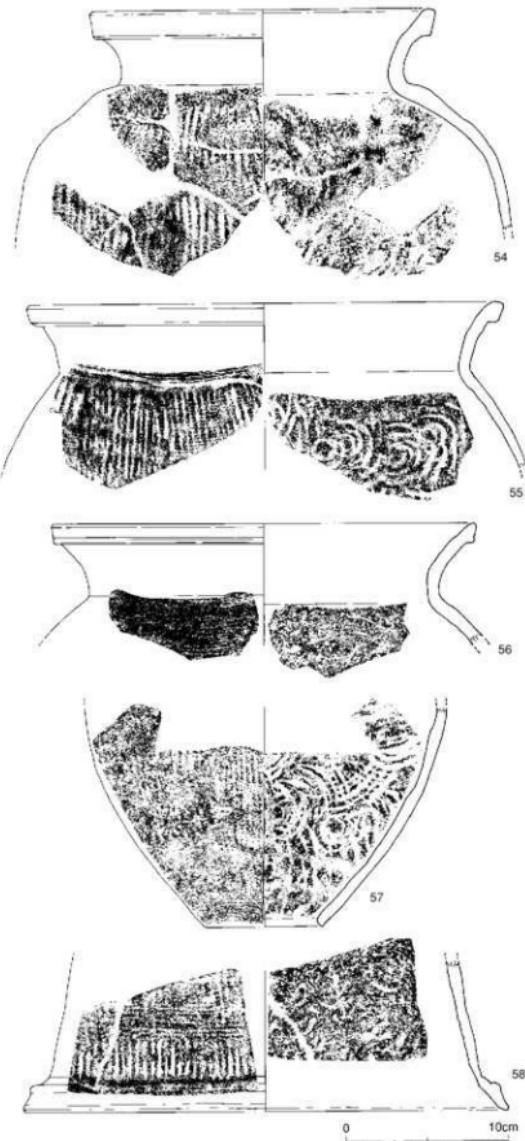


Fig.8 土器溜り出土土器実測図 4 (1/3)

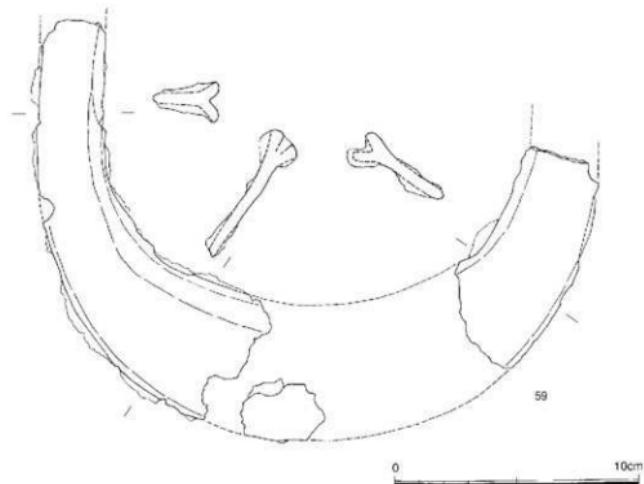


Fig.9 土器漏り出土鉄器実測図 (1/2)

ア調整である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成堅緻であるが焼きひずんでいる。2は丸みをもつ天井部と口縁部の境が不明瞭で凹線状の窪みで画する。天井部は回転ヘラケケズリで、口縁部から内面は回転ナデ調整である。口唇部の内面は浅い段をもつ。口径15.4cm、器高は4.8cm前後、焼成堅緻で内面は白灰色で、外面は暗灰色である。3~8は1、2に比して少し小型化し、口径が14cm前後を計るものである。丸みをもつ天井部と口縁部の境の段は無くなり、口唇部内面に浅い段をもつ。天井部は回転ヘラケケズリで、口縁部から内面は回転ナデ調整である。9~21は天井部中央が尖り気味に丸くなり、口縁部に向かい自然と丸くなり、口縁部の端部を丸く収める一群である。9~11のように口唇部内面を斜めに面取りしているものもある。天井部外面を2/3ヘラケズリし、他は回転ナデ調整である。21は焼き歪んでいるがほぼ完形品で口径13.9cm、器高3.9cmを測り、天井部に一本線のヘラ記号をもつ。18にも同様のヘラ記号がある。22~34は壊身である。22は口縁部の一部を欠くがほぼ完形品で口径11.8cm、器高3.8cmを測る。底部は1/3程がヘラケズリである。口縁部は外反しつ、内傾して立ち上がり、端部は丸く収まる。24の内底にはタタキの跡が残る。32~34は口縁部の立ち上がりが高い一群である。口径13cm、器高4.4cmを測る。底部はヘラケズリで他はナデ調整である。35は胴部から底部が遺存している短頸壺である。最大径は胴部上半にとり、頸部はすばまり薄く仕上げられる。36、37は壺の口縁部から頸部にかけての破片である。36の胴部内面には當て具痕が残り、37の頸部には擗描波状文がある。

#### 土師器 (Fig.7,8~38~59, PL.4)

38~41、44、45は壺の口縁部から胴部にかけての破片である。あまり膨らみのない胴部から短く外反する口縁部となる。小破片が多く器表面の剥離があり調整は不明瞭であるが胴部外面から口縁部内面にかけ刷毛目調整し、口縁部外面をナデ消しているものであろう。39は暗褐色を呈し、外面には煤が付着している。42は丸みを帯びた胴部から緩やかに外反する口縁部となる。胎土には砂粒を含み焼

成良好で赤味を帯びた黄褐色をなす。口縁部端は外面を垂下させ、中央部を窪ませ、断面三角形になり、須恵器の形状となっている。43は膨らみのない胴部から外反する口縁部となり、口縁部端は外面を垂下させ、中央部を窪ませ、口唇部を尖らせる。46～48は瓶の把手及び胴部下半の破片である。46の把手は断面が円形で先端が尖っている。47、48は断面が隅丸長方形で先端が尖らない。各面とも丁寧な面取りがなされている。50、51は椀で51はほぼ完形である。口径14cm、器高5.9cmを測る。52～58は須恵器の形態、技法を用い、焼成のみ酸化炎焼成の一群である。52、53は須恵器の技法、器形を模した土器器の坏の蓋と身である。ともに淡黄褐色で胎土には少量の砂粒を含むが精良である。52の天井部は回転ヘラケズリを行っている。54～56は甕の胴部から口縁部にかけての破片である。胎土には砂粒を含むが良く淡褐色を呈する。54は球形に近い胴部から外反する短い口縁部で端部は肥厚する。全体に摩減がひどいが口縁部はナデ、胴部外面は綫方向のタタキ、内面には当て具痕が残る。55もほぼ同様の器形、調整であるが口縁部の肥厚が角張っている。56の胴部外面はカキ目調整である。57は甕の胴底部の破片で赤褐色を呈する。底部を焼成前に穿孔する。外面には綫方向のタタキの後、下半の部分のみにカキ目状の調整を行う。内面には円文と半円文の二種類の当て具を用いる。58は立ち上がりが急で、胴部内面に青海波文の当て具痕がそのまま残っていることから脚としたが、あるいは口縁部であるかもしれない。脚部は綫方向のタタキの後カキ目状調整を施す。脚端は二重口縁状となり外面に垂直近い面をなす。

#### 鉄器 (Fig. 9-59, PL.4)

鉄製の「U」字状鋏先である。遺存状態が悪く二つに折れ、中央部分、及び基部を欠く。推定幅23cm、長さ18cm前後である。耳部の幅は2.5cm、刃部の幅は5.5cm、厚さ5mm前後を測る。

#### 2) 溝状遺構 (Fig.2)

3条の溝状遺構を検出した。いずれも傾斜に直交し、長さの短いもので、その性格については不明である。1号溝状遺構は裾部に検出した溝状遺構で南西部が二股に分かれている。覆土は暗褐色土で、その規模は全長6.2m、幅は南西部で0.9m、中央部で1.5m、深さ約10cmを測る。出土遺物は土器の細片が少量の出土であり、時期は明らかではない。2号溝状遺構は1号のすぐ西側に位置する。その規模は全長7.0m、幅は最大部で1.1m、深さ約20cm前後を測る。覆土は茶褐色土の單一層で、溝内からの出土遺物は土器の細片が少量の見られる程度であり、時期は明らかではない。3号溝状遺構は調査区北壁際に検出した遺構で、大部分は調査区外へと延びる。最大幅1.6m、現存長約2m、深さは傾斜上面の西側で65cm、東側では15cmを測る。上層は灰褐色砂質土、灰色砂層で覆われており、下層は茶褐色土である。出土遺物は無くその時期については明らかでない。

#### まとめ

調査地点は搅乱が著しく遺構の残りは悪く、今回の調査で検出したのは6世紀後半の土器溜りと時期不明の溝だけである。土器溜りは溝状の窪みに細長くに堆積していたものであるが、明確な掘り込みは観察されなかった。意図的に集積したのではなく集落から廃棄された結果、土器溜りになつたものであろう。集落址に伴なうものであろうが、集落の検出には至らなかつた。集落が予想されるのは調査区の西側斜面と思われ、数本の試掘トレンチを入れたがいずれにおいても岩盤がすぐに現れ、何ら遺構の痕跡は残っていなかつた。よつてその性格について知る由もないがいずれにしろ小規模なものであろう。



(1) 調査区遠景（北から）



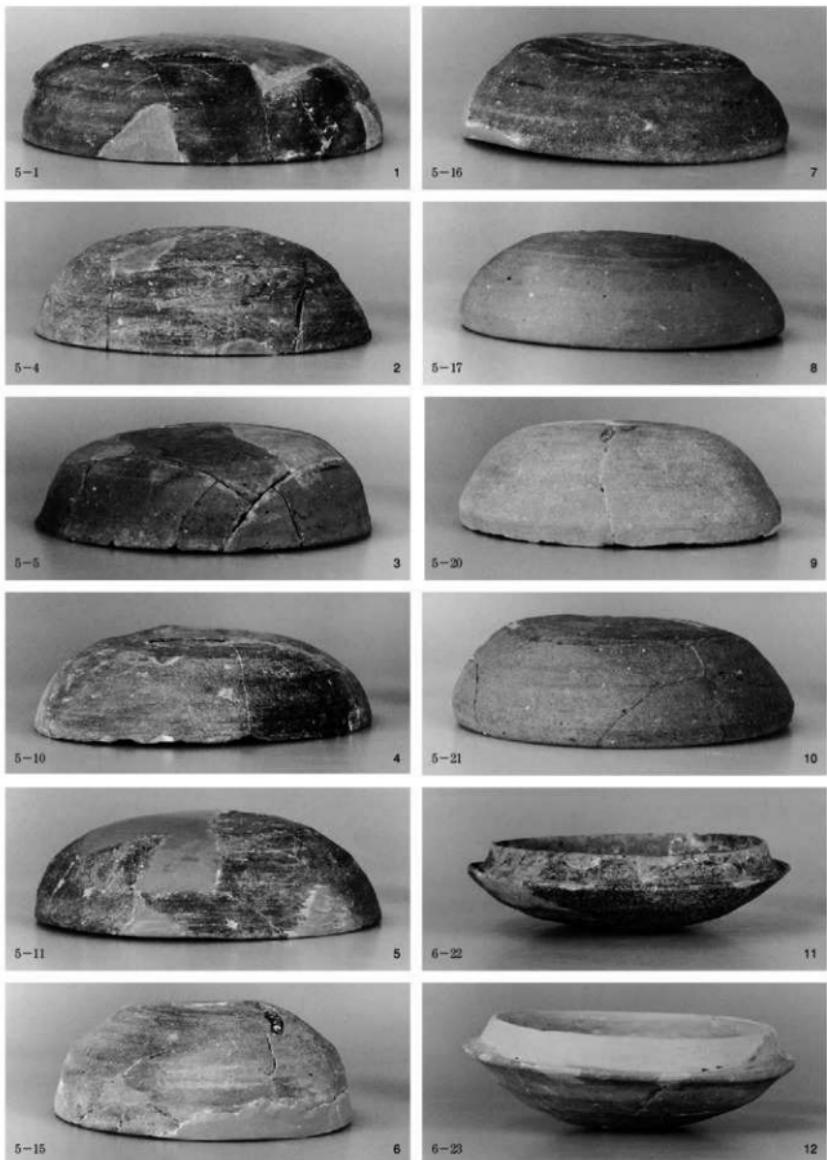
(2) 調査区全景



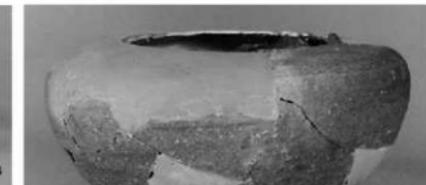
(1) 土器溜り全景



(2) 土器溜りの遺物出土状況（北から）



出土遺物 (1) ※左下の番号は挿図番号



21

出土遺物 (2)



平成15年度調査地点遠景（左側は造成後の調査地点）（南から）

書名ふりがな	きゅうしゅうだいがくとうごういでんようちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ		
書名	九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書		
副書名	元岡・桑原遺跡群3 第3、4、8、11次調査の報告－		
巻次	3		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第829集		
編著者名	松村道博 池崎誠二 菅波正人 吉留秀敏		
編集機関	福岡市教育委員会		
発行機関	福岡市教育委員会		
発行年月日	20040331		
作成法人ID			
郵便番号	810-0001	電話番号	092-711-4667
住所	福岡市中央区天神1-8-1		
遺跡名ふりがな	もとおか・くわばらいせきぐん		
遺跡名	元岡・桑原遺跡群		
所在地ふりがな	ふくおかしにしくもとおか・くわばら		
遺跡所在地	福岡市西区元岡・桑原		
市町村コード	40135	遺跡番号	
北緯	333530		
東経	1301230		
調査期間	第3次 1997.11.19-1999.2.22 第4次 1997.12.1-1998.3.31 第8次 1998.9.16-12.25 第11次 1999.1.6-3.20		
調査面積	第3次 13,500m <sup>2</sup> +古墳1基 第4次 1,219m <sup>2</sup> 第8次 古墳1基 第11次 1,650m <sup>2</sup>		
調査原因	大学移転		
種別	集落／古墳		
主な時代	縄文時代-中世		
遺跡概要	第3次 縄文早期 集石造構23基+炉穴1基+弥生中期堅穴住居跡9基+円墳1基 第4次 中世整地層 第8次 円墳1基 第11次 古墳時代-古代包含層		
特記事項	第3次では縄文早期の多数の集石造構の他、条痕文、燃糸文、刺突文、無文、押型文土器等の土器類、石鎌、石槍、削器、搔器等の石器類が多数出土した。		

福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集  
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群3  
-第3、4、8、11次調査の報告-

2004年3月31日

発行 福岡市教育委員会

(福岡市中央区天神1-8-1)

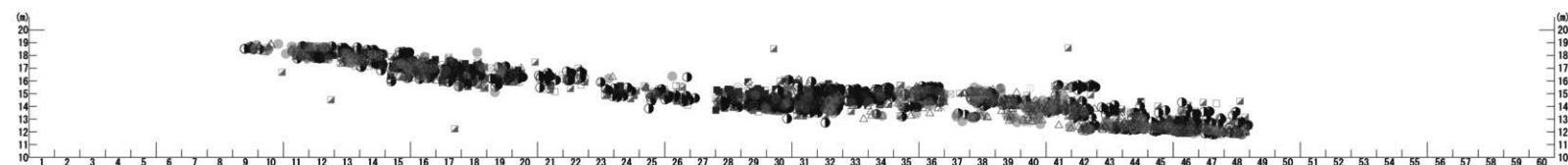
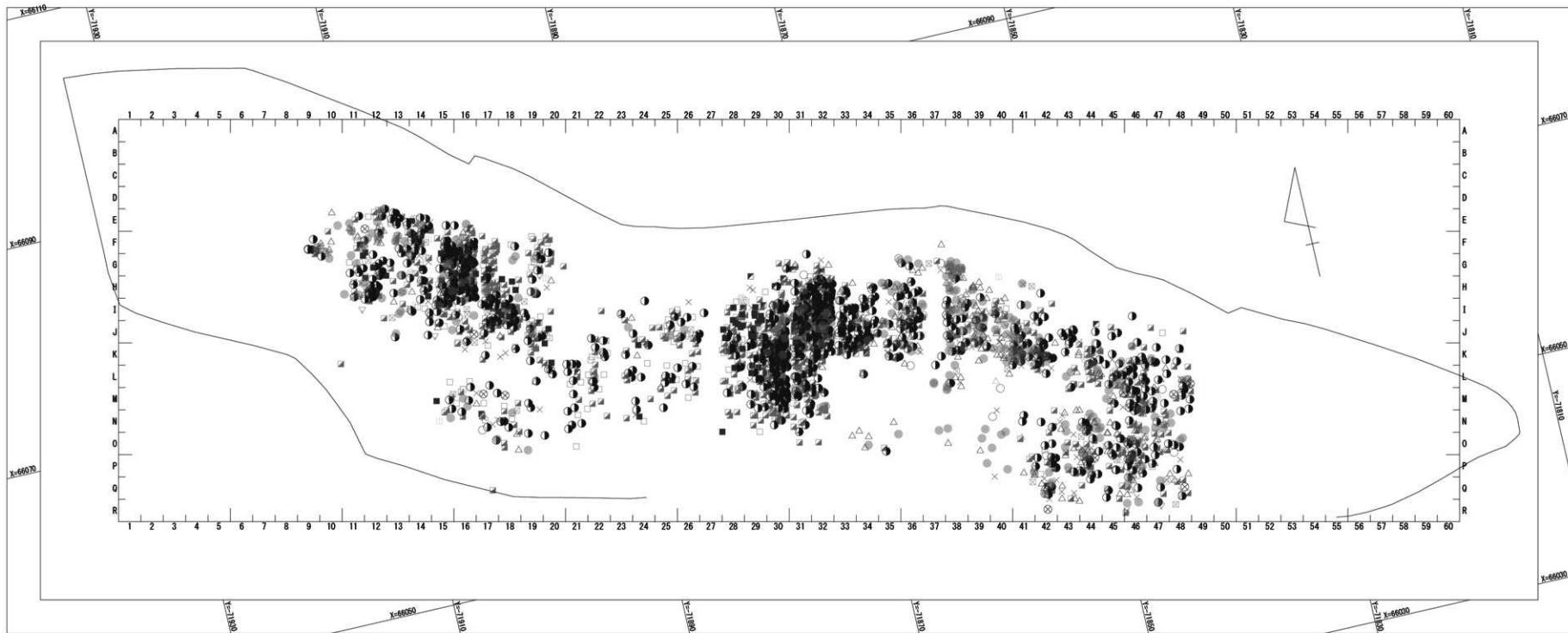
印刷 博多印刷株式会社

(福岡市博多区須崎町8-5)

# 元岡・桑原遺跡群3次調査 遺物分布図1

S=1/300

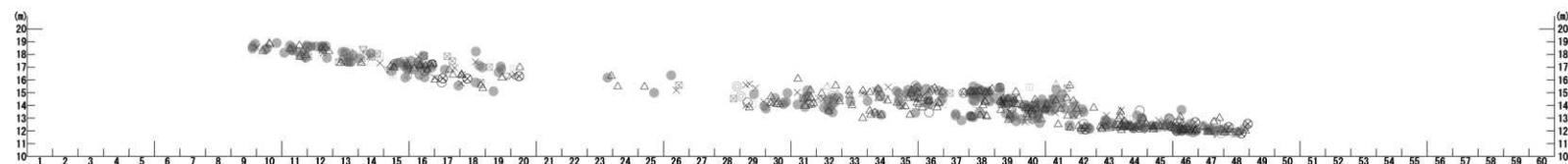
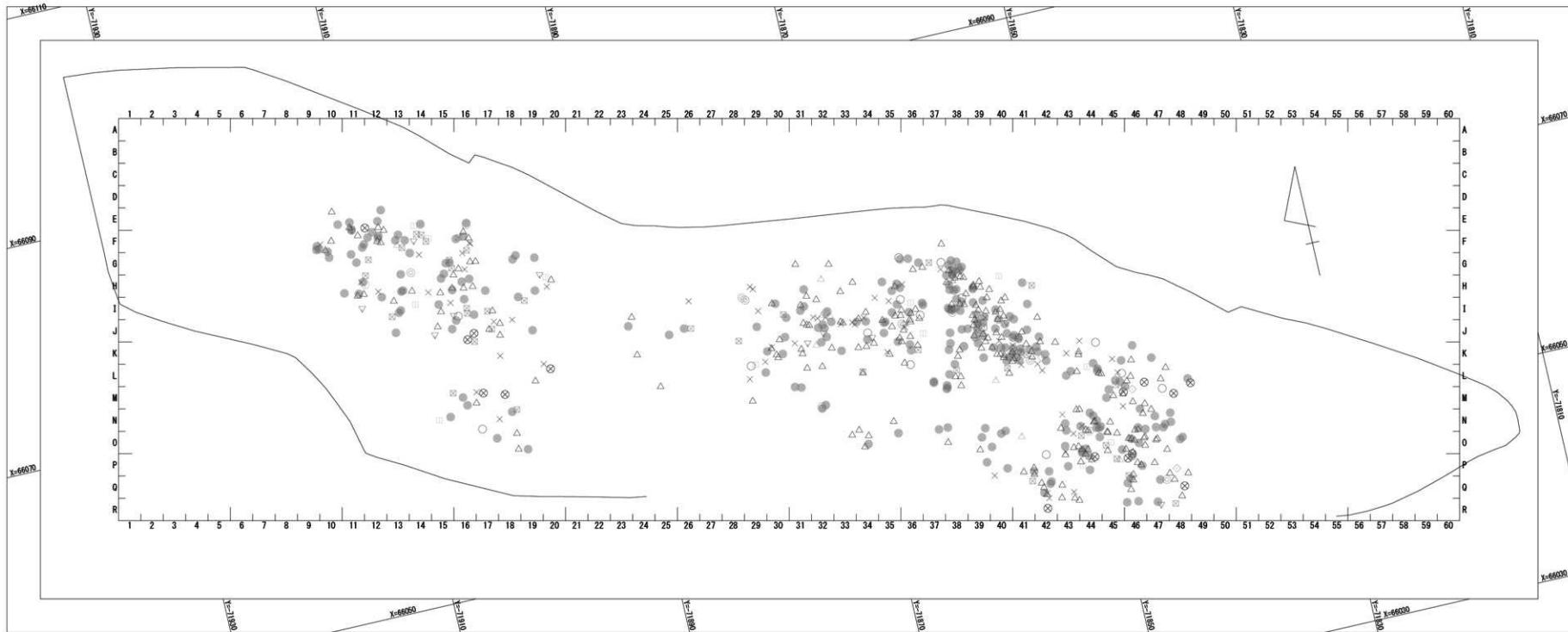
△ RF・UF	×	石核	□ 搗器
■ 押型文	○	石皿	△ 摘糸文
◎ 原石	◎	石錐	◎ 磨石
▣ 刈器	▽	石槍	● 無文
▨ 刺突文	●	石鬱	○ 敵石
▢ 条痕文	△	尖頭器状石器	○ 楔形石器



## 元岡・桑原遺跡群3次調査 遺物分布図2

S = 1 / 300

△ RF・UF	● 石鐵
◎ 原石	△ 尖頭器状石器
□ 削器	□ 搔器
×	◎ 磨石
○ 石核	◇ 敵石
□ 石皿	○ 模形石器
▽ 石槍	



# 元岡・桑原遺跡群3次調査 遺物分布図3

S=1/300

- 押型文
- 刺突文
- 条痕文
- 擦系文
- 無文

